

---

# 大好き！お兄ちゃん

白雪なずな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大好き！お兄ちゃん

### 【Nコード】

N6998E

### 【作者名】

白雪なずな

### 【あらすじ】

義妹が、できた。突然始まった、彼女と僕との奇妙な二人暮らし。無邪気な笑顔に振り回されっぱなしの毎日。彼女との共同生活、前途多難だ。

## プロローグ「1」（前書き）

題名のイメージと違って、決してラブコメじゃありませんので、  
注意を。

シリアス、でもほのぼの。作風はそんな感じです。

## プロローグ〔1〕

冷静に、冷静に。冷静になって考えてみよう。

かれこれ一分間くらい、僕はそう自分に言い聞かせながらも、固まった状態で動けずにいた。

いつも通りの朝なはずだった。

いつも通りの僕の部屋で、いつも通りに目を覚ました。そこまではよかったはずだ。

どうして僕がここまで狼狽して固まらないといけなかったのか。

それは今、この状況。

隣で寝息を立てる、いつの間に僕のベットにはいったのか　あどけない寝顔の彼女。

上半身だけ起こした状態の僕の腰に、両腕でしがみついたような恰好で、彼女はすやすやと眠っている。

思わず僕が身じろぎすると、彼女はわずかに意識を取り戻したようだった。

「ん……お兄ちゃん……？」

彼女は眠たそうに薄く目を開け、片手で目をこする。

彼女は僕をお兄ちゃんなんて呼んだけれど、本来、僕に妹なんかない。それどころか、僕は一人っ子なのだ。

新しい家族が来るとは聞いていた。昨日、ちらっと会って挨拶だった。

だけどその時、中学一年生になったばかりだと、聞いたのに。

「おはよお」

すこし掠れたハスキーボイス。

気だるげな動作で体を起こした彼女は、この前までランドセルをからっていたなんて信じられないほどに、大人びていて。

夏だからといっても露出の多すぎるキャミソール一枚の無防備な姿に、目のやり場に困ってしまう。

最近の子は、こんなに発育がいいのか。なんてまるで変態じみたことを考えている自分を信じたくない。

僕ももう大学二年。僕は今まで普通に生きてきたわけで、断じてロリコンじゃないし、変態でもない。

だけど彼女との同居生活 前途多難だ。

## ブローグ〔2〕

ママの離婚も、もう三回目。再婚も、三回目。

小学生だった私にも、ママがいい加減なところのある人だってわかりかけてた。

だけど、ママは一人じゃ生きていけないひとで。今度はうまくいくかもしれないから。

だから私も、ちゃんと受け止めてあげなきゃって。

わかってる、わかってるけど。……家族って、何だろう？

私が中学生になって、あわただしかった三度目の再婚も落ち着いて。

今度は、新しく義理のお兄ちゃんができるって聞いて。そのお兄ちゃんが自己紹介してくれたあのときは、はつきり覚えてる。

「はじめまして。僕、拓斗っていうんだ。よろしくね」

さわやかな笑顔で、拓斗っていう私よりずっと年上のお兄ちゃんは私に右手を差し出してきた。

心臓がきゅっていたくなるような。初めての、感覚だった。男の人なのに、可愛い笑顔。でも、かっこよくもあって。

義理の兄弟ができるのだって、三回目。一回目は妹、二回目はお

姉ちゃん。

二人とも、大好きだったのに。

ママたちが離婚した途端、遠い人になってしまった。

また、他人になっちゃうかもしれない。入れ込んだらダメ。関係なくなるのが嫌だなんて思ったら、また辛いから。

だからうわべだけにしとこうって思った。

きつと簡単。学校でだって、やってた。クラスメイトの、いじめっ子のあのこにするみたいに。

可愛くない服を可愛いって言う。友達と思ってないのに、親友って言う。

だから、かわいくて無邪気な妹を演じてれば、きつと大丈夫。

関係ない人になっちゃうのだって、きつと平気。

いつまで家族でいられるかわからないけど。いつだって笑顔を返してくれる、この人は私の、素敵なお兄ちゃん。

## 第1話 “無邪氣”な妹〔1〕

『はじめまして。僕、拓斗っていうんだ。よろしくね』

そう言って手を差し出した時、彼女は少し、不安げな色を瞳に揺らした。けど、それは一瞬のことだ。

ああ、ただの見間違えか、と思った。

『美沙です。よろしくね、お兄ちゃん』

彼女は僕の手をきゅっと握り、無邪気で可愛い笑顔を浮かべた。大人びた顔つきでも、やっぱりまだ中学生。

一人っ子だった僕にとって、兄妹ができるのは嬉しくもあって、大切にしたい、と思った。

大好き！お兄ちゃん      〔第1話 “無邪氣”な妹〕

僕は昔から、この中性的な顔立ちのせいか、単に偶然かはわからないけれど、年上と付き合うことが多かった。

だから年下の扱い方なんて、正直全くわからないわけで。日々、戸惑うことばかりだ。

しゃっとカーテンが開けられる音とともに、朝日が、瞼の向こう



側から僕の寝ぼけた頭を刺激してくる。

今日の講義は午後からだ。セットしていた目覚ましは鳴らないところを見ると、まだ寝ていられる時間のはず。

うーんと唸りながら布団をかぶりなおす。すると勢いよくその布団もはがれてしまった。

「おはよ、お兄ちゃん！ 朝だよ！」

薄く目を開けると、そこには、初日から僕のベットに入り込むという無茶をしでかしてくれた、彼女。

ああ、そうか。彼女との生活が始まって、まだほんの数日。

夢から戻ってきた瞬間、改めてこの現状を理解する。そんな朝も数回目。

彼女の少し鼻にかかったようなハスキーボイスをやっと聞き慣れてきた。

綺麗な顔立ちに、でも少しあどけなさの残ったまろい頬を緩ませ、彼女は何が嬉しいのかにこにことほほ笑んでいる。

けれど、微笑み返す余裕もなく、僕のまぶたは自然に落ちていく。意識の消えるか消えないかすれすれのところで、僕はかろうじて声を絞り出した。

「もう少し、寝かせてくれないかな……」

「ダメ！ 私だって学校に行くんだから、お兄ちゃんだけずるいでしょ！」

小中学生特有の、わけのわからない強引な理論。

見事に僕にダメ出しをした彼女は、何を思ったのかがばつといきなり僕に抱きついてきた。

「うわっ!？」

寝ぼけていたのと驚いたのとで、僕の喉から格好のつかない声が出てきた。

けれど彼女の方はというとマイペースなもので、ぐいぐいと精一杯の力で僕を抱き起そうとしている。

「起きろー! 寝坊ばかりしてると、モテないよ!」

そんな話、聞いたこともない。僕もモテないというわけではないので、そこは余計なお世話だったが、このままの状況で寝ていられるほど僕の神経は太くない。

他人が見ればベットの上で抱き合っているようにしか見えないような状態だ。

彼女はムキになってしまっていて、僕が起きなければ納得しそうになかった。

中学生と抱き合ったからといって別段何もないはずだが、初日の同じベットの中での記憶がどうしても邪魔をする。

とにかく相手が中学生だからこそ、モラル云々という話だ。何度も言うようだが、僕には断じてその気<sup>け</sup>はない。

「わ、わかった。起きるから」

観念した僕に、やっと彼女は僕の背中にまわしていた腕を解いた。僕は安堵のため息をつく。

おかげで、と言っていいのかわからないが、すっかり目も覚めてしまった。



## 第1話 “無邪気”な妹〔2〕

ほんわりとあったかくなるような気持ちを、知った。それはきつと、お兄ちゃんに会った瞬間から。

ママには言えないけど、何度再婚してもママはうまくいかない予感がしてた。

だからさみしくないように。笑顔でたくさん思い出を作って、もしもの時も、笑顔でさよならするんだ。

お兄ちゃん、一緒に暮らして数日間。毎朝、お兄ちゃんを起すのが私の役目になりつつあった。

お兄ちゃんは大学は昼からのことが多くて、あまりすんなりとは起きてくれないけど。

無理やり口実を作って、起こしてる。

お兄ちゃんと話したいって言うのもあったけど、なにより一人の朝はさみしいから。

ママは再婚相手の新しいパパと一緒に、一か月の新婚旅行に行ってしまった。

いつも通り。新婚旅行に行つて、これから先上手くいくのか確かめるつて。

そんなのいつものことだから、慣れてる。けどお兄ちゃんに驚いてみたいで、会ったばかりの子供たちを残していくなんて非常識だつて言つてた。

今朝も強引に起こして居間に連れてきたお兄ちゃんをちらつと見ると、あくびをかみ殺している所だった。

そんなほのぼのしたような空気が何だか嬉しくて、思わずにこにこしてみたみたいで。

お兄ちゃんが不思議そうにそんな私を見てくる。私は慌ててごまかすようなことを言う。

「お兄ちゃん、意外に重いんだもん。細身なのになあ」

「身長差があるからね。そう簡単にはいけないよ」

お兄ちゃんはそう言つて少し笑つた。

今朝、布団をはいでも起きないお兄ちゃんを、あるだけの力で抱き起そうとしたのに、びくともしなかつた。

大学生つて、きっと私なんか比べ物にならないくらい大人なんだろう。身長とか身体的なこともちろんだけど、気持ちのこともお兄ちゃんから見たら、私なんてただの子供なのかな……？

初日はお兄ちゃんが予想以上にかつこよくて、優しそうな人だったから、嬉しくなつちゃつて。

ちよつとしたいたずら心で布団に潜り込んだ。けどあれはちよつとやりすぎだったかもしれない。

私はお兄ちゃんと仲良くなりたいたいで、変な子だつて思われたわけじゃないんだから。

今朝早起きしたのも、お兄ちゃんに喜んでほしかったから。

「ねえ、お兄ちゃん。私お弁当作っただよ。ほら！」

ソファーに眠そうに座っているお兄ちゃんの後ろから抱きついて、そしてその目の前に美沙作特製お弁当をぶら下げて見せた。

お兄ちゃんは抱きつかれたことに対してちょっと困ったような声でこら、と言ったけど、差し出されたままにそのお弁当を素直に受け取ってくれた。

そしてお兄ちゃんの喜んでくれる顔を見ようと、急いでお兄ちゃんの後ろから前に移動する。

だけど、覗きこんだお兄ちゃんの顔、気難しそうな目をしてた。

それを見た瞬間、心臓が、嫌な感じに高なっていく。気に入らなかったのかな。ウザかったのかな。どうしよう。嫌われたら

「美沙ちゃん。会ったばかりの僕を、そんなに簡単にお兄ちゃんだなんて受け入れられる？」

お兄ちゃんは落ち着いた声で言ってから、私の目を見てきた。

……どうして？ “美沙ちゃん”なんて、他人みたいな言い方。兄妹だったら呼び捨てにするものでしょ？

どうしてそんなこと気にするんだろう。会ったばかりなんて、そんな関係ないじゃない。

お兄ちゃん。妹で。私のママとお兄ちゃんのパパが結婚して、私とお兄ちゃんは“家族”になったんだから。

そう思った瞬間、ずっと昔から心の中にある言葉が浮かび上がった。

てきて、警告音みたいにこえました。

“家族”って、何だろう？

だめだつて、そう思った。これ以上考えちゃ、だめ。

うわべだけの無邪気な妹でいい。それで、うわべの笑顔でこう言うの。「大好き、お兄ちゃん」って。

## 第1話 “無邪気”な妹〔3〕

『会ったばかりの僕を、そんなに簡単にお兄ちゃんだなんて受け入れられる？』

初日から疑問に思っていたことを、訊いただけ。それは僕にとって何気ないことで、別に他意があつたわけじゃなかった。

いくら家族になったと言つたつて、僕と彼女は会ったばかり。ついこの間まで赤の他人だったのだ。

なのに、彼女には警戒心というものがまるでない。そう、初日から僕のベットにはいりこんでくるくらいだ。

普通は知り合つたばかりの人間にそんなことをしたりしないだろう。

僕にとっては当然の疑問で。だけど彼女は、ひどく傷ついたような目をした。

傷ついたというか……衝撃を受けたような。しばらく黙つたのち、彼女はふと思いついたように笑顔になった。

可愛くて、無邪気な僕の妹。ただどこか不自然だと感じてしまふのは、僕の気のせいだろうか？



初夏とはいえ、もう暑い。早起して家でやることもないので、早めにやってきた大学の空きの講義室は、クーラーが効いていて居心地がいい。

なんとなく、しっくりこない。新しい妹ができて、単に僕も戸惑っているからかもしれないが。

彼女は無邪気すぎる気がする。でも中学生というのは身の回りにいなくて、そもそもどんな感じが普通の妹なのかがわからない。

時間が十二時に差し掛かったところで、腹が減ってきた。ふと、鞆の中に入っている今朝渡された弁当が目につく。

一生懸命作ったんだろう。何となく微笑ましくて、僕は何気なく取り出した弁当の包みを解き、その蓋を開ける。

一瞬、僕の目が点になる。そして僕は頭で考えるより先に、弁当のふたをすばやく戻した。

いやいや、でも僕の見間違いだったかもしれない。落ち着いて、もう一度ふたを開ける。

「……………」

これを見て、何を思えばいいのかわからない。今時こんな弁当を作る女の子がいることを知らなかった。

おかずの方はいたって普通。彩りも気を配られていて、普通に上手い盛り付けだと思う。

ウインナーがタコになっていたり、りんごがウサギになっていたりと可愛い工夫もされている。

だが問題はご飯の方だ。ピンク色のふりかけがかかっている。…

：大きなハートマークの形で。

つまりは僕は人目を気にして弁当を食べなければいけないことになった。

けれど幸いなことに味の方は問題なかったために、腹が満たされた僕はその日の講義を寝ながらにして乗り切ることができた。

久々に、夜七時までの講義だった。あまりに詰まった講義は睡眠学習にもならない。

講義が終わった講義室からはちらほらと人が出ていく。その波に乗りつつふとケータイをチェックすると、メールが入っていた。

元カノと別れてからというものの、最近僕のケータイには友達からの飲み会の誘いや遊びの誘いなんかが入るばかり。

今回も、たいしたメールじゃないだろうと疑わなかった。

だけどその送り主を見て、僕は眉をひそめた。強引に登録させられた、“美沙”というその送り主。

初めて交わすメールなわけだが、その内容はこうだ。

題名：兄妹デートしよう！

本文：今日はお兄ちゃんと初デートしたいと思います 駅前のオレンジの看板のカフェの前で待ち合わせ。何時までも来てくれるまで待つてます。

何時までも来てくれるまで、という内容に強制的な意思を感じる。でもそれより何より、気になったのはそのメールの受信時間。

受信時間は、17：13との表示。そして今は19：26。

そういえば少し前から雨が降り出していた。待ち合わせ場所には

雨よけになるような場所がない。

まさか待つてはいないだろう。そう思うが念のため、と電話をかけてみるがつかない。僕はらしくもなく焦り始めていた。

急いで大学を出て、僕は指定された待ち合わせ場所に向かった。

## 第1話 “無邪気”な妹〔4〕

待つことなんてもう慣れきってる。いつもいつも、私は待ってた。家族が、安心できる家族になれる瞬間を。

だからどんなに長い時間だって平気。私はそんなに弱い子じゃないから。

強引に送ったメールに、もう二時間近く返事は来ない。それは、私が待ち合わせ場所に立ち尽くして二時間ってこと。

メールするのも電話するのも好きだけど、こうやって待つてる時間は大嫌いだ。

何度もメールの問い合わせをする。そして「新着メールはありません」って文章を見るとすごく暗い気持ちになる。

それを繰り返す、無限のループ。

私は手に持っていたケータイの電源を切って、鞆の奥に押し込んだ。

いつもならお兄ちゃんも大学から帰っている時間。もうきつと来ないんだろって思った。

何時までも来てくれるまで、なんて文章を一方的に送りつけて、人の良心に付け込むような真似をした罰ばちが当たったのかも。

出会ってまだたったの数日。それでも私にとってお兄ちゃんは今

う、お兄ちゃん以外の何者でもなくて。

だけとお兄ちゃんにとっては、きつとちがうんだ。私は形式上妹だけど、他人で。

お兄ちゃんと居るのは好き。だけどそれは、家族になったからって理由だけじゃないかもしれない。

胸が苦しくなる。切ない、って、多分こんな気持ちのことを言うんだろうな。

なんだかつかれてしまった私は人目も気にせず、オレンジの看板の前、通路の隅にしゃがみ込んだ。

何人もの人が、駅に向かって私の前を足早に通り過ぎていく。一人ぼっちでぼつんととり残されてしまったような気持ちに、なった。

でもこんな気持ち、慣れてるから全然辛くない。そうだ、こんなときは考えることを少しずらせばいいんだった。

それは私の得意技。つらい時には、楽しいことを考える。

そこですぐ思いついたのが、今朝、お兄ちゃんに渡したお弁当のこと。

困らせたくて、わざとふりかけで大きなハートマークを作った。

どんな反応を返してくれるのか、今日一日すごく楽しみにしてたんだ。

そうやって少しずつ、お兄ちゃんのことを知っていきたい。私のことも知ってほしい。

……でも、それって変だ。

私は、うわべだけの無邪気な妹でいて、楽しい思い出を作って、笑顔でさよならするつもりじゃなかった？

ふと、そんなことを思ったとき、頬に水が落ちてきた。  
しゃがんだまま見上げた、いつもより少し遠い空に、雲がびっしり詰まっている。

ああ、雨が降るんだって、他人事みたいにぼんやり思った。

次第に、濡れていく髪の毛。一生懸命ドライヤーでセツトしてきたのに、意味なかったな。

降り出した雨に、歩いていた人たちの足がだんだん速くなる。

ではじめた水たまりを、ばしゃばしゃ踏んで。そこで跳ねた泥水が少しだけ、私にもかかった。

どうして私はまだここにいるんだろう。もう待っても無駄なのに。だけど、ここを動く気にはならないから。

そうやって黙って濡れるままになっていると、急に雨がやんだ。

……ううん、近くの水たまりを見るとまだ降り続けている。頭上を見上げて、私はやっと私の周りだけ雨がやんだ理由を知った。

「……あは、あははは」

何がおかしいのか自分でもわからないまま、私は気づけば笑っていた。まるで王子様みたいな登場。

しゃがんだ私の前に立って、私にカサをかざしてくれている、お兄ちゃん。

「どうして泣くの？」

お兄ちゃんは私を見下ろしながら、そんなことを言った。

……何言ってるんだろう。私は今笑ってて、泣いてなんかいない。

お兄ちゃんは雨を涙だつて勘違いしてる。  
そう思って、自分の頬に指先で触れてみると、少し暖かい雨がひ  
とすじ、指先から伝わっていった。

## 第1話 “無邪気”な妹〔5〕

どうして泣くの、なんて。そんなことを聞くべきじゃなかった。予想もしていなかったのだ。まさか泣く、なんて。だから思ったことがそのまま言葉に出てしまった。

待ち合わせに遅れると、かつての僕の彼女たちは、どの子もひどく怒りだしていた。

それが原因で別れたことだってある。

だから今回も、怒るか嫌われるか、どっちかだと思っていた。

そしてそんなことになったら、傷つけてしまうというのも勿論だが、何より今後の兄妹関係に悪影響だと思い焦ってここまで来た。

僕はそんな浅はかな自分を恥じた。最悪の人間だ。

小降りだと思っていたら、ここに来る間に雨足は急激に強くなり。今更力サをかざしてやっても、すでに彼女のセミロングの髪の毛から水滴がぼたぼたと落ちている。

だけど彼女の瞳から頬を流れているそれは、違う。あきらかに涙だ。

笑い泣きをしていた彼女は笑うのはやめたようだが、まだ平然とした顔で、瞳から静かに涙だけを流している。

驚きなのは、それを、彼女は自分では自覚してないみたいだということだった。

何と言葉をかけていいのかわからない僕。



対して次第に涙が止まってきたらしい彼女は、すくつと立ち上がった。

僕は半分以上はみ出しているが、同じ力サの中にいるわけだから、結構な至近距離だ。

「お弁当……、おいしかった？」

彼女のハスキーボイスは、また僕の予想に反してそんな言葉を紡いだ。

なんで今、そんなことを。こんなときに気にすることじゃない。少しはびしょぬれの自分のことを心配したらいいのに。

「うん。でもあのふりかけは、ちょっと予想外だった」

ハートマークをかたどったふりかけを思い出し、僕はそう言っ少し笑った。

僕の言葉に満足したのか、彼女は「でしょ？」と少し得意げに微笑んだ。

さつき泣きながら笑った時の、痛々しい笑顔とは全く違う。

この子はもしかしたら、ずっと自分を抑えて生きてきたのかもしれない。

感情を隠して、平気なふりをして傷を一人で抱えていく。詳しい事情なんて何も知らないが、まだ中学生のうちにそんな生き方を覚えてしまうなんて、悲しいことだと思った。

彼女の髪の毛からはまだ水滴が落ちている。

僕は鞆をまさぐった。汗を拭くために持っていたハンドタオル。今日はずっと講義室にいたから、幸いまだ未使用だ。

やっとそれを見つけ出し、取り出して髪の毛を拭いてやると、ハ

ンドタオルはすぐに水を吸った。

こんな濡れても待ち合わせ場所を動かず、待っていたなんて。

心が痛んだ。この子はとても純粋なのだ。無性に申し訳なくなり、思わず口が動いていた。

「ごめんね」

心からの言葉だった。彼女の大きな瞳が僕を見上げる。

もうこの澄んだ瞳を傷つけることはできないと思った。僕が守ってやらないと。

それは僕の中で、彼女という存在が、他人から「妹」に変わり始めた瞬間だったのかもしれない。

## 第1話 “無邪氣”な妹〔6〕

お兄ちゃんが謝る必要なんて、どこにもなかったのに。私が一方的に待ち合わせを取りつけて、勝手に待ってただけ。

なのにお兄ちゃんは、とても優しい目をしてごめんと言った。

お兄ちゃんの優しさに、初めて触れた日。なんだか……胸がいた  
いよ、お兄ちゃん。

雨は通り雨だったらしくて、だんだん止みつつあった。少しずつ、  
慌ただしかった人の動きがゆっくりになって。

そしてそうなってくると、歩く人たちの心の余裕も出てきて、私  
みたいなびしょぬれの人間が目立ちはじめ。

カサをたたんだお兄ちゃんも、それに気づいてたのか。上着を脱  
いで私に掛けてくれた。

プリントの入ったノースリーブ一枚だけになってしまったお兄ち  
ゃん。真夏ならこんな格好も素敵だけど、今はまだ初夏。  
それにお兄ちゃんだって濡れてないわけじゃないのに。

私は慌ててその上着を脱ごうとしながら、お兄ちゃんに声をかけ  
る。

「いいよ、お兄ちゃん。お兄ちゃんが風邪ひいちゃうよ」

「大丈夫だよ。妹は素直に甘えていいんだよ」

お兄ちゃんの口から出てきた予想外の言葉に、私は脱ぎかけの上着もそのままに、驚いてお兄ちゃんを見上げた。

妹、って言うてくれた。お兄ちゃんの中で、私は他人なんだと思っただのに。

私、少しはお兄ちゃんの妹になれたのかな？ 私……大切なお兄ちゃんの、大切な妹になれるかな？

言われたように素直に上着を着直すと、雨でいつの間にか冷えて体が、少しだけあつたかくなつた。

それはきつと、上着のせいだけじゃない。こんな安心感、はじめてかもしれない。

こっそり小さな声で、「ありがとう」って、呟いた。

お兄ちゃんにもちゃんと届いたみたいで、穏やかな瞳で笑ってくれた。

「帰ろうか、美沙ちゃん。今日はほんとにごめんね」

お兄ちゃんはそう言って、私の頭にぼんと手を置いた。

どきつとしながらも、お兄ちゃんの帰るって言葉に、一瞬がっかりしてしまう。

でも、確かにそうだ。私はこんなありさまだし、もう夜だし。帰るべき状況だつてわかる。

わかつてるけど、お兄ちゃんと一緒に街を歩きたかった。家の中で以外での一緒の時間を増やしたかったんだ。

それに、気になったのが、お兄ちゃんの、私の呼び方。

いいことを思いついた私は、お兄ちゃんに少しいたずらっぽく微

笑んで見せた。

「お兄ちゃんが美沙、って呼んでくれるなら、今日のことは許してあげる」

本当はこんなことと言える立場じゃないんだけど、こうでも言わないとお兄ちゃんは私の呼び方を変えてくれないだろう。

お兄ちゃんはうーん、と考えるようなしぐさをしてから、少し困ったように微笑んだ。

「じゃあ、帰ろうか。……美沙」

自分で言い出したわけだけど、実際に美沙なんて呼んでももらえたら、感激で言葉が出なかった。

照れているのか、そんな私に背を向け歩き出すお兄ちゃん。思わず、体が勝手に動いていた。

「お兄ちゃん、大好きっ！」

無意識のうちに出了た言葉。はちきれそうな笑顔のままお兄ちゃんの背中に思いつき抱きついた。

神様、私にこんなお兄ちゃんをくれてありがとう。

これからもずっと、……少しでも長く、お兄ちゃんとの日々が続きますように。

## 第2話 とまどいの気持ち〔1〕

僕が美沙と呼んだ瞬間、彼女の 美沙、の表情がぱつと明るくなった。

そこまで嬉しそうな反応をされてしまうと、僕もなんだか照れくさくて、思わず背を向けた。

すると驚いたことに、美沙は突然、後ろからぶつかるときに抱きついてきた。衝撃で少し前のめりになる。

当然のことだが、通行人すべての視線を僕たち二人が二人占め。

「お兄ちゃん、大好きっ！」

どこまでも純粹で、周りの注目を集めていることなど無自覚な美沙は、僕の背中で無邪気に笑う。

ああ。この愛しくも哀しい、僕の受難の日々は、この先もまだ続くんだろう。

やっかいなのは、僕自身がそのことを、まんざらでもなく思っていることであって。

大好き！お兄ちゃん      第2話      とまどいの気持ち

今日も、彼女はいつも通り制服に身を包んでいる。

その中学生の制服を着ていなければ、もっと大人びて見えるとこ

るだ。……とりあえず、外見は。

今日は金曜日。昨日の埋め合わせということで、僕は美沙を車に乗せて海に向かっている。

どうして海かというと、どこに行きたいかと聞いたら、美沙が「デートっぽいところ！」と即答したからだ。

美沙はどうしても兄妹「デート」というところにこだわりたいらしい。

そんな注文を受けたのは初めてで、僕にとっても無理難題だったわけだが。

学校帰りの美沙を連れて、夕方からでも行けるところ、と考えて、思いついたのは海くらいだった。

車で行けばそう遠くない距離だから、夜遅くなることもない。

「お兄ちゃん！ 海が見えてきたよ！」

そう言った助手席の美沙が、開いた窓から身を乗り出してよりいっそうはしゃぎ始める。

本当に危なっかしい。僕は右手でハンドルを持ちながら、左手で窓からはみ出た美沙を引き戻した。

すると窓の外に夢中だったらしい美沙が、きょとんとした顔で僕を振り返る。

この数日間に分かったことだが、美沙のこういう周りの状況をかえりみない一面は困りものだ。

自覚がないのが、更にことをやっかいにしている。

そうして辿り着いた小さな海岸には、意外なことに誰もいなかった。

た。

海開き前の、平日の夕方。そんな状況を考えてみれば、それも納得できる。

「やっと着いたあ！」

嬉しそうにそう言った美沙は、駐車場に車を止めるなり降りて、走って浜辺へと向かっていく。

置いて行かれないように、僕も車から降りて後に続く。

歩いて向かった僕に随分と距離をあけ、美沙はすぐに浜辺まで到達した。

そしてためらいもなく靴下と靴を浜辺に脱ぎ捨てて、海に向かって走っていく。

その後ろ姿を遠目に見送りながら、兄心ってこんな感じなのか、なんて、僕はそんなことを思っていたのだった。

美沙が笑うと、僕もなんとなく嬉しい。昨日の美沙の泣き顔は、僕の心に残って消えてくれそうにないのだ。

付き合いはまだ短いが、これから増やしていければいい。もう二度と、美沙があんな顔をする事のないように。

海に足をつけてはしゃいでいた美沙が、笑顔で振り返り、「お兄ちゃん！」と僕を呼ぶ。

僕はやれやれと微笑みながら、呼びかけに応え、美沙のいる波打ち際に向かった。



## 第2話 とまどいの気持ち〔2〕

お兄ちゃんと初めて一緒に出かけて、今年初めての海を見た。

夕方の海は空が少し赤っぽくて、光が海に当たってキラキラして、すごくきれいだった。

今日のこんな景色も、離れてもずっと忘れられない思い出になるんだって、そう考えると嬉しいけど。

……同時に少し、さみしくなった。

少しだけ、体の調子が悪かった。昨日、濡れて帰ってから、のどが少し痛くなって。

だけど、昨日お兄ちゃんが誘ってくれたから、今日だけは何があっても元気でいなきゃいけないくて。

学校ではちよつと辛かったけど、お兄ちゃんが迎えに来てくれて、車に乗ったらすぐに辛さなんて吹っ飛んで行った。

大丈夫。だって、すごくうれしくて、ほんとに楽しくて。

海に辿り着いたとたんすっかり元気を取り戻した私は、全速力で浜辺を目指す。

砂の上に靴と靴下を脱ぎ捨てて、波打ち際までまた全速力。

私はこう見えて、結構足が速い方なんだけど、今日はいつもより

も足が出にくかった。

でもこんな楽しい時にそんなことは気にしないようにして、私はおそろのおそろ、海に足をつけた。  
冷たい。でも気持ちいい。

後ろを振り返って「お兄ちゃん！」って呼んだら、お兄ちゃんが困ったように笑いながら私の所まで来てくれた。  
赤い空、海がきらきら光って。お兄ちゃんはそんな景色に溶け込んでいた。でも、存在感。

目が離せなくなる。お兄ちゃんって、なんだか

「芸能人みたい……」

「え？」

突然の私の呟きに、お兄ちゃんの目が点になり、頭の上にはてなマークが浮かんで見えた。

いけない。思ったことをそのまま口に出してしまった。

「お兄ちゃんも一緒に海に入ろうよ！」

ごまかしついでにお兄ちゃんを誘ってみるんだけど、「僕はいいいよ」って断られてしまった。

面白くない私は、不意打ちでお兄ちゃんの腕をぐいと引いた。

油断してたらしいお兄ちゃんの足は、引っ張られたことで2、3歩進み、ジーパンごと海の中にざぶんと入った。

すねの下あたりまで海につかり、みるみるうちに水を吸っていくお兄ちゃんのジーパン。

してやったりという顔で、私はお兄ちゃんを見上げる。

すると、ちょっと困った顔。こんな顔もするんだ。新たな発見。

「あんまり無茶しないようにね、美沙」

そう言ったお兄ちゃんは私のおでこをこつんとしてから、海から上がり片方靴を脱いで、靴の中に溜まった水を流したりしている。お兄ちゃんの瞳の色が、数日前、初めて会った時よりも、優しくなっていた気がした。

どうしてだろう。お兄ちゃんといると、うれしいだけじゃなくて胸が痛くなることがある。

こうやってお兄ちゃん存在が大きくなるほどに、辛くなることなんてわかってたのに。わかってるのに。

とまどいの中、私はもう一度お兄ちゃんを見た。

すぐに私の視線に気づいてくれるお兄ちゃん。なんだか、心の奥がつんとした。

## 第2話 とまどいの気持ち〔3〕

夕方の海は、そろそろ暗くなり始めていた。太陽が完全に見えなくなるまで、あとほんの少し。

興奮冷めやらぬ様子の美沙は、今度は砂浜にしゃがんで何やら探しているようだった。

美沙に強引に海に入れられて、ジーンパンはまだ乾いていない。濡れた足下は少し気持ちが悪いが、あんな笑顔を見せられてしまつては、怒る気も起きないどころか微笑ましくもあつた。

「あ！ あつた。あつたよお兄ちゃん！」

しゃがんでいた美沙からそんな声が上がった。立ち上がって、僕の前まで駆けてきた美沙は、手のひらを差し出してきた。

その手のひらの上に乗っているものを見て、僕は首をかしげつつ呟く。

「貝殻？」

美沙の小さな手のひらよりもっと小さい、親指の爪ほどのふたつの綺麗な白い貝殻。

それらは示し合わせたように左右対称な形をしている。きっと元は一つの貝殻だったんだろう。

探していたのは、対の貝殻だったのだろうか。

「他のを合わせようとしてもだめなんだよ。このふたつはね。ふた

つでひとつなの」

美沙はそう言って、僕の手をとり、掌にその貝殻の片割れを乗せてきた。

嬉しそうに笑いながら、その大きな瞳で僕を見上げ、美沙は弾んだ声を出す。

「お兄ちゃんに、片方あげる！」

僕は、こんなに屈託なく笑える人間を見たことがない。

それは年齢がどうかじゃなく、美沙自身の本質的なものによるのだろう。憎めない。

いつのまにか、すっかり美沙のペース。微笑ましく見守っている自分がいる。でも、そんな自分を嫌いじゃなかった。

「ありがとう」

僕はそう言って微笑みを返した。美沙も無邪気な笑みを深める。

僕の兄妹になったのが、美沙でよかったと思った。これから過ごす兄妹としての時間も、美沙となら退屈しないだろう。

ふと気づけば、時計はもう七時を指していた。夏は日が長いから実感がないが、あまり遅くなるわけにもいかない。

「美沙、そろそろ帰ろうか？」

僕がそう言うと、もつと渋るかと思ったが、意外にも美沙は「わかった」と素直に頷いた。

そして脱ぎ捨ててあった靴と靴下をとり、砂の上に座って、足の裏の砂をはたいてから履き始める。

異変に気づいたのはその時だった。靴を履き終わっても、美沙は一向に立とうとしない。

見かねた僕は、座り込んだまま俯いている美沙の前にしゃがみ、声をかける。

「美沙？　どうかした？」

「……なんでもない！　ちょっと、貧血かな。あはは」

明らかに無理した様子で、美沙は顔だけあげて曖昧な顔で笑った。気づいた僕は、美沙の額に手を伸ばす。

とつさに美沙が僕の手を遮ろうとするが、僕の手が美沙の額に到達する方が早かった。

……予想通り。熱い。

「言ったよね？　無茶はだめだって」

僕の言葉に、「だって……」と呟いてから美沙が口ごもる。僕は少し怒っていた。

昨日、あんなに雨に濡れて冷え切っていたのだ。それを考えれば今日は体調を崩していても不自然じゃない。

強がって隠していた美沙に対して、というのもあったが、なにやり気づいてやれなかった自分自身に対して憤りを感じる。

今日、誘い出すべきじゃなかった。心の中で自分に舌打ちしながら、僕はしゃがんだまま美沙に背を向ける。

「乗って」

さっき少し怒ってしまったので、怖がらせないように、できるだけ声をやわらかくして言った。

美沙は歩けそうにない様子だし、おぶっていくのが一番負担がないと判断したのだ。

ここから駐車場まで少し距離がある。これ以上無理はさせない方がいいだろう。

「え、でも重いし……」

美沙はそんなことを言って躊躇している。見るからに細身で、重い訳もないだろうに。

とにかく美沙を早く休ませたかった僕は、美沙が断れないような言葉を選ぶ。

「僕はそんなに軟弱に見える？」

「そんなこと……ないけど……」

美沙の気まずそうな声が、語尾に近づくにつれ弱くなる。迷っているのだろう。

そうして僕の背中の方こうで少しの間戸惑っていたようだが、やがておずおずと僕の肩に手を置いてきた。

やっと連れて帰れることに安心しながら、美沙をおぶって立ち上がる。予想通り全く重くない。

「もっと頼ってくれていいよ。兄妹なんだから……」

美沙に負担をかけないようにゆっくりと歩きながら、僕は独り言のように呟いた。

美沙は何も言わず、辛そうな息を洩らしながらも、応えるように僕にまわした腕にきゅっと力を込めしがみついていた。

背中から、僕よりも高い美沙の温度。この胸にひっそりと生まれ

ていく、くすぐったいような感情を。

その時の僕はまだ、全く気づいていなかったのだった。



## 第2話 とまどいの気持ち〔4〕

お兄ちゃんの少し茶色い髪の毛が、目の前でふわふわ、ふわふわ優しく揺れて。ゆっくりとした歩幅が、心地いい。

身体の調子は悪くなってしまったけど、なんだかとても幸せ気分だった。

お兄ちゃんは私をおぶって歩いてるんだから、きっと重いだろうし、楽じゃないはずなのに。

なのに、このままずっと続いて欲しいなんて、私は自分勝手なことを考えてしまっていた。

「もっと頼ってくれていいよ。兄妹なんだから……」

ぼつりと漏らされた、お兄ちゃんの言葉。優しさがにじみ出てるその声。

ああ、家族になろうとしてくれてるんだって。お兄ちゃんは優しいだけじゃなくて、あったかい人だ。

ねえ、お兄ちゃんは、ずっと私のお兄ちゃんだよね……？

「37、4、か」

私から体温計を受け取ったお兄ちゃんは、その数値を読み上げから少し難しい顔をした。

家にたどり着いてすぐ、私はお兄ちゃんに促されるまま、寝支度を整えてしまった。

風邪薬も飲んだ。お風呂で適度にあつたまつて、お兄ちゃんが作ってくれたおかゆも食べた。

やっと落ち着いた居間に、お兄ちゃんと私二人。薬が効いてきたのか、今は海にいた時よりもずいぶん楽になっていた。

でもまだ心配な様子のお兄ちゃんは、とりあえずと私に体温計を渡してくれたのだ。

お兄ちゃんは私を誘ったことを悪かったと思ってるみたいだった。でも私は心配させたくなかったし、なにより誘ってくれたことを後悔してほしくなかった。

あんなに素敵な思い出ができたんだから。

「たいしたことなかったね。よかった」

残った元気をふりしぼって、いつもの私らしく笑顔を見せながら、そう言ってみる。

ただお兄ちゃんはすこし困ったように笑ってから、言い聞かせるような声を出した。

「風邪はひき始めが大事なんだよ。病人は無理しないで、大人しく寝てること」

私の下手なカラ元気は、すっかりばれていたみたいだ。

だけど私は部屋に戻りたくなかった。ひとりの部屋。真新しいベツトで眠るのには、まだ慣れない。

数日前まで、私はこの家に入ったこともなかったのだ。ここにいるはずのなかった私とママ。

再婚っていうたつた二文字の形式だけで、あっけなく簡単に、他人から家族になった私たち。

ひとりであの部屋にいるとき、寝付けないとき、それを実感してしまう。

それに、夜は寝る時間まで、お兄ちゃんと二人、居間でテレビを見るのが習慣になりつつあった。

でも、まだ数日間。定着しきつてないその習慣を、今、一日でもやめてしまうのは不安だった。

私はお兄ちゃんとテレビを見ている時間がとても好きなのだ。

「今日は、ここで寝ようかな」

今日もテレビを見始めたお兄ちゃんの横で、ぼつりと独り言のように呟いてみた。

お兄ちゃんの注意が、すぐにテレビから私に移る。

お兄ちゃんは不思議そうな顔をしていた。私がすぐに部屋に戻ると思つてたみたいだ。

「部屋で寝た方がいいんじゃないかな。ここじゃ、落ち着かないと思つよ?」

「うつん、ここの方が落ち着くから。私、この部屋が好きなの」

かなり無理のある言い訳で、お兄ちゃんの言うことを頑なに否定する。

でも、無理はあつても嘘は言つてない。正しく言えば、お兄ちゃんとテレビを見るこの部屋が、ってことだけど。

当然、お兄ちゃんはその言い訳じゃ納得してくれない様子だ。何か言われる前に、私は隣の部屋になおしてあつた予備の布団と、まくら代わりのクッションを持つてきた。

お兄ちゃんの隣にクッションを置いて、ころんと横になり布団をかぶる。

すると、お兄ちゃんがテレビを消した。予想外の行動。テレビを見るお兄ちゃんの横で、眠ろうと思つていたのに。

もしかしたら私にあきれて、私を置いて居間を出て行つてしまうつもりなのかもしれない。

不安になつた私は、咄嗟にお兄ちゃんの服の裾をつかんだ。

お兄ちゃんは意外な顔をして私を見たけど、それをすぐに微笑みに変えて、私の髪をくしゃくしゃになでる。

なんだか甘やかされているみたいで、慣れない感覚に戸惑う。

「安心していいよ。ここにいるから」

お兄ちゃんのその言葉は、私の心の奥まで、優しい音色のまま落ちていった。

## 第2話 とまどいの気持ち〔5〕

僕の服の裾をつかんだ美沙は、一瞬泣きそうな顔をした。

毎日、くるくる変わる表情。でも、美沙の悲しい顔だけは、いつも変わらず痛々しい。

不安なら、それを取り除いてやりたい。

もうすっかり兄気分の僕は、自然とそんなことを思ってしまうのだった。

眠れないのか、さつきから美沙は何度も寝がえりを打っている。

眠るまでそばに居てやろうと思った。

とりあえず、美沙の前でテレビを見てうるさくするわけにはいかない。僕は大人しく本を読んでいた。

体調が悪い時というのは、わけもなく不安になったりする。美沙の様子からして、そんな心境なんだろうと思った。

絨毯がひいてあるとは言っても、寝心地は悪そう。居間ではゆっくり休めないだろうと思うけれど。

意外に頑固な一面がある美沙には、言っても譲らないだろう。

「ねえ、お兄ちゃん」

ふと、眠ろうとしていたはずの美沙から、少しくぐもったハスキーボイス。

本から彼女に視線を移すと、美沙はかぶった布団から鼻から上だけを出して僕を見ていた。

僕は努めて優しい声で呼びかけに応える。

「何？」

「……ううん、ただ呼んでみただけ」

そう言っ、美沙は少し、はにかんだような表情をした。そんな美沙に、ため息交じりに微笑んでやる。

そしてまた、しばらくの静寂。僕の目はまた本の文章を追う。

数ページめくり、そろそろ眠っただろうかと美沙を見ると、美沙の目は僕を向いていた。

眠ろうとしているとばかり思っていたのに。

「美沙。早く寝ないと、風邪が治らないよ」

「お兄ちゃんの、一番好きなものって何？」

僕の諭すような言葉には答えず、美沙は唐突にそんなことを言った。

不意打ちのような問いかけに、一瞬言葉に詰まってしまった。好きなもの、と言っても範囲が広すぎる。

「難しいこと聞くね。美沙は？」

答えに困った僕は、質問をそのまま返してみた。すると美沙は静かに微笑む。

いつも無邪気なものだが、美沙はたまに、中学生とは思えないほどの大人びた表情をする。

「私はね、星がすき」

美沙の口から出てきたのは、予想外の返答だった。もつと食べものとか、スポーツとか、そういう類たぐいの話だと思っていた。

僕が「星？」と聞き返すと、いつのまにか目を閉じていた美沙は、頷き、言葉を続ける。

「本当のパ……お父さんがいなくなった時にね。お母さんが、星になつたって言ったの」

パパ、と言おうとしたのを、途中でお父さんと言い変えたのが微笑ましいが、今はそんなことを気にする雰囲気じゃない。

何と言葉を返していいのか、わからなかった。

僕も早くに母親を亡くしている。こんなとき、安易な慰めの言葉が欲しい訳じゃないこともわかるからだ。

「月は嫌い。星を見えなくするから。星のない夜は……少し、怖い……」

美沙のその声は、語尾になるにつれ、だんだん弱くなる。眠たくなってきたのだろう。

やがて僕の返答を聞くまでもなく、声は自然に寝息に変わっていった。

猫のように、丸くなって眠る。あどけない寝顔。この子は今まで、どんな思いをしてきたのだろう。

美沙の布団をかけ直してやった僕は、ふと思いついて、カーテンと窓を開け、居間から続くベランダに出た。

見上げた空には明るい月が浮かんでいて、星はあまり見えなかった。



### 第3話 晴れのち妹、時々雨〔1〕

眠れない夜が減った。笑顔の回数が増えた。星のない夜のさみしさが減った。大切な思い出が増えた。

お兄ちゃんができたこと。三度目の新しい家族は、私の中、想像以上に大きな存在になっていく。

こうやって、私は変わっていくのかな。いつかまた家族を失って、その先に待つ悲しさなんて、もう考えたくなくなってた。

大好き！お兄ちゃん      〔第3話 晴れのち妹、時々雨〕

「……よしっ」

やっと出来上がったお弁当を前に、私はにっこりと笑いながらそんな独り言をもらした。

月曜日。風邪も土日ですっかり治って、私はいつものようにお兄ちゃんのお弁当を作ったのだ。

今日もふりかけでハートマーク。でも、そろそろハートじゃ驚いてくれなくなっただから、新しい何かを考えなきゃ。

「おはよう」

ふと背中から声がして、振り向くと、あくびをかみ殺しながら兄

ちゃんが立っていた。

珍しい。びっくりするほど朝に弱いお兄ちゃんが、自分から起きてくるなんて。

「今日は朝から講義だからね」

表情から私の思っていることを読み取ったのか、お兄ちゃんはそう説明してくれた。

そして、私の前髪をかきあげて、おでこに手を当てる。私よりもずっと大きな手のひら。

なぜか、少しどきつとした。なんだろう。なんか変だ、こんな気持ち。

少しだけ胸が痛い。お兄ちゃんと上手く目を合わせられない。

「熱は……もうないね」

もう片方の手を自分のおでこにあてながら、お兄ちゃんが呟くように言う。

その後もお兄ちゃんは、大丈夫だって言っても、薬はちゃんと飲めとか、無理はするなとか、まるでママみたいだった。

お兄ちゃんって、意外に心配性だ。そうしてお兄ちゃんに見送られ、私は今日も学校に向かう。

この前熱を出しておぶってもらったときは、パパみたくてもあったな、なんて。

そんなことを思い出して、私は学校への道を歩きながらくすりと笑う。

「おはよ、美沙ちゃん！」

新しい学校にも少し慣れて。最初にできた友達の真央ちゃんが、教室に入るなり笑顔で声をかけてくれた。

真央ちゃんは、とってもいい子。一重瞼がすっきりして可愛らしい。

それに、真央ちゃんにもお兄ちゃんが居るらしくて、私は親近感も持っていた。

席について、授業が始まるまでの雑談タイム。私はふと、気になっていたことを口にした。

「真央ちゃんにとって、お兄ちゃんってどんな感じ？」

私の言葉が意外だったのか、真央ちゃんはきよとした顔で数回まばたきした。

「変なこと聞くね！ 美沙ちゃんもお兄ちゃんいるんでしょ？」

「うん……そうだけど」

口ごもる私。私とお兄ちゃんは、本当の兄妹じゃないから。

普通の、本当のお兄ちゃんがどうなのか知りたかった。でもそんなこと、あんまりべらべら言いたくない。

すると真央ちゃんは、それ以上追及するのをやめてくれたみたいで。

うーん、と考える仕草をしてから、笑顔で口を開いた。

「空気みたいな感じ。たまにけんかもするけど、力抜いて話せる家族。いてもいなくても変わらないかな。美沙ちゃんは？」

真央ちゃんが私を見る。その視線に促されるまま、私はお兄ちゃんを思い出す。

私のお兄ちゃん。いつも隣でお兄ちゃんは笑っててくれて。それが嬉しい。思い出すだけで、心があたたかくなる。

「私は……いなくちゃならない存在、だと思う。でも一緒にいると、少しだけ胸が痛くなったりする」

なんだかしんみりしたような気持ちで、私は自分の正直な気持ちを話した。

すると、真央ちゃんの口からは予想もしない言葉が出てきた。

「それってさ、まるで恋してるみたいじゃない？」

衝撃的、だった。真央ちゃんは冗談のつもりだったみたいで、「なんてね」なんて言って笑ったけど。

恋、なんて聞き慣れない言葉。なんだかわけがわからなくなって、一日中その言葉が頭から離れなかった。

だけど、そんな風にいっぱいいっぱいになっていた私に、容赦なくそれは訪れた。

帰り際、先生に見つからないように、かばんの中でこっそりのぞいたケータイ。

何となくの行動で、何も考えてなかったのに。

そこに残っていた着信履歴に、どきりとする。それは、ママからの連絡だった。

### 第3話 晴れのち妹、時々雨〔2〕

昼時の、大学の講義室、空き時間。

僕は食べるのも数回目の美沙の弁当のふたを開けて、そしてまた今日も苦笑するのだった。

最初は驚いたけれど、なんだか今ではこのハートマークのふりかけに、すっかり慣れてしまった。

それを微笑ましいとすら思っている時点で、すでに重傷だ。気づけばいつもペースに巻き込まれている。可愛い僕の妹は、可愛いだけじゃなく、なかなかのくせ者だ。

そういえば風邪は治ったみたいだったが、美沙は大丈夫だったただろっか。

治ったと言っても全快ではないだろう。朝から少し心配だった。

「おはよ、拓斗。何？ 珍しく弁当作ってきたの？」

ふと背後からの声でそんな物思いは打ち消され、そして僕はすばやく弁当のふたを閉めた。

いくら美沙のペースとは言っても、一応、あのハートを他人には見せたくないという羞恥心はまだ残っている。

「久しぶりですね。伊藤先輩」

冷静な姿勢を保ちつつ、僕は振り返らずに答えた。

僕を拓斗、と下の名前で呼ぶ人間は限られている。同じ学年の友達<sup>すがや</sup>は菅谷と名字で呼ぶ。

下の学年は菅谷さん。つまり、先輩しかないのだ。

サークルに一応入っているというものの、あまり顔を出さない僕には、上の学年に知り合いは数人しかない。

特にさっきの声は明らかに女。女で先輩、といえば、元力ノの友達である伊藤先輩くらいだ。

「亜子って下の名前で呼んでいいって。ってかさ、ありえないハートついてなかった？ 何？ もう力ノジヨできたの？」

伊藤先輩、という僕の予想が当たったのはいいが、先輩にはきっちり見られてしまったらしい。

別にどう思われてもいいが、とりあえず誤解を解くため、僕は弁解してみる。

「彼女じゃないですよ。妹です」

「へえ、拓斗に妹とかいたっけ？」

いぶかしげな目に睨まれてしまった。本当のことだが、やっぱりただの言い訳にしか聞こえないか。

「まあ、いいや。今日は、絶対にサークルに顔出してもらってから」

あっさりと話を変えた先輩は、強制的にそう言うってから、僕の返事を待たずして講義室から出ていった。

前から思っていたことだが、年上は、こういう強引なところがやっかいだ。

そうして夕方に差し掛かり。そろそろ美沙も家に着いたころか、なんて思っていたら、丁度ケータイが鳴った。

メールだった。差出人は、美沙。『今日は、お祝いしよう！』という題名に、『家で待ってるよ』という本文のみ。

くせなのか、美沙のメールはいつも、語尾に星がついている。

意味がわからなかった。とりあえず待っているということは、早く帰れということだろうか。

今夜はサークルに行かなければいけなかったが、適当な飲み会サークル。

少し顔だけ出して帰ればいだろう、と安易な発想で、『わかった』とだけ返信した。

それがいけなかった。僕のその考えなしの返信は、あまり思わしくない方向に向かっていくのだった。

### 第3話 晴れのち妹、時々雨〔3〕

私の嫌な予感、半分当たったようで、半分当たってなかった。

ママからの着信。家族を失った時の、小さな過去の傷。また離婚することにした、なんて言われたらどうしよう。

そう思うと怖くて、どうしても電話をかけ直すことができて。

ずるずるとそのままに、学校から家にたどり着いてしまった。

部屋のベットに転がり、ケータイをにぎったまま、かけ直すか考え込む。

そうしていると、急に手の中でケータイが震えだした。

驚いたあまり、私はびくりと肩を震わせる。

それは、メールだった。差出人はやっぱりママ。宣告でも受けるような気持ちで、私は恐る恐るメール本文を開く。

だけどそこにあったのは拍子抜けするような内容だった。

『今日、拓斗くん誕生日らしいから。お祝いしてあげてね』と、題名なしの、本文もそのたった一行。

「なんだ……」

思わずひとり呟く。そして自分に笑った。私、ひとりで勘違いして、すごく緊張してたみたいだ。

第一ママの離婚なんて、慣れてたはずなのに。何動揺してたんだろ。



だけと思った以上に不安だったらしい私の心は、離婚じゃなかったことになんとか安心して緩んでて。

その勢いで、私はとても勇気のいるはずのことを、簡単にやってのけてしまった。

『新しいパパとは、上手くいきそう?』

得意の早打ちで、すぐにママに返信する。だけど返信が完了して我に帰る。

軽い気持ちで簡単に聞いたけど、私、これがどんなに重い意味を持つか自分でわかってた?

もし上手く行きそうにない、なんて言われたら。

怖い。なにこれ、これじゃさつきと同じ状況だ。

しばらく何もできず、じっとママの返信を待つ。ママはメールの返信は早いはず。

でも10分たっても、30分たっても、ママからの返信はない。大嫌いな、メールを待つてるこの時間。

新着メール問い合わせの回数だけが増えていく。

やがて一時間を過ぎたところで、私はどん底まで沈んでいく自分を感じていた。

どんな時でもメールの返信は欠かさないママ。それなのに、返信しないってことは……。

だめだ、と思った私は、とっさに考えることをずらした。

いつものくせ。辛い時には楽しいことを考えること。　　そうだ、

お兄ちゃんの誕生日。

思い立った私は、お兄ちゃんに『お祝いしよう』とメールする。  
お兄ちゃんからはすぐに『わかった』と返事が返ってきた。男の  
人らしい、淡白で短いメール文章。

でももう少し、絵文字とか顔文字とか使ってほしいのにな。

なんだかすっかり楽しい気分になった私は、そのまま夕方の街に  
買い物に出かける。

そして買ってきた材料で、はりきって大きなケーキを作った。昔  
から料理は得意。いつもどおり、かなり上手くできた。

ケーキにさしたロウソクは、20本。ハタチだなんて、なんだか  
大人の響き。

テーブルの上にクラッカーをならべた私は、椅子に座ってお兄ち  
やんの帰りを待つ。

お兄ちゃん、きっと喜んでくれる。そう思うだけで、私の方が嬉  
しくなっていた。

### 第3話 晴れのち妹、時々雨〔3〕（後書き）

美沙と拓斗の名前は、前作をもじってます。

美香 美沙、達也 拓斗。エピソードも所々かぶらせてます。話  
は全く無関係です。

次話も、美沙視点です。

### 第3話 晴れのち妹、時々雨〔4〕

はつと我にかえると、同じ景色の中、部屋の明るさだけが変わっていた。

私は机に突っ伏して、いつの間にかうたたねしていたみたいだった。

外はすっかり暗くなり、電気のついていない部屋は真っ暗で何も見えない。

手探りで見つけたケータイを開いても、誰からもメールは入ってなかった。

なんの反応もない静かなケータイを見たたん、一気に気持ちが落ち込んでいく。

夕方から待ってたのに、もう8時になってる。約束してたのに、いくらなんでも遅い。

ママからのメールもなく、お兄ちゃんも帰ってこない。

待ちくたびれた私は、なんだか疲れた気持ちでケータイを閉じた。そしてとりあえず暗闇から抜け出そうと、立ち上がり、電気のひもを力チリと引く。

その時、テーブルに手をついたのが、いけなかった。ぐちゃ、という気持ち悪い感触と共に、電気がつく。すぐに目にはいつてきたのは、私の手につぶされて、悲惨な形になってしまったケーキ。

どうしようもない気分になった。こみあげる涙をぐっところえる。どうしてお兄ちゃんは帰ってきてくれないの。どうしてママはメルを返してくれないの。

どうして 私はまた、ひとりぼっちなの？

そこに考えが行きついた瞬間、私は急に怖くなった。助けを求めようと、ベランダに出る。

くもった空。星のない夜。ひとりの私。誰も、私を見てくれない。すべてがどうでもいいような投げやりな気分。こんな気持ちになったのは久しぶりだった。

その時、部屋の中からケータイのバイブレーションが聞こえて。生き返ったようにはっとした私は、慌てて家の中に駆け込み、ケータイを掴む。

電話の着信だった。それも、お兄ちゃんから。

「もしもし！」

自分で自分から出た声の大きさに驚いてしまった。

飛びつくように出た私の迫力が伝わったのか、お兄ちゃんは受話器の向こうで一瞬止まったみたいだった。

『美沙……？ ごめん、なかなか帰れなくて……できる限り早く帰るから……』

受話器越しに聞くお兄ちゃんの声は、実際に近くで聞くよりも低く落ち着いている。

連絡をくれた。忙しかっただけだったんだ。

「ううん、いいよ。連絡くれたんだもん……」

すっかりさっきまでの悲しい気持ちが飛んで行ってしまった私は、見えないのに受話器越しに何度も首を横に振った。

電話一本でなんて単純、って自分でも思いつつ、上機嫌になった私。

だけどその時、受話器の向こうから予想外の声が聞こえた。

“拓斗、電話？”って、はっきり女の人の声。一気に私の気持ちの色が変わる。

「お兄ちゃん。近くに女の人がいるの？」

『……えーと、うん。そうだけど……』

いつも低いけど、それよりもっと低い私の声に、お兄ちゃんが気まずそうな声で答えた。

私がこうやって必死に待ってたのに、お兄ちゃんは私をほったらかして、女の人と居たなんて。

私が、どんな気持ちで待ってたかなんて、何も知らずに。

悲しい気持ちが胸を埋め尽くして、それを吐き出すための言葉が、私の口について出てきた。

「お兄ちゃんのバカ！ 大っきらい！」

受話器に向かって渾身の大声を出して、私は一方的に電話を切った。ついでに電源も切った。

そしてそのまま階段を駆け上がる。部屋のドアをボタンと閉め、布団にくるまった。

“大嫌い？” ううん、そうじゃなくて。そんなのウソで。私……

…  
変だ。

### 第3話 晴れのち妹、時々雨〔5〕

自分のことに無頓着な僕の性格が、災いした。すっかり忘れていたのだ。誕生日なんて。

あの後、サークルの飲み会に顔を出したはいいものの、盛大に僕の誕生日が始まってしまった。

気になってはいたのだ。美沙からのメール。どこで僕の誕生日を知ったのかは知らないが、祝うため家で待っているはずだ。

以前にも、美沙を待ち合わせで待たせたことがあった。もうあんな事態は避けたかった。

けれどもいくら僕が帰ると言ってみても、サークルのメンバーは、先輩を中心に「主役は帰らせない」との一点張り。

電話するどころか、席を立てないまま時間ばかりが過ぎ。

やっとケータイを持ち抜け出せたのは、8時を回ったころだった。

そこで電話したところまではまだよかった。タイミング悪く、伊藤亜子先輩が話しかけて来なければ。

飲み会を無理やり抜け出して、やっと辿り着いた我が家の玄関。ただいまと言ったが何の反応もない。居間の電気がついているので、美沙が居るのかと思ったが、居間には誰もいなかった。

ふと、テーブルの上に目が行った。クラッカーが数本。それと、失敗したのか、少し形の崩れた手作



りらしきケーキ。20本のローソク。

一生懸命にケーキを作り、いそいそとクラッカーを準備して、僕を待つ美沙の様子が浮かぶようだった。

そばに置いてあったフォークで、ケーキを一口食べてみる。美味しかった。何ともいえない沈んだ気持ちになった。

もう傷付けたくないと思っていたのに、僕は結局、また美沙を悲しませてしまったのか。

気づけば、僕の足は階段を上がっていた。靴はあったし、美沙は部屋にいるはずだ。

美沙の部屋の扉をノックしてみる。何度ノックしても応えないので、入るよ、と一言断ってから部屋の扉を開けた。

部屋の電気は付いていた。ベッドの上で、布団が丸く盛り上がっている。もそもそとしているので、眠ってはいないようだ。

「美沙、ごめんね」

布団の上からそう声をかけてみるが、返答はない。

これで、美沙に謝るのは二度目だ。だけど今回は一方的に僕が悪い。

盛り上がった布団の、美沙の背中と思われる場所に手を置き、あやすようにぽんぽん、となでてみた。

一瞬びくつと反応したが、それでも美沙は頑なに何も言わない。ほったらかされていじけた、小動物か何かを相手にしている気分だ。

「……私、よけいなことしたよね。お兄ちゃんにはいっぱい、お祝いしてくれる女がいるんだよね」

しばらくして、布団の中からくぐもった声。目の前の少し大きめな小動物は、やっぱり完全にいじけているようだ。

やれやれと微笑ましい気分になるが、同じだけ罪悪感もあった。そんなつもりはなくても、結果的にひどいことをした。けれど過ぎてしまった今、僕には謝ることしかできない。

「ごめん。美沙がせつかくお祝いしようとしてくれたのに、ひどいことしたよね」

「お兄ちゃんなんて、嫌い。大嫌い」

僕の言葉はその耳に入っているのか、布団の中から、いつもよりもトゲのある美沙の声。

けれど本心ではないんだろう。うぬぼれのようにそう思ってしまったのは、いつも僕に見せる、彼女の無邪気な笑顔のせいなのか。

美沙を笑わせたい。美沙を大切にしたい。

いつの間にかすっかり僕の家族になってしまった美沙。とても純粹で、だからこそ、誰かが守ってやらねばいけない。

その役目を果たすのが、兄である僕であればいいと。そう思うのは、つまりはこういうことだ。

「美沙が僕をきらいでも、僕は好きだよ。大事な妹だ」

僕のその言葉を聞くなり、かたくなに布団に閉じこもっていた美沙が、ひよっこり顔を出した。

大きな目が、涙をこらえて赤くなっている。口をへ字に曲げて眉尻を下げ。

やがてその瞳にたまっていた涙は、簡単にこぼれ落ちていくのだ  
った。

### 第3話 晴れのち妹、時々雨〔6〕

布団の向こう側から聞こえた声は、とても優しい響きだった。  
お兄ちゃんは、ずるい。ずるい。ずるい。

大事な妹、なんて。そんなこと言われたらもう、怒ることなんて  
できるわけないじゃない。

布団の中からこっそり顔を出したら、穏やかな瞳のお兄ちゃんと  
目があった。瞬間、堪えていた涙があふれ出す。

情けない顔をしているのは、自分でもわかった。私、今すぐくっ  
こ悪いのかもしれない。

どうしてだろう。私は強かったはずなのに。簡単に涙なんて見せ  
なかったのに。

家族を失った日も、ママがデートで帰ってこなくて、ひとりで、  
星のない夜も。私は絶対泣かなかった。

弱い自分に、負けたことなんてなかった。それなのに。

間の抜けた泣き声をもらしながら、私はとにかく泣いた。

わかってるの。ただ、くやしかっただけ。

私が一番にお祝いしたかった。喜ばせたかった。でもそれができ  
なくて、悔しくて、お兄ちゃんにやつあたり。

一番安らげるあったかい場所。大切な日を過ごす場所。一番居心  
地のいい場所。

きつとそれが、家族ってことなんだって。  
そんな夢見た家族が、もしかしたら現実のものになれるのかもつ  
て、思い始めてるのはお兄ちゃんのおかげ。

だから私もあつたかい気持ち、あげたかった。お兄ちゃんの心を  
あつたかくしたかった。

ほかの女の人に、その役目を取られなくなかったんだ。

「……うそ。うそだよ。……きらいな、わけ、ないでしょ……」

嗚咽まじりに、私は呟いた。情けない声、とぎれとぎれの言葉。  
だけとお兄ちゃんは笑みを深め、私の頭をなでた。

小さい子にするみたいにな、とても優しく。お兄ちゃんのこげ茶色  
の瞳に私が映っている。

それがなんだかすごく、安心した。

「ケーキ、おいしかったよ」

私がやつと落ち着いてきた頃、ふと、お兄ちゃんがそんなことを  
言ったので、私は少し慌ててしまった。

私の手につぶされてしまった、あんな不格好なケーキ。見られた  
だけでなく、お兄ちゃんが食べたなんて。

こんなことなら、捨てておけばよかった。

「カツコ悪かったでしょ。あんなになっちゃって……」

失敗作を見られたのが恥ずかしくなつて、私は少し沈んだ声を出  
してしまった。

するとお兄ちゃんは、言い聞かせる時のような顔で、首を横に振  
った。

「僕はね。大事なのは、そういうことじゃないと思うんだ。……ちゃんと言わったよ。美沙の優しい気持ち。ごめんね、ほんとに」

そう言って、お兄ちゃんはまた微笑んでくれる。なんだか胸がキユツとなった。

「お誕生日、おめでとう、お兄ちゃん」

自然と出た言葉。どんなにすねてみても、泣いてみても。ひとりで空回りしても、ケーキを失敗しても。

私は結局、この言葉を一番届けたかったんだ。大好きな、私のお兄ちゃんに。

「ありがとう」

そう言って、お兄ちゃんが笑った。私をはじめて見た、お兄ちゃんの屈託ない笑顔。

ハタチになったお兄ちゃん。私よりずっと大人なんだけど、きれいな顔立ちだからなんだか可愛くて。

海で見つけた、お兄ちゃんと半分ずつの貝殻。風邪をひいた日、お兄ちゃんの大きな背中。

お兄ちゃんの横で眠った、星のない夜。

そして今日、思い出はまた増えて。お兄ちゃんに向かう大好きの気持ちもまた、ひとつ増えていった。

そんな幸せな気持ちの中、わずかなひっかかり。結局、ママからのメールの返信はなかった。

でもそれ以上考えないように。不安な気持ちを忘れるように。私  
は、お兄ちゃんに精一杯の笑顔を向けた。

#### 第4話 コドモと大人の境界線（1）

あれから、仕切り直しとばかりに美沙は張り切った。

崩れたケーキに20本のローソクを立て直し、手料理をテーブルに並べる。

美沙の料理の腕前にはいつも驚かされる。

ただ、オムライスのケチャップなんか、やっぱりハートマークだったりするところが、玉にキズだが。

はしゃぐ美沙をあやししながら、それでも僕自身も結構楽しんでいった。

そうして料理も食べ終わり、僕が皿洗いをしていると、美沙が運んできた食器を置いて、後ろから僕の肩を指先でつついてきた。

振り向くと、少しはにかんだような笑い方。美沙はよく笑うが、その時の状況によってニュアンスが違ってくる。

くるくる変わる表情は、見ていて飽きない。美沙は照れくさそうに口をひらいた。

「ねえ、お兄ちゃん。前より少しだけ、仲良くなった気がする」

「そう？　じゃあ、ケンカしたかいもあったかな」

冗談ぽくそう言っ、僕は少し笑う。すると、美沙が驚きの行動に出た。

突然僕に向かって背伸びしてきたかと思うと、ふいについて僕の頬にキスをしてきたのだ。



驚いて、手に泡を付けたまま、半ば呆然と美沙を見る僕。けれど美沙はといったらけろつとしたものだ。

僕はそんな美沙に、少し遠慮がちになりながらも訊ねてみる。

「……美沙、どうしたの。突然」

「え？　だって小さい頃パパ　じゃなかったお父さんが、男の人とケンカしたときはこうしてやれって。私もお父さんとケンカしたとき、いつもしてたよ。仲直りのしるし！」

そんなことを言っただけで笑う、美沙の無垢すぎる微笑みが痛々しい。

美沙ももう中学生。一応は思春期だ。男とケンカするたびに、誰にでもこんなことをしては、周りに誤解されかねない。

さすがに誰にでもしてはいるまいだろうが。　いや、していない  
と思いたい。

一体どういう育て方をされてきたんだろう。この子の将来に、一抹の不安を感じる。

#### 大好き！お兄ちゃん　第4話　くコドモと大人の境界線く

美沙と居ると、一日がとても長い。まだ一週間と少しだが、もうずっと兄妹をやっている気分だ。

「お兄ちゃん、今日も勉強？」

週末。冷えた麦茶を持ってきてくれた美沙は、気遣わしげに僕に声をかけてきた。

最近、僕は勉強モードに入りつつある。前期試験がもうすぐなのだ。

たいがいの場合過去問があるからいいが、一教科、やっかいな教授の試験がある。

過去問と全く傾向を変えてくる。その上、いつもいやがらせのよう  
に難しい。

バイトのない休みの日は勉強。美沙にも気を使わせて悪いと思うが、こればかりはどうしようもない。落第はしたくないのだ。

「ごめんね。最近、なんだか慌ただしくて……」

「ううん。夏休みになったら、毎日いっぱい相手してもらおうから」

僕の言葉に、美沙は笑顔でさらっと恐ろしいことを言う。

長い夏休み、また僕はこの妹君に振り回されることになるんだろう。それを思い、僕は少しだけ苦笑した。

美沙はそのまま僕の部屋を出ていこうとはせず、ソファーに寝転んで何かの本を読み始めた。

こんな日常が自然になってきている。ついこの間までいないのが当たり前だった妹も、もう今では、そばにいてあたりまえ。

しばらく無言の、でも穏やかな空気が流れて。ふと美沙を振り返ると、彼女はすでに夢の中。

やれやれと微笑んだ僕は、自分のベットから持ってきた布団を、美沙にかけてやった。

## 第4話 コドモと大人の境界線（2）

やっと幸せを手にした時、それはいつも、ふとやってきた。膨らんでいく不安な気持ち。

リコン、という恐ろしい三文字が、ママの口から出てくるのを恐れて。

家族が壊れる、カウントダウン。再婚してすぐは幸せそうに笑ってたママの顔が、日に日に険しくなっていく。

あれは二度目の離婚直前の時。

私はどうしようもなく悲しい気持ちで、ケンカするママと、『パパだった人』の間に、割って入ったことがある。

「いやだよ、ママ……パパと仲良くしてよ」

私の必死の抵抗。だけどイライラした様子のママは、険しい表情を変えなかった。

いつもは優しいはずのママの瞳が、冷たく私を映し出して。

「子供は黙ってなさい」

たったその一言で、私は言葉を奪われてしまった。はがゆい気持ち私が私を支配する。

子供だと、話も聞いてくれないの？ 子供扱いはやめて。そんな顔するのはやめて。私の声を、聞いて ……

「あれ……？」

突然場面が変わって、自分の呟いた声が、やけに現実的だった。視界に広がるのは、まだ完全には見慣れない、お兄ちゃんの部屋。ぼーっとして気だるい頭。私は目をこすった。

ふわりと、お兄ちゃんのおいに包まれている。私、いつの間に布団にくるまってたんだろう？

「起きた？ よく寝てたね」

机に向かっていたお兄ちゃんが、ソファーに転がった私を振り向いた。お兄ちゃんを見て、ほっとする。

夢……だったみたいだ。離婚のときの夢はもう何度もみたけど、いつもリアルで気分が悪い。

特に、今日の夢は。子供、って言葉が、胸に突き刺さったままだ。

「私……子供なのかな」

体を起こしてすぐ、気づけば、つぶやいていた。

わかってる。お兄ちゃんだって大人なんだし、私なんて子供でしかないって。でも、聞かずにはいられなかった。

そんな私に、お兄ちゃんが少し首をかしげる。

「突然どうしたの？」

当然の疑問。でも、理屈はいいかとにかく、答えが欲しかった。私が黙っているの、お兄ちゃんは小さく微笑んだまま、ひとつため息をついて口を開いた。

「心配しなくても、すぐ大人になれるよ」

否定、じゃない。でも遠まわしに肯定してる。一番優しくて、嘘のない、的確な答え方。

それはわかるけど、なんだかどうしてもくやしかった。

「私、部屋に戻る」

いつもより低い声が出た。すくっと立ち上がり、私は部屋のドアに向かってずんずんと歩き出す。

お兄ちゃんがそんな私を見守っている。不機嫌になってるなんて悟られなくなかったけど、ばれちゃったかもしれない。

余裕の差。お兄ちゃんは、やっぱり大人だ。

なんだかやけになっていた私は、部屋に戻るなり鏡の前に座った。いつもはさわりもしない、ママからもらった化粧道具たちをずらっとならべる。

どこをどうしていいのかわからないけど、とりあえず塗りたくってみた。

外見は、いつも大人に間違われてきた。大人っぽい顔立ちだっがよく言われる。だから勘違いしてたのかもしれない。

コドモと大人の境界線。どこまでが子供で、どこからが大人なの？

必死にはじめての化粧を仕上げて、とどめとばかりに、私はママのおさがりの大人っぽい洋服に着替える。

そして鏡を覗いた瞬間、張り詰めていたような私の心が、少しゆるんだ。

そこに映っていたのは、高校生って言っても通用しそうな、大人

な私の姿。

なんだ。やっぱり私だつて、簡単に大人になれるんじゃない。  
すっかり自分を取り戻した私は、そんな姿のまま、いそいそと再  
びお兄ちゃんの部屋に向かった。

#### 第4話 コドモと大人の境界線「2」（後書き）

シリアス……？ コミカル？ シリアス？？

やっぱり、ランキングのジャンルを移動した方がいいのでしょうか……。

題名のイメージから、ラブコメ読みたくて覗いて下さった方、もうほんと申し訳ないです。

次話も、美沙視点の予定です。

#### 第4話 コドモと大人の境界線〔3〕

「お兄ちゃん！」

弾むような声で、私はお兄ちゃんの部屋の扉を勢いよく開けた。まだ机に向かっていたお兄ちゃんが、私を振り向く。どんな反応をしてくれるんだろうって、私は内心うきうきしてた。

大人になったでしょ、って、誇らしげな気持ち。私ももう子供じゃないんだって思ってた。ほしかった。

だけとお兄ちゃんの反応は、私の思ったようなものじゃなかった。

「どうしたの？ それ。似合わないね」

お兄ちゃんは、笑顔を向けてはくれなかった。大人っぽいつて、ほめてくれると思ったのに。

鏡を見てからついさっきまで、上昇していていた私の気持ちが、あっけなく落ちていくのを感じた。

無理して、必死に背伸びしてるのを見透かされたような気がして、急に自分が恥ずかしくなってくる。

だけど今さら引き下がれない私は、なんとか笑顔を保って口を開く。

「大人っぽくなったでしょ？ ねえ、少しだけ出かけようよ」

「今日は、ちょっと無理かな。ごめんね。また今度、遊びに連れていくから」



ねだる私に、お兄ちゃんは困ったように笑いながら言った。お兄ちゃんは私のことをそんなに相手にしていない。

私はお兄ちゃんに見てほしくて、こんなに必死に化粧して、おしやれしてきたのに。

お兄ちゃんと私の間の、この温度差がくやしい。

私は半ば意地になって、お兄ちゃんに食い下がる。

「いいじゃない、少しくらい」

「……美沙、頼むから」

お兄ちゃんの声に、少しの疲れを感じる。でも怒ってるってわけじゃなくて。

お兄ちゃんは今くまで大人な対応で、必死な私を簡単に受け流す。

お兄ちゃんは、最近ずっと頑張ってる。勉強してたんだから、疲れるのも無理ない。

出かけられるわけない。わかってるのに。

困らせてる。ワガママ言ってる。私が疲れさせてる。そう自覚すればするほどあせって、私は躍起になっていく。

「お兄ちゃんは、私より勉強が大事なんだ……」

本心じゃそんなこと思ってないのに。気づけば、私はそんなことを口走っていた。

はっとして、口をつぐむ。こんなこと言っつもりじゃなかったのに。

「そんなことは言っていないよ。ただ、今は状況的に無理だって……」

わかるよね？」

さっきまでの優しい瞳が、今はいつもより少し、厳しい色をして  
お兄ちゃんはい聞かせるような声で私に言った。

お兄ちゃんの言う通りで、何も言い返せなくて、私はぐっと言葉  
に詰まる。

どっかに逃げ出して、隠れてしまいたい気持ちになった。

ワガママ言ってるって自覚してたのに、自分の感情を止められな  
かった。

自分が子供だって思い知る。これじゃまるで、思い通りに行かな  
くて、だだをこねる子供そのもの。

私はいたたまれなくなつて、お兄ちゃんの部屋を飛び出した。お  
兄ちゃんは追ってくる気配もない。

なんだかやるせない気分になった。のどがかわいて、そのまま一  
階に降りて冷蔵庫を開く。

そこにいいものを見つけた私は、思わずそれを手に取ってしまう  
のだった。

こんなので大人になれるなんて思ってたない。でも、大人になりた  
いから。

結局、矛盾してるんだ、私。

#### 第4話 コドモと大人の境界線「3」（後書き）

ワガママ美沙発動。この2人、さりげに7つの年の差があります。

ちなみに作者は、兄・拓斗とひとつ違いですが、こんなに大人じゃありません（笑）

#### 第4話 コドモと大人の境界線〔4〕

はじめて口にした、ビール、っていうのは、とても美味しいなんて言えるものじゃなかった。とにかく苦い。

テレビの宣伝とかで、おいしそうに飲んでるのが信じられなくなる。

でも、その苦いビールの味にまで、子供だって馬鹿にされてるみたいで。

悔しくなった私は、それを無理矢理のどに流し込む。

少しずつ、頬が火照ってきていた。手の中のビールの缶を見つめながら、どうでもいいことを考えてみる。

冷蔵庫に入ってたけど、これって、お兄ちゃんのパパのビールだったのかな。

そう思って、ふと気付く。お兄ちゃんのパパ、じゃなくて。

ちらっと会っただけの、今はママと旅行中のあの人は、私のパパでもあるんだって。

でも家族って実感がない。この家に来てから、私の新しい家族は、ひたすらお兄ちゃん。

そうやってお兄ちゃんのことを考えた瞬間、なんだか急に感情が高ぶっていくのを感じた。

ワガママを言った自分を再認識して。自己嫌悪と共に、涙が込み上げる。

なんだかいつもより、気持ちの振り幅が大きくなってしまっているみたいだ。

「お酒を飲めば忘れられるって、そんなの全然嘘なんじゃない……」

ひとり呟いて、私は涙をこらえつつ、ふっと笑う。投げやりな笑い。

お兄ちゃんの、私に対する『子供扱い』な所、まるでママみたいだ。そう考えてすぐ、違和感を感じる。

ママみたい、ってところに引っかけりを感じた。だってお兄ちゃんは、ママとは違ってなかった？

ママは、私を話にも入れてくれなかった。子供だからわからないって決めつけて。

でも、お兄ちゃんの態度はどうだったんだろう。

……子供扱いじゃ、なかったんじゃないの？

だってちゃんと私を見てくれた。厳しいことを言ったのも、私と向き合おうとしてくれてたから……？

「何、飲んでるの。ちょっと目を離したすきに……」

急に背後から声が飛んできて、驚いた私はビールの缶を取り落としそうになりながらも、居間の入口を振り向いた。

腕組みをして壁に寄りかかり、私を見守ってるお兄ちゃん。

ワガママな子供だって、軽蔑されるかもしれないと思ってた。ウザったいって、嫌われるかもしれないと思ってた。

なのに、お兄ちゃんの瞳の色は、いつも通りに優しかった。

ほつとすると同時に、涙がこぼれて。そしてしゃっくりがでた。それがまるで、テレビの中の酔っ払いみたいで。そんな自分がかしくなつて、私は笑った。

すごくいい気分。でも、お兄ちゃんを見てると胸が切ない。

なんだろう、これ。お酒を飲むと、こんな気持ちになるのかな。

それは思った以上に、私の心を戸惑わせるような、ひたすらに甘い切なさだった。

#### 第4話 コドモと大人の境界線〔5〕

甘やかすだけが優しさじゃない、と思った。だから厳しいことを言った。

けれど心は痛むもので。結局気になって仕方がなかった僕は、勉強どころの話じゃなくなってしまった。

戸惑い。どう接すれば、美沙のためなのか。どう接すれば、美沙を悲しませずに済むのか。

それは、一人っ子で、年下との接点がまるでなかった僕にとって、かなりの難題だった。

しばらくそつとしておくつもりが、結局は30分も待たず、僕は居間に向かった。

すると、驚きの光景が目に入ってきて、僕は一瞬、啞然とする。美沙が、冷蔵庫にあったはずのビールを飲んでいるではないか。

少し様子をうかがった後、背後から声をかけてみると、振り向いた美沙は泣きながら笑いだした。

ずきりと心が痛む。また、この顔をさせてしまった。涙をさんざん我慢した後の、笑い泣きの顔。

僕は、美沙のこの表情を見るのが嫌いになりつつあった。痛々しくて見ていられなくなる。

床に座り込んでいる美沙の前まで行き、同じように座って目線の

位置を合わせてみた。

床に転がったビールの缶が、2本。美沙の手にも1本。

結構な量を飲んでいる。やっと笑うのを止めた美沙は、規則正しいリズムでしゃっくりを繰り返していた。

まるい頬を真っ赤に染めた、幼い酔っ払い。酔いが回ってきたのか、さつきよりもぼんやりとしている。

美沙には悪いけれどおかしくなって、僕は少し笑ってしまった。

対して美沙は、僕に笑われていることなど自覚していない様子で。ぽすん、と僕に抱きついてきた。

「お兄ちゃ、んー」

甘えた声で、美沙が僕を呼ぶ。僕の胸のあたりに顔を押し付けてきたので、んー、というところがこもった声になった。

猫のように、美沙は僕にじゃれついてくる。可愛らしいというか、微笑ましいというか。

どんなに振り回されようと、結局は僕は、この無邪気な妹に弱くなりつつあるのかもしれない。

そんな和やかな気分になっていると、ふと脇腹のあたりに違和感を感じた。

見てみると、そこには美沙の手が。何やら僕の脇腹のあたりで必死に手を動かしている。

……これはもしかして、くすぐっているつもりだろうか。

僕を笑わせようと一生懸命な美沙には悪いが、僕は昔から、くす



ぐられても効き目がまるでない。

冷静なまま美沙を見ると、きょとんとして僕を見上げる美沙の瞳と目が合った。

一瞬の間をおいて、美沙の表情が、笑みの形にふにやりと緩む。

「効かないの？　なんで効かないの、お兄ちゃんっておかしい！  
おかしいよ！」

声のトーンを大きくしながら言っ、美沙は突然、きゃははは、とそれはおかしそうに笑いだす。

さつき、やっと笑い終えたばかりだったのに。美沙の笑いのツボがまったく理解できず、僕は対応に困る。

箸が転がっても面白がる年代、ということはわかるけれど、これは酒が入ったせいでもあるんだろう。

美沙は笑い上戸になるタイプらしい。いや、酔っていないなくても、もともとその素質はあるが。

「……あー、はいはい。よしよし」

僕はくすりと笑いながら、僕に抱きついてはしゃぐ美沙の頭をなで、なだめてやる。

すると、はじめたように笑うのをやめて、美沙が顔を上げた。変化が突然すぎて、僕はまた驚かされる。

「お兄ちゃんは、私よりずっと大人なんだよね……？」  
「……さあ。どうかな……」

唐突な美沙の質問に、僕は答えを濁した。美沙はよく難しいことを聞いてくる。

はつきりと自分が大人だ、と言い張れるようになる瞬間というのは、いったいいつのことを指すのだろう。

20歳になったからと言って、別に何かが変わったわけじゃない大人、というのは、そういう形式的なものじゃなく、きっと精神的な面が大きく影響しているからだ。

「私、子供じゃない、よ……」

美沙が、舌足らずになりながらも、ぽつんと呟いた。

きつと美沙も、自分ではわかっている。この一週間で感じたことだが、美沙は僕が思っていたほど幼くない。

子供じゃないと言い張るのは、自分が子供なのかもしれないと、感じているからなんだろう。

優しさを見せるのもいいかもしれない。

「……うん。わかったよ」

僕が微笑みながらそう言ったら、僕を映した美沙の大きな瞳が、頼りなげに揺らめいた。

#### 第4話 コドモと大人の境界線「6」

お兄ちゃんの大きな手で、頭をなでてもらうのが好き。安心できるから。

お兄ちゃんの手は、とてもやさしい手だから。

お兄ちゃんが優しいのは、大人だから？ 私が妹で、子供だから優しくしてくれるの？

「私、子供じゃない、よ……」

舌がうまく回らなくなってくるのを感じながらも、ふわふわした意識の中、意地を張ってみる。

すると、お兄ちゃんは優しい笑顔で口をひらいた。

「……うん。わかったよ」

ほんとは、子供だって思ってるくせに。

心の奥がつんとする。厳しいことも言ってくれる。でも最後には、まるごと私を受け入れてくれる。

優しい、優しい私のお兄ちゃん。大好きなお兄ちゃん。

お酒をのんで、うわついたような気分は、なんだか力が抜けていくみたいで。

意地っ張りな私が、虚勢を張ってしまう自分を、脱ぎ捨てる手伝いをしてくれる。

私は両手で顔をおおって、内緒話をするときのように、小さな声で心の中を打ち明けた。

「ほんとね、わかってる。……でも、くやしかった。早く大人になりたかったの」

ママの冷たい瞳が、怖かった。自分が無関係なまま、家族が壊れていくのが怖かった。

子供だって、わかることもある。自分の気持ちを、考えを持つて。それを否定しないでほしかった。

コドモと大人の境界線なんて、とっくに超えてると思ってた。でも、そうじゃなくて。

あんな夢を見て、急に怖くなったの。

あの日のママみたいに、いつかお兄ちゃんにも、子供だつてはねのけられるかもしれないって。

いつか、私が部外者なまま、お兄ちゃんまで他人になってしまふんじゃないかって。

だから、お兄ちゃんと同じ目線の高さになりたいと思った。

でも追い付けない。追いつきたい。そんな気持ちにあせるばかりで、必死になって空回りして。

大人ぶっても大人になりきれない。それがやっぱりコドモで。

「僕も思ってたよ。大学生ってどんなに大人なんだろうって。でも不思議だけど、実際自分がなってみるとそうでもないんだ」

顔を覆ったままの私の耳に、お兄ちゃんの声が静かに降ってきた。

おそるおそる顔の上から両手を取ってみると、お兄ちゃんの頬笑みが私を包んでくれる。

「……ゆつくりでいいよ。美沙が大人になるまで、僕が隣で見てあげるから」

思ってもみないお兄ちゃんの言葉に、私は微笑み返すのも忘れて、ただただお兄ちゃんを見た。

心の中、冷たく張り詰めていたものが、溶けだしていくみたいに。お兄ちゃんは私の気持ちを、簡単に和らげていく。こんなあったかい幸せを、どう表現したらいいんだろう。

「それなら、私ずっと子供でいいや……」

冗談ぽく私が言ったら、お兄ちゃんがぐすりと笑った。

必死になりすぎて、私はきつと見落としてたんだ。大切なこと。お兄ちゃんは、私が子供だとしても、大人だとしても、きつと変わらない。変わらない、優しいお兄ちゃんのままなんだって。

## 第5話　ちくりと、胸の痛み「1」

あれから僕は、まだ酔いの覚めない美沙の酔い覚ましのために、二人でベランダへ出ていた。

今夜は、見事なまでに星空が広がっている。

赤くなった頬もそのままに、美沙はゆるい風にふわふわと猫っ毛を揺らしながら、夜空を見上げていた。

星が好きだと言った美沙は、きっとこんな星空を喜ぶだろうと思っていた。

けれど、今僕の隣にいる美沙は、喜んでいるというよりは複雑な様子で。

「ねえ、」

言って、美沙が僕を見た。僕が美沙を見返すと、美沙は少し、さみしそうに笑って見せた。

大人びた表情。たとえば僕と同世代の人間でも、こんな顔を見せることはめったにないんじゃないだろうか。

「星のない夜は怖いけど、星がたくさんありすぎても怖い。見失いそうになっちゃうから」

酔いがだいぶさめたのか、美沙の声はしっかりとしていた。

確かに、と僕は思った。亡くした父親の面影を探しているのなら、星はたったひとつで十分だ。

僕が答えあぐねていると、美沙がまた言葉を続けた。

「結局、夜が怖いのかも……でも、最近はね。そうでもないんだよ？」

美沙が僕の手を取り、きゅつとつないだ手。星空を背景に微笑む美沙は、子供でもなく、大人でもない。

その中間の、不安定な位置にいるのかもしれない。

ただ、その時僕の目には、美沙がとてもまぶしく映ったのだった。

大好き！お兄ちゃん　　ゝ第5話　ちくりと、胸の痛みゝ

無事に僕の前期試験が終わると同時に、夏休みに入り。結構大変だった勉強の日々も終わりを告げた。

ほっとするのもつかの間のこと。美沙からの、連日の「遊びに連れてって」コールに、振り回され気味な僕。

つまり、僕が夏休みに入ったことを一番喜んでるのは、すでに夏休みに入っていた美沙の方だった。

「ねえ、早く行こうよ！」

ご機嫌な様子の美沙は、はしゃいだ様子で僕をせかしている。

今夜は、近くで夏祭りがある。そんな話を聞きつけて、僕の元気な妹が行きたがらないわけはなく。

すでに浴衣に着替えた美沙に、僕はこうして腕を引っ張られる事

態になったわけだ。

黄色の浴衣。どこで着付けを習ったのか、着こなしはばっちりだ。

茶色っぽい猫っ毛を結い上げて。元が大人びた綺麗系の顔つきだから、結構様になっている。

それはいいのだが、僕に浴衣をお披露目した時、何度も「かわいい？」と聞いてくるのは困った話だった。

可愛いよ、なんて、今時の男は滅多に言わないだろう言葉を何度も言わされ、正直疲れた。

しかも適当にカワイイ可愛い、と流そうとするものなら、気持ちが悪くてないとダメ出しを食らうのだ。

そんなことを思い出して、僕はまた苦笑する。

「お兄ちゃん、何その顔。早く行かないと、花火終わっちゃうよ？」

敏感に僕の表情を読み取った美沙が、腰に両手をあてて、むっとしたような顔で言った。

終わってしまうなんて気が早い話だ。花火は9時からで、あと3時間もある。むしろ今行っても早すぎる。

「夏祭りって言ってもね。花火もあんまり上がらないし、大したことないよ？」

僕はやれやれと微笑みながら、美沙に聞いてみた。

夏祭りと言ってはみても、近くの公園で毎年細々とやっている、本当に小規模なものだ。

出店も花火もあるが、そう大々的なものじゃない。地元の間人は、



美沙みたいに浴衣なんか着て結構来るが。

期待していたら、がっかりしてしまうんじゃないだろうかと思っただのだ。

「それでも嬉しいよ、すごく。だって、大切な思い出の一つになるでしょ？ …… 思い出だけはね、ずっと消えないから」

けれど美沙はそんなことを言って、小さく微笑んだ。

それがなんだか儚く見えて、さっきの元気な笑顔とのギャップに戸惑ってしまった。

思い出“だけは”、なんて。

「…… 僕も、消えないよ？」

思わず、僕はそんなことを言っていた。美沙は僕を見て、「そうだね」と笑って見せる。

そんなに感情を隠すのが得意じゃなくせに、無理をしている。付き合いが長い訳じゃないが、僕にもそのくらいはわかるようになった。諦めたような笑い方なのだ。

「行こうか。花火に間に合うように、早く行かないとね」

言って、僕はにこりと笑い、自分から美沙の手を取った。美沙が意外だとも言いたげな顔をして、僕を見る。

さっきまでさんざん渋っていた僕だが、あんな顔をされてはどうにも弱ってしまう。

美沙の表情を、どうにかして笑顔に戻したかった。

「…… うん！」

頷いて、美沙がやつとまた、さっきまでの無邪気な笑顔を見せた。

美沙はいつも笑顔で、僕はやつとそれに見慣れてきたところだ。  
だからいつも笑っていて欲しい。

美沙を笑顔にするのが、兄である僕の務めなら、兄妹というものも悪くないなと思った。

## 第5話　ちくりと、胸の痛み〔2〕

夏祭りとか、花火大会とか。そういうのは、いつも家の窓から遠目で見ることが多かった。

家族で行ってる友達を、羨ましく思ったり。  
でも結局、いつもごたごたした家族の中にいた私は、そういうイベントに行ったりする機会があまりなくて。

だから、今日は本当にうれしかった。車で五分くらいの、結構大きな公園に、人がだんだん集まってきた。

視界いっぱい広がる、たくさんのちょうちん。たくさんの出店。まだ薄暗いくらいだけど、夜になって暗くなったら、きつとすごくきれいだ。

小規模だってお兄ちゃんは言ったけど、私にとっては十分大きなお祭りだった。

「美沙、走ると転ぶよ」

後ろを歩くお兄ちゃんが、私の背中に、そんな声をかけてきた。下駄をカタカタ鳴らしながら走るの、慣れなくてちょっと大変だけど。今の楽しい気分には、そんなの全然関係なかった。

お兄ちゃんと一緒に、浴衣で歩けるのが嬉しい。ママに着付けを習っておいてよかった。

「あ、ねえお兄ちゃん。あれやりたい！」

出店の中で一つ、目につくものを見つけて、私はお兄ちゃんを振り向きながらそこを指差した。

ふくらました小さなプールに、水風船がいくつか浮かんでいる。

私の言葉を受けたお兄ちゃんは、少し不思議そうに首をかしげた。

「やりたいの？ 欲しいんじゃない？」

「うん！」

釣る気満々の私は笑顔で頷き、そして一目散に出店に向かって駆けていく。

何も言わなくても、お兄ちゃんは私の後をついてきてくれる。

釣ってもらうのもいいけど、楽しそうに釣ってる人たちの様子を見てると、なんだかどうしても自分でやりたくなってしまつて。

紙の糸の先に、引つ掛けるところがついてて、それで水風船のゴムを取る。

それだけの動作で、簡単だつて思つてた。

だけど予想以上に難しくて、私は仕方なく一番欲しかった水色の水風船をあきらめた。

そしてオレンジ色の水風船を狙うんだけど、それもなかなか取れなくて。

気づけば、水に濡れて切れかかっている紙の糸。

失敗しちゃったみたいだ。欲しかったのに。なんて思つて動作を止めていたら。

「美沙、ちよつと貸してね」

ふと、後ろで見守ってたお兄ちゃんがそんなことを言つて、肩越しにひょいと私の切れかかった糸を取った。

そしてお兄ちゃんは水風船を一発で釣った。

あまりに簡単に取るから、私の苦勞はなんだったんだろう、とか思ったりして。

「はい。美沙はね、どっちかって言うところの色のイメージかな」

言いながら、お兄ちゃんは笑顔で私の掌に釣った水風船を乗せた。私が欲しかった、水色の風船。

私、あの色がいいなんて一言も言っていないのに。言葉じゃなくても伝わったみたいで、すごく嬉しかった。

「ありがとう。お兄ちゃん、すごくかつこよかった！」

「水風船釣ったくらいでそんな風に言ってもらえるなら、釣ったかいもあったよ」

私の言葉に、お兄ちゃんが困ったように笑う。お兄ちゃんが良く見せる、この笑い方が好き。

でもたまに見せる、女の子みたいに可愛くて、屈託のない笑顔はもっと好き。

お兄ちゃんが、大好き。

また二人で並んで歩きながら、水風船を片手に下げて。余った方の腕で、私はお兄ちゃんと腕を組んでみる。

お兄ちゃんは私を見たけど、特に何も言わなかった。

それが許されたみたいで、私はうれしさに胸を弾ませる。

芸能人みたいにかっこいい、自慢のお兄ちゃん。

すれ違う女の子たちが、さりげなくお兄ちゃんを見てるのがわかる。

私たちふたり、兄妹に見えるのかな？ それとも恋人同士なんか見えちゃったりして。

そんなことを考えて、ふと我に帰る。

……恋人同士？ 私、何考えてるんだろう。だってお兄ちゃんだよ。ずっと欲しかった家族だよ。

なのに私、恋人同士に見えたらいいな、なんて思ってたなかった？

『それってさ。恋してるみたいじゃない？』

こんな時にこのタイミングで、真央ちゃんの言葉をリアルに思い出してしまつて。

恋なんて未知の言葉が、私をまどわせて。一気にかつと、顔に血が上った。

「美沙？」

「あつ……え！？」

急にお兄ちゃんに声をかけられて、私は裏返った声をあげてしまった。

いつの間にか私は立ち止まっていたらしい。私の腕に引つ張られたお兄ちゃんも、一緒に歩くのをやめていたみたいだった。

その時私の目に、お兄ちゃんと組んだ腕が入ってきて。

お兄ちゃんに触れていることが急に恥ずかしくなって、私はぱつとお兄ちゃんの腕を離れた。

痛いほどに高鳴る、胸の鼓動。なにこれ。私が私じゃないみたい。

「顔が赤いよ。また熱があるんじゃない……」

お兄ちゃんの低い、男の人の声。お兄ちゃんが私の額に向けて差し伸べた手のひら。

ただでさえパニック状態だった私は、思わずそれをぱしっと思いつきりはねのけてしまった。

## 第5話　ちくりと、胸の痛み〔3〕

僕の手をはねのけた美沙は、すぐに手をはねのけられた僕よりも傷付いた顔をした。

義理の兄妹になったときから、何の違和感もなく僕になついていた美沙。

手をはねのけられた一瞬、僕の方も、傷付かなかったと言ったら嘘になる。

けれど、目の前にいる美沙の、今にも泣き出しそうな顔は、僕のそんな気持ちを簡単に吹き飛ばした。

まだ中学生になったばかり。難しい年頃なのだ。

「ごめんね」

美沙の表情を明るく変えてやろうと、僕は笑みを浮かべながらそう言っただけだった。

けれどそれは逆効果だったようで。とうとう、涙をこらえていた様子の美沙が泣き出してしまった。

美沙が手のひらでその頬に流れる涙を拭いた後、結い上げた猫っ毛が揺れる。

僕自身、あまり表情に感情を出さないタイプの人間だけれど、こんな場面になってしまつて内心焦りを感じていた。

「どうして？　なんでお兄ちゃんが謝るの？」



美沙の涙声が、夏祭りでにぎわっている空気を小さく揺らす。  
少し薄暗くなってきた景色の中、美沙の黄色い浴衣が、ぽつんと目だっているように見えた。

「……わかんないよ。なんか苦しい。私……」

呟くように言っ、美沙が俯きそのまま黙る。気づけば、僕は美沙に向って手を差し伸べていた。

頭をなでてやるのか、手をつないでやるのか。とにかく安心させてやりたかった。

けれど、僕の手が伸びていることを気配で察したらしい美沙の肩が、びくりと震えて。

僕は行き場をなくした手を引っ込め、なすすべなく立ち尽くすしかできなくなった。

その時。

「あれ、拓斗？」

背後から聞き慣れたようなそうでないような、あまり好きじゃない声が聞こえて。

振り返ると、そこには赤い浴衣を着たサークルの先輩、そして元カノの友達でもある伊藤亜子先輩がいた。

まさかこんな地元の祭りで会うとは思っていなかった。……そう言えば地元が一緒だったか。

「何女の子泣かしてんの？ あー、こんな小さい子……」

大丈夫？　なんて言いながら、先輩が無神経に美沙に手を伸ばす

と。

美沙は涙目もそのままに、突然僕と先輩に勢いよく背を向けて、逃げるように走り出した。

声をかける暇もなく、次第に小さくなっていく美沙の後ろ姿。

もう暗くなりかけている。それに夏祭りなんてイベントの最中には、あまり良くない類の人間も大勢来ているはずだ。

外見がどんなに大人びていようと、美沙はまだ中学生なのだ。

結構な広さのこの公園ではぐれるのはまずい。そう判断して、美沙の後を追おうとする僕。

けれど先輩に腕を掴まれ、阻止されてしまった。

「何？ あの子が妹ってやつ？」

僕が振り向くと、おもしろくなさそうな顔をした先輩が、巻き髪をいじりながら言った。

先輩も妹とは言ってみたものの、まだ、ただの言い訳だと思っているんだろう。

「義理ですけど、大事な家族なんで。悪いですけど、探しに行かせてもらえますか？」

僕が渋い顔で訴えてみても、先輩の大きな態度は変わらない。

あー、と思いだしたような声をあげて、先輩がまた、そのグロスをたっぷり塗った唇をひらく。

「そう言えば再婚したんだっけ？ じゃあさ、尚更ほっときなよ。逃げたってことは、拓斗から離れたかったわけでしょ。小さな子供じゃないんだから」

他人だからかもしれないが、先輩の美沙に対する物言いは冷たい。これ以上話しても無駄だと思った僕は、僕の腕をつかむ先輩の手をやりわりと外してから、先輩に背を向ける。

「どうしたの？ そんなに誰かに入れ込んでるなんて。昔から、温厚だけど淡泊で冷めてる、拓斗らしくないよね」

すぐに後ろから、先輩のそんな鋭い声が飛んできた。淡泊で冷めている。僕にはそんなつもりはなかったが、僕は昔からそう言われることが多かった。

それは、付き合ってきたのが年上が多かったからだだろうと思う。相手が大人だと、あっさりした付き合い方ができた。

だから自然と、僕の異性に対する付き合い方自体も、あっさりしたものになって行つて。

だけど、美沙は違う。

「時々、どう扱っていいのかわからなくなる。多分……大切にしようとするほど、戸惑いも大きくなってる」

僕の呟くような声が聞こえなかったのか、先輩が背後で「え？」と聞き返してきた。

先輩にはつきり伝える気もなかった僕は、そのまま先輩を置いて走り出す。

随分暗くなってしまった夜空に、まばゆい光。打ち上げ花火の、始まりだった。



## 第5話　ちくりと、胸の痛み〔4〕

わけのわからない、自分の感情に振り回されて。私はもう、どうしていいのかわからなくなってきていた。

だって、すごく近いんだって思ったから。

あの大人な女の人が、お兄ちゃんの名前を呼ぶ声も、話し方も、視線一つを取ったって。

私よりずっと、あの女の方がお兄ちゃんに近いんだって感じたから。

だから　逃げた。でもそれだけじゃなくて。

お兄ちゃんを誰よりも大切に思っている私だから、わかつちやつたんだ。

あの女の人にとっても、お兄ちゃんは特別な人なんだってこと。

それに気づいた瞬間、途方もなく苦い気持ちがこみ上げてきて。

こんな気持ち、知らなくて。

気づけば、体が勝手に動き出していた。だけどまだ、お兄ちゃんとはぐれるつもりなんてなかったのに。

少しだけ走って、そして振り向いたら、お兄ちゃんはその人の方を向いていて、何か話してるみたいだった。

あの人の、楽しそうな笑顔。そんな光景が、私の心に突き刺さって。

ほんの少しのためらいも捨ててしまった私は、そのまま背を向け

て走り去った。

「っはあ、はあ、」

そうして少しの間走ったところで、息が上がってきた。

一体どこまで来たのか自分でもわからないまま、気づけば足元は、じゃりみち砂利道。下駄で走るのはすごく難しい。

第一、浴衣で走るのなんて無理があった。せつかく一生懸命着た、黄色の浴衣。もう着崩れてしまった。

でも、走らずにはいられなくて。私は疲れを訴える肺を無視して、おぼつかない足取りで走り続けた。

自分の気持ちすらわかることができなくて、パニック状態になって。

優しいお兄ちゃんの手をはねのけて、傷付けて、あげくの果てには勝手に逃げ出して。

そうやってやけになってた、報いだったのか。いきなり、視界が反転した。

「きゃっ……！」

思わず悲鳴をあげる。どうやら砂利に足をとられたみたいだった。でも気づいた時にはすでに遅くて。

転んだ拍子に地面に手をついて、手首にぶら下がっていた水風船を、ぼこぼこした砂利に押し付けてしまった。

瞬間、ぱんつ、と激しい大きな音をたてて、水風船はあっけなく割れた。

ぱしゃつと水がこぼれおちて、そこに残ったのは無残な風船のかけらだけ。

例えようもない虚しさの中、私は自分の心の奥にあった気持ちに感づいてしまった。

ああ、私　追いかけて欲しかったんだ。そうやって確かめたかったんだ。

あの女の人よりも、私の方が大切にしてもらってるって。

「私、バカみたい……」

体を起こしながら、投げやりに呟いてみる。だって悲しかった。くやしかった。

私がお兄ちゃんと家族のつながりをなくして、他人になってしまっても。あの人は、近いんだ。

こんな惨めな自分を見つけて欲しくなくて、私はちょうど近くにあった大木の影に座り込んだ。

申し訳程度の隠れ方。そんなのわかってたけど、もう動く気にもなれなかった。

……うつん、動きたくなかった。だってここにいれば、完全に隠れてないこの場所にいれば、もしかしたら

その時、打ち上げ花火が上がる音がして、私は反射的に顔を上げた。

一呼吸おいて、夜空いっぱい広がる、きれいなひかり。

いつの間に花火が始まってたんだろ。夢中で走ってたから、気がつかなかった。

本当は、お兄ちゃんと見るはずだった。

さみしくない夜空。明るい夜空。星なんかなくなたって、きっとこんな夜は幸せだ。

だからこそ、大切な人と一緒に見たかった。

……でも、でも本当は  
だれどこんな私、見つけて欲しくない。見つけられなくていい。

「見つけた」

一瞬目の前が暗くなって、頭の上から降ってきた、穏やかで心地いい低さの、大好きな声。

逆光で、顔がなんとなくしか見えなくても。それが誰かなんてもう、考えるまでもない話で。

私の胸に込み上げる、切なさとともに。お兄ちゃんの背中では、七色の大きな花火が、夜空に再び円を描いて散った。



第5話 ちくりと、胸の痛み「4」（後書き）

近々、ランキングの方をシリアス部門に移動しますので、ご注意くださいね^^

## 第5話　ちくりと、胸の痛み〔5〕

やっと見つけ出した美沙は、大きな木の根元に座り込み、俯いて小さくなっていた。

声をかけると、僕に気づいて顔を上げた美沙は、頼りなげな瞳の色をしていて。

「探したよ、美沙。花火始まったから、近くまで一緒に見に行こう」  
なるべく美沙の心に負担をかけないように、さっきの出来事を掘り返さないように、僕は慎重に言葉を選んだ。

逃げ出すほどに追い詰められていたのだ。きっと美沙は気にしている。

「ただどやっぱりというか、美沙は簡単には笑顔になってくれないで。」

沈んだ表情のまま、ぼつりと言葉を洩らした。

「私、ずるいよね……」

「どうして？」

僕が訊ねると、美沙の表情が歪んだ。その瞳が揺らいで、美沙の頬に、ひとすじの涙が静かに流れていく。

僕の後ろで、次々と花火の上がる音がしている。花火が上がるたび、明かりが美沙の顔を映し出す。

純粹な美沙の、純粹な涙。

元が整った顔立ちだ。絵になるくらいに綺麗だったけど、それでもこれ以上美沙を泣かせたくなかった。

そんな僕の内心を知ってか知らずか、美沙が気持ちを吐き出すように話し出した。

「ここにいればきつと、お兄ちゃんは見つけてくれると思ったの。だからわざと、こんなわかりやすいところに隠れてたの。見つけてほしかったから……」

言い終わった美沙は、涙を拭うこともせず、僕の目をまっすぐ見てきた。

あっと言う間に、僕の心の痛みが増してくる。

やっとわかった。どうしたって僕は、美沙の泣き顔に弱いんだ。美沙が泣くなら、涙を止めてあげたいと思う。気づけばそれはとても自然な感情として、僕の心の中にあって。

「それでいいよ。だって、僕は美沙を探すから。見つかる場所に居てくれないと、困るからね」

僕は言いながら、美沙の結い上げた髪を崩さないように、ぼんぼんと頭を撫でてやった。

すぐるような切ない目をして、美沙が僕を見上げる。不安だったんだろうか。

例えば美沙が、どんなわかりにくいところに隠れたとしても。

僕はきつと探し出すと思う。それが家族ってことであり、僕と美沙はもう立派な家族だと思うから。

いつの間にか、こんなに大切な存在になっていた。

泣き顔は見たくないけれど、涙を我慢しては欲しくない。そんな矛盾すら抱えるほど。

ワガママを言ってもいい。泣いても、逃げて。僕の前で、ありのままの美沙で居てくれれば。

僕の言葉を聞いて、悲しげだった美沙の表情は少しずつ和らいでいったけれど。

ふと、思いだしたようにまた表情を暗くした美沙が、申し訳なさそうに僕を見て言った。

「……ごめんね」  
「ん？ 何が？」

僕が聞き返すと、美沙はどこかさみしそうな目をして、おずおずと口をひらく。

「水風船……割れちゃったの」  
「そっか。じゃあ、また釣ってあげるよ。何個でも」

僕がそう言って笑うと、美沙がやっと、小さく笑顔を見せた。その瞬間、背後の花火の音がひととき大きくなる。

はっとしたような美沙が、僕の頭上の後方を見上げながら、勢いよく立ちあがった。

その生き生きした表情を見て、ようやく安心した僕は自然と微笑む。

「お兄ちゃん、見て！ 最後の花火連発！」

美沙の言葉に後ろを振り向くと、すぐにまぶしい光が視界いっぱいに入ってきて、僕は目を細めた。

夏祭り、虫の声。露店の明かり。次々と夜空に広がる花火に、美沙がはしゃいで無邪気に笑う。

さっきまで泣きべそをかいていたのに、もう満面の笑顔。くるくる変わる表情は相変わらずみたいだ。

それに振り回される僕もまた、相変わらずということだ。

でも、美沙とのこんな夏もいいかもしれない。美沙の隣で花火を見上げながら、僕はそんなことを思っていたのだった。

## 第6話 うそつきのホンネ〔1〕

“それでいいよ。だって、僕は美沙を探すから”

まるで当たり前のことみたいに、お兄ちゃんが笑って言うから。私の心に生まれつつあった小さなわだかまりも、戸惑いも、忘れられたような気がして。

花火が終わった後、にぎやかな雰囲気の流れで。散っていく人たち。ひかりをなくした夜空。

でも、そんなにさみしくなくて。

「終わったね。そろそろ帰る？」

お兄ちゃんはそう言って、空に向けていた視線を私に移してやわらかく笑ってくれる。

自然と、私も笑顔になっていた。差し出された手を、当たり前のように取って。

「うん。お兄ちゃんと、花火見れてよかった」

言って、お兄ちゃんと手をつないだ瞬間。また頬が熱くなって、私は俯いてしまった。

きっと私、顔が真っ赤になってる。夜の暗さでごまかして。気づかれないように、そっと隠した胸の奥。

届きそうで、手の届かないひと。近いようで遠いひと。いずれ他

人に戻っちゃうかもしれないひと。  
きつと辛くなるだけだって、わかってるから。私はその気持ちの  
正体に、気付かないふりをした。

大好き！お兄ちゃん　　く第6話　うそつきのホンネく

それは、何気なくの行動で。まさかそれがこんなことになるなんて、思ってもいなかったのに。

「何これやばい！　かつこいいい！」

私とお兄ちゃんが二人で写った写真を見ながら、真央ちゃんが大興奮。

数日前の夏祭り、花火を見た夜。通りすがりの人にとってもらった大切な写真。

かつこいいっていうのは、もちろん私のお兄ちゃんのこと。

私の部屋の絨毯の上でくつろいだように座りながら、真央ちゃんはその写真を離そうとしない。

今日は真央ちゃんが私の家に遊びに来ていて。見せて欲しいって言うから引き出しの中から出して渡した。

でも真央ちゃん予想以上の反応に、私は戸惑い気味。

お兄ちゃんがかつこいいって言われるのは嬉しいけど、同時になんだか面白くないような、微妙な気持ちだった。  
その時、部屋のドアがコン、とノックされて。

私の家族は今、一人だけ。だから私の部屋をノックするのなんて一人しかない。

タイミングが悪い。真央ちゃんには悪いけど、できればお兄ちゃんと真央ちゃんを合わせたくなかった。

そんなことを思っている自分に気づいて驚く。 私、こんなに意地悪だったっけ？

「美沙ちゃん？ ドアの向こうで、待たせてるみたいだよ？」

真央ちゃんの不思議そうな声が耳に飛んできて、私ははっと我にかえる。

気を取り直して小さく返事をする、予想通り、お兄ちゃんが開けたドアから顔をのぞかせた。

「美沙、バイトに行くってくるから……っと、あれ？」

お兄ちゃんは私以外に誰がいるのを知らなかったらしく、少し驚いた様子で真央ちゃんを見た。

そつえばお昼頃、真央ちゃんが来た時も、どうしようもなく朝に弱いお兄ちゃんは、まだ夢の中に居たんだった。

「こ、こんにちは！ 美沙ちゃんの親友で、吉岡真央って言います！」

さっきまでくつろいだ姿勢で座っていた真央ちゃんが、さっと姿勢を正して上ずった声を出した。

最近仲良くなってきてるけど、何も親友ってほどじゃないのに。嫌な予感。

ただとお兄ちゃんは初対面だからか、ちょっとおかしい真央ちゃ



んの態度を特に疑問に思う様子もなく。

真央ちゃんに向けて、にこりと微笑んだ。

「美沙と仲良くしてくれてありがとう。ゆっくりして行つてね」

真央ちゃんが「はい……」と気の抜けた声でお兄ちゃんに答えた。嫌な予感がだんだん確実なものになっていく。お兄ちゃんが行ってしまったから、真央ちゃんはぼかんとした顔で。

ほんのりと赤くなつた頬。女の私から見てもかわいい、乙女な瞳をした真央ちゃんの小さな唇から。

「私……好きになつちやつたかも」

そんな衝撃的な言葉が出てきて、わかつていたのに大きなショックを受けた。

同時に、疑問符が頭の中で次々と生まれて行つて。

私だつて、そんなに恋を知つてゐるわけじゃない。好きって気持ちを、完全にわかつてゐるわけじゃない。

でも、わからなくて。それに、どうしても否定したい、意地悪な気持ちが抜けなくて。

「好きって、そんなに簡単なの？」

思わずそんな強い口調を真央ちゃんに向けていた。すると真央ちゃんもむつとしたのか、真顔になる。

「私が好きだつて決めたんだから、好きだつてことだよ。美沙ちゃんにはわかんないでしょ？ 好きになつたことないって言つてたし」

真央ちゃんの言葉に違和感を覚えながらも、私は何も言い返せなかった。

花火の夜、涙と一緒に心に走った動揺は、今もそのまま。怖いんだ。だからうやむやなままにしておきたかった。

良くわからない自分の気持ちを、知ってしまったら後戻りができない気がする。

いつか来る、お兄ちゃんとのお別れのをときを、笑顔にできるよう。

私はまだ子供だから。そう言い訳して、考えないようにして、隠して逃げ出した方が楽じゃない。

お兄ちゃんがやさしいから。だから子供でもいいって思ってた。今だってそう思ってる。

だけどこんな気持ちを抱えてちゃ、いくら子供だって言い訳したって、どうしようもなくて。

誰か、この気持ちの正体を教えて。でも、やっぱり知りたくない。わかりかけてる。

知らないふりをしたうそつきな自分。

真央ちゃんが帰った後、一人きりになった玄関。胸のあたりで服を握りしめて、私は思わず目を閉じた。

## 第6話 うそつきのホンネ〔2〕

あれから、真央ちゃんは毎日のように家に遊びに来ていた。目当ては、もちろんお兄ちゃん。

追い返すことなんてできないし、真央ちゃんが嬉しそうにお兄ちゃんと話すのも止められない。

今日も、いつものように私の部屋に真央ちゃんと二人。もうすぐお兄ちゃんがバイトから帰ってくる時間。

真央ちゃんもそれをわかってるから、そわそわした様子で。

「拓斗さん、まだかなあ」

なんて、そんなことを呟いてる。いつの間にか、お兄ちゃんのことを名前で呼んで。

真央ちゃん、すっかり乙女の顔だ。私と遊ぶことを言い訳にして、お兄ちゃんに会いに来てる真央ちゃんにイライラが募る。

だめだ。私今、真央ちゃんに対してすごく、心が狭くなってる。

そんな私の内心をよそに、やがて帰ってきたお兄ちゃんが私の部屋の扉をノックした。

別にほつといてもいいのに、お兄ちゃんはいつも、律儀に真央ちゃんにあいさつしていく。

そして今日は、あいさつだけでなく、お兄ちゃんの口からとんでもない言葉が飛び出してきた。

「美沙、真央ちゃん。今日は僕も時間あるし、どこか連れて行こうか？ 家にばかりいちゃつままないでしょ」

「わ、私たち家で遊ぶ方が好きだから。ね、真央ちゃん!？」

間髪入れず、私はお兄ちゃんの言葉に上ずった声を返して、無理やり真央ちゃんに同意を求める。

普通、妹とその友達を遊びに連れてってくれるお兄ちゃんなんてめったにいないだろうと思う。

お兄ちゃんがやさしいのは嬉しいし、そういうところすごく好きだけど。

今この状況で、そんなこと言われてしまったら、私にとってあまり面白くないことになる。

真央ちゃんにとっては嬉しいことだろうけど。案の定、真央ちゃんの口からは予想通りの言葉が出てきた。

「私……行きたいな……」

真央ちゃん、遠慮がちにぼそりと可愛く本心を言うあたりが、ずるい。

「で、でも……、お兄ちゃんに迷惑だし……」

それでも私は、そんなことを言ってまた必死に食い下がる。だって面白くなかった。

お兄ちゃんのことを好きだって言ってる真央ちゃんと、お兄ちゃんと、三人で出かけるなんて。

無自覚なんだろうけど、お兄ちゃんはさらに私を追い詰めることを言う。

「いいよ、迷惑とかはないから。真央ちゃんも行きたがつてるみたいだし。僕はどっちでもいいけど……」

「美沙ちゃん、お願い！」

お兄ちゃんの落ち着いた声音と、真央ちゃんの必死な顔に責められて、私は言葉に詰まった。

こんな状況で私に意見を求めたって、うんってしか言いようがないのに。まるで私が悪者みたいじゃない。

仕方なく頷いて、こっそり唇を尖らせる私とは対照的に、真央ちゃんの表情はだんだんと明るく嬉しそうになっていく。

弾んだ声で、真央ちゃんがお兄ちゃんに言葉を向けた。

「私！ プラネタリウム見に行きたいです！ 最近近くにできてから、ずつと行こうと思ってて！」

「プラネタリウムか。うん、いいよ」

お兄ちゃんがにこやかに頷いた。プラネタリウム。話の流れがさらに嫌な方向に向かって行つて。

どうしても我慢が出来なくなった私は、最後の抵抗を試みる。

「私……やだ」

なごんでいた場の空気が、私のその一言でしんと冷たい空気になった。

いたたまれなくなるけど、それでもどうしても、譲れない。

プラネタリウムっていうのが、私は昔から嫌いだった。だって、偽物の夜空なんてつまらない。

本物の星の光がどんなにきれいか知ってたら、人の作った偽物の星に、感動なんてできないと思う。

自分が我儘になってることくらいわかってた。でもわかっててもこの態度を直したくない。それは私の意地だった。

だけど、拗ねたような気持ちで顔を曇らせている私に、お兄ちゃんはいさよならの目をした。

「美沙。友達が行きたいって言うてるんだから、賛成してあげようね」

教諭のような、お兄ちゃんの静かな声。それは思ったよりも深く、私の心に突き刺さる。

本当に嫌だったけど、また仕方なく私は頷いた。

「……わかった」

私の口から、いつもより低い声が出た。感情を隠しきれてない。私、今すごく感じ悪いのかもしれない。

だって、真央ちゃんは本当にお兄ちゃんが好きみたいで。お兄ちゃんも、真央ちゃんに優しい対応で。

どっちかって言うと、私よりも真央ちゃん優先な態度。ここ数日ずっと、我慢して我慢して。

お兄ちゃんはお兄ちゃんなのに、真央ちゃんのお兄ちゃんじゃないのに、どうして真央ちゃんが一番なの？

「お兄ちゃん。最近、真央ちゃんのことばかり優先だね」

トイレって言い訳で、真央ちゃんを二階の部屋に置いてきて。  
一階で戸締りとかして、出かける準備しているお兄ちゃんの後ろ  
から、お兄ちゃんの服の裾をそっとつかんで。

振り向いたお兄ちゃんに、ぼそっとそんなことを言ってみた。

最悪なこと言ってる。私、全然可愛くない。

「友達は大切にしないとだめだよ」

だけどお兄ちゃんは、手の甲で私の頭をこつんとして、そんなこ  
とを言った。

怒るでも気を悪くするでもなく、穏やかな目をしたお兄ちゃん。

負けてしまった気分で、思わず身をひるがえした私は、そのまま  
部屋への階段を上る。

真央ちゃんの笑顔が頭から離れない。お兄ちゃんが好きだって、  
その態度で言ってるのに。

「お兄ちゃんなんて、なんにもわかってない癖に……」

階段の途中、私はぼつりと独り言を洩らした。

真央ちゃんは素直で、迷いも何もなくて、かわいくて。だから私  
は、羨ましかったのかもしれない。

私はと言えば、自分を我儘にするこの気持ちの正体に、気付かな  
いふりをして。

本音を隠して嘘をつく。なんにもわかってないのは　うそつき  
な私自身なんだ。

## 第6話 うそつきのホンネ〔3〕

あれから、私の無言の抵抗も空しく、出かける話は確定して。

あんまり気乗りがしないまま、私は真央ちゃんと、出かける準備を終えたお兄ちゃんの後が続いていた。

真央ちゃんの弾んだ足取りと対照的な、重苦しい私の足。

だけど3人で乗り込んだお兄ちゃんの車、助手席は自然と私になつて、それで私は少し機嫌を取り戻した。

よかった、真央ちゃんじゃなくて私で。そうやって満足した後、ふと気づく。

必死になつて、真央ちゃんと張り合つてる自分。すぐに襲ってくる、自己嫌悪の中。

真央ちゃんが、後部座席から身を乗り出して、楽しそうにお兄ちゃんに話しかけてる。

お兄ちゃんの優しい対応は、真央ちゃんを喜ばせて。

それを、私はサイドミラーを無意味にじつと見つめながら、しょんぼりと唇を尖らせ、黙って聞いていた。

助手席にいたって、こんなじゃまるで意味がない。

愛想笑いをする余裕だけはなんとか保ちながら。やっと辿り着いて、3人で入ったプラネタリウムのドーム。

解放された気分で、私は指定された席に座った。映画館みたいな



雰囲気。

上映が始まったら、静かにしてなきゃいけないし、無理に話すこともない。

お兄ちゃんと話す真央ちゃんの、楽しそうな声を聞かなくてもすむ。……って思ったのに。

上映までの五分間。渡されたチケットの関係で、真央ちゃんを真ん中にして、3人で座ってるのに。

真央ちゃんは私の方なんて見向きもせずに、はしゃいだ様子で向こう側のお兄ちゃんに話しかけてばかり。

私は当然、座ってる場所からして、真央ちゃんに話を振ってもらわないと、自然に会話に入っていけないし。

何を話してるのかすら、わからない。だけど、自分から積極的に話に割って入っていく気にはなれなかった。

そんな自分が、嫌い。意地を張って、3人の中でだんだん孤独になつていく自分が辛かった。泣きたい気分になる。

しばらくして、私の気持ちを表すかのようになり、ふっとドームが暗くなった。真央ちゃんもやっと黙る。

オルゴールみたいな音楽が流れて、ロマンチックでやわらかな雰囲気。

ドームの天井に星がいつぱいに浮かぶと、解説員の人が、星座や星の話始めた。

すると解説員の人の話にいちいち反応して、真央ちゃんがまた、お兄ちゃんにひそひそ話しかけ始める。

普通、友達の私に話しかけるはずなのに。私なんてそっちのけ。

つまんない。つまんない。視界いつぱいの夜空、目まぐるしいほどの星に囲まれて、息苦しくなる。

「あ！ 流れ星」

真央ちゃんのそんな声と同時に、天井の夜空に、星が流れて消えていった。

見つけちゃった、なんて、お兄ちゃんに向けられてる興奮気味の真央ちゃんの声が、私の耳にも聞こえた。

私だっで見つけたけど。別に、そんなにはしゃぐことないのに。モヤモヤした気分のまま、20分間の休憩を迎えて。お兄ちゃんが飲み物を買ってくるって言って、席を外した。そこでやっと、真央ちゃんが私の方を向いた。

今さらな扱いにむっとしてる私の内心なんか知らず、真央ちゃんが嬉しそうに私に聞いてきた。

「美沙ちゃんは、流れ星に何をお願いした？ 私はね――」  
「お願い？ 何言ってるの、あれは偽物の星だよ。願い事なんて叶えてくれないよ」

真央ちゃんの言葉を最後まで言わせずに、私は冷たい声できつぱりと言いきった。

真央ちゃんの願いなんて、今日の態度を見てれば、聞かなくてもわかってた。だから聞きたくなかった。

意地悪な私の対応。すると真央ちゃんもむっとしたような顔になって、言葉を返してきた。

「可愛くないなあ。せっかく拓斗さんが連れてきてくれたのに、美

沙ちゃん全然楽しそうじゃないよ」

だって、それは真央ちゃんのせいでしょう。私はそんな言葉を心の中で飲み込んだ。

あまりにも子供じみてて。性格悪くて。心狭くて。叫んで真央ちゃんを責めなくなるのを、ぐっと我慢して。

「じゃあ、真央ちゃんとお兄ちゃん2人で見ていいよ。私……具合悪くなっちゃったから、ここ出るね」

それだけ、なんとか冷静な声で言うてから、私は席を立ちあがった。嘘の、言い訳。

「え、ちよつと美沙ちゃん!？」

背中に真央ちゃんの慌てた声が飛んでくるけど、私は無視して、俯きがちな早歩きで上映ドームを出た。

すると入口のところで人にぶつかつた。すいません、と言いながらすり抜けようとしたら、突然腕を掴まれた。

「どこ行くの?」

聞き覚えのある、その人の声。見上げてみれば、そこに居たのは缶ジュースを3本持ったお兄ちゃんだった。

タイミングが悪すぎる。私は妙に落ち着いた気持ちの中、矛盾のない言い訳を考えた。

「ちよつと外の空気を吸いに。お兄ちゃんは美沙ちゃんのところに居ていいよ」

明るく言えればよかったのに、私の口から出たのは冷めた声だった。そのままお兄ちゃんに背を向け走り出す。

お兄ちゃんなんて、真央ちゃんとはっかり。

わざわざ連れてきてくれたお兄ちゃんに対して、そんな最低な言葉が飛び出しそうだったから。

お兄ちゃんはどう思っただろう。途中で抜け出すなんて、あきらかに雰囲気悪くする私の態度。

怒ったのか、それとも呆れたのか。お兄ちゃんの顔を見ないまま逃げだしたから、それすらわからなかった。

真央ちゃんに悪気がないことくらいわかってる。だからこそ、とにかくひとりになりたかった。

逃げて、逃げて、逃げて。自分の気持ちからも逃げ出して。

そんな私自身が、真央ちゃんやお兄ちゃんを、傷付けてしまった。

## 第6話 うそつきのホンネ〔4〕

真夏の空気。強い日差し。飛び出したドームの外は、うんざりするほど暑かった。

決心が揺らぎそうになる。ドームの中に戻れば、涼めるんだから。でも、今さらそう思ったところで、引っ込みはつかなくなっていた。自分から飛び出てきたんだ。

でもせめて、お兄ちゃんが持ってた缶ジュースくらい、もらっておけばよかった。

「もう、プラネタリウムも終わっちゃったかな……」

ひとり呟いて、私はふっと視線を落とす。自分の靴が見えた。

建物の影の、日の当たらない場所に、ぽつんとひとつだけあったベンチ。

ここならなかなか見つかりにくいと思った。でも大問題は、日陰なのに全然涼しくないってこと。

けっこうな時間が経過していた。さすがに二人も、戻ってこない私に、おかしいって思ってる頃だろう。

それとも星に夢中になって、私のことなんてすっかり忘れられちゃってるのかな。

そんなことを考えては、また自己嫌悪に陥って。

セミの鳴き声の中、ゆるい風すらないむっとした気候。一人きり

の時間は、私の嫌な気持ちを増幅させていた。

「美沙」

その時、ふと背後から名前を呼ばれて、私はびっくりと肩を震わせ  
る。

いつまでも隠れていられると思ってたわけじゃないけど、もう少し  
見つからないと思ってたのに。

心の準備がまだできてない。具合悪かったの、ごめんね、って言  
い訳して。あっさり笑える自信がなかった。

恐る恐る振り向くと、やっぱりそこには見慣れた背中が。  
ベンチに座ってる私の後ろで、背中あわせにお兄ちゃんが立って  
いる。

「ケンカしたの？ 真央ちゃん、気にしてたよ」

あくまで中立的な立場なのか、怒るでも諭すでもなく、純粹に私  
に質問を投げかけてくるお兄ちゃん。

ここで素直になっておけばいいのに、私もまだ上手く自分をコン  
トロールできなくて。

「私のことなんてほつといて、真央ちゃんと星見てきなよ」

つんとした声でそんなことを言ってしまった。今日の私ってホン  
トに最悪だ。

こんな調子でずっと、お兄ちゃんを困らせてばかり。こんなに  
可愛くない妹、お兄ちゃんに嫌われちゃうのに。

だけど背後のお兄ちゃんから帰ってきたのは、意外な台詞だった。

「……花火見た日にさ。僕が言ったこと、覚えてる？」

やさしいお兄ちゃんの声。すぐに、わかった。お兄ちゃんの言ったことの、意味すること。

それはいともたやすく、意地になって心を閉ざそうとしていた私の心の奥の方まで、届いてしまった。

夏祭りの夜、逃げ出した私を見つけ出して。私が隠れても、探すって言うてくれたお兄ちゃん。

大切な約束は、今もちゃんとここにあつて。こんな私でも、お兄ちゃんはやっぱり探してくれたんだ。

限界だった。必死に我慢してこらえてた気持ち、切れたように。涙があふれ出す。

あつという間に、私の心を埋め尽くす、この切なさの正体は。

後ろにいたはずのお兄ちゃんは、いつの間にか私の正面に来ていて、かがんで視線を合わせてくれていた。

泣きじゃくる私の頭に手を置いて、髪をくしゃくしゃにしながらなでてくれる。

「……わかってるよね、美沙も。今自分のしてることが、友達をどんなに困らせてるか」

お兄ちゃんの言葉に、涙ながらに私は頷いた。

思い通りにいかなくて、真央ちゃんに対して意地悪な気持ちになつて。

それはきつとこういうこと。私がお兄ちゃんの、一番でいたい。

お兄ちゃんはお兄ちゃんできて欲しい。

そんな気持ちにとまどって、翻弄されて。それは、私がうそつきだったから。私が、目をそらしていたから。

「好きって……どんな気持ち？」

やっと涙が落ち着いて。私が落ち着くのを、黙って見守ってくれていたお兄ちゃんを見上げて。私は静かに問いかけた。

話の流れとまるでかみ合っていない質問。だけど今の私にとってはすごく重要なことだった。

真央ちゃんがお兄ちゃんに向ける感情。夏祭りで会った、あの女の人がお兄ちゃんに向ける感情。

どっちも、“トクベツ”だってことには違いなくて。だけど私の感情とは、どこか違う気がするから。

甘いようで、苦い。切ないようで、あつたかい。それはすごく大きな感情で、私を戸惑わせるから。

だから今、どうしてもお兄ちゃんの答えが知りたかった。

夏の空気、セミの音が響く中。お兄ちゃんの穏やかな色をした瞳が、私を映し出していた。



## 第6話 うそつきのホンネ〔5〕

突然の、私の言葉。お兄ちゃんは少し考えるような顔をした後、困ったように小さく笑った。

「美沙はいつも、難しいことを聞くね」

そうだなあ、なんて言いながら、お兄ちゃんが私の左隣に座った。同じベンチに並んで座ったお兄ちゃんと私の間に、少しだけの距離感。それがもどかしいようで、でもとても優しい。

答えを待つて、私はお兄ちゃんの横顔を見る。すると、お兄ちゃんがゆっくりと口をひらいた。

「それは誰かに教えられることじゃなくて、自分で見つけることだよ。美沙にも、すぐにわかる」

お兄ちゃんの答えは、私の期待してたようなものじゃなかったけど、でも思ってた通りで。

わかりきってるから、誰かに答えを求めてた。逃げるのをやめて向き合おうとしたって、そう簡単に強くなれるわけじゃない。

自分自身で認めてしまうより、誰かの確かな言葉で、気付かせてもらった方が楽だから。

でも、そうなんだ。結局は自分の中にあって。心の奥でひそかに息づいてるから。

ずっと生まれ続けてる、どうしようもない、こんな気持ち。

頬を伝っていく涙のあたたかさと、さっき目の前で流れて消えた、ちっばけな架空<sup>かくう</sup>の星と。

“ 流れ星に、何をお願いするの？ ”

真央ちゃんの声が、私の心にこだました。今、私の願い事はたったひとつ。

さみしい夜、空を見上げて、一番星を見つけたときの気持ちみに。涙がこみ上げて、でもあったかくて。

夜が明けて、消えてしまうのが怖い。消えてしまうことを知っても、消えないでほしいって。

幸せと、恐れと。心の中、同時に存在してて。

わがままにもなって。臆病にもなって。泣き虫にもなって。強がりも通せなくて。

わかつちゃった。わかりたくなかったのに。怖かったのに。でももう、嘘はつけない。ごまかせない。

無造作にベンチの上に置いてある、左隣のお兄ちゃんの、大きな手のひらを思わず握って。

こみあげてくる感情に、指先が、震えた。

「大丈夫だよ。ちゃんと……できるよね？」

「……うん」

お兄ちゃんの言葉に、私はすごく素直な気持ちで頷いた。お兄ちゃんが言ってるのは、きちんと、真央ちゃんに謝ること。

そのまま立ち上がったお兄ちゃんに手をひかれ、引っ張られるようにして、私も少し遅れて立ち上がる。

離れていったお兄ちゃんの手。それはあくまで自然な仕草だったけど、さみしく感じた。

「……ありがとう、お兄ちゃん」

ドームに戻る道を歩きながら、歩幅を合わせて一緒に歩いてくれるお兄ちゃんに、そう言ってみた。

少し照れくさかったけど伝えた、心からの言葉。優しさをくれてありがとう。お兄ちゃんできてくれて、ありがとう。

そんな私に、お兄ちゃんがまた、微笑みを返してくれる。

「いいよ、ありがとうなんて言わなくて。家族なんだから。美沙が悲しい顔をしないでいてくれればそれで」

お兄ちゃんのその言葉は、私の心を嬉しくすると同時に、切なくさせた。

家族として大切。家族以上に、大切。私の心の奥、もうひとつ残ってた、感謝の気持ち。

こんな感情を教えてくれて、ありがとう、って。

## 第6話 うそつきのホンネ〔6〕

少しだけ緊張しながら、お兄ちゃんと一緒にドームの中に戻っていく。

プラネタリウムは、やっぱりもう、終わっていたみたいだった。上映会場から出てすぐの廊下にある長椅子に、真央ちゃんが座っているのが目に入り、遠目ながらにどきりとする。

真央ちゃんは、きっと怒ってるってことはないと思う。でも、どう言い訳していいのか。

今日、私の態度はすごく悪かったんだから、むっとさせてしまったことは間違いないんだ。

高まっていく緊張に、私の足が一瞬止まる。すると絶妙なタイミングで、お兄ちゃんが私を振り返った。

逃げちゃだめなんだよって、瞳だけで私に伝えて。

ママという短い時間はいつも、甘やかされて育ってきた。

苛々したママに怒鳴られるのはよくあったけど、私のしたことに對して、“怒られる”なんてことは数えるほどだった。

ただとお兄ちゃんは甘いだけじゃなく、ちゃんと教えてくれる。それが對等に見てくれてるみたいで、うれしい。

再び足を進めた私がお兄ちゃんに追いつくと、お兄ちゃんは一言、「僕はあっちに行ってるね」とだけ言っ

私の肩にぽんと手を置いて、そのままもと来た道に戻っていく。

ここで頼っちゃだめなんだ。

呼びとめたい気持ちをぐっとこらえて。私はお兄ちゃんを振り返らないまま、真央ちゃんの前まで歩いた。

俯きがちに長椅子に座ってた真央ちゃんが、気配を察知して顔を上げた。

一瞬、言葉に詰まる私。でも何か言わなきゃと必死に考えながら、私はとりあえず口をひらいてみた。

「真央ちゃん、あの……」

「私、やめることにしたから」

唐突に真央ちゃんがよくわからない言葉を返してきたので、私の目が点になる。

すると微妙な笑顔の真央ちゃんが、補足するように付け加えた。

「拓斗さん好きなの、やめるって決めたの」

「え……？」

私はそう呟き返すことしかできなかった。さっきまで、あんなにお兄ちゃんに夢中だったのに。

どうして突然そんなことになってしまったのか理解できず、私の心にたくさんの疑問符と動揺が走る。

「もしかして……私の、せい……？」

なんとか声を絞り出し、私は真央ちゃんにおそろおそろ問いかけた。

私が真央ちゃんを素直に応援してあげなかったから。だから真央

ちゃんはやめるなんて言ってるのかもしれない。

心臓がずきりと痛む。もしそうなら、私って本当に最低だと思った。

だけど私のそんな嫌な考えは外れてたみたいで、真央ちゃんにこりと笑って首を横に振った。

「違うよ。そんなんじゃないけど……。でも、そうでもあるかな」

すっきりしたような笑顔で、言葉をそこで切って。

それから少し首をすくめるようにしながら、真央ちゃんが続ける。

「だってね、拓斗さんってば美沙ちゃんのことばかり！ 妹には勝てないや」

今度こそ本当に頭の中が疑問符で埋め尽くされてしまった私は、数回まばたきを繰り返した。

私のことばかりなんて、そんなわけない。

だってお兄ちゃんはずっと真央ちゃんとはっきり話して、私はひとりぼっんとしたんだから。

「なんで？ だってお兄ちゃん、真央ちゃんにすごく優しくて……」

今度は腑に落ちない顔で、私はまた真央ちゃんに問いかける。

それは私にとって、当然の疑問だった。もし私が真央ちゃんなら、間違いなく好きなのをやめるなんてことはしない。

だけど真央ちゃんは私の言葉を聞いて、あはは、とおかしそうに笑って言った。

「美佐ちゃんって鈍感だね！ 気づかないの？ 私にはあくまで、他人の対応。だけど美沙ちゃんには身内の対応。格が違うの」

「他人？ 身内……？」

他人と身内とか、対応とか格の違い、とか。なんだか大人が使ってそうな、難しい言葉。

そんなのが真央ちゃんの口から次々出てくるものだから、私は飲み込もうとして言葉を反芻する。

そんな私に、真央ちゃんが頷いた。

「そう。美沙ちゃんに仲のいい友達が出来て、すごくうれしいって言ってたよ。心配だったんだって。転校したばかりでしょ？」

「うそ……だって……」

言葉にならないながらも、私の戸惑いが、眩きになって自然と口から出ていった。

驚いた。そんな風に思ってくれてたなんて知らない。だってお兄ちゃん、そんなこと一言だって言っていなかったのに。

「私に優しくかったのも、プラネタリウムに連れてってくれたのも、ぜーんぶ、美沙ちゃんのため！ なんか馬鹿らしくなっちゃって。私の気持ちなんて、そのくらい。薄っぺらだったのかもね」

苦笑いを浮かべながら、真央ちゃんが不意にポケットをぐそぐそと探り始めた。

そして取り出した何かを、私の手を取り手のひらの上に乗せた。

「仲直りしたら、これ、美沙ちゃんに渡してほしいって、拓斗さんが」

それには、見覚えがあつた。いつか海に行つた時、お兄ちゃんにあげた、半分ずつの小さな白い貝殻。

何も言えないまま、私は急いで手のひらから顔をあげて、真央ちゃんを見た。

「言葉にしくなくても、心の中にある大切な気持ちがあるでしょ？  
きっと拓斗さんにとって、美沙ちゃんはかけがえのない人なんだね」

切羽詰まつたような私に、真央ちゃんがそんな言葉をくれた。  
それは私の心の中、とてもやさしい波紋を残して吸い込まれていく。

真央ちゃんばかりとか、3人の中で孤独だとか。私は何を言つてたんだろう。大切なことを見失つてた。

だって、私が言つたんだ。他のを合わせようとしてもだめなんだって。

他の誰かじゃ代わりはできない。私の家族が、お兄ちゃん以外ではあり得ないのと同じに。

お兄ちゃんにとっての家族も、今、私以外じゃだめなのかもしれないって。

実際お兄ちゃんは私に、家族だって何度かそう言ってくれた。なのに私は、どうでもいいことばかり気にして。

信じられてなかったんだ。家族なんて、所詮うわべだけの言葉だと疑つてたから。

素直になつてやっと自覚した想いと、もうひとつ、あつたかい家族の気持ち。

込み上げるふたつの気持ち、今、私を急きたてて。



「真央ちゃん。私……、お兄ちゃんの所に、行って来てもいい？」  
思わず、私はそんなことを口走っていた。どうしても今、お兄ちゃんと話がしたかった。

「ただ真央ちゃんはそんな私に、相変わらず笑ったまま頷いてから、言った。」

「いいよ。私も美沙ちゃんのこと仲間はずれにしちゃったし。ここで待ってるから、ちゃんと迎えに来てね」

「……ありがとう。私、真央ちゃんと友達になれてよかった！」

私はそう言っ、真央ちゃんに笑いかけた。今日はたくさん、大切なことに気づけたんだ。

大切な友達。大切な気持ち。大切な家族。お兄ちゃんは、私の大切な人。

自然と走り出しながら、お兄ちゃんを探して、私もまた元来た道に戻った。

## 第6話 うそつきのホンネ〔7〕

走り続けて息が上がって、呼吸が少し苦しくなる。

お兄ちゃんを探し、ドームの外に出た瞬間からずっと、むっとした空気の中必死で息を吸っていて。

強い日差しに肌を射されて。やっとのことで遠目に見つけたお兄ちゃんは、さつき私がいた場所にいた。

建物の影のベンチ。暑いのにわざわざこんな場所に居るなんて思わなくて、見つけ出すのが少し遅れてしまった。

結構近づいたところで、私の走ってくる足音が耳に入っただのか、お兄ちゃんがこっちを向いた。

やがてお兄ちゃんの前に立つことができ、私はやっと立ち止まり膝に手について息を整える。

休まず走り続けるなんて、やり過ぎだったかもしれない。

お兄ちゃんは座ったまま、そんな私を黙って見上げていた。私の言葉を待ってるみたいに。

さつき、私が逃げ出してここに座ってた時とは、立場が逆転してるみたいだ。

「貝殻……いつも持ってきてくれたの？」

一度息をついてから、私はお兄ちゃんに唐突に問いかけた。それだけで全部伝わると思ったのだ。真央ちゃんと話したこと。ちゃんと仲直りできたこと。

案の定、お兄ちゃんが少し表情を和らげてから、少し冗談っぽく言った。

「うん。……って言えばカッコいいけど、実はサイフの中に偶然入ってただけ」

お兄ちゃんの言葉に、一瞬ばかんとする。だってあんなに感動したのに、それがただの偶然で持ってただけなんて。

けどその方がいいと思った。完璧じゃないからこそ、親近感って言うか……あったかい気がする。

「もう！ お兄ちゃんは……」

私もそんなことを言っつて、冗談まじりに怒ったふりをする。

するとお兄ちゃんが、あはは、とおかしそうに笑った。

和やかな雰囲気。夏の暑さが、そこまで気にならなくなっていた。

すると、お兄ちゃんがふと私の手を取り、握りしめている私の手のひらをそつと開く。

そこには、お兄ちゃんの白い貝殻。そこに目を落としながら、お兄ちゃんがやさしい声で言った。

「でもさ、本当に大切なのは、美沙がくれた言葉の方だね。貝殻そのものじゃなくて。だから……少しでも、伝わったらいいと思っただ。見失うのは簡単だけど、見つけ出すのはすごく、難しいから」

お兄ちゃんの言ってることは、なんだか難しいと思った。けどなんとなくわかるような気もする。

お兄ちゃんはそんな私の手のひらからそつと、貝殻を取った。

「ちゃんと持つてるね。美沙が僕に、初めてくれたものだから」

そう言つて、にこりと笑つてくれるお兄ちゃん。

お兄ちゃんが言つたように、たとえば『見つけ出す』のが難しいことだとしても。

お兄ちゃんのことなら見つけ出せると思った。だって私、一番星を見つけれなかった夜なんてないんだ。

「仲直りできたみたいで、安心したよ」

ふと、お兄ちゃんの声がまた飛んできて、知らず知らずのうちに考え込んでいたらしい私は我に帰つた。

そういえば真央ちゃんも言つてた。お兄ちゃんは、心配してくれてたつて。

なんだかくすぐつたいような気持ちで、私はまたさっきまでのノリで、冗談ぼく笑いながら言つた。

「お兄ちゃん、私つて強い子だよ。そんなに心配しなくても、大丈夫だよ」

「本当に？」

間髪入れず、お兄ちゃんがやわらかい口調で、鋭い言葉を投げかけてきた。

同じように、冗談で流してくれると思ったのに。あっけなく、心の奥の方で、長年封じ込めてきた気持ち揺れる。

どんなに辛い時も、決して心の外に出てしまわないように。必死で保つて保つて、取り繕つて。

ただとお兄ちゃんの前じゃ、簡単に暴かれてしまふんだ。

「……うそ。私、ほんとは……ただ強がつてるだけ」

驚くほど素直に、私の口からそんな言葉が出ていった。

お兄ちゃん、よくできましたって言うみたい、座ったまま手をのばして、立っている私の頭をくしゃとなでてくれる。

「強いのと、強がりとは違うからね。大丈夫。美沙なら強くなれるよ」

お兄ちゃんの言ったことに、妙に納得した。だつてずっと強くなりたいと思つてた。

お兄ちゃんがいつか言ってくれたように、隣で見てってくれるなら、私はきつといくらでも強くなれる。

お兄ちゃんへの思いを自覚すると同時に、確かに気づいたこと。

真央ちゃんのお兄ちゃんへの気持ちと、私の気持ちが違うように思えたのは、きつとこういうこと。

きつと私は、真央ちゃんみたいに、あっさり気持ちを捨てることなんてできないんだ。

お兄ちゃんへの私の気持ちは、きつと簡単じゃなくて。

「大好きだよ。お兄ちゃん」

口をついて、自然と出ていくそんな気持ち。

大好き。何度も使ったこの言葉。でも、その意味はだんだん変わってきてて。

不思議な気持ち。嬉しいような、泣きたいような。今ではもう、私の胸を切なくする言葉になっちゃったから。

でも、どうか気付かないで。一番星を見つけて、私はそれだけで幸せだから。

あったかい気持ちを、たくさんもらってるから。いずれ消えてしまつ星の光に、これ以上何も望めないんだ。

穏やかに微笑んでくれるお兄ちゃん。初めての“恋”という私の感情は、あっけなく私を支配した。

## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔1〕

プラネタリウムに行った日からというものの、美沙は味をしめたのか、遊びに連れてってコールは日に日に加速していた。

考えてみれば、転校して早々、夏休みに入ってしまったのだ。一緒に遊べる友達もそんなにはいないだろう。

それを思うと僕も、どうしても美沙に対して甘くなるわけで。

大好き！お兄ちゃん      〳第7話 隠れた想い、隠した想い〵

「お兄ちゃん、準備できた？ 私はばっちりだよ！」

今日も遠出の約束を取り付け済みな美沙は、ご機嫌な様子で弾んだ声を出した。

今日僕たちが行く予定なのは、少し遠いけれど結構有名な、プール付きの遊園地だ。

美沙が真央ちゃんも一緒にいい、と言うので、この家に集合して僕の手で行くことになっている。

待ち合わせ時間までもうすぐだ。真央ちゃんは気を遣ったのか、いとこのお姉ちゃんも一緒に連れてくるということだった。別に僕一人でもいいが、引率は多いに越したことはない。

そのお姉ちゃんとやらとは面識はまるでないので、気乗りはしないけれど。

今日の前で嬉しそうに笑う美沙を見てみると、それも仕方ないかななんて思ってしまうのだった。

夏休みに、遊園地に遊びに連れていく。突然子持ちの父親にでもなった気分だ。

まあそれはいいのだけれど、はしやぎながら美沙が腕に抱えている鞆が気になった。

やっとのことで持てる、というレベルまで、ぱんぱんに膨らんでいるのだ。

遊園地に行くからと言って、普通ここまで大荷物になるだろうか。

「美沙、その鞆……何が入ってるの？」

恐る恐る、僕は訊ねてみる。すると美沙がにこりとさわやかに笑って説明を始めてくれた。

「えっとね、おサイフとケータイと、水着とタオルと浮き輪でしょ。あとマンガと、懐中電灯！」

浮き輪は向こうで脹らませるんだよ、なんて嬉しそうに言っている美沙の声を聞きながら。

教えられた鞆の内容物を、僕はひとつひとつ、ゆっくり飲み込んでみる。

サイフとケータイは必要だ。水着とタオルと浮き輪も、プールで泳ぐつもりなら必要になってくる。

その後の2つが難しい。マンガは、車での移動時間にも読むつ



もりなのだろうか。

……ただ、懐中電灯がさっぱりわからない。

「……どうして懐中電灯なの？」

理解に苦しんだ末、わからないと観念した僕はまた美沙に恐る恐る尋ねてみた。

すると美沙は、またも笑顔でとんでもないことを言い出した。

「お化け屋敷で使ったら、怖くなくなつて！」

……本当にこの子は、中学生なのだろうか。普段は大人びているくせに、こういう時には疑問に思わせられる。

そんなものを使ったら営業妨害になりかねない。それに懐中電灯は結構な大型で、それが美沙の鞆を膨らませていたようで。

大荷物を持つて遊園地に行くなんて、無理のある話だ。

「うーん……それはお化け屋敷では使えないから、置いていこうね」

なんとかやわらかい言葉を選びつつ、僕は美沙が懐中電灯を持つていくのを止めてみる。

すると美沙ががっかりした顔でうなだれつつ言った。

「……やっぱりダメかな？」

「ダメだろうね」

僕にダメ出しをされ、美沙はしぶしぶと言った様子に、鞆から懐中電灯を出した。本気で使えると思っていたのだろうか。

そんなに怖いなら、初めからお化け屋敷なんて入らないことにすればいいのに。

美沙はどこか天然ボケが入っていると思うのは、僕だけじゃないはずだ。

その時玄関のチャイムが鳴り、美沙がはじかれたようにぱつと顔を上げた。

「真央ちゃんだ！」

言うのが早いか、美沙は玄関に向かって全力疾走していく。さっきまでのうなだれた様子はどこへやら。

プラネタリウムに連れて行ってから、二人はより仲良くなったように、僕も一安心だった。

「真央ちゃん、待ってた……よ」

玄関のドアを開ける音と、美沙の声がかぶり。けれど美沙の言葉は、途中で力をなくして切れた。

まるで、何かに驚いたような。怪訝に思いながらも、僕も顔を出して玄関をのぞいてみる。

するとそこには、真央ちゃんと、もうひとり予想外の人物がいた。

「先輩……？」

「久しぶり、拓斗」

伊藤先輩は、呆然とした僕を見て、にこりと笑って言った。

夏休みに入ってからというもの、僕も美沙にかまけてばかりで。

サークルには顔をだしていなかったから、以前ほど顔を合わせることもなくなっていた。久々と言えば久々だ。

美沙にとっても多分、夏祭りの夜会って以来だろう。先輩に会うなり、逃げ出した美沙。

僕にとっては苦手なタイプで、美沙にとってもきつとそうだろうと思う。真央ちゃんのいところだったなんて思ってもみなかった。

楽しくなるはずの遠出だったけれど、こんな展開になるなんて波乱の、予感がした。

## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔2〕

道案内できるから、ということでご名乗り出た先輩が、助手席に乗っていた。後部座席に美沙と真央ちゃん。

当然と言えば当然の席順なのだが、美沙は不満な様子だった。美沙はいつも助手席に乗りたがるのだ。

けれどそれが叶わず、いつもより数段ふてくされた美沙は、窓を全開にして猫っ毛を流されるがままになっている。

真央ちゃんはといえば、美沙のマンガに夢中だ。

3時間ほどの道のり、現在やっと1時間半。4人の車内は、あまり雰囲気が悪くなかった。

たまに先輩が、隣で地図を見て道案内をしてくれるのだが、それ以外では流した音楽の音くらいしかない。

そんな気まずい空気の中、有料道路に入り。しばらくして、パーキングエリアに差し掛かる。

駐車場に車を停めるなり、美沙が「真央ちゃん、おみやげ見に行こ！」とやけになったような声で叫んだ。

真央ちゃんはマンガを読みたいと渋っていたが、美沙は強引に車外に連れ出していった。

美沙のあの様子。どうやら車内でため込んでいた不機嫌が、爆発したようだった。

美沙たちがお土産やら自動販売機やらがある建物の方に走っていくのを、僕と先輩は黙って眺めていた。

エンジンをかけたままの車内はひんやりしているが、外は日照りがひどく、暑そうだ。

「真央から聞いてるよ、“拓斗さん”の話」

唐突に先輩が言ったので、僕は美沙たちから視線を外し、助手席に向けてみた。

いつも通りどこか余裕な表情で、人工的にふわふわ巻いた髪を指先でいじりながら、先輩はおかしそうにふふつと笑った。

細かくマニキュアやビーズみたいなものできれいに飾られた爪。相変わらず、指先まで完璧だ。

高校時代から可愛い系と評判で、かなりモテていた先輩。女であることに抜かりないのだ。

先輩の視線はまだ美沙たちの方に向いているようだった。

遠目に見える美沙たちは、建物の入り口付近を見ていたが、やがて暑さに負けたのか、建物の中に入っていく。

「まさか、あの子がライバルなんてね。しかも、強敵」

今度は独り言のようにぼつりと、先輩がまた言った。あの子、というのは美沙と真央ちゃんどつちを指すのだろう。

話の流れから行くと真央ちゃんのことになるのだが、どうもそうとは決められない雰囲気だ。

とにかくどつちだったとしても、何のライバルなのか、どうしてライバルなんて言いだすのか意味がわからなかった。

怪訝な思いのまま、僕は先輩に訊ねてみる。

「……ライバルって？」

「気づいてないの？」

すかさず質問に質問で返されて、僕はなんとなく言葉に詰まる。すると先輩が畳み掛けるように口を開いた。

「聖人君子に見える拓斗にも、ちゃんと欠点があるでしょ。朝に弱い。だから時間にルーズ。感情の起伏が乏しい」

突然自分の欠点を指折り挙げ連ねられて、僕はわけもわからないまま苦笑いするしかなくなった。

先輩とは高校からの、元カノぐるみの付き合いだ。当たっているだけに何も言えない。

対して先輩はと言えば、悪気も何もない様子で、淡々と続ける。

「そして極め付けは、自分の彼女であろうと、あっさりしてて絶対に執着しない。よく言えば穏やか、悪く言えば淡泊。……な、はずだったよね。めぐと別れたのもそれが原因でしょ？」

めぐという名前を久しぶりに聞いた。僕の元カノの名前だ。正しくは、めぐみ。先輩にしてみれば友達に当たる。

別れて以来、一度も会っていないどころか連絡すらしていない。今思っても形式的な付き合いだった。

「……あたしってさあ、ピンチになるとその気になるの」

またも唐突な先輩の一言。先輩が何を言いたいのかますますわからない。

話の流れに脈絡みやくわくがないのは相変わらずみたいだ。

僕は先輩に真意を訊ねてみようと言を聞きかけた。……その時、絶妙なタイミングで、車の後部座席の扉が開いた。

後ろの店からやってきたのか。暑かったあ、なんて言いながら、美沙と真央ちゃんが車に乗り込んできた。

「ただいま。はい、これ！」

少し機嫌が回復した様子の美沙がそう言って、後部座席から、運転席と助手席の間に両腕をつき出してきた。

冷えた缶ジュースが片手に1本ずつ、計2本。どうやら僕のと先輩の分を買ってきてくれたようだ。

「ありがとう」

言いながら、僕が左斜め後ろを向いて缶ジュースを受け取ろうとした時、ふと美沙の指と僕の指が触れた。

すると美沙が突然、はじかれたように缶ジュースを手からはりと離れた。最近美沙は、時々こんな態度を見せることがある。

はじめの頃はとまどったが、年頃だからということに納得していた。

けれど今は時と場合が悪かった。そのまま落下した缶が片方、先輩の太ももに落ちてしまったのだ。

痛々しく鈍い音とともに、先輩が「いたっ！」と小さく言って、顔をしかめる。

「うう、ごめんなさい！ ああ、大丈夫ですか？」

僕が先輩に声をかける前に、慌てたように美沙が後部座席から身を乗り出して言った。

かわいそうなくらいに小さくなっている。先輩が心配なことは心配だったが、そんな顔をされてはあまり表立って心配できない。

真央ちゃんも同じなのか、心配そうに後ろから覗きこんでいるが何も言わない。

「いいよ、別に。大したことないから」

先輩が太ももをさすりながら美沙に言った。あまり明るい声ではなかった。

見るからに痛そうなので仕方ないのかもしれないが、それは車内の空気を再び重くした。

とりあえずなんとか場を和ませようと、僕は美沙に声をかけてみることにした。

「美沙、お金は……」

「大丈夫。いらない」

美沙は小さく言って、しょぼくれたように後部座席へと身を引いた。

缶ジュースは本来の役目を果たせず、先輩の足を冷やすアイスノン代わりになり。

僕は、楽しくなるはずだったのに、心中あまり穏やかでないドライブを、また続けることになったのだった。



## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔3〕

気持ちを隠すなんて、できっこないのかもしれない。

お兄ちゃんへの想いを自覚したら、もやもやしてた気持ちがすつきりして、また上手く笑えるようになった。

けどどうしても、戸惑いの気持ちも大きくなって。

いつもどおりに笑いあえるけど、ふとした時に、どうしていいかわからないような気持ちになる。

夏祭りの夜に感じた戸惑いが、そのまま日に日に成長したみたい

に。  
たとえばそれは、お兄ちゃんの手と私の手が触れ合っただけでも、すぐに私を支配するんだ。

そんな理由から、私が落つことした缶ジュースのせいで、あのひとに迷惑をかけた。

車の中で、自己嫌悪の嵐。けどそんな中でもふとお兄ちゃんの後ろ姿をちら見して、胸を切なくさせたり。

こんな気持ち、知らない方がよかったのかな、なんて思ったりしている。

だって穏やかじゃいられないんだ。あのひとが、お兄ちゃんを見る瞳を、目の当たりにしちゃったら。

自分の気持ちをコントロールできないまま、やけにお兄ちゃんに

なれなれしいあの人の態度にイライラを募らせて。

ひとりふてくされることで、必死に自分を保っていた。

でも、何も言えない。お兄ちゃんはお兄ちゃんだけど、私だけの人じゃないから。

そうしてあまり居心地の良くない車内でしばらくすごした後、たどり着いた遊園地。

4人そろってチケットを買い、中へ入る。

すると途端に、遊園地らしくにぎやかな世界に、日常世界から突然紛れ込んだような感覚に陥った。

そのギャップに戸惑い、そしてそれはすぐに嬉しさに変わる。わくわくした。

こんなのは久しぶりだった。そもそも遊園地なんて、ずっと前に一度しか行ったことないのだ。

真央ちゃんも盛り上がっているのは一緒なようで、私の右隣にびったりとくっついて。

入口でもらったパンフレットを両手で広げ、それを覗き込みながら弾んだ声を出した。

「美沙ちゃん、どこから回る!？」

「お化け屋敷!」

私も真央ちゃんも、お互いに無駄に大きな声だった。満面の笑顔になってるとこまで一緒。

私は真央ちゃんの質問に、パンフレットを見るまでもなく即答した。小さな遊園地に一回しか行ったことのない私。

だからお化け屋敷っていうのに入ったことがなくて、怖がりだけど、どうしても一回入ってみたかったのだ。

私は張り切っていた。

だけど私の言葉を聞いて、お兄ちゃんが「いきなりお化け屋敷？」と困ったように笑った。

冗談にとられたみたいだ。失敗したかな、とそこで気づく。遊園地の順序なんてわからない。

「そうだよね。あはは……」

話のわからない子だっと思って思われなくて、私はとりあえず愛想笑いしてごまかしてみた。

そして、じゃあ他のから行こう、って言おうとしたとき。

「いいじゃない、行きたいって言うなら、行ってあげれば」

あの人がお兄ちゃんに向かってさざりと言った。

お兄ちゃんが先輩って呼ぶひと。真央ちゃんがお姉ちゃんって呼ぶ人。

私はどう呼べばいいかもわからないし、名前だっ还不知道いから、あの人のことを呼んだことがない。

それに今の言い方。言葉の内容だけ見れば、私のことを庇ってくれたわけだけど。

なんだか……しっくりこない。私の気のせいかもしれないけど、嫌な感じなのだ。

あの子はそのまま誰の意見も聞くことなく、「お化け屋敷ってどこにある？」なんて言っ

て自分の手にパンフレットを持ってるくせに、わざわざお兄ちゃんのパンフレットをのぞきこんだ。

今さっき私と真央ちゃんがしてたみたいに、ぴったりくっついて一つのパンフレットを覗き込む。

そしてそのまま2人で並んで歩きだしてしまった。ついていくしかない私と真央ちゃん、子供の2人。

さっきまで盛り上がっていきなりだった私の気持ち、そこでまた一気に急降下する。

車の中で、あの人が助手席に乗ってからこんな予感してた。遊園地って言えばふたりひと組。

私と真央ちゃん、お兄ちゃんとあの人。きつとこんな組み合わせになるんだろうって。

それはたぶん、自然なこと。年齢的にも、立場的にも。嫌だっと思ってる私の方がおかしいんだ。

だけど、まるで恋人同士みたいな二人の後ろ姿を目の前に歩いていても、ちっとも楽しくない。

私だってこの前まで、あんな風にお兄ちゃんにくっついてたのに何も知らずに無邪気にお兄ちゃんに抱きついてた自分が、最近のことなのにすごく昔のことみたいで。

それはすごく幸せなことだったなって、思う。

隣で並んで歩いてる真央ちゃんは、そんな私の内心も知らず、楽しそうに話しかけてくる。

それに申し訳なく思いながら、たどりついたお化け屋敷の前。

お化け屋敷も、やっぱり2人ひと組だった。列に並んで順番待ちしてる間も、お兄ちゃんとあの人は何か話していて。

私はその後ろで、真央ちゃんと話しつつ、歩いてゴールを目指すんだって説明書きを、なんとなく見ていた。

私たちが前に進むたび、後ろにも行列ができていく。人気があるってことは、やっぱり怖いんだろうか。

昨日の夜から遊園地に来るのを楽しみにしてた。お化け屋敷に行くことも計画して。

疑うことなく、一緒に入るのはお兄ちゃんなんだって決めつけてた。だから怖くても平気だって思ったのに。

お化け屋敷なんて、言い出さなきゃよかった。きつとお兄ちゃんはある人で行っちゃうんだなって、あきらめていた。

だけでもうすぐ私たちの順番が回ってくるってところで、予想外の事態が起きた。

「美沙ちゃん、一緒に入ろうか？」

そう言っ て私に手を差し出してきたのは、真央ちゃんでも、お兄ちゃんでもなく。あのひと、だったのだ。

まだよく知らない、でもあまり好きになれない大人の女の人を前に。私は、戸惑いの中にいた。

## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔4〕

どうして私が誘われたのかわからないまま、断る理由も見つけられず、組み合わせは決定してしまい。

お化け屋敷に入る2人組は、私とあのひと、真央ちゃんとお兄ちゃん、っていう組み合わせになってしまった。

真央ちゃんは、お兄ちゃんと一緒ってことで、心なしか嬉しそうな感じだった。

お兄ちゃんはどこか心配顔で私を見てたけど、こんな遊園地のアトラクションくらいで頼るわけにもいかないし。

あのひとへの、警戒心は取れないまま。お兄ちゃん達より一足先に、2人並んで足を踏み入れた、はじめてのお化け屋敷。

中は薄暗くて、寒いほどにクーラーがきいていた。

想像よりもずっと、雰囲気が出ている。とたんに、私の足が先に進みたくないって訴えるみたいに、重くなっていく。

この先を進む勇気が持てない。だけど一度入ってしまったのだ。今さら引き返すことはできない。

入口の説明書きに、ゴールまで15分程度と書いてあった。それを思い出して気が遠くなる。

それに一緒に居るのがあの人なんだから、絶対に弱音は吐けない。私は勇気を振り絞り、また一歩足を進めた。

「……っ！」

直後、悲鳴が喉まで出かけて、私はそれを寸前で飲み込む。  
暗がりです下が見えないところに、突然、生ぬるい風が私の足首  
にかかったのだ。

驚いたあまりに、心臓が早鐘のようにリズムを刻み始める。嫌な  
汗が出た。

「……美沙ちゃん？」

いつの間にか立ち止まっていたらしい。私より数歩先に進んでい  
たあのひとが、振り返って私を呼んだ。

奥の方から、何か悲鳴みたいな声が聞こえてくる。とにかくここ  
から逃げ出さなくて、泣きたい気分だった。

でも絶対に怖いなんて言えない。お化け屋敷って、自分から言い  
出したのだ。

弱音を吐きたくないって気持ちだが、よけいに私を追い詰めていた。

「すみません、ちょっとびっくりして」

どうしてもいつも通りとまではいかなくても、精一杯の声のトーン  
で言ってる。

私は何とか足を動かし、待っているあの人の所までやっと追い付  
いた。平静を装うのも精一杯。

あのひとはそんな私の様子に困り顔で笑って、首をかしげた。

「怖いのか？」

直球な質問に、私は答えに困った。本当は、怖くなんかないです  
って強がりたかった。

でもこんな状態で強がってみても、結局はばれただ。

それじゃますます呆れられそうな気がして、私は仕方なく、正直に本心を話した。

「少し……怖いです」

「可愛いんだ」

くすつとちいさく笑うあの人の言葉そのものと、その表情がなんだが嫌だった。

まるで子供扱い。しかも嫌な意味にしか聞こえない。

「私のことはね、亜子って呼んでいいよ」

誰も聞いてないのに、あの人は唐突にそんなことを言ってきた。

話の飛び具合について行けない。

でもとりあえず呼び方には困っていたので、私は“亜子さん”と呼ぶことに決めた。

亜子さんは、まだ先を進もうとはせず、私ににこりと笑いかけた。

「拓斗はね、下の名前で呼んでくれないから。よそよそしいよねえ？　こんなに仲いいのに」

この人の口から、あまりお兄ちゃんの話話を聞きたくなかった。そんなことを言われてしまったら、何も言えなくなる。

会ったばかりの私と違って、亜子さんは昔のお兄ちゃんも知っている。

私よりもずっとお兄ちゃんに近い所にいる人で。夏祭りの夜にそれに気づいて。



今日も、車の中でも、遊園地に来てからも、それをまざまざと思い知らされ続けてきたんだ。

これ以上、畳み掛けないでよかった。

私が何も言葉を返さないの、そこで会話はぷつぷつと途切れ。

亜子さんがまた歩きだしたので、私もそれに続く。

早くこの時間が終わればいいのに。そう思えば思うほど、1分1秒がとても長くて。

ゆっくりペースでも先に進むにつれて、お化け屋敷のスケールも大きくなって。怖さもだんだんと増していった。

突然怖いものが眼前に落ちてきたりするので気が気じゃない。

「手をつなぐ？　少しは怖くなくなるかもよ」

ふと、余裕な様子の亜子さんが、私に向かって手を差し出しつつ言った。

さつきから、多分まだ1分とたつてないのに、もう何度も悲鳴をかみ殺し続けている。心臓は悲鳴を上げていた。

精神状態もパニック寸前。亜子さんにもそれを気付かれたみたいだった。

でも確かに怖いけど、この人に頼るくらいなら、怖いままの方がずっとましだと思った。

私がまた何も言わず、差し出された手もとらずにじっとしているので、しばらくして亜子さんは手を引っ込めた。

ため息まじりに、ふっと笑い。そして呟くように亜子さんは言った。

「手が触れただけでも戸惑って。あつたなあ、私にも。そんな時代」

さっきまで怖さという理由だけで高なっていた私の心臓が、この瞬間、別の意味で大きく鳴った。

たとえあからさまでも、隠してたつもりだった。お兄ちゃんへの、大切な……

「初めての恋は……とまどっちゃったのかな？」

亜子さんの、相変わらず余裕な笑みと言葉。状況も忘れて、私は知らず知らずのうちに表情を引き締めていた。

## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔5〕

不穏な空気が流れていた。亜子さんの物言いは、やっぱりどうしても嫌な感じがした。

だけど、どうしても逃げるわけにはいかなかった。私の恋心だけは、絶対に誰にも何も言わせない。

お兄ちゃんとの過ごした時間とか、私よりも亜子さんの方が、お兄ちゃんのことを知っているとか。

そういうことなら、亜子さんにはかなわないって素直に思うけど。

気持ちの大きさとか、想いをどれだけ大切にしてるかとか。そういうことに関しては、絶対に譲れない。

立ち止まった、お化け屋敷の真ん中で。私はまた無意識のうちに、自分のスカートをぎゅっと握りしめていた。

「突然あんなお兄ちゃんができたら、誰だって憧れちゃうよね。…真央もそうだったし」

そんなことを言つて、亜子さんがまたにこりと笑う。真央ちゃんと比較して、一緒にして。

結局この人から見れば、私も真央ちゃんも同じ、ただのちっぴけな子供なんだ。

お兄ちゃんっていう人が、どんなに貴重な存在なのかわかる。

子供だからって、想いの種類までもが一緒だなんて、そんなことあるはずないのに。

私がむっとしているのを知ってか知らずか、まるで余裕を失わずに、亜子さんが続ける。

「一番身近な男の人だもんね？ 美沙ちゃんから見れば、拓斗は大人だし。恋に恋するお年頃なんだよね」

その一言で、さっきまでなんとか保っていた私の冷静な部分が、あっけなく姿を消した。

コイニ コイスル オトシゴロ？ そんな一言で、簡単に片付けないでほしい。偽物扱いしないでほしい。

どんなに私が幸せなのか。どんなに私が切ない思いをしてるのか。どんなに 怖いか。知りもしないくせに。

「あなたになんてわかりません！ 私がっ……、どんな気持ちでお兄ちゃんを好きでいるか。わかってほしくもない……！」

感情的になって、私は叫ぶように気持ちを吐き出した。だけど、いくら私が必死になって訴えても、亜子さんに届くはずもなく。さっきからずっと表情を崩さず、ふっと笑う亜子さんの表情そのものに、すごくイライラした。

「ふふ。意外にオトナなんだ？」

亜子さんの言葉の一つ一つに、バカにされているような気がした。これ以上、この人となんて一緒にいられない。

そう思ったらもう、この場に居るのも嫌になって。

「……私、先に行ってますから！」

気づけば言い捨てて、私は走り出していた。何も考えずに、とり

あえず亜子さんの前から消えたかった。

背後で私を呼びとめる、亜子さんの声も無視して。

だけど、それが間違いだった。ここがどこなのか、まるで忘れてしまっていた私。

数歩走ったところで、突然がばりと凄まじい勢いで、何かが私の眼前に落ちてきて、ぶらりと揺れた。

「っ!？」

それが何なのか認識すると同時に、私の恐怖メーターが最大値を振り切った。

「ひっ……っ……」

震える唇で声にならない声を発しながら、体中の力がストーンと抜けた。

私の目の前で、白い着物を着た血まみれの女の人が、地面に落ちることもできないままつるされ、天井からぶらぶら揺れている。

へなへなとその場にへたり込みながら、動かない自分の体を意識する。あまりの出来事に、見開いた眼から涙が出た。

怖い。怖い。怖い。物凄い形相で私を見ている着物の女の人から目がそらせない。

その時、背後からぼん、と肩に手を置かれ、私は心臓が外に出てきてしまいそうなほどに驚いた。

「美沙ちゃん……?」

恐る恐る振り向くと同時に、さっきまで聞いていた声に名前を呼

ばれて、そこでやつと我にかえる。

亜子さんはあきれ顔で、座り込んでいる私を見下ろしていた。本当に不本意だけど、この状況では亜子さんでも安心した。でもそれが悔しくもあって。

「何してるの、一人で行ったりするからでしょ？　これだから子供は嫌いなんだよね……」

ため息まじりに亜子さんが言う。冷静になってよく見ると、着物の女の人は人形だった。

はつきりと子供だって言われて力チンと来るけど、こんな状況で迷惑掛けてるんだから仕方ない。

すいません、とちいさく言っ、私は立ち上がろうとした。けどできなかった。

立とうとしたところで、すんと力が抜けてまた座り込んでしまう。力がまるで入らないのだ。

「もしかして……立てないの？」

状況を察した亜子さんが恐る恐る聞いてくる。心底嫌がっている感じた。私もこんな自分がすごく嫌になる。

肯定とばかりに黙りこむ私を前にして、亜子さんがうんざりしたように自分の額に片手を当てた。

「ああもう。どうすんのよ。おぶっていくなんてごめんだからね？」

亜子さんがそんなことを言ったとき。突然、背後からガサリと物音がした。

また怖いものが出てくるのかと、びくりとした私は、背筋を凍りつかせて固まった。

「ただ背後から飛んできたのは、お化けでも幽霊でもなく、誰かの声だった。」

「何してるの、2人とも？」

「訊き慣れた大好きな声。間違えるはずなんかない。私が振り向くと、そこにはやっぱり予想通りの人が。」

「もたもたしているうちに、とうとう追いつかれてしまったらしい。」

「不思議そうに私と亜子さんを見ているのは、後から入ってきたはずのお兄ちゃんと真央ちゃんだった。」

## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔6〕

私と亜子さん。お兄ちゃんと真央ちゃん。お化け屋敷の中四人が向かい合い、奇妙な空気が流れて。

だけどへたり込んだ私と亜子さんを交互に見たお兄ちゃんは、それで状況を察してくれたみたいだった。

「いいよ、2人は先に行つて。僕が美沙を連れてくから」

お兄ちゃんの一言が、亜子さんを前にして窮地に追いやられようとしていた私を救ってくれた。

だけど呆れられちゃったかも。そう思つてふとお兄ちゃんを見てみると、お兄ちゃんはやれやれといった笑顔で私を見ていて。

そうだ。お兄ちゃんはたとえどんなに私が情けなくても、呆れたり嫌つたりとか、そんなふうにしたことなんてなかったんだ。

「あんまりお兄ちゃんを困らせないようにね、美沙ちゃん」

亜子さんはため息まじりに私に言つてから、真央ちゃんと連れ立つて先に行つてしまった。

ちらちらと私たちを振り向きながら歩いていく真央ちゃんと、全く振り返らずにすたすた歩いていく亜子さん。

その2つの後ろ姿を見送っていると、ふいに、ぼんと私の頭の上に何かが乗った。

見てみると、それはお兄ちゃんの手で。お兄ちゃんはいつも、こうやって私をなだめる。



それがなんだか、パパみたいで、でもお兄ちゃんでも必死に強がってた。亜子さんの前では、私は大人でいなくちゃいけなかった。でも、今は。

張り詰めていたものがぷつりと切れてしまった私は、込み上げる涙を抑えることができなくなった。

「おにいちゃん……」

「よしよし。頑張ったね」

涙目の情けない顔で座り込んだまま見上げる私に、お兄ちゃんがそう言ってくすつと笑った。

怖かった。それに、悔しかった。もどかしかった。亜子さんに敵わなくて。想いを軽く見られて、否定されて。

「本当は、僕と一緒に入ってあげようと思ってたんだ。でもあまり過保護にするのもどうかناと思って……ごめんね」

お兄ちゃんは困ったように微笑みながら言って、そして私の頭に置いてあった手をすつと引き、私の前に差し出した。

手をつなごうと言う合図だった。一瞬、困惑する私。

この手に触れたら、またドキドキして、怖くなって、逃げ出したくなるかもしれない。

だけどそんな固くなってしまった私の心も、お兄ちゃんの言葉は簡単に溶かしていく。

「手をつないでいけば、そんなに怖くないよ。そのための2人ひと組でしょ?」

亜子さんの手とは違う。どこまでもやさしいこの手を。

気づけば、私も無意識のうちに手を差し出していた。おそろおそろ近づく私の手を、お兄ちゃんはっきりと握ってくれた。

あったかかった。さっきまでの怖い気持ちとか、不安とか、そんなのまるごと飛んで行っちゃうみたいにな。

ああ……そうなんだ。すっかり忘れてた。恥ずかしい気持ちより、恋心からの戸惑いより、大きなもの。

お兄ちゃんにくっついてる時の、安心感。それはお兄ちゃんの持つ雰囲気でもあり、心のあったかさでもあり。

心に張り巡らされたいくつものジレンマが、ひとつひとつじんわりと溶けだして。

最後に残ったのは、ほんわか幸せな気持ち。

「私……もつたいたいことしてた、かも」

「ん？ 何が？」

呟くように言った私に、お兄ちゃんが不思議そうな顔で聞き返してきた。

つないだ指先から流れ込む、甘いようで切ない、幸せ。

やっぱり恥ずかしいし、ドキドキするけど。それでもこうして、お兄ちゃんとずっと手をつないでいたい。

この手に触れたくないなんて、もつたいかなかったなって。

でもそんな気持ちはやっぱり、恥ずかしいから教えてあげない。

それに……やっぱり望めないから。

「……秘密！」

言って、私はにっこりと微笑み、お兄ちゃんの手を握ったまま立ち上がる。

立てなかったのは一時的なものだったみたいで、今では少しよるめきつつも立ち上がることができるようになっていた。

亜子さんが前に居て、余計に緊張してたせいもあったのかもしれない。

「ホラー映画も見れない美沙には、お化け屋敷よりもジェットコースターが似合ってるんじゃない？」

手をつないだままお化け屋敷の先を進みながら、お兄ちゃんがちよつとからかうような口調で言った。

テレビであつたホラー映画と一緒に見たことがある。でもすぐに、私は音を上げたんだっけ。

「うっん、お兄ちゃんが一緒ならお化け屋敷だって平気だよ」

私は得意になって、そんなことを言ってみた。本当にそう思うんだ。

亜子さんと居た時は、ゴールまでの道のりが永遠に感じられるほど苦痛で、早く抜け出したいって思ってた。

でも、今じゃずっと続いてもいいな、なんて。そんなことを想ってるから。

そうして、また私が微笑んだ瞬間。……足首に何かが触れた。

「……っ！？ きゃああっ！？」

息がとまるほど驚いた私は、思わず悲鳴を出してしまった。忘れ

かけても、ここはやっぱりお化け屋敷。

甘い気持ちから一転。さっきの着物の女の人のトラウマが、一気に私を青ざめさせた。

とにかく恐ろしくなって、目をぎゅっと閉じた私は、がむしゃらに近くにあるものにぶつかるとようにしがみついた。

と、同時に、ごん、と派手な音がした。あつたかい、人の温度を両手に感じて少し安心する。

「美沙。怖いのもわかるけど、これはちょっと……」

頭の上から、少し疲れたようなお兄ちゃんの声。そろそろと目を開けてみると、私が抱きついたのはやっぱりお兄ちゃん。

でもここからが予想外だった。私に壁に押し付けられたお兄ちゃんは、頭をぶつけてしまったらしい。痛そうに後頭部をさすっている。

「ご、ごめん！ ごめんねお兄ちゃん！」

さっきまでの恐怖はどこへやら。すっかり慌てふためいた私は、必死にお兄ちゃんに謝り続ける。

やさしいお兄ちゃんは私を怒ったりせず、冗談で流そうとしてるけど、それがよけいに心に痛い。

前言撤回。やっぱり、私にお化け屋敷は無理みたいだった。

第7話 隠れた想い、隠した想い〔6〕（後書き）

しばらく更新できず申し訳ありませんでした。

毎日更新だけが取り柄だったこの小説。

大多数の読者様は失ってしまったと思いますが、またいちから頑張りますので、どうかよろしくお願いします！

## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔7〕

結局、私は何度も悲鳴を上げ続けることになってしまったけど、お兄ちゃんと2人、無事にお化け屋敷から抜け出すことができた。

外に出ると、近くのベンチに座ってる真央ちゃんと亜子さんが目に入った。

なんだかすっかり忘れてたけど、今からはまた亜子さんと一緒に行動しなきゃいけないんだ。

気が重くなる。まだお兄ちゃんとつないだままの手だけが、私を支えていた。

「遅かったじゃない。待ちくたびれそうだったよ」

私とお兄ちゃんを視界に入れた亜子さんが、立ち上がり、いかにも疲れた声で、でもそつなく笑ってお兄ちゃんに言った。

真央ちゃんも立ち上がって私とお兄ちゃんを迎えてくれる。

亜子さんの軽い雰囲気表情が、逆に嫌味に感じられて私はむっとする。

するとそんな私の内心を察したのか、亜子さんが私の方を向いた。

「……美沙ちゃんもさ。もう少し、強くならなきゃいけないね。真央のことを見習って」

いかにも小さな子供に言い聞かせるような声で、亜子さんが冗談っぽく言って笑う。

確かにその通りで、悪いのは私で、迷惑掛けたのも私。真央ちゃんも怖がつてる様子もなく、大人しくしてて、でも真央ちゃんと比べたような言い方されると、どうしても素直になれなかった。

「……すいません」

亜子さんと目を合わせることをせずに、私は小さくぼそりと言った。今、すごく嫌な言い方してしまった。でも謝るのも変だし、苛々してて、まあいつか、なんて思った私はそのまま黙る。

すると、繋いでいたお兄ちゃんの手が自然と離れていった。心の中でけっこうショックを受ける。

「先輩、怖がり方は人それぞれだから。美沙はちょっと怖がりな方なんです」

亜子さんに向かって、お兄ちゃんがやんわりとフォローを入れてくれて、私の気持ちが少し救われた。

だけとお兄ちゃんの言葉を受けた亜子さんは、あはは、とおかしそうに笑った。

「拓斗、甘やかしすぎ！ 妹が可愛いのはわかるけどさ。美沙ちゃん、可愛いもんね？」

亜子さんはお兄ちゃんに向かって言ってるのかと思ったら、語尾の向かう先は私だった。

含み笑いで私を見ている亜子さんの耳、髪の間隙に、キラキラしたピアスが揺れているのが目についた。

たぶん亜子さんが言いたいのは、“子供で”可愛いつて意味だ。全然嬉しくない。

黙りこむ私に気づいているはずなのに、亜子さんはそれ以上その話題に触れず、そして鞆からパンフレットを取り出した。

そしておもむろにお兄ちゃんの隣で広げて、お兄ちゃんに向かって言った。

「さ、次に行こつか。真央がこれに乗りたいつて言つててね」

そしてそのままお兄ちゃんと歩きだす亜子さん。結局、こうなつちやうんだ。

しかも今度は、真央ちゃんまでもが2人に並んで、これに乗りたいんです、なんてはしゃいでいる。

ひとりでついていくしかない私。もしかしくなくても、私はまた空気を壊している。

じゃあ、気持ちをかくして、必死にはしゃいで、亜子さんとお兄ちゃんの2人についていけばよかったの？

でも、そんなの無理だつて思った。そんなに大人になんてなれない。

うわべを取り繕つて、気持ちを抑えて、作り笑うのが大人なら、私は大人になんてならなくていい。

次に向かうのは、真央ちゃんの希望つてことで最新型のジェットコースターになつたらしい。

私は、次どれに乗るのかの話し合いには参加しなかった。話し合いが終わつて、決定された行き先に従うだけ。

そしてお兄ちゃんと亜子さんの進むままに後ろをついていくだけ。



「美沙ちゃん？ トイレ行かない？」

気を使ったのか、横を歩いていた真央ちゃんが私に声をかけてくれた。

この前プラネタリウムに行ったときから、真央ちゃんにはこんな態度見せてばかり。

全然可愛くなくて、あまりに子供じみた私。自己嫌悪するけど、どうしてもなおらない。

すると前を歩いていた亜子さんが振り返った。

真央ちゃんは私に向かって言ったのに、亜子さんにも聞こえていたみたいだった。

「じゃあ、3人で行こうか？ 近くにあるみたいだから。拓斗はここで待ってて」

亜子さんが余計な気遣いを見せて真央ちゃんに微笑んだ。せつかく真央ちゃんが気を利かせてくれたのに台無しだ。

そのまま3人でトイレに向かい、私が鏡の前で髪の毛を直していると、亜子さんが不意に私の横に立った。

ポーチから取り出された口紅で、同じ鏡に映る亜子さんが化粧直しをする。

本当にきれいで、可愛い顔立ちな人。大人で、魅力的で。私にないものを全部持つてる。

一緒に歩いているとき、亜子さんのことをちらちら見てる男の人が何人かいたの、気付いてた。

「あたしね、ずっと見てたの。拓斗のこと。でも安心してた。拓斗

の心は誰にも動かされない」

あくまで鏡に視線を向けたまま、亜子さんがぼつんと言った。  
たぶん、三つ隣の鏡の前に居る真央ちゃんには聞こえてないだろうってくらいの、声のトーンで。

「だけど美沙ちゃんが存在……、予定外だったんだよね」

私に返事を期待してるわけじゃないのか、亜子さんがまた続ける。  
言ってる意味はわからなかったけど。

とにかく私の予想が当たって、やっぱり亜子さんは、お兄ちゃん  
のことが好きなんだってことだけはわかった。

「悪いけど……負けるつもりはないから」

そう言っただけで、亜子さんが私を見た。微笑むでもなく、怒っ  
ているでもなく、ただ真顔をしている。

この人のことが嫌いだったけど、今日の前に居る亜子さんの瞳は  
すごくきれいに見えた。

まっすぐなんだ。お兄ちゃんに対する想いは。私なんかより、  
ずっと。

なんだか打ちのめされたような気持ちのまま、またお兄ちゃんと  
合流して。

そしてまた亜子さんとお兄ちゃんが並んでるのを見ながら、ただ  
ついていく私。

私あまり話さないの、真央ちゃんもいつしかお兄ちゃんと亜  
子さんの中に入っていくようになっていた。

だんだんと、足が重くなっていく。いつの間にか私は、3人に距

離を開けて歩いていた。

離れていく背中。気づいて欲しい。亜子さんより誰より、私を見て欲しい。でも……気づいて、くれないの？

とうとう立ち尽くしてしまった私は、だんだんと小さくなっていく3つの後ろ姿を、ただ呆然と眺めていた。

## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔8〕

美沙がいない。そのことに気づいたのは、目的地の手前まで来たところで、少し休憩しようと先輩が提案した時だった。

それがはぐれてすぐだったのか、それとも時間がたってしまっただったのか、それすらわからない状態で。

最新型のジェットコースターの手前のベンチを見つけて。一番に気づいたのは真央ちゃんだった。「美沙ちゃんがない」と。

焦る気持ちを抑えつつ、僕は美沙の携帯電話に3度目のコールを鳴らす。でも何度鳴らしても全く出る気配がない。

これは多分、意図的だろう。でもこんなに広い遊園地ではぐれるなんて、あまり思わしくない事態だ。

美沙はしっかりしているようでまだ幼く、どこか抜けている。心配で仕方がなかった。

ついてきているはず、と思いこんで、美沙のことを全く注意していなかった。

そもそも今日ぼくがここに居るのは美沙のためだ。美沙が喜ばないなら意味がない。はぐれてしまうなんて尚更だ。

美沙につながるままの携帯電話を切り、やや顔をしかめてパチンと折りたたんだ僕に、真央ちゃんが真顔で声をかけてきた。

「拓斗さん、今日の美沙ちゃん、泣きそうな目をしてたよ。美沙ちゃんのこと……、ちゃんと見てました？」

その一言は、小さな衝撃とともに、予想よりもずっと深く僕の心の奥に突き刺さった。

最近、美沙の様子はどこがおかしかった。特に今日、ここに来てからそれは更に際立っていたようにも思える。

だけど、僕は気付いていながらどこか軽視していなかったか。思春期だから、とその一言で。

その原因をつきつめてみれば、つまりは僕の中にあるんだ。

美沙のことなら、何でもわかつている気になっていた。美沙が、あまりにも素直に、ありのままに、笑顔を見せてくれたから。

だから僕は、それに安心しきってしまっていたんじゃないだろうか。美沙は僕に、心の内を全部見せてくれているんだと。

相手に全部を見せる、なんて。冷静に考えれば、そんなことはあり得るはずがないのに。

心の中で自己嫌悪していると、ふと背後から肩に手をぽん、と置かれて。

振り返ると、その手の主は、いつも通り余裕な表情の先輩だった。先輩がやんわりとほほ笑みながら口をひらく。

「拓斗、少し落ち着いたら？ らしくないなあ、そんなに慌てて」「ああ……そうですね」

確かに、と思いつつ、僕は小さくため息をつき、そして苦笑する。すっかり美沙のことを見れていなかった。目を離していた僕が悪い。

初めてできた妹。日に日に慣れて、戸惑いは薄れてきても、やっぱりそう簡単に上手くなっていなくて。

僕も一応大学生だ。友達との付き合いもあるし、サークルもバイ

トもある。

毎日美沙にかまっていられるほどに余裕があるわけじゃなかったけど、それでも美沙のためなら時間を作ってやりたいと思った。笑顔にしてやりたいと思っていた。

誰かのために、こんなにも何かをしてやりたい、と思ったのは初めてかもしれない。それほどに、美沙の笑顔は大きい。

でも僕は自分で思っていたよりも不器用で、知らず知らずのうちに美沙を傷付けていたこともあったかもしれない。

「手分けして探そう。見つけたらお互いに連絡を」

僕は先輩と真央ちゃんに向かってそう提案した。

美沙がケータイに出ない以上、そうするのが最良の選択だと思った。

連絡の取れる真央ちゃんと先輩なら、電話一本ですぐに合流できる。

真剣な目をした真央ちゃんと、やっぱり余裕を失わない先輩がそれぞれに頷いて。

そして僕たちは一旦、それぞれ別の方向を探しにかかった。

まだ、時間はたくさんある。僕と美沙は家族だから。はじめは上手くいかなくても、やり直せるはずだ。

今度はちゃんと美沙自身を、見てやれるように。

## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔8〕（後書き）

またも更新遅れて申し訳ないです。

仕事がなかなかハードでして、最近特に、本当に忙しく……読者様を不安にさせてしまったようで、もうなんとお詫びしていいのか。ですが間が開いても、途中で更新を止めるということは絶対にしないつもりですので、今後も気長に待つて頂けたらと、わがままなことを思ってみたりしております。

10月になれば、更新する余裕も出てきそうです。

## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔9〕

にぎやかな遊園地。華やかな雰囲気。楽しそうに笑いながら過ぎていく人たち。

そんな中、ひとり場違いな私は、ベンチに座って何をするでもなくぼんやりとしていた。

「私……何やってるんだろう」

ぼつんとつぶやいた言葉に、もちろん返答はない。結局今の私が何を言っても、独り言に終わってしまう。

膝の上には、自分で買ったお土産用に包装されたチョコレートが5つ。

でも、これは誰かにあげるために買ったんじゃない。あくまで、今の自分が食べるために買ったのだ。

可愛いキャラクターもののチョコレート。なけなしのお小遣いはなくなりかけている。

でも何のためらいもなく、私はバリバリと可愛い包装紙を破り、箱のふたを開けて。その中から一個を取り出す。

「やけ食い……なんちゃって」

またひとりごちて、ふふっと自分で笑ってみるけど、それはすぐにまた虚しさ変わった。



逃げてばかり、弱い私。結局、いつもそうだ。同じことを繰り返して。

亜子さんみたいに、強かったらよかったのに。そしたらお兄ちゃんが好きだって、胸を張れたかもしれないのに。

口に入れたチョコレートの苦さは、私の胸をさらに切なくさせるだけに終わった。

そしてそれを嚙んだら、中に何かとろりとしたあまり美味しくないペースト状の何かが入っていて、私は顔をしかめる。

美味しいと思っていたはずが、全く美味しくなかったチョコレート。

なんだかそれにまで馬鹿にされた気分で、私はせつつくようにして次々と美味しくないチョコレートを口に入れ続けた。

そうして一心不乱に食べ続けて、5つめの箱も半分開けてしまった頃、不意にしゃっくりが出た。

さっきまで悲壮感に埋め尽くされていたのに、今はなんだか頬も火照って、だんだんと良い気分になりつつある。

わけもなく笑いたいような変な感覚に襲われながら、ペースを落とすにつつチョコレートを食べ続けていると、突然ケータイが鳴った。ディスプレイに表示された名前は、真央ちゃんだった。私は深く考えることなく、電話に出た。

「もしもし？」

『美沙ちゃん？ 今どこに居るの？』

しゃっくりまじりで妙なテンションの私の声とは対照的に、真央ちゃんの声は切羽詰まっているみたいだった。

私はまた深く考えず次の言葉を発する。

「今？　今ねえ、玄関の、お土産屋さんの前のベンチ！」

テンション変わらず、明るい声のトーンで真央ちゃんに正直に答えてみた。

すると真央ちゃんは『わかった、すぐ近くに居るからすぐ行く！』とだけ言ってすぐに電話を切った。

一方的に切られた電話をしばらく耳にあてたまま、ツー、ツーという音を何度か聞き。

やっと反応した私も、ケータイを折りたたみ、またマイペースにチョコレートを食べるのを再開する。

そして5箱目も食べ終わったとき、「美沙ちゃん！」と誰かに名前を呼ばれた。

振り向いてみれば、そこにいたのはさっき電話した真央ちゃん。真央ちゃんは私の前まで走ってきた。

「何してたの、心配したんだよ！　美沙ちゃんが突然いなくな」「真央ちゃん！」

真央ちゃんの言葉を途中でさえぎって、私は思いっきり立ち上がり、真央ちゃんにぎゅっと抱きついた。

自分でもよくわからない行動だったけど、とにかく誰かにくっついてじゃれたい気分だった。

瞬間、さっきまで切迫していた真央ちゃんの表情が、きょとんとしたものに変わった。

「……どしたの美沙ちゃん」

やや引き気味の真央ちゃんの声。でも私はさつきから堪えていた笑いこらえられなくなりつつあった。

さつき通った通行人の人。その人はおじさんと言ってもいいくらいの年齢のくせに、猫耳をつけていたのだ。

遊園地だからそういうのも売ってるし、別に変なことじゃないんだけど、それでもあのアンバランスさがどうしてもおかしかった。

「あはは！ あかね、さつきね……、あは、あははは！」

あまりのおかしさに笑いが止まらず、言葉がうまく出ない。代わりに、笑い過ぎたせいで涙が出てくる。

とにかく私は抱きついた真央ちゃんの体をゆすりながら、笑い続けていた。その時。

「……美沙！」

聞き慣れた、丁度いい低さの心地良い声に名前を呼ばれて、私はその声のした方に視線をやった。

走ってきたのか、息を切らして。そこにいたのはやっぱり、大好きなお兄ちゃんだった。

## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔10〕

美沙の居場所を知ったのは、真央ちゃんからのメールのおかげだった。美沙は玄関近くにいらっしゃるらしい。

玄関付近を捜していた真央ちゃんと、中心を探していた僕、奥の方を探していた先輩。

無駄に広いこの遊園地。先輩が合流するのは、少し先になりそう  
だ。

とにかく美沙が見つかったことに安堵しながら、僕は気の急くまま走って告げられた場所に向かう。

結構な距離を走って、やっと美沙を見つけた僕は、息も上がったまま思わずその名前を呼んでいた。

「……美沙！」

僕の声に反応して、美沙が僕を振り向いた。僕を認識した途端、美沙の表情がぱっと明るくなる。

それに面食らいながらも、美沙たちの前まで歩いて、すぐに、僕の頭の上に疑問符が飛んだ。

冷静になってその場をよく眺めてみると、なぜか美沙が真央ちゃんに抱きついてるのだ。

抱きつかれた真央ちゃんといえば、目線で僕に“助けてくれ”と訴えている。

もつと怒るなり拗ねるなりした美沙との、深刻な再会の場面を予想していたのだ。

けれど今日の前に居る美沙は、緩みきった顔でにこにこしている。瞬時に、嫌な予感が頭をよぎった。

美沙の無駄に楽しげな目と、赤い頬。こんな美沙を、以前にも見たことがある。

「おにーちゃん！」

美沙が舌足らずな声で大きく僕を呼んだかと思うと、真央ちゃんから体を離し、今度は思いっきり僕に抱きついてきた。

通行人の格好の見世物だ。予想通りの展開に、僕は頭を痛める。

猫のようにじゃれてくる美沙に抱きつかれたまま、僕は美沙がこんなになってしまった原因を探してみる。

すると美沙が座っていたと思われるベンチの上に、空になった菓子箱を何個も見つけた。

それですべてを悟った僕は小さくため息をつく。アルコール入りのチョコレートだったらしい。

表紙に大きく書いてあるのに、美沙は気付かなかったのだろうか。

そのくらいで酔うなんて普通に考えればありえないが、あれだけの量だし、美沙ならそれもありそうで妙に納得してしまった。

そんな僕の内心も知るはずのない美沙は、やがて僕に抱きついたまま肩をふるわせ始めた。

一瞬泣いているのかと思ったが、上機嫌の美沙にはそんなことはありえなかったらしい。

良く見ると、ただ笑いかみ殺しているだけのようだった。僕の頭痛が増していく。

前に美沙が酔った時に学んだことなのだ。これ以上にないくらいに笑い上戸になる美沙。

「お兄ちゃん！ あのね、さっきすっごいおかしくてね！ ネ、ネコ耳のね！ あははは！」

そんなことを言つて、美沙はとうとうこらえられなくなったのか、大笑いを始めた。

ネコ耳、なんて大きな声で叫んで笑うから、通行人のネコ耳を付けた女の人にぎろりと睨まれてしまった。

……勘弁してくれ。

「ほら、美沙。とにかく落ち着いて」

僕はとにかく、僕にしがみついて笑い続ける美沙をあやす。

すると、それまで僕と美沙の様子を黙って見守っていた真央ちゃんが、突然吹きだした。

ぎよっとして僕は真央ちゃんを見る。すると真央ちゃんまで大笑いを始めてしまった。

2人に大笑いをされてしまつて、僕たち3人はまるで遊園地から浮いてしまっているかのように目立っている。

「……真央ちゃんまで、どうしたの」

恐る恐る、僕は美沙越しに真央ちゃんに問いかけてみる。

するとやや笑いの落ち着いた様子の真央ちゃんが、まだ含み笑い

を続けながら言葉を返してきた。

「だって！ 美沙ちゃんてば、さっきまで私に抱きついてたくせに、拓斗さん見つけた途端、飛びついちゃって。やっぱり、拓斗さんには勝てないや」

真央ちゃんが言い終わって見ても、美沙の笑いは一向に収まらない。

真央ちゃんが僕にひつついた美沙の頭をよしよしと撫でると、美沙が顔だけ真央ちゃんの方を向けた。

「真央ちゃん！ あははは！」

「うんうん、おかしいねえ」

真央ちゃんは上手いこと美沙に相槌を打っている。

同じ年の真央ちゃんにまであやされている美沙。本当にこの2人が同じ年なのかも怪しくなってくる。

「……お姉ちゃんも、拓斗さんも。気持ちを隠すのが上手な、大人なんですよね」

美沙の猫っ毛をなでながら、真央ちゃんがふとそんな言葉を洩らした。

そして、美沙の方にやっていた視線を、今度は僕に向けてきた。

「でも見てれば、すぐわかるものなんですよ？」

真央ちゃんが何を言おうとしているのかわからなかったけれど、あまりに大人びたまなざしを向けられ、僕は驚いていた。

美沙にもこうして驚かされることがある。子供という言葉でひと

くくりにできるほど、子供は子供じゃないのだろう。

僕が何も言えずにいると、真央ちゃんはまた言葉を続ける。

「隠してるのか、ただ隠れてるだけなのか……私にはわからないけど。でも気持ちって、そんなに簡単じゃないと思います」

真央ちゃんの言葉の意味を探ろうとしながら、僕が何か言葉を返そうと口をひらきかけた時。

ふと、真央ちゃんのケータイ電話が鳴った。

電話に出た真央ちゃんの言葉を聞いていると、どうやら電話の相手は先輩らしかった。

会話を終えてケータイを折りたたむと、慌てたように真央ちゃんが言った。

「拓斗さん、お姉ちゃんがここの場所良くわからないって言うるので、迎えに行ってくださいね」

言い終わると同時に、真央ちゃんは遊園地の奥の方に駆けていく。美沙と2人とり残された僕の心の中、さっきの真央ちゃんの言葉が、まだ消えずに残っていた。



## 第7話 隠れた想い、隠した想い〔11〕

しばらくしてから、美沙の笑いはやつと落ち着いたようだった。それでも、相変わらず僕にしがみついたまま離れない美沙。先輩達からの連絡もなく、合流の兆しはまだ見えない。

とにかくこんな状態で立っているほど目立つことはないのです、僕はとりあえず美沙を離れさせようとしてみる。

「美沙、そのベンチに座ろうか？」

「んー……」

いつかと同じように、僕の胸に顔を押し付けた美沙が、くぐもった声で生返事をした。

声のトーンが若干落ちている。美沙がこんな状態になるのは、だいたい眠い時だと決まっている。

あれだけ笑えば消耗もしたんだろう。

美沙はどうも、立ったままでも眠れそうなほどの雰囲気だ。どっちにしろ座らせておいた方がいいだろう。

でも無理やり引き剥がすわけにもいかないのです、僕は再度美沙に声をかけてみることにした。

「美沙、離れないと座れないよ？」

僕がそう言ってみても、美沙は離れる気配がない。

それどころか、よりいっそうぎゅっと強く僕にしがみ付いて、そして頭を何度も横に振った。

まるで駄々をこねる幼稚園児。だけど結局美沙に弱い僕は、それを微笑ましくも思ってしまうのだ。

「……どうしたの？」

くす、と笑いながら僕が問いかけてみると、美沙がやつと顔を上げた。

そしてその美沙の顔を見てみて、僕は少しの驚きを感じた。美沙の瞳には涙が浮かんでいた。

「……好きだよお……」

くしゃつと顔を歪めた美沙は、僕の目をまっすぐ見ながらぼつんと小さな声でそう言っ、そのまま目を閉じた。

美沙の涙がひとすじ、その頬に伝わっていくのを見ながら、僕の心の奥に得体の知れない何かの感情が走る。

美沙はいつも、僕に好きだと言って笑う。それは特別な意味じゃなく、家族として、兄として。

そんな美沙を微笑ましく思っていたし、僕にとっても家族で。でも、さっきの美沙の表情が、何かを僕に訴えてくるようだった。

目を閉じたまま眠りに落ちていこうとする美沙を、とりあえずベシに落ちつけて、そして僕も隣に並んで座った。

すると、とん、と肩に小さな衝撃。隣を見てみると、美沙が僕の肩に寄りかかって寝息を立て始めた。

得体の知れない感情は増していくばかりで。今まで、こんな感情を感じたことなんてなかった。

どうも、さっきの美沙の一言で、僕は完全に自分のペースを失っ

てしまったようだ。

“隠してるのか、ただ隠れてるだけなのか……私にはわからないけど。でも気持ちって、そんなに簡単じゃないと思います”

真央ちゃんの意味深な言葉を、僕がもう一度思い出した時。

「拓斗さん、美沙ちゃん！」

絶妙なタイミングで、真央ちゃんの声が飛んできた。見てみると、真央ちゃんと先輩がこっちに向かってくるところだった。

真央ちゃんと一緒に、僕と美沙の前まで来た先輩が、小さく笑いながら言った。

「ごめんね、ここがどうしてもわからなくて。……ああ、美沙ちゃん、寝ちゃったんだね」

先輩は美沙の寝顔をのぞき込むと、少し困ったように笑い、言葉を続ける。

「素直に甘えて、素直に笑って。……少し、うらやましいかな」

先輩は美沙に視線を向けたまま、やっと聞きとれるくらいの声の大きさで、呟くような言い方をした。

先輩がそんなことを言うのが意外で、僕が先輩を見てみると、先輩はいつものごとく余裕な微笑みを浮かべた。

でも先輩のその瞳は、今の僕と同じように、少しの戸惑いを抱えているようにも見えた。



## 第8話 ためらい、予感〔1〕

いつの間にか、私は眠っていたらしい。どうして眠っていたのか、思い出そうとしても思い出せない。

今わかることは、眠りから目覚めると、いつの間にか私は家にたどり着いていたってことで。

遊園地でのプールとか、ジェットコースターとか、私の楽しい計画は全部計画のまま終わってしまった。

いつも通りの私たちの家で、いつも通り居間のテレビの前に2人遊園地のにぎやかな雰囲気から、当り前な光景の中に戻ってきた私たち。真央ちゃん達も帰ってしまった。

眠りこんでいた自分も悪いんだけど、どうして起こしてくれなかったのって、私はお兄ちゃんに詰め寄った。

だけどもめんと言いながら、お兄ちゃんがいつもより優しい目をするから、私はそれ以上何も言えなくなった。

大好き！お兄ちゃん      〔第8話 ためらい、予感〕

懐かしい声を聞いた時、ずっと昔から知ってる笑顔を見たとき、同時に苦い思い出がよみがえった。

家族を失う悲しさの中で、いつも隣で支えてくれた人がいた。

でもその子のことを思い出すとき、どうしようもなく辛い気持ちも一緒に思い出しちゃうのが怖くて。

お兄ちゃんと家族になってからは、考えないようにしていたのかもしれないかった。

だからこの再会が、私の一番恐れている予感に、近づいて行きそうで　怖かった。

過去の夢を見た。あんまり楽しい夢じゃなくて、急いで目を覚まして、そして現実にはっとするような夢。

“すぐに壊れてしまうなら、それは本物じゃなかったんだよ”

いつか受けた言葉は、夢の中でも鮮明で。あの時の衝撃は、思い出すたび私の心に重くのしかかる。

お兄ちゃんと家族になってからというもの、穏やかな日常が続いていた。

何事もなく、だんだん不安も薄れて。お兄ちゃんの隣で過ごす日々は、幸せそのもの。

1日1日が、すごく大切だって思ってた。

それは、隣にお兄ちゃんがいるこの日常が、決して当たり前な日常じゃないって知ってたから。

だから、あんな夢を見たのかもしれない。

「……美沙。どうしたの？」

朝の挨拶をしてからもずっと変わらない、冴えない表情の私をさすがに見かねたのか。

テーブルの向かい側に座って一緒に朝ごはんを食べているお兄ちゃん、心配そうにこっちを見た。

「ううん、ちょっと嫌な夢見て……まだ、現実感がなくて」

作り笑った私は、卵焼きをつつきながら言った。

夢の中で、私は泣いていた。こうしてたまたに離婚のときの夢を見るけど、昨日のは本当にリアルで。

特に印象に焼きついているのは、幼馴染のマキちゃんのこと。

いつもマキちゃんのことまでは夢に出てこないし、思い出したのは久しぶりだった。

離婚のとき、私が落ち込んだるといつも励ましてくれた親友みたいな人だ。

こっちに転校してから、メールのやり取りすらあんまりしてないけど、どうしてるかな。

ママは離婚何度もしてたけど、近くの人とが多かったから、引越しはしたけど学校は転校しなくてよかった。

そう言う意味で、今回は私を転校させてでも、どうしても再婚したいって言うから、今度こそ上手くいくと思ってたのにな。

そんなことを思うと、また少し気分が落ち込んでいく。

するとそんな私の様子を見たお兄ちゃんが、くす、と穏やかな瞳をして小さく笑った。

「現実感がなくても、ちゃんと現実だよ。大丈夫。……嫌な夢とか見た後ってさ。その分、現実の大切さに気付くよね」

お兄ちゃんの優しい声のトーンが、ずとんと私の胸に落ちて行つて。なんだか、安心した。

どんなに私が思い悩んでも、お兄ちゃんは言葉一つで簡単に救いだしてくれるから。

だからやっぱり大好きなんだ。ずっと近くにいたいなっと思う。

「ねえ、お兄ちゃん。今日もどっか連れてって！ その辺に買い物、とかでもいいから」

さつきよりも自然に笑顔ができるようになって、少し明るい気分になった私はさっそくねだってみる。

お兄ちゃんはいつものように、しょうがないな、と言って笑ってくれた。

そうして朝ごはんを終えて、2人で片づけを済ませた台所で、お兄ちゃんは少し時間が欲しいと言ってきた。

「バイトの準備済ませてくるから。今日は夜にバイト入ってるから、それまでだったら付き合えるよ」

準備なんてあんまりしたくないけどね、と続けて、お兄ちゃんはすこし困ったように笑った。

お兄ちゃんは塾の講師のバイトをしている。準備っていうのは、たぶん予習のことだ。

もう忘れかけてるから、なんて言って、お兄ちゃんはいつもバイトの前は予習して行っている。



夏休みって言っても、こーやってバイトがあるんだしまったくの暇ってわけじゃないんだろうな。

そんなことを思うと、無償に言いたくなった言葉がそのまま口から出ていった。

「……いつもありがとう。私のわがまま、聞いてくれて」

私の改まったような言葉に、お兄ちゃんは一瞬ひよつとしたような顔をしたけど、すぐにその表情を微笑みに変える。

何か言葉を返してくるわけでもなく、お兄ちゃんはとても優しい目をしていた。

瞬間、私は言葉に詰まる。最近、お兄ちゃんは時々こんな表情を見せるようになった。

いつからだろうって何度か考えてみたんだけど、いつも最終的には、遊園地に行った後くらいからだって答えに行きつく。

私たち2人が家族に近づいたから、だからお兄ちゃんも変わってきてるのかな、って思ってみたりするけど。

でも、それだけで納得してしまえるような感じでもなくて。正直、戸惑ってしまう。

そんな私の内心なんて知らないお兄ちゃんの大きな手が伸びて、ぽすん、と私の頭の上に乗っけられた。

「待っててね」

それだけ言って、お兄ちゃんはそのまま2階の部屋に向かっていく。

その後ろ姿を、私は何となく目がそらせないまま、じっと見つめてみる。気づけば、頬が少し熱くなっていた。

## 第8話 ためらい、予感「1」（後書き）

やっと更新できましたー^^

この一か月ほど、書こうとしては失敗してを繰り返して苦しんでおりました。

更新を待ってくれた方は、まだいて下さるのかわかりませんが、本当に申し訳ないです。

更新止まってる間も拍手とか投票とかして下さった方々がいて、すごく励まされてました！

ありがとうございます。今後も頑張ります！

## 第8話 ためらい、予感〔2〕

修学旅行の前日の、ベットに入って寝ようとしてときの気分みたい。

楽しいことを待つてる時間っていうのは、どこか上の空で、何も手につかなかつたりする。

お兄ちゃんと出かけるのはもう何度目かわからないけど、それでも毎回、こんなにも楽しい気分になれる。

私はお兄ちゃんを待ちつつ、居間で1人でテレビなんかを見てたりするんだけど、どうしても集中できずにいた。

そうしていると、意味もなくいろんなことを考える。

なんとなく手に取ったケータイをいじりだすと、ふと忘れていたことを思い出した。

音沙汰ないメール。ママのこと。

思い出したとたん急に不安になってしまった私は、慌てて以前やり取りしたメール履歴を捜し出した。

履歴のメールに表示された日付から、もう何日も時間がたってる。楽しいばかりの毎日で忘れかけてたけど。

改めて気づいてみると、心の隅に隠れていた不安が突然顔を出してしまったみたいで。

その時「美沙、」と背後から飛んできたお兄ちゃんの声に、私は大げさなくらいびくりとして応えてしまった。

振り向いてみると、お兄ちゃんも私のリアクションが予想外だったのか、少しきょとんとしたような顔をしていた。

「……どうしたの？」

不思議そうにそう言って、でも結局は微笑んでくれるお兄ちゃんを見たら、なんだか少し安心できた。

「うっん、なんでもない。行こうよ！」

気を取り直した私は、いつものように笑顔でお兄ちゃんとの兄妹デートを楽しむことにした。

大丈夫、だよ。こうやって心配したって意味はないんだから。

私が笑顔になると、お兄ちゃんも一緒に笑ってくれる。ささいなことだけど、お兄ちゃんとのこんなやり取りがすごく好きだ。

不安から一転、なんだかあったかい気持ちになって、私はお兄ちゃんと家を出る。家の玄関を出て、隣の駐車場に移動する。

今日は私の言ったとおりに買い物になったけど、どこに連れて行ってくれるのかな。そんな風に心を躍らせていた、その時。

ふいに鳴り始めた、私のケータイ。いつもみたいに、真央ちゃんかなって、そんな軽い気持ちでケータイを開いて。

そして、私は息を呑んだ。表示された、なつかしい番号と名前。

忘れたわけじゃないけど、とても大切な人だけど、忘れたい思い出もこの人と一緒にある。

思わずケータイを握ったまま立ち止まると、一緒に歩いていたお兄ちゃんも数歩進んでから立ち止まり、私を振り返った。

お兄ちゃんがまた不思議そうな顔をして私を見ている。  
その眼差しに見守られるようにして、一瞬のためらいの後、私は  
通話ボタンを押した。

「……………もしもし？」  
『美沙？』

恐る恐る発した私の声に、すぐに返ってきたのは、お兄ちゃんと  
はまた違う落ち着きを持った、少し低めの声。  
私が何も言葉を返せずにいると、受話器の向こうの声がまた続け  
る。

『会いにきた。……………住所、聞いてたし』  
「そっか……………」

私はやっとそれだけ返した。私の様子を、お兄ちゃんが隣で見守  
ってる。

なつかしい人と、新しくできた家族のお兄ちゃんの隣で話してい  
る。なんだか、変な感覚だった。

『……………あ。オマエ見つけたから、切るよ』

ふと受話器の向こうの声がそんなことを言い、聞き返す間もなく  
電話は切れた。

戸惑う間もなく、通りの向こう側から、こっちに向かって歩いて  
くる人物の姿が目に入った。

隣で支えてくれてたのはほんの少し前のことなのに、なんだか大  
昔のことみたいに感じる。

それはきつと、お兄ちゃんと過ごす日々が、私の中ですごく大きいんだって証拠。

やっと私たちの前まで歩いてきたその人物に、私は少しためらいがちになりながらも、“いつものように”呼びかけてみる。

「……マキちゃん」

「マキちゃんって呼ぶなって言ってるだろ。女じゃないんだから。オレには、五条タマキって男らしい名前があるんだよ」

返ってくる言葉は、やっぱり予想通りで。なつかしいやり取り。なつかしい笑顔。

幼馴染、ふたつ年上の彼は、あまり変わっていなかった。

“すぐに壊れてしまうなら、それは本物じゃなかったんだよ”

夢に見たばかりの過去の記憶が、私を支配し始めていた。

## 第8話 ためらい、予感〔3〕

思いもよらない、久しぶりの再会だった。だから何を話せばいいのか、どんな顔をすればいいのかにも戸惑って。

私は、なんとか言葉を探し出そうとしながらも、そのまま黙っていた。

私とお兄ちゃんとマキちゃんと。家の前で、3人並んで。

傍から見たら、変な光景なのかもしれないな、なんて私は呑気にもそんなことを思っていた。

再会した幼馴染の2人と、その家族。3人中、一番に口を開いたのは、意外にもお兄ちゃんだった。

「美沙、知り合い？」

お兄ちゃんが少し首をかしげつつ私に問いかけてきた。そうだ、こんな状況。

お兄ちゃんにとってはわけがわからないよね。私はとりあえずお兄ちゃんに説明してあげることにした。

「あ、うん。マキちゃんって言って、私の幼馴染なの」  
「だーかーらー、タマキだって」

間髪入れず、少し笑いながら、マキちゃんがわざとらしくも項垂れたような声をあげる。

こういうとこ、やっぱり変わってない。私は少し和みながらも、



今度はお兄ちゃんをマキちゃんに紹介しようとした。

だけど私が口を開くその前に、マキちゃんの視線がお兄ちゃんを向いた。

「美沙の兄貴って、オマエ？」

初対面なのに、あまりに偉そうなマキちゃんの物言いに、私の方があせった。

お兄ちゃん、気を悪くしないといいけど。でも私のそんな心配は余計なものだったみたいで。

「うん。そうだけど……」

お兄ちゃんは特に怒った様子もなく、穏やかなままマキちゃんの問いかけにそう答えた。

「ふーん……」

なのにマキちゃんときたら、含みのある言い方でそれだけ言っただけ黙ってしまった。

なぜか陰悪な雰囲気だった。というよりも、マキちゃんが陰悪な雰囲気を作り出している。

昔から生意気だっって言われて、上級生とケンカしてばかりいたマキちゃん。まだ変わってないみたいだ。

「ね、ねえマキちゃん。元気にしてた？　ここの住所わかりにくくなかった？　今日帰るの！？」

気まずい空気をなんとかしたくて、私は一気にまくし立てた。直後、後悔する。

わざとらしすぎたみたいだ。空気が余計に気まづくなっただけ。上手くやれない自分に自己嫌悪する。

「近くに親せきの家があるから、しばらくそっちに泊めて貰えることになってる」

マキちゃんは複数の私の質問の中の、最後の一つにだけ答えた。そしてお兄ちゃんと私を交互に見て、マキちゃんはまた言葉を続ける。

「どっか出るところだったんだろ？ とりあえず会えたし、今は帰るよ」

確かに私は出かける格好で、お兄ちゃんは車のキー持ってるし、出かけようとしてるのは見ればわかることなんだけど。ここまで会いに来てくれた幼馴染をこのまま帰してしまうなんて、やっぱりちょっとひどいのかな。

どう気を使っているのかわからずに、私は困り顔になってしまふ。するとそんな私に気づいたのか、隣のお兄ちゃんがマキちゃんに声をかけて助け船を出してくれた。

「別に用事あってわけでもないし。せつかく会いに来てくれたんだから、美沙と少し話していきなよ」

「いいよ。急に来たオレが悪いわけだし」

だけどマキちゃんは、無愛想にお兄ちゃんの申し出を断ってしまった。

そしてまた私を向いたマキちゃんが、少し真剣な目をした。昔の記憶と重なったような錯覚を覚える。

「また来るから。オレ、美沙の中の過去の人間には、なりたくないんだ」

マキちゃんはそれだけ言うと、そのまま私たちに背を向けて元来た道を歩いていく。

“過去の人間”、なんて。マキちゃんがどんな意味でそれを言ったのかわからないけど。

その言葉がどうしても胸に引っかかってしまった私は、思わず放心してしまった。

だって、それってすごく怖い言葉だ。もうずっと長いこと、私が抱えてる不安をそのまま表したみたいな。

なくしていった家族、大切な人たちの心の中で。私っていう存在ももう、きつと

結局その後、私とお兄ちゃんは出かけることになったんだけど、どうしても上の空で。

そんな私に、お兄ちゃんが気づかないわけもなく。

「……浮かない顔だね」

少し困ったような笑いを浮かべたお兄ちゃんに、そんなことを言われてしまって、私は焦ってしまった。

せっかく連れてきてくれたのに、こんなじゃ最悪だ。私はあわててできるだけ自然な笑顔を作って見せた。

「そんなことないよ？　すごく楽しい！」

私はそう言ってみるんだけど、即席の笑顔ではやっぱりだませない

かったみたいで。お兄ちゃんは表情を変えない。  
くしゃ、とお兄ちゃんが私の前髪をかきあげて、手のひらで額に触れる。

触れた場所を中心に、心の奥から湧き上がってくるような、この  
どうしようもない感情。

「嘘つき。不安で仕方ないって顔してる」

お兄ちゃんが小さくくすりと笑う。すっかりばれていた。  
これ以上言い訳して、いくらうわべを取り繕ってみても、きっと  
お兄ちゃんはだませないだろう。

「何があつたのか知らないし、無理に聞くつもりもないけど。我慢  
するのは、美沙の悪い癖かな」

お兄ちゃんはそれだけ言うてから、もうそれ以上その話題には触  
れなかった。あくまでふつうに接してくれる。

やっぱり優しい。こんな優しいさの中にいるから、幸せに慣れちゃ  
ったのかな。

そうして家に帰ってから、お兄ちゃんはバイトに行った。ひとり  
になった部屋は、やっぱりあまり好きじゃない。

お兄ちゃんは帰ってきてくれる。最近はそれが当たり前の日々で、  
だからひとりでも平気で。不安なんて、忘れてたのに。

今日は夢も見たし、突然マキちゃんに会ったことで、ちょっと動  
揺して思い出しちゃったのかもしれない。

今日はもう寝てしまおう。朝が来たらお兄ちゃんが居るんだ  
から。

時計はまだ6時も回ってないけど、気を取り直すために、私は寝る準備にとりかかることにした。

まずは、晩ご飯を作ることから。今日はお兄ちゃんの好きなものをいっぱい作ろう。

少し気分が回復した私は、いそいそと台所へ向かった。その時、ケータイが鳴った。

着信音はメールのものだ。すぐに思い当たった。きっとマキちゃんだ。

あのまま追いつきたいな形になっちゃったから、とりあえず謝らないと。

そう思っ、私は特に深く考えず、送り主も見ずにメールを開いた。すぐに表示される本文。

『ごめんね。やっぱり、ダメかもしれない』

本文はそれだけだった。意味がわからなくて、私の頭の上に疑問符が飛ぶ。

そしてその受信メールをよく見てみたとき、私の心に言葉に言い表せないほどの、ものすごい衝撃が走った。

そのメールの送り主は、マキちゃんじゃなく、ママだった。

## 第8話 ためらい、予感〔4〕

慣れていたはずだし、覚悟だつてしてたはずだった。いつかこうなることは、わかりきってたはずだった。

だけど実際に、離婚という言葉が目の前に迫ってくるのを感じて。私はめまぐるしく揺れる自分の気持ちに、どうしようもなく混乱してしまっていた。

しばらくして足が疲れてきて。

そこでようやく、私は自分がケータイを持ったまま台所に突っ立っていたことに気がついた。

30分くらい、もしかしたらそれ以上、ずっと立ち続けてたみたいだ。私は何もできないまま、その場に座り込む。

考えないようにしようとしても、臆病になった私の心が、無意識のうちに昔の記憶を思い出してしまふ。

そして、マキちゃんの“過去の人間”という言葉。

離婚して、他人になって。いつか、お兄ちゃんの中からも、私の存在は、消えてしまふの……？

私がそんなことを思ったとき、ふと居間の壁掛け時計が音楽を鳴らし、私はびくりと肩を揺らす。

遠目に見た時計は、7時を告げている。お兄ちゃんが返ってくる時間が、近づいていた。

その時、私は急に怖くなった。

手を離したくなかった。以前の離婚のときよりもずっと強い気持ちで、手を離したくなかった。

信じたい気持ち、ささやかに抵抗してる。

大切なお兄ちゃんとの思い出、お兄ちゃんと過ごした日々。お兄ちゃんがくれた言葉。

こんな日々は簡単にはなくならない、ずっと続くんだって。そう信じていたい自分。

だけど離婚を何度も経験して、何度も傷ついてしまった私の心は、すべて信じ切ってしまうほど単純じゃなくて。

今私の心を支配するのは、お兄ちゃんを失う時に訪れるだろう心の痛みから、逃げようとする弱い気持ちだけだった。

どんなになくしたくないんだって訴えても、いずれ遠い人になってしまうのなら。

どうしようもなく辛い気持ち、その後に残っているのなら。

それなら　いつそ、自分から手を離してしまえば。

そしたら楽なのかな。もうあの時みたいに、失った時みたいに、傷付かないで済むのかな……。

その時ふいに、玄関のベルが鳴り響いた。私の心臓が大きく鳴って反応する。

きっとお兄ちゃんだ。鍵を忘れていったときとか、お兄ちゃんはこうしてベルを鳴らす。

そう思ったけど、だからこそ私はますますその場から動けなくな

もし今、お兄ちゃんの顔を見てしまったら。きっと私はダメにな  
ってしまいそうな気がした。

一呼吸おいて、ベルが再び鳴らされた。どうしよう、出ないとお  
兄ちゃんが家に入れない。

でも、どうしようもなかった。ただじわじわと鼓動の速度を増す  
自分の心臓の鼓動が、嫌な感じに頭に響く。

やがて私のケータイが震えだした。お兄ちゃんがかけてきてるの  
かもしれない。

恐る恐る、私はケータイを手取る。だけど、開いた画面に表示  
されていたのは、予想と違った名前だった。

とまどいながらも通話ボタンを押すと、すぐになじみのある声が  
飛んでくる。

『美沙、家にいないの？ 玄関前まで来てるんだけど』

ベルを鳴らしていたのは、お兄ちゃんじゃなくマキちゃんだった  
らしい。

それに安心して、冷静さをほんの少し取り戻した私は、動揺から  
抜け出してなんとか言葉を返す。

「うっん、家にいるけど……」

『じゃあ開けるよ。まさかまた、追いつもり？』

受話器の向こうのマキちゃんは、少しいらついているのか、それ  
が声にも出ていた。

居留守だとばらしてしまったようなものだから、しかたないのか  
もしれないけど。



どっちにしても今は、誰かと話せそうな気分じゃないし、誰とも会いたくないのに。

だけど家の前まで来ている人を無視するわけにもいなくて、私は仕方なく玄関まで出てドアを開けた。

ドアの前に立っていたマキちゃんは、私を見るとやっと機嫌を直したのか、笑顔になった。

「ごめん、また来て。やっぱり兄貴抜きで2人で話したいじゃん？だから、タイミング見計らって……」

冗談ぽくそんなことを言いかけたマキちゃんは、そこで言葉を切った。

そして真顔になって私の顔をまじまじと見てくるので、私は気まずい気分で思わず顔を逸らす。

たぶん、私は今ひどい顔をしているのだ。

ショックで打ちのめされた今の私には、表面を取り繕う余裕も元気も残ってなかったから。

「美沙。まさか、また……」

そう言いかけて、マキちゃんはまた言葉を切った。察しのいいマキちゃん。気づかれてしまったんだろう。

しばらくの沈黙の後、マキちゃんがぶっきらぼうな声でぽつんと言った。

「我慢しないで、泣きたいときは泣けば」

照れ隠しの中の優しさ。つらい時、いつも支えてくれた声が、私の心の奥まで届いた。

私　泣きたいのかな。もうそれすらよくわからなかったけど。  
なぜか、マキちゃんと言葉を合図みたいにして、私の目から自然  
に涙が出ていった。

「マキちゃん。私、もう何も考えたくないよ……」

私は涙ながらにマキちゃんに訴える。マキちゃんにこんなこと言  
ったって、どうしようもないのに。

でも、苦しかった。ずっと誰かに打ち明けたかった。  
お兄ちゃんへの気持ちが膨らんでいくたびに、同時に増していっ  
た、抱えきれないほどに大きい不安のこと。

すると突然、マキちゃんが私の腕を強引に引いて、外に連れ出し  
た。

あまりに突然で対応できず、私は靴を足に引っ掛けたままの状態  
で、ケータイ以外何も持たず家の外に出てきてしまった。

私は焦ってマキちゃんに問いかける。

「あの、マキちゃん？　どこ行くの？」

「出ていくんだよ。オレだって、もう前みたいな美沙は見たくない。  
また悲しむくらいなら、ここに居る必要なんてないだろ……」

迷いのないマキちゃんのその声は、少し怒っているみたいで。

怯んでしまった私は、そのままマキちゃんに手をひかれるまま連  
れていかれていた。

嫌だと言えば、マキちゃんは無理に連れていったりしないだろう。  
でも、このまま家にいれば、すぐにお兄ちゃんが帰ってくる。こ  
んな状態でお兄ちゃんと顔を合わせられる自信がなくて。

自分の中の弱さに負けた私は、お兄ちゃんから逃げだすことを選んだ。

## 第8話 ためらい、予感〔5〕

バイトなんかで家をあけてから、帰るときには、いつも美沙が玄関まで駆けてくる。

玄関のベルを押したわけでもないのに、気配を察してくるのか。

ドアを開けると美沙はいつもそこにいて、僕を迎えてくれる。

その表情はとても嬉しそうで、でも同時になんだかほっとしたような目をしていて。

二階から駆け降りてくるらしく、少し息を切らして玄関で僕を迎える美沙は、まるでなついた子犬か何かみたいだ。

不安な気持ちで待っていたんだろう。そう思わせる美沙の様子が、なんだか微笑ましかった。

だから最近是用事があるとき以外は、寄り道もせず、まっすぐ家に帰る癖がついていた。

僕の生活の中心に、美沙が居る。それはいつしか自然なことになっていて。

だからまさか、今日みたいな日が訪れるなんて、想像もしていなかった訳で。

バイトを終えて、美沙が待っているだろうと、急ぎ足で帰ってきた我が家。

時間はもう7時半を過ぎている。いつもより少し遅くなってしまった。

少しでも早く美沙を安心させてやろうと、僕は急いで家の鍵を開けようとした。

けど途中で、僕はいつもと勝手が違うことに気がついた。鍵が開いているのだ。

出るときは確かに鍵をして行っただのに。

「ただいま。美沙……？」

ドアを開けて、家の中に向かって呼びかけてみるけど、返事はない。いつもなら玄関で待っているはずなのに。

もしかしたら、夕飯の買い物にでも行ったのかもしれない。鍵もかけ忘れただけだろう。

そう自分に言い聞かせながら、でもなんとなく何も手につかないまま、僕は美沙を待った。

だけど待っても待っても、美沙が帰ってくる気配はなくて。時計は8時を回っていた。

いくらなんでも遅い。連絡もなしに美沙がいなくなったことなんて、今まで一度もなかったのだ。

痺れを切らして、僕は美沙のケータイに電話をかけた。すると、何回コールを鳴らしても反応がないではないか。

そこで僕は、予感として感じていた危機感を、現実のものとして認識した。

僕の心を一気に焦りが支配する。最近は何事もない。何かの事件に巻き込まれていたとしても不思議じゃない。

考えが悪い方にはかり向かっていくので、落ち着け、と何度も自分に言い聞かせる。

まだ決まったわけじゃない。とにかく探せるところは探してみな

ければ。

とりあえず冷静になって、僕は頭を働かせた。美沙の行きそうなところ。

このあたりでは真央ちゃんの所か……今日会ったあの少年のころだ。

どっちななんてわからないので、両方確かめるしかない。今、僕にわかるのは真央ちゃんの家だけだ。

切羽詰まったまま、僕はバイトのために着たスーツを着替える暇もなく、家を後にした。

真央ちゃんの家までは、そんなに遠くない。車で行けば5分もかからないほどの距離だ。

ほどなくして辿り着き、車から降りた僕は、すぐに真央ちゃんの家玄関前、ベルを鳴らした。

一度鳴らしてもなかなか出てこないの、再度鳴らす。

すると家の中から、聞き覚えのある声が、気だるげに返事をしながら近づいてくる気配がして。

空いたドアの向こうから顔を出したのは、予想外にもなじみのある人だった。

「拓斗……？」

真央ちゃんの家なのに、なぜかそこにいた伊藤先輩は、僕の姿を認識し名前を呟いた後、数回瞬きをした。

むこうにしてみても、僕が来るなんて予想外だったんだろう。先輩が少し首をかしげながら僕に問いかけてきた。

「どうしたの、突然」

「……先輩こそ、なんで真央ちゃんの家に？」

美沙が来ていないか早く聞いてみたかったが、突然来てそんなことを急に聞くのも気がひけて。

僕が問い返すと、先輩は少し微笑みながら素直に答えてくれた。

「あたしは、真央の両親が今日いないから、真央の世話にね。……それはいいから、拓斗のことでしょ？ そんな恰好で出てくるなんて、ただ事じゃなさそうだけど」

僕の様子を察した先輩がそう切り出してくれた。確かにこんなスーツ姿、バイト帰りだと言うことは明らかだ。

先輩の後押しを借りて、僕はためらいつつもようやく本題に入った。

「……こっちに美沙が、お邪魔してないかと思って。見つからないんです」

「え？ 来てないけど……、何かあったの？ ケンカでもした？」

先輩の答えと同時に、心配な気持ちがさらに増していく。ケンカでもしたなら話はわかるが、本当に突然だったのだ。

でも確かに、バイトに行く前、美沙の様子はどこかおかしかった。あの少年のことも気にかかる。

幼馴染なんだと、美沙は言った。だけど幼馴染との再会の場面にしては、雰囲気が固いと思った。

過去に何かあったんだろう。そう思わせるには十分な、あの2人の間に流れていた空気。

本当は、何があつたのか聞きたかつた。だけど、それをためらわせたもの。

踏み入れない領域。踏み込まれたくない、心の奥の部分。美沙は心に何か重いものを抱えている。

美沙のことを知つたつもりで、僕は何も知らないんだと思ひ知つて。家族と言つてみても、まだ遠い存在なのかもしれない。

そのことに気がついた時、美沙のことをもつと知りたいと思つた。

だから、今。僕は約束を守らないといけない。どんな時も、美沙を見つげ出すと言つたのだ。



## 第8話 ためらい、予感〔6〕

僕はあの少年のことから考えを戻して、再び頭を働かせた。

どう考えても、こっちに越してきたばかりの美沙に、ここ以外行くところがあるとは考えにくい。

あの少年と一緒に居るとも考えられるけど、ケータイが通じない理由が見つからない。

さっきも、車で信号待ちの間、美沙に電話をかけてみたが、さっぱり反応はなかった。

深刻になっていく僕をよそに、目の前の先輩は呑気に笑って言葉を続ける。

「でもさー、わざわざ家まで来なくても、メールでも電話でもして、確かめればよかったじゃない？」

「すいません、思いつかなくて……。とにかく、他を探してみます」

先輩に適当に答えてから、僕が引き返そうとすると、先輩が後ろから僕の腕を掴んだ。

急いでいたから正直迷惑だったが、手を振りほくこともできないので、僕は先輩を振り向いた。

先輩は困ったような、大人びた顔をして僕を見ながら、説得するかのようにゆっくりと言った。

「落ち着きなって。美沙ちゃんも小さな子供じゃないんだから、ちょっと出かけることくらいあるでしょ」

「でも、美沙は……」

探すあても何もないくせに、僕は先輩に反論する。先輩が小さく笑って僕の腕を離れた。

先輩の落ち着いた表情に、僕は冷静さに欠けている自分に気がついた。

自分を自覚し我に帰った僕の様子を見て、やっと安心したのか、先輩は少し笑みを深くして言った。

「必死なんだね。拓斗が困ってるなら助けてあげたいけど。拓斗を困らせてる原因が、あの子なら……」

先輩はそこで言葉を切って、伏し目がちになりながら、自分の耳もとのピアスに指先で触れた。

たまに、先輩のこんな仕草を見る。困ったときとか、気まずい時とかによく見る気がする。

声をかけづらい雰囲気の中、僕は先輩にためらいがちに声をかける。

「先輩……？」

「今日は、手伝ってあげられないの。……なんてね。言ったら、拓斗はもっと困るかなあ？」

意味深に言って、先輩はやっぱりいつものように軽い調子で微笑んだ。さっきの儚げな表情が嘘のように。

そしてそれ以上僕が何か言う前に、先輩は家の中を振り向いて、少し大きな声で呼びかけた。

「真央ー？」

先輩の声に反応して、すぐに2階の方から真央ちゃんの返事が返ってきた。

真央ちゃんも美沙がするように2階から駆け降りてきて、そして僕を見て目を丸くして言った。

「あれ？ 拓斗さん……？」

「真央、ちよっと、美沙ちゃんに連絡してみて。今どこに居るのかって」

先輩は特に説明も何もなく、真央ちゃんに向かってそれだけ言った。

真央ちゃんは戸惑いがちになりながらも、雰囲気でただ事じゃないと察したのか、大人しく従った。

2階で電話をかけてくる、と真央ちゃんはまた2階に戻って行った。

たぶん、電話には出ないだろう。僕が何回もかけてもつながらなかったのだ。

そう思っていたけれど。電話を終えて戻ってきた真央ちゃんの口からは、予想外の結果が告げられた。

「美沙ちゃん、電話に出ましたよ」

それを聞いて、僕の中で張り詰めていた緊張の糸が少しゆるんだ。よかった。何かの事件なんて、そんなことじゃなかったみたいだ。電話も気がつかなかったただけかもしれない。

ほっとしたと同時に、僕は自然に微笑みながら真央ちゃんに問いかける。

「そうか。よかった……それで、なんて？」

「どこにいるかは、教えてくれませんでした。幼馴染の子と一緒に居るから心配しないでって。それと……」

真央ちゃんはそこまで言うてから、なぜか気まずそうな顔で口ごもってしまった。

幼馴染の子……やっぱり、美沙はあの少年と居たみたいだ。無事だったならそれでいいけれど。

あの少年はあきらかに美沙に好意を持っていたし、美沙もそんなのかもしれない。

久しぶりの再会だったようだし、美沙もたまには僕に黙って、誰かと一緒に居たくなることもあるんだろう。

美沙だつてもう中学生なのだ。別に不自然なことじゃないし、僕がどうこう言うべき問題じゃない。

だけど……わずかに、心に引かかるものがあつた。自分でもよくわからない何か。

とりあえず、僕は真央ちゃんの次の言葉を待った。

でも真央ちゃんは一向に口を開こうとしない。僕と先輩はそんな真央ちゃんの様子に首をかしげる。

「真央？ それと……何？」

ややあつて、先輩が真央ちゃんに続きを催促した。真央ちゃんはまだ黙っていたそうな顔をしていた。

仕方なくと言った様子に、でも言いづらそうに、真央ちゃんが言葉の続きを口にした。

「美沙ちゃん、“お兄ちゃんには何も言わないで”って……そう言

「たんです」

## 第8話 ためらい、予感〔7〕

しつくりこないと云うか、この気持ちの具合をどう表現していいのかわからない。

美沙の無事はわかった。心配したような危険もなかった。これでよかったじゃないか。

駐車場までの短い道を歩いていて、道端の石がなんとなく気になった。道路のコンクリが割れてできたようだ。

美沙がいたなら、蹴りたがっただろう。美沙は歩いていると、とにかく空き缶でも石ころでも蹴りたがるのだ。

そこまで考えて、ふと気付く。こんな些細なことにでも、自然と美沙を思い出してしまっている。思わず笑ってしまった。

はじめは、義理の妹。ただそれだけで。一緒に暮らしていく上で、適当に上手くやっていければそれでいいと思っていた。

突き詰めて考えてみれば、妹なんて面倒だとすら思っていたかもしれない。

親の再婚に協力できるように。さし支えのない程度に。優しく接して、有効な関係を築いて。

深入りしない、でもそれなりに仲良く。それは僕の得意とする人付き合いの仕方、これからもそうやっていこうと思っていた。

別に他意なんてない。ただ、面倒だから。僕の気持ちにはそういう冷めた部分が、昔からあって。

自分のことを冷たい人間だと思ったこともあるし、だからといって気にもしなかった。

いつから、ペースを乱されてしまったんだろう。

今まで作ってきた、他人を簡単に立ち入らせないための、僕の心の壁。

だけど美沙はそんなものあっさりと壊して、驚くほど自然に僕の心の中に入ってきて。こんなことは初めてだった。

気づけば、守りたいと思っていた。美沙を泣かせたくない、本当の意味で家族になりたいと。

ふと、ケータイが鳴った。表示されていたのは、さっき真央ちゃんの家で別れたばかりの先輩の名前だった。

『拓斗、忘れもの。待ってて、今持ってくるから』

僕が通話ボタンを押してすぐ、先輩は電話口でそれだけ言い捨てから、すぐに電話を切った。

程無くして、先輩の声が背後から僕の名前を呼んだ。家から駐車場までの距離だ。

追いつくのも簡単だったんだろう。

「……はい、これ、車の鍵。これがないと帰れないでしょ」

振り向いた僕の前まで来た先輩は、小さく笑いながら、僕に手を差し出してきた。

そこにあっただのは、確かに僕の車の鍵だった。確かに、これがなければ車も動かさなければ、帰れない。

こんなものを忘れて帰るなんて、間抜けにもほどがある。

「拓斗さあ、らしくないよね。最近ほんと。……それとも、それが拓斗の本質なのかな」

先輩の瞳が、複雑な色を湛えて僕を映した。先輩はまた、自分の耳もとのピアスを指先で触っている。

苦し紛れの独り言のように、先輩がぼつりと言葉を漏らした。

「ひとつ大人になるたびにさ。器用になる分、不器用になるっていうか。無意識に、気持ちの奥に隠しちゃうのかもしれないね」

「先輩……？」

先輩の言わんとすることがわからなくて、僕は先輩に問いかけてみるけど、先輩はそれ以上何も言わなかった。

……わからなかったはずなのに、先輩の意味深な言葉に、なぜかどきりとした。核心をつかれたような気がして。

だからこそその真意が知りたかったのに、先輩はすぐに、いつもの余裕な笑みに戻ってしまった。

「矛盾、かな。あたしの意地悪な部分は、知らないふりしろって言うてるの。だから悪いけど、これ以上は教えてあげない」

先輩は少し困ったような声でそれだけ言っと、じゃあね、とだけ言い残し、あっさり帰って行ってしまった。

ふわりと、茶色い巻き髪を揺らして。美沙の天然の猫っ毛よりも、手が入っているというか、人工的な感じだ。

気持ちは晴れることはなく、ますますややもやとして。帰路にいた僕の心は、今までにないほど複雑な色をしていた。





第8話 ためらい、予感〔7〕（後書き）

更新遅くなりました！ ごめんなさい！

## 第8話 ためらい、予感〔8〕

強くなりたかった、ずっと。余裕な顔して言いたかった。家族なんていなくても、ひとりだって平気だよって。

だけど。誰かに嘘をつくのは簡単だけど、自分自身をだますことなんて不可能で。

簡単に強くななんてなれなかった。だからひたすら逃げて、逃げて、自分の心を守って。

「美沙ちゃん？ どうしたの？」

おばさんに優しい声で問いかけられて、私ははっと我に帰った。いけない。慌てて作り笑った私は、お箸でお茶碗のごはんをすくって、急いで口の中に入れた。

マキちゃんに連れられるまま、私はマキちゃんのおじさんの家にお世話になっている。

美味しい晩ご飯も出してくれた。いろんなこと話しかけてくれる。

笑顔の食卓。今日も明日も、あさっても。毎日ずっとこんな笑顔は続くんだって、みんな信じて疑わない。

あたりまえすぎて気付かないほどの幸せ。私のずっと欲しかったもの。

だけど当然だけど、私はこの家族の中にいてあたりまえじゃなくて。

マキちゃんのおばさんが私に気を使うたび、違うんだって思い知らされる。

ここでは、私はよその人間。ここは、私の居場所じゃない。

じゃあ、いったいどこが私の居場所だって言うの？ どこに私の居場所があるって言うの？

そう考えてしまったら、だめだって思っても、今の私の心には、たったひとりが浮かんできてしまう。

泣きたいけど泣けそうにない、変な気分だった。ただ、どうしようもなく胸が痛かった。

突き放したくせに。怖い気持ちに耐えようとせず、逃げだしたくせに。

ごはんも終わって、私は貸してもらった空き部屋の窓から、空を見上げていた。

電気も付けてないから、星が良く見える。久しぶりに見た。

そういえば最近は、夜空を見上げることが、だんだん減ってきてたんだ。

『拓斗さん、心配してるよ……？』

受話器の向こう側から聞こえた、真央ちゃんのとまどいがちな声が頭から離れない。

お兄ちゃんに会う勇気がなくて、内緒にしてって頼んだ。お兄ちゃんの優しい気持ちを無視して。

心配してるかもしれない。ううん、それよりもう、呆れられてる

かもしれない。

どっちにしろ、私最低なことしてるんだ。情けない。こんなことをしておいて、まだ

「美沙」

その時、唐突にノックもなく部屋の扉が開いて、慣れた声が私を呼んだ。

部屋に入ってきたマキちゃんは、少し不機嫌な顔だった。

それもそうだ。食事の間、私ずっと上の空だったんだから。

おばさんたちにも失礼なことしちゃったし、マキちゃんも気を悪くして当然だよな。

だけど私の前まで来たマキちゃんは、私の頭にぽんと手を置いただけで何も言わなかった。

いつも、お兄ちゃんもこんな風にして、私の頭をなでってくれる。思い出すと更にどうしようもない気分になった。

こんなどうしようもない気持ちの時は、誰かの優しさが本当に痛い。

こんな私に優しくなんてしないでっていうマイナスな気持ちと、優しくしてほしいっていう甘えた気持ち。

ぐちゃぐちゃになった心の中、結局最後に浮かぶのは、どうしてもお兄ちゃんのことばかりで。

「ねえ、マキちゃん。私、今度は“菅谷”になったの」

そんな気持ちを振り切るように、私は笑って、わざと明るい声を

出した。

マキちゃんは黙っていて、それが気まずくて、私は必死になりながら冗談めかして言葉を続ける。

「あはは。おかしいよね。私は私なのに、苗字だけ変わり続けて。いろんな名前経験できて、楽しいけどね」

「……美沙。無理して笑うなよ」

だけどマキちゃんにはこりとも笑わずに、そう言葉を返してきた。変わらない。簡単にごまかされてくれないんだ。

作り笑いもできなくなった私は、もう沈んだ声しか出せなくなつた。

「苗字も同じ。両親も同じ。住んでる家も同じ。でもね、私たちは昔から一緒にいたわけじゃないから」

自分の言葉が、自分の心を傷付けていく。なにもないんだ。私とお兄ちゃんの間には。

過去に積み上げてきた時間も、思い出も、何もなくて。だから

「二度目に離婚したとき、泣いてる私にマキちゃん言ったよね。すぐに壊れるなら、本物の家族じゃなかったんだって」

私の言葉に、マキちゃんがはっとしたように私を見た。ひどく驚いた顔をしている。

それもそうだろう。ずっと避け続けてきて、はじめてこの話題に触れたんだから。

ずっと近くで励ましてくれた、大切な人だった。一番近くにいる人だった。

でも、あのときマキちゃんがくれたその言葉は、私に大きなショックを与えるには十分で。

私がずっと信じ続けてきたことを、一気に突き崩してしまうような。

離婚という言葉を、もっと怖いものに変えてしまったその一言。それ以来、私はマキちゃんに上手く接することができなくなった。そのまま、マキちゃんと私の間に空いた距離。

「あれは……オレ、お前に元気出してほしくて、ただそれだけで……」

マキちゃんが気まずそうに口ごもる。わかってるのに、マキちゃんに悪気なんてなかったって。

マキちゃんを責めようとしてるわけじゃない。でも今の私を責めているのは、やっぱりマキちゃんのあの言葉で。

とめることもできないまま、私は吐き出すように言葉を続ける。

「そうだね。きっと本物じゃなかった。第一、今まで他人だった人同士が家族になるうだなんて、やっぱり無理があるし。本物になんて、なれるわけないよね」

自分で言った現実が、また私の心を傷付けた。今私の言ったことも、あの時マキちゃんが言ったことも、正しい。

家族ってそんなに簡単じゃない。それが現実っていうものなんだ。だから怖くなるんだ。

だけど信じたいって叫ぶ自分が、心の中で泣いていて。涙がこみ上げた。

「でも……マキちゃん。私……壊したくないなあ」

声が震えた。壊したくない。だけど、ママの電話。こわれていく音がしてる。いっそ諦めていけば楽なのかもしれない。

でもだめなんだ。どうしても諦めることなんてできない。だって、こんなに大切なのに。

「もし、また壊れても。本物じゃなかったなんて、思いたく、ないなあ……」

私の言葉を聞き終わったマキちゃんが、急に棚の上にあった私のケータイを手を取った。

そして勝手にボタンを押して、電話をかけ始めた。

「マキちゃん！？ 何して……誰にかけてるの!？」

あまりに唐突なその行動に、涙も忘れた私は慌てふためいて問いかけた。

マキちゃんといえば涼しい顔をして、そしてなんと「オマエの兄貴」とだけ言葉を返してきた。

どうして。混乱したまま、私はマキちゃんからケータイを奪い返そうしながら、声をあげる。

「やめてよマキちゃん！ なんで」

「迷いを捨てきれないで逃げてるだけなら、それは違う。間違えんなよ。傷付きたくないなら、自分できつぱりけじめつけとけ」

まっすぐに私の目を見て、マキちゃんがそんなことを言うので、私はぐっと言葉に詰まった。

逃げてるなんて言われてしまったら、何も反論できない。



私が混乱から覚めきれないまま、電話に出たらしい受話器の向こうのお兄ちゃんの声が、私にもかすかに聞こえた。

直接会話しているわけでもないのに、変に高まる緊張。

対して冷静なマキちゃんは表情も変えず、唐突に住所を告げて、すぐに電話を切ってケータイを折りたたんでしまった。

マキちゃんが言ったのは、多分ここの住所だ。

「あいつ、来ると思うから。涙ふいとけよ」

マキちゃんは私の手にケータイを返しながら、それだけ言って部屋を出ていった。

逃げ出したいと思ったけど、マキちゃんにあんなこと言われてしまったら、それもできなくて。

私は、ただ立ち尽くすことしかできずにいた。

## 第8話 ためらい、予感〔9〕

いつ帰ってくるのかもわからない。もしかしたら、しばらく帰らないつもりなのかもしれない。

僕からの連絡に、美沙は一切反応しなかった。そして美沙と一緒にいるというあの少年。

美沙が僕を避けている。思春期にはよくある話だ。恋愛に夢中になって、家族を煩わしく思う時期。

こんなときには、そつとしておく他はない。冷静に考えれば、そんなことは明らかなはずなのに。

帰りついた家の玄関、靴を脱ぐこともせず、僕は玄関に座って美沙を待っていた。

連絡があるかもしれない。そう思って、ケータイも握ったままだ。

もう一時間は経っただろう。ここにこうして座っていても何の意味もない。でもここを動く気にはなれなかった。

無駄だと分かっているが、どうして僕はこう必死になって待っているのか。自分でも自分の行動に驚いていた。

『拓斗さあ、らしくないよね。最近ほんと。……それとも、それが拓斗の本質なのかな』

さっきの、先輩の言葉がなんとなく思い出された。確かにそうだ。自分の本質なんてことはわからないが、らしくないことは確かだ。出会ってからずっと、乱されたままのペース。

少し疲れたような気分で溜息をつき、僕は座ったまま横の壁にもたれかかった。

心配したり、もやもやした気分になったり。思えばこんなに感情の起伏が激しくなったのは本当に久しぶりだ。

どうして急にこんな行動をとったのか。どうして僕を避けるのか。さつきからずっと考えている。

あの少年とのことという、はじめに出した結論は、一般論でもありそれが一番妥当なわけだけだ。

だけど僕の心はどこかでそれを否定している。それは少しおかしいんじゃないか、と。

恋愛に夢中になったからと言って、それだけで美沙は本当にこんな行動をとるだろうか。

違うような気もする。でもそれならいったい何が理由でこんなことになったのか、見当もつかない。

自然と自嘲的な笑いがもれた。結局僕は、さつき思い知らされた通り、美沙のことを何も知らないのだ。

家族だなんだと言って、できたばかりの妹を、必死に大切にしてきたつもりだった。

だけど、美沙との間にあった距離を埋め尽くすのには、時間があまりにも足りなかったのかもしれない。

まだ、本物にはなれていないのか。家族になろうとするだけのことが、こんなにも難しいのか。

感じる焦燥感が、僕をこの場から動けなくさせていた。

だけど、それだけじゃないのだ。僕の心にある、また別の感情。家族、それだけの言葉で片付けられるようなものでなく。

家に入った瞬間、家が広いと感じる。駆け寄ってくる美沙がいなだけで、他人の家かのような錯覚を起こす。

ほんの少し前までは、父親も仕事で家をよく開けていたし、ひとりの家が当たり前だったはずだ。

いつのまに、美沙がいることが“あたりまえ”のことになってしまったのか。

大切な家族、僕よりもずっと年下の妹。見守ってやるべき大切な存在。

いつか本当の意味で家族になれて、一緒に笑っていても。ずっと一緒にいられるわけじゃない。

いつか家族よりも大切なひとりを見つけて、美沙は僕から離れていく。それを見守るのが、僕の役目じゃないか。

もしかしたら美沙にとって、その大切なひとりというのは、あの少年なのかもしれない。

そこまで考えてまた我に帰る。まだずっと先のことだ。どうしてこんなことまで考えているのか。

自分の心の奥にある得体の知れない感情の、存在は自覚している。でもそれ以上、詮索してはいけない気がした。

ずっとそう思っていたのかもしれない。考えることを、無意識に避けていたのだ。無意識に

『無意識に、気持ちの奥に隠しちゃうのかもしれないね』

その時唐突に、頭の上から先輩の声が降ってきて、僕は顔を上げた。

瞬間、玄関の扉が開いて。そこから顔を出したのは、あまりにも見慣れた、大切な笑顔。

僕の心が安堵に満たされて。自然と僕は立ち上がり

……そこで、場面は途切れた。さっき開いたはずの玄関の扉は、閉まったまま。

意識が少しぼんやりとしている。ああ、夢を見ていたみたいだ。夢なんて久しぶりに見た。

いつの間に眠っていたんだろう。意識が少しづつ現実に戻ってくるとともに、近くで鳴っている騒音が耳につく。

手の中で、振動しているケータイ。それを見て、やっと電話の着信だと気がついた。

そこに表示された名前に、僕は慌てて通話ボタンを押した。

## 第8話 ためらい、予感〔10〕

まだ、私の心の中の弱い部分が、逃げ出したいつて叫んでる。同時に、膨らむ自己嫌悪。

時間だけが迫ってくるような緊張感の中、私の心はいろんなことでいっぱいになっていた。

マキちゃんも出て行ってしまったって、ひとりきりになった部屋の中。やっぱり、ひとりって大嫌いだ。ひとりだと変にいろいろ考えてしまつて、余計に不安になる。

「……おねえちゃん？」

その時、ふいに部屋の電気がついて。同時に、幼い声が私を呼んだ。

いつの間に部屋に入ってきていたんだろう。そこに立っていたのは、幼い女の子だった。

みどりちゃん。このお家の娘さんだつて紹介してもらつた。今年小学校に上がったって。

黒目がちの大きな瞳が、心配そうに私を見あげていた。

「だめだよ。かなしそうなかお」

みどりちゃんは私のスカートの裾をぐいぐいひっぱりながら、小さな唇をとがらせて。

そして、まるで当たり前のことを話すように、必死で私に訴えか

けてきた。

「あのね、先生がいつてたよ。おともだちとケンカしてもね。心のなかの手は、まだつないでるんだって。でもその手まではなしちゃったら、とおくに行っちゃうかもしれないんだって」

私は何も言えずに、目の前の小さな女の子を見ていた。小さくても、今の私よりもずっと大人なのかもしれない。

少なくとも今、私の不安定な気持ちを感じ取って、この子は必死になってくれている。

私の内心を知ってか知らずか、みどりちゃんは大きな瞳を細めてにつこりと笑うと、また続けた。

「だからね、おねえちゃん。また、握手すればいいんだよ。そしてずっといっしょだね？」

ストレートなその言葉は、思った以上に私の心に響いた。それはきつと簡単なこと。

だけど簡単なことがどうしてこんなに難しくなったんだろう。

また、揺れ始める私の心。その時、扉の向こうから聞こえてきた、ふたつの足音。

心臓が大きくどきりと鳴った。と同時に、開いた部屋の扉。そこに立っていたのは、マキちゃんと、そして

「みどり。こっちにおいで」

無表情に近い顔をしたマキちゃんが、短くそれだけ言った。

みどりちゃんはまだ何か言いたげな顔をしてたけど、素直に従っ

てマキちゃんのもとへ走っていく。

そしてそのまま、マキちゃんとみどりちゃんは出て行って。部屋に残されたのは、私と、そしてもうひとり。

目の前にいる、お兄ちゃんの顔がまともに見れない。近くに居るのに、私の心が自然とお兄ちゃんを遠ざけていた。

「まず、最初に。一言だけ、厳しいことを言うね。お兄ちゃんとして」

唐突に、お兄ちゃんが話を始めた。それにはっとして私も思わずお兄ちゃんを見る。

お兄ちゃんは私が何も言えそうにないことをわかっているのか、私の返答を待たずに言葉を続けた。

「家族として一緒に暮らすってことは、ルールだってあるんだよ。美沙が僕のこと少しでも大切だと思ってくれるなら、突然いなくなつて僕がどれだけ心配したか……わかるよね？」

お兄ちゃん、厳しい顔。……怒ってる。そこで初めて、自分のしたことの大きさを改めて思い知った。

もし逆の立場だったら、私だってきつともものすごく心配してた。何も手につかないで、ひたすら待ってたかもしれない。

私……バカだ。そんなことも考えつかないほど、自分のことで精いっぱいになって。

自分が不安になったからって、逃げ出して。もっと大きな不安を、お兄ちゃんに与えてしまったのかもしれない。

「ごめんなさい……」



申し訳なさでいっぱいになりながら私がそう言つと、お兄ちゃんの表情が少し和らいだ。

いつものお兄ちゃんの優しい瞳。ううん、今までだって本気で怒ってるって風じゃなかったのかもしれない。

厳しいことを言うのも優しさ。お兄ちゃんって人の根っこにあるのは、やっぱり優しさ。

だから大好きなんだ。失うのが怖くて、逃げ出したくなっちゃうくらいに。

「あと、これは兄妹としてじゃなく、僕個人としての話。聞いてくれる？」

お兄ちゃんが少し微笑みまじりに切り出してきた。

さっきより少しだけやわらかくなった雰囲気の中、お兄ちゃんの声は自然と私の心を開いていくようだ。

一瞬ためらうようなくさをした後、お兄ちゃんがゆっくりと話した。

「僕たちは普通の家族みたいに、ずっと同じ時間を積み重ねてきたわけじゃないから……過ごしてきた時間も、話した言葉もまだ、全然足りないんだ」

私は驚いてお兄ちゃんの顔をまじまじと見つめてしまった。私も同じことを思っていたんだ。

だから本物になれないんだって。開きかけた心を、また閉ざしたくなる。少しづつもどってくる苦い思い。

だけどそんな私の気持ち、次のお兄ちゃんの一言が簡単に吹き飛

ばしてしまった。

「だから、お互いに近づこうとしなきゃ、何も始まらない」

瞬間、お兄ちゃんとまっすぐに目が合った。お兄ちゃんが少し、困ったように微笑み、また続ける。

「僕のことを嫌になる時もあると思う。それは当たり前のことだと思っただ。簡単なことじゃなくて、家族になるうとしてるんだから」

お兄ちゃんのその言葉に、嫌になったんじゃないよって、慌てて言おうとしたけど。

すぐに、私は口をはさむのをやめた。今は、そんなちっけなことが大事なんじゃなくて。

真剣な目をしたお兄ちゃんが、伝えようとしてくれること。私が見落としていたこと。

「それでも最後には帰ってきてほしい。美沙の帰る場所は、あの家だ。僕はずっと待ってるから」

お兄ちゃんが言い終わったところには、私の目にはいっぱい涙がこみ上げていた。

どうして、逃げ出すことしか考えられなかったの。何も見えなくなっ

でもお兄ちゃんの中には、壊れることなんて存在してなくて。作り上げていこうって。大切に、守っていこうって。

「……言いたかったのは、それだけ。ちゃんと食べて寝て、無理は

しないようにね。無理するのは、美沙の悪い癖だから」

お兄ちゃんはその言うって小さく笑うと、そのまま部屋を出ていくとする。

頭で考えるよりも先に、私の口が動いていた。

「待つて……！」

私の涙声に、お兄ちゃんが振り向く。気づけば、必死になっていた。かっこわるくても、涙を隠すこともできずに。

ただ、お兄ちゃんに伝えたい言葉が、頭の中、パンクしそうなほどいっぱいになってて。

「ごめんね。私……強くなろうとしても全然だめ。情けなくて。

お兄ちゃんにいつも、いろんなもの、もらってばかりで」

しどろもどろになりながら言うって、私は懸命に次の言葉を探し出そうとしていた。

なかなか出てこない私の言葉を、お兄ちゃんはちゃんと待つてくれている。

そんなお兄ちゃんに後押しされて、私はとてつもなく勇気の要るはずの言葉を、恐る恐る口にした。

「だけどね。だけど……帰っても、いい……？」

次から次から、涙が止まらなかった。自分の言いたいこと、まとめられないまま口に出していた。

「あの家が、居場所だって。私……居場所を見つけたって。私……」

…」

うまく言葉になんかならない。お兄ちゃんを前にして、ただ、抑えきれない涙が込み上げるばかりで。

いつも上手くやれない私。だけど、私に大好きなお兄ちゃんは、やっぱりお兄ちゃんです。

静かに微笑んだお兄ちゃんは、何も言わずにただ、私に向かって手を差し出して。そして、一言だけ。

「……帰ろう？」

“だからまた、握手すればいいんだよ。そしたらずっといいんだよ。”

ひたすらにこみあげる、この気持ちを抑えるすべを、私は知らない。

子供みたいに、思いっきり声をあげて泣いた。お兄ちゃんの手を握ったまま。

こんなに素直に泣いたのは久しぶりだった。つないだ手の温かさが、私の心の中の不安を、ゆっくりと溶かしていった。

## 第8話 ためらい、予感「11」

しばらく泣いた後、落ち着いてきたころっていうのは、変に気恥かしかったりする。

「……もう、大丈夫。ありがとう」

そう言って、私はお兄ちゃんから目を逸らす。思いつきり泣きすぎてしまった自分が照れくさいって言うか、なんて言うか。

そんな私の内心なんてお見通しなのか、お兄ちゃんがくすつと笑って。

なんだかいたたまれなくなった私は、慌ててその場を離れる言い訳をひねりだした。

「か、帰るって決めたし。私、おばさん達にあいさつしてくるね」

早口で言うってから、私は急いで部屋の扉に駆け寄って、それを押し開いた。と、同時に。

扉の向こう側からもそれを開けようとする人がいて。私はその人に、あやうくぶつかりかけた。

見上げてみると、そこに立っていたのは、仏頂面をしたマキちゃん。

「話、終わったの？」

マキちゃんは短くそれだけ聞いてきた。マキちゃんにもたくさん

迷惑をかけてしまった。

マキちゃんは話をつけろとは言ったけど、帰れとは言ってなかった。少し気まずく思いながらも、私は頷いた。

「うん。……帰るって、決めたよ。ごめんね」

「ふーん」

そう呟いたマキちゃんは、喜ぶでも怒るでもなく、ただ私の出した結論に納得したみたいだった。

それになんとか安心して、私はマキちゃんに笑顔を向けた。

「私、おばさんに挨拶してくるから。マキちゃん、ありがとう」

「……いーよ。別に」

照れたのか、マキちゃんがぶいっと横を向いた。こういうところから、女の子に人気あるんだよね。

本人は全く自覚してないみたいだけど。マキちゃんってそういうところ鈍いんだ。

そうこうして部屋を後にした私は、台所に居るおばさんのところへ向かった。

気配で気付いたのか、声をかける前におばさんが私を見つけた。

「お話、終わったの？」

おばさんが優しい目をして微笑みながら尋ねてきた。なんだか、その笑い方がママに少し似てる気がした。

私がい、と頷くと、おばさんはますます笑みを深くしながら言った。

「大切に思われてるんだね。あんなに心配してくれる家族、ほかにいないよ」

「……お兄ちゃん、何か言っていました？」

「うん。しばらく面倒みてやってほしいって、何度も申し訳ないって頭下げるから、こっちが困っちゃって。でも、その必要もなくなつたかな？」

おばさんがまた、笑いながら言った。見えないところでも、お兄ちゃんは私を思ってくれてるんだって実感して。

じんわりと感じる幸せは、また膨らんで。でもそれは、ただ幸せなだけじゃなくて。

「幸せは幸せなだけじゃなくて、同じくらい怖いんだって。最近そう気づいたんです」

伏し目がちな私の言葉を聞いて、おばさんが少し面食らったような顔をした。

それを見て我にかえる。突然こんなこと言われたって、誰でも困っちゃうだけだね。

「あ……ごめんなさい。意味分かんないこと」

私が慌てて話題を戻そうとしたけど、おばさんは首を横に振った。唐突な私の話を、真剣に受け止めてくれてるみたいだった。おばさんは静かに話してくれた。

「私はね、幸せは失うものじゃないと思うんだ。たとえばそれが永遠じゃなくても、一瞬でも、幸せな気持ちはずっと蓄積していつてそれがまた、美沙ちゃんを幸せにしてくれる。大切にしていって？  
今この瞬間は、美沙ちゃんだけのものだよ」

おばさんの言葉は少し難しく、でもなんだか私の心の奥まで響いてくるみたいだった。

やっぱりまだ、迷いは捨て切れなくて。不安な気持ちが減ったわけじゃない。怖い気持ち、消えたわけじゃない。

でも、もしかた壊れたとしても、本物じゃなかったなんて、きつとそんなこと思わない。

迷って、たどり着いた答え。それははじめのころに思っていたのと変わらないものだった。

笑顔でたくさん思い出を作って、笑顔でさよならする。だけど全然違うんだ。そこにある意味が。

全然違う。私のお兄ちゃんへの気持ちも。

おばさんにお礼を言って、部屋に戻ったら、お兄ちゃんが笑顔で迎えてくれた。

見えなくなってた今。今　お兄ちゃんの隣で、たくさんの幸せをもらってるってこと。

未来のことはわからなくても。今目の前にあるお兄ちゃんの笑顔が、教えてくれてるじゃない。

だからいつかその時が来ても、心からの笑顔で、さよなら……で  
きるよね？

あたり前のように、迎えに来てくれる人。私を待っていてくれる人。  
例え時間は限られてても。

お兄ちゃんはずっと、私にとって大切な家族。だから私の精一杯で、大切にしたいと思った。





## 第8話 ためらい、予感（12）

美沙が出て行って、美沙の幼馴染だと言う少年と2人、部屋に残されることになった。

なんだかんだと言って、この少年も美沙のことを大切に思ってくれているんだろう。その意味はどうだとしても。

「君にも、迷惑掛けたみたいだね」

僕がそう声をかけると、少年は少し不機嫌そうに目を細めて言った。

「きみ、じゃなくて、タマキ。……くんとかつけんよ。呼び捨てでいいから。オレ、あんたとは対等でいたいんだ」

そういえば、そんな風に自己紹介されていた。初対面のと時から、このタマキという少年はどこか態度にとげがあった。

けれど美沙と話す時には、そんなもの全く感じさせないくらいの優しい眼差しをしていて。

対等でいたいと言うのも、美沙のことがあるから。あからさまなくらいにまっすぐな所が、美沙と重なる。

「怒んないの？ 美沙のこと勝手に連れ出したの、オレだよ？」

タマキ、がぼつりと言った。自分の感情面だけ重視すれば、あまり思わしくなく思っているのは確かだ。

けど、自分の立場を考えてみればすぐに冷静になれる。つまりは、

簡単なことだ。

「それが美沙の意思なら、僕に怒る資格なんてないから」

言いながら、自分でも自分の声音がやけに冷静なことを感じた。  
適切な答え。何も間違っただけなんかない。

いつもそうだ。僕は自分の感情を優先して行動したり、話したり  
することはしない。

だけど今はなぜか、必死に自分の気持ちをコントロールしようと  
意識している自分がいて。

表面には出したりしないけれど、それにひどくとまどっていた。  
自分の気持ちを探ろうとしては、やめるのを繰り返す。

「あんた、何か勘違いしてんじゃないの？」

ふと、少年がそんなことを言ったので、物思いにふけていた僕  
ははっとして顔を上げた。

少し表情に陰りを見せながら、タマキは話し出した。

「あんたが思ってるような関係じゃないよ、オレと美沙は。……オ  
レ、美沙に言っちゃいけないこと言ったんだ。あいつは信じてた。  
何回家族が変わっても、あいつの中じゃ本物だったんだ」

その話し方を見て、苦々しい思いが、初対面に近い僕にも伝わっ  
てきた。

後悔しているんだろう。2人の間にあった違和感。過去に何かあ  
っただろうと感じさせる空気。

少年が美沙に何を言ったのかはわからないが、その理由は、きっ  
とこのことだったんだろう。

「ぎくしゃくして、そのまま話さなくなってた。あいつがオレから離れていった。……いつもそうだった。オレ、上手くやれなくて。あいつを傷つけることしか、できなくて。でも、気持ちだけは、誰にも負けないって思う」

そう言ったあと、少年は　　タマキは、まっすぐに僕の目を見てきた。

射抜くような、といったら表現できるだろうか。やや気おくれしてしまふような、そんな感じだった。

特に、今の僕にとっては。そんな僕の内心を見抜いているのか、タマキは挑戦的な物言いで訴えてきた。

「あんたは美沙を守ってやれるくらい大人で、オレみたいに失敗することもなく……、あんたについて、美沙は幸せそうに笑って。でも、あんたは大人だからこそ、見えてないこともあるんじゃないの？」

その一言は、確実に衝撃となって僕の心に残ることになった。

美沙を探していた時に、先輩に言われた言葉と重なって。多分もう、わかりきっていたことなのだ。

美沙を迎えに来て、必死で伝えた言葉達。どれも僕の心からの言葉で、望みで。

これから先もずっと、美沙と家族をやっていたい。戻ってきてほしい。例え美沙が帰らなくても、僕は待っていていようと思えた。

だけど、その根底にあるのは本当に、純粹に家族としてだけの感情なのか？

そんな気持ちのまま、美沙と2人で家にたどりついた。今ここに暮らしている、ほぼ2人だけの家族。

美沙がこの家に帰ってきた。それだけのことはさすが、本当にうれしかった。

嬉しいと言う感情自体、久しぶりに感じたかもしれない。

少し気まずいのか、一緒に玄関に入った美沙はおずおずと靴を脱いで、でも家の中にかかることを躊躇している。

「おかえり」

僕がそう言っただけで微笑みかけてやると、やっと安心したのか、美沙がいつものような無邪気な笑顔を見せた。

「ただいま」

美沙が弾んだ声で答えてくれる。僕にいろんなものをもらってばかりだと美沙は言っただけで、そんなはずがない。

何も手につかないほど心配したり、戸惑う感情に振り回されたり。そして何より、僕をこんなにあたたかな気持ちにさせるのは、ほかの誰でもありえない。

その夜は、美沙は終始僕から離れなかった。家出したことの罪悪感もあつてのことだろう。

居間で一緒にテレビを見ていた時、眠たそうに目をこすっていたくせに、美沙は自分の部屋にも戻らず。

そしてそのまま絨毯に横になったかと思うと、数分もたたずに聞こえてくる小さな寝息。

それでも美沙の両腕はしっかり僕を捕まえていて、まるで身動きも取れない状態に苦笑する。

「お兄ちゃ……ん」

うわごとのように呟いて、僕の腰のあたりに腕を巻きつけ、すやすやと眠る美沙。

こんな場面は以前にもあった。そう、初めて会った日。

めちゃくちゃなインパクトで、美沙は僕の静かな日常に乱入してきた。

あの日から、そんなに時間がたったわけじゃない。けれど目まぐるしく、美沙は僕の中で存在を大きくして。

他人から妹へ。妹から家族へ。そして家族から ……

「……まいったな。まさかこんなに……」

思わず、ひとり呟いていた。自分の気持ちがわからないほど子供じゃないのだ。

だからこそ、今まで気付かないふりをしてきたのかもしれない。

けれど自分の中であきらかになっちゃった今となってはもう、目を逸らすのもなんだか馬鹿らしい話で。

あどけない寝顔の美沙の髪をなでてやると、猫っ毛は思った以上にふわふわとしていた。

「おやすみ。いい夢見てね」

呟いた言葉に、我知らず想いがこもっていた。とても穏やかな気

分で、僕はその寝顔を眺めてみる。

今はまだ、夢の中に居る僕の大切な妹に。

## 第9話 彼女の仮面の、その下に〔1〕

気持ちが変化して、新しい心境で。今までと同じ場所に立って見ても、なんだか少し違って見えたりする。

家出して、帰ってきた大切な家。そこで過ごす時間は、違っているようでもある。

一見すれば同じ。だけど一緒に居るお兄ちゃんまでも、どこかわったように見えるのは、私自身が変わったからなのかな。

大好き！お兄ちゃん      〔第9話 彼女の仮面の、その下に〕

変化の時期ってというのは、もしかしたら、重なるものなのかもしれない。

周りの誰も気づいてなくても。あの人の、完璧なはずの仮面はすでに、揺らぎ始めてたのかもしれない。

短いようで長い夏休みは、まだ続いていた。

夜ご飯も作り終わって、私はテーブルに座り、並べた料理を何となく眺めながら、お兄ちゃんの帰りを待っている。

世界でいちばん、安らぐ居場所。この家の全部が、私とお兄ちゃんの家族生活そのもので。



ずっと抱えている不安以上に、ここに居ると安心する。安心して、なにもせずに待っている、いろんなことを考えてしまう。

すぐに浮かぶのが、最近ずっと気になっていること。

最近つて言ってもここ数日のことだけど、あの人の様子が少し、以前と違っている気がするのだ。

お兄ちゃんもそうなんだけど、でもお兄ちゃんの変化っていうのは、より優しくなったって言うか。

ささいで、私の気のせいかもしれない。家出したことで、お互いの距離がより近くなったことでそう感じているのかもしれない。

だけどあの人の場合は、違う。それは何か確信があってそう思うわけじゃなくて、なんとなく、感じるってだけで。

同じ想いを抱えた者同士。だから私も彼女の心を、敏感に感じとってしまふのかな。

実際、あの人との接点もなんだか増えた気がする。夏休み、同じ家に居るお兄ちゃんと私は一緒の時間が多いから。

だからそれは、つまり、あの人とお兄ちゃんとの接点が増えたってことを意味するわけで。

「考え事？」

ふと、頭の上から声が降ってきて、驚いた私はびっくりと肩を震わせてしまった。

見上げると、そこにはいつの間に帰ってきたのか、お兄ちゃんが立っていた。いけない。今日は玄関で迎えることができなかった。

そのことに落ち込みそうになったけど、今はそれどころじゃない。

あの人のことを考えてたなんて言えるわけない。

いくら家族だからって、お兄ちゃんの交友関係にまで口出しできるような立場じゃないし。

お兄ちゃんが誰と会おうが、私には関係ないんだ。そう思ったら、なんだか胸の中がもやもやとした。

嫌だな、こんな気持ち。彼女のことを考えるたび、こんな気持ちがこみ上げてくる。

ごまかすように、私は笑顔を作って努めて明るい声を出した。

「な、なんでもないよ！　ちょっと、うたたねしてた、かな？」

言い終わって、少し気まずい空気が流れた。私は目を開けてたんだし、さすがに不自然だったかもしれない。でもこれ以上つつこんで聞いて欲しくなくて、私はなんでもないを貫きとおそうと必死になっていた。

そんな私の内心なんか、やっぱりお見通しなのか。お兄ちゃんが小さく首をかしげながらくすつと笑って一言。

「悩むのもいいけど、あまり思い詰めないようにね」

お兄ちゃんがぼんと私の頭に手を置いた。すぐに私は、お兄ちゃんから目が離せなくなる。とてもやさしい瞳の色だと思った。

どうして、こんな目をして私を見るんだろう。胸が痛くなる。私の心を占める大切な想いは、時々こうして私を切なくさせたりする。それにとまどいを覚える。

自覚、ないのかな。こんな風なまなざしを向けられてしまったら、

誰だって好きになっちゃうよ。

その後もなんとなく、お兄ちゃんを意識してしまつて、不自然にならない程度に接してみたものの。

戸惑いを隠しきれないまま食事を終えて、お皿を洗っていると、お兄ちゃんが台所までやつてきた。

お兄ちゃんには毎日顔を合わせているはずなのに、またひそかにどきつとする。

恋つて、疲れる。私がそんなことを思っているなんて気付いていない様子のお兄ちゃんが、私にケータイを差し出してきた。

それは私のケータイだった。お兄ちゃんがにこりと自然な笑みを作つて言つた。

「ケータイが鳴つてたから持つてきたよ。長かつたから、電話じゃないかと思つて」

誰からの着信だろう。そんなことを考えながら、ケータイを持つたお兄ちゃんの手視線を送る。

すると、ケータイよりもそれを持っているお兄ちゃんの手が目が行つてしまった。

大きくて、少し骨ばつてて。私とは違う、男の人の手をしてるんだなつて。

「美沙……？」

お兄ちゃんの不思議そうな声が私の名前を呼んだところで、私はやつと我に歸つた。頬が熱い。

慌てた私は、お兄ちゃんの手からケータイを無言でひったくるように受け取つてしまった。

お兄ちゃんは少し驚いているみたいだった。その反応に、私も余計に焦ってしまう。早くお礼を言わなくちゃいけないのに。

ただどあくまで大人なお兄ちゃんは特に気にしないことにしたのか、少し微笑んでから居間に戻っていく。

「あ、あの！　ありがとう！」

さらに慌てた私は、少しずれたタイミングでお兄ちゃんの背中に向かってお礼の言葉を叫ぶ。

振り向いたお兄ちゃんがまた、笑顔で答えてくれた。いつも笑ってくれるお兄ちゃんが好き。優しさがにじみ出てるみたいで。

好きだっと思ったび、戸惑っていく。こんな戸惑いは、お兄ちゃんを好きだっって自覚した時以来かもしれない。

何で今さらって、自分に問いかけてみても、どうしてここまで意識してしまうのかわからなくて。

ただ、さっき見せたお兄ちゃんの優しい瞳の色だけが、私を支配していく。

ほんの時々、一瞬だけ見せる、あの表情。まだ数回しか見たことないけど、決まって言葉を失う私。

出会ったところには、あんな顔見たことなかった。それが特別みたいで嬉しい。

心臓がどきどきしてしまうんだけど、でも、あんな顔を見せてくれるようになったのが嬉しい。

お兄ちゃんにとっては私は子供で、妹なのかもしれないけど。でも、家族としてでもお兄ちゃんの特別になれたのが嬉しいのだ。

お兄ちゃんのおんなな表情も、私の大切な思い出になっていくんだろうな。それってさみしいけどすごく幸せだ。

あったかくなった気持ちの中、私はケータイをチェックしてみた。着信が一件。真央ちゃんからだった。

かけ直してみると、真央ちゃんはワンコールで出た。

『美沙ちゃん？ 今日さ、一緒に花火しない？』

受話器の向こうの真央ちゃんは、何の前置きもなく唐突に話を始めた。

それに少し面喰いながらも、私は嬉しいお誘いに一気に心を躍らせた。花火は大好きなのだ。意気込んで、私は言葉を返す。

「うん、いいよ！ どこです？ ふたりで？」

『ううん。あのね……美沙ちゃん家、遊び行ってもいいかな？ お姉ちゃんも、一緒に来てくれるって』

真央ちゃんの言葉を聞いた瞬間、上がり調子だった私の気持ちが、少し勢いを失う。

またか、って思った。真央ちゃんの言うお姉ちゃんっていうのは、亜子さんのこと。

真央ちゃんのところで、お兄ちゃんの大学の先輩。

最近、何かにつけてあの人に会うことが多い。サークル関係の連絡とか言って、わざわざ家まで伝えに来たり。

私の疑い過ぎで、本当に直接伝えなきゃいけない用事だったのかもしれないけど。

以前は全然そんなことなかったのに、最近そんなのがやけに多い

気がして。

だけど真央ちゃんの話の話を断ることもできなくて、真央ちゃんに流されるまま、電話を切った。

緩やかな夏の空気の中、私の心がまた、ざわざわと騒ぎ出していた。

第9話 彼女の仮面の、その下に「1」（後書き）

あああ、更新遅れてごめんなさい。

言い訳になるのですが、ちょっとショックなことがあって落ち込んでおりました（私情です）。

感想くださった方々ありがとうございます！！ 今後も頑張ります。

## 第9話 彼女の仮面の、その下に「2」

想いを自覚しても、別に、劇的に何かが変わったわけじゃない。

僕の中にある美沙へのあたたかな気持ちは、以前と変わらずそこにあつて。

だけど初めてとも言えるようなその気持ち、自分をどう動かしていくのか、僕はまだ気づいていなかったのかもしれない。

「花火？」

僕はクッションを抱きしめるようにしながらソファに座っている美沙に、そう聞き返した。

今日もいつも通りに美沙の手料理を食べ、美沙が皿洗いを引き受けると言つて。

皿を洗い終わったらしい美沙は、居間に来たかと思うと唐突に花火をするなんて言い出した。

それも今日の話らしい。こういうことはせめて前日から計画することだと思うが、急に思いついたのだろうか。

「うん。さっき電話があつたでしょ？ 真央ちゃんが誘ってくれて。真央ちゃんと、……亜子さんも来るって」

美沙が頷きつつそう返してきた。なるほど。さっき美沙のケータ



イが鳴っていたから持つていつてやったが、そのことだったのか。  
美沙が花火がしたいと言うのなら構わない話だが、花火云々よりも美沙の様子が気になった。

いつもならば、花火なんてことになったら美沙ははしゃいでいるだろうに、今日はどこか元気がない。

「どうしたの？」

耐えかねた僕はそう訊ねてみたのだが、美沙はときたら演技が上手い訳でもない癖に、わざとらしく不思議そうな顔をした。

そしてまたわざとらしくも作り笑った美沙が、言葉を返してきた。

「何が？」

とぼける美沙。これ以上聞かないでと言わんばかりの態度だ。今日、帰ってきた時も美沙の様子はおかしかった。

複雑な心境だった。もどかしいとはこういうことを言うのだろうか。何か悩んでいるなら相談してほしいのに。

だけど美沙が必要としていないのなら、不必要に立ち入ることができない。例えば家族であっても。

美沙の様子が気になっではいても、なにも声をかけることができないまま外は暗くなり、やがて玄関のチャイムが鳴った。

美沙と2人で玄関に出てみると、まず真央ちゃんが入ってきた。その手には巨大な花火セット。

今晚あれをすべて燃やしつくすのだろうか。片付けのことを思い、僕はうんざりしてしまった。

けれどそんな僕とは対照的な反応をするのは、考えるまでもなく。

予想通り、美沙が声を出した。

「わあ、すごい！ 真央ちゃんそれどうしたの？ 買ってきたの？」

さっきまでしゅんとしていた美沙だったが、さすがにあんな巨大な花火セットを見せられてはたまらなかったのか。

態度が一変。はしゃぎ始めた美沙は真央ちゃんと連れ立って庭に向かっていく。花火の準備をするつもりなのだろう。

そんな元気な2人を見送った後、残された大人2人。

伊藤先輩は耳もとのピアスをきらきらと揺らしながら、いつも通りに余裕な笑い方で微笑んだ。

「拓斗、久しぶり」

先輩がそう言ったが、僕はその言葉に違和感を覚える。

いつも会った時にはこう挨拶しあっていたが、久しぶりという言葉がしっくりこないのだ。

いつも通りに行けば、久しぶりと返すところだが、今日は別の言葉を選んだ。

「最近、よく会いますね」

僕が言うと、先輩は「そうかもね」、と少し困ったように笑った。最近、なぜか顔を合わせることが多い。

単なる偶然だとは思うが。それはそれとして、僕はさっきから気になっていたことを先輩に訊ねた。

「花火、わざわざ買ってきたんですか？ 払いますよ」

花火は結構高いのだ。あれほど大きなものともなると相当したはずだ。

美沙もさせてもらうのだから、こっちも払うのは当然のことだ。けれど伊藤先輩は首を横に振って言った。

「あれ、もらいもののなの。真央が、美沙ちゃんとしたいって言うから」

そうこうして先輩を連れて庭に向かってみると、すでに花火の準備は整っていた。

美沙が「遅いよ！」と口を尖らせる。先輩と話していた時間なんて数分に過ぎなかったと思うのだが。

待ちきれないと言わんばかりに、美沙が花火に火をつけた。しゅうしゅうと音をたてて、美沙の花火が七色に光る。

真央ちゃんもそれに続き、夜の暗闇がにわかにかき消された。

はしゃぐ美沙たちを眺めながら、僕は適当に小さな花火を手にとって、庭の隅の方に並べてある石の上に座った。

そこには伊藤先輩も座っていた。花火とは言っても火を使っているのだから一応見守りは必要だ。

何かあった時に対応できるように。それには、この場所が一番適切だ。

僕も先輩もしばらく無言で花火を続けた。その時、一瞬美沙と目があつたように思った。

笑顔を消した美沙が、何とも言いがたい表情でこっちを見ている。けれどすぐにふたつの視線は離れた。

何事もなかったかのように、美沙は真央ちゃんと笑いあっている。泣きそうな顔をしていると思ったが、勘違いだったのだろうか。そんなことを思っていると、やがて先に火をつけていた先輩の花火が消えた。

新しいのを取りに行くのかと思ったが、先輩は消えた花火を握ったままそこを動こうとしなかった。

面倒なのだろうか。僕の花火もだんだんと明るさを失いつつあった。そろそろ火が消えるだろうか。

「……自分の意思で言ったこと、もう後悔してるの。後悔することなんてわかってたのに」

唐突に、先輩が言った。僕が隣の先輩を振り向くのと同時に、僕の花火も光を失った。

何の話だかよくわからなかった。少し離れたところに居る美沙たちの花火のわずかな光と、家の中からの電気の光と。

薄暗い中、先輩の表情はあまり見えなかった。何と言葉を返していいのかわからない僕を置いて、先輩が立ち上がった。

「年上って、損だと思わない？」

そんな一言を残して、先輩はすぐに歩きはじめてしまった。花火を取りに向かったようだった。

そして花火を置いているところに居る真央ちゃん達に声をかけたりにしている。いつも通りの余裕な先輩だ。

わけがわからないまま、僕も消えた花火をバケツに突っ込んでから、花火を取りに向かう。

さつきは小さいのにしたが、なるべく長めの花火の方が取りに来る手間が減る。

なんとなく花火を物色していると、ふいに背後から誰かに服の裾をつかまれた。

振り向くと、そこには美沙が。さつき目が合った時と同じような、何とも言い難い表情をしていた。

美沙の唇が、何か言いたげに動いて。でも美沙は結局何も言わずに真央ちゃんの元に駆けて行った。

美沙も先輩も、どこか様子がおかしい。不可解な気持ちのまま、残った花火の本数だけが少しずつ減って行っていた。

## 第9話 彼女の仮面の、その下に〔3〕

花火を見に行っただのはついこの間だけど、自分でするのは久しぶりで。

夏の楽しいイベント。亜子さんのことなんてすっかり忘れて、私は真央ちゃんと2人、花火に夢中になっていた。

花火の光はまぶしいくらいに明るくて、すごくきれいで。見ていると何だか安心する。

だから私は、昔から花火が好きだった。夜の暗闇をかき消すほどの強い光。

最後に花火をしたのは、いつだっけ。そう考えてすぐ、私は考えてはいけなかったと後悔した。

……そうだ。最後に花火をしたのは、前の家族とだった。もう戻らない、家族だった人たちの笑顔。

楽しいことをしているはずなのに、どうして私はこんなにも、さみしい気持ちになってしまってるんだろう。

「……きれいだね」

隣でピンク色の花火を持っている真央ちゃんが、しみじみとしたようにつぶやいた。

私の花火は、黄色から水色に色を変えて、光を放ち続けている。とてもきれいだ。思わず見とれてしまうほど。

だけどその花火が、だんだんと光の強さを失いつつあるって気づ

いてしまつて、何ともいえない気持ちになつた。

燃やして、消えて。そしてまた新しいのに取り替えて。でもすぐに消えるその光は、もしかしたら空の星よりもはかなげで。

それは怖さと、隣り合わせなんだつて。今まで花火をしていても、こんなこと考えなかつたのに。

沈んでいく気持ちを自分ではどうしようもなくなつてしまつて。助けを求めるように、私はお兄ちゃんを探した。

私の視線はすぐにお兄ちゃんを捕まえた。束の間に得る安心。でも私の視線はあの人も一緒にとらえてしまつた。

並んで座つてゐる2人。亜子さんとお兄ちゃんが一緒に居るのを見るだけで、余裕をなくしていく私。

余裕をなくせばなくすほど、まだ消えてしまつてはいない、大きくて深い不安が私を襲つた。

私に向けられるお兄ちゃんの笑顔があつて初めて、私は不安以上の幸せを実感できてゐるんだ。

どうしようもない気持ちでただ、お兄ちゃんを見つめていると、気持ちが伝わつたのかお兄ちゃんも私を見た。

お互いの視線が交差して。気持ちを隠しきれず、私はただ、視線をそらさずにいた。

「美沙ちゃん、火が消えてるよ?」

真央ちゃんの声が隣から私に向けられて、私はやっとお兄ちゃんから視線を外した。

真央ちゃんは不思議そうに私を見ていた。真央ちゃんは楽しんで

るのに。せつかくの楽しい雰囲気壊すわけにはいかない。  
不自然にならないように、私は笑顔を作った。

「あ、ほんとだ」

まるで今気づいたように、私がそう言って笑うと、真央ちゃんは「気付かなかったの？」とおかしそうに笑った。

そんなやり取りをしていると、亜子さんがこっちに歩いてきた。花火を取りに来たらしい。

亜子さんのことをこれ以上見たくないって思う嫌な自分に、気付きたくなかった。

真央ちゃんは亜子さんにおすすめの花火を取ってきて何本も渡している。いとこだつて言うけど、2人は本当に仲がいい。

とりあえず私も花火を取りに向かおうとしたけど、先客をみつくてどきつとした。

こんな不安定な気持ちでお兄ちゃんの近くに行くことを少しためらったけど、そばに行きたいと言う気持ちが勝った。

そつと近づいて、後ろから服の裾をつかむ。お兄ちゃんが振り向いた。

なんて声をかけようか、何も考えてなかったので、私は瞬時に混乱してしまう。

結局何も言えないまま、私は真央ちゃんの元に戻ってきてしまった。亜子さんはすでに元の場所で花火を再開していた。

お兄ちゃんに変に思われたかもしれない。まるで拳動不審だった。

「真央ちゃん、私、のどかいちゃったからジュース持ってくるね！ 真央ちゃんも飲む？」



私が一気にまくし立てると、真央ちゃんは私の勢いに押された様子だったけど、頷いてくれた。

家の中に戻ってきた私は、とりあえずコップにジュースを注いで飲んだ。とにかく気持ちを落ち着けたかった。

「楽しめてる？」

飲み干したところで、ふと、背後から聞き慣れたような声が飛んできた。

振り向くと、声の主はお兄ちゃんだった。さつき挙動不審なところを見せちゃったから、気にして来てくれたのかもしれない。

「うん。すごく楽しいよ。花火できて、よかった」

私は笑顔でそう言った。うそのない私の本心だ。また思い出が増えたことを嬉しいって思ってる。

だけとお兄ちゃんはさつきの私の様子から不安を見抜いてしまっていたのか。

「……美沙。何か悩んでる？　ためこまないで、話してほしい。それが家族ってことだよな？」

ためらいがちに言い方に、氣遣ってくれてるのを感じた。優しいお兄ちゃん。一瞬、何もかも話して楽になりたいと思った。

けどそうじゃない。そんなことしても何の解決にもならない。私の心の問題なんだ。

何も言えない私に、お兄ちゃんは心配そうなまなざしのまま、でもにこりと笑ってくれた。

「来年もまた、しょうか。花火」

私は笑顔を作ることでもできず、そんな言葉をくれたお兄ちゃんを呆然と見つめる。

お兄ちゃんはずっと、私を安心させようとして言ってくれたんだ。けど約束は、“未来を望むこと”だ。

お兄ちゃんとのこれからが、続くことを望む。それだけはだめだと思った。

脳裏に浮かぶ、過去の家族との記憶。あつたかい今日の思い出。どちらの中でも変わらず、きれいな光を放つ花火たち。

花火は永遠なわけじゃない。でもきつと一瞬だからきれいなんだ。ずっと残っていくんだ。だから私はやっぱり、花火が好き。

“幸せは失うものじゃないと思うんだ。たとえばそれが永遠じゃなくても、一瞬でも、幸せな気持ちはずっと蓄積していつて。それがまた、美沙ちゃんを幸せにしてくれる”

今を見つめること。私を支えている、いつかもらった大切な言葉。この幸せが本物だと実感するほどに。

すごく幸せだよ。嬉しいよ。この気持ちは、ずっと消えないよ。ううん、消さないから。

けどどうして願ってしまうの。もっと増えて欲しい。永遠になつてほしい。お兄ちゃんとの時間が、ずっと続いて欲しい。

永遠に消えない花火なんてないのに。いつか消えてしまうことを嘆くよりも、綺麗な一瞬を大切にしたいのに。

私……よくばりになったの。たくさんの幸せをもらったのに、まだ足りないって。

「美沙？ どうしたの？」

お兄ちゃんがまた心配そうに私を見ながら言った。心配させちゃだめだ。元気に振る舞わなきゃいけないのに。

もうそんな余裕も失ってしまった私は、心を隠すこともできず、思わず呟いていた。

「先の、見えない約束は、怖い……」

結局、何も変わってない。納得したふりをして。わかりきったふりをして。でもそんなの、ただの強がりに過ぎなくて。

だから亜子さんのことなんて簡単なきっかけで、すぐにはがれ落ちる。

信じる気持ち。不安な気持ち。ずっと矛盾してるの。どっちも大きくなくていくの、止められなくて。それが、苦しい。

その時突然、私の視界が反転した。何が起ったのかわからなくて、私は瞬きを繰り返し返す。

手に持っていたプラスチック製のコップが、音をたてて床に落ち、転がって止まったのが見えた。

一瞬、お兄ちゃんの悲しそうな瞳を見た気がする。でも今は私の視界の中にはコップしかなくて、お兄ちゃんの顔は見えない。

すぐ近くに、お兄ちゃんの鼓動を感じて。ふんわりとした例えようもない安心感に包まれる。

抱きしめられている、ということに気づいたのは、それから少し後のことだった。

## 第9話 彼女の仮面の、その下に〔4〕

涙を見たわけじゃない。でも泣き顔よりももっと、悲しい目をしていると思った。

星のない夜が怖いと言う美沙。泣き虫なくせに、どんなに辛い時もひとりで耐えようとする美沙。

僕が家に帰ると、決まって駆けてくる美沙。僕が帰ってきたというだけのことを、まるでとても幸せなことのようになう。

でも、ほっとしたようなその瞳の中に、不安の色が見え隠れしていることにも、気づいていた。

最初はそれを、微笑ましいとさえ思った。でもきつとそれは、そんな簡単なことじゃない。

確実に帰ってくるはずの僕を待つだけのことが、どうしてそこまで美沙を不安にさせるのか？

ずっと感じていたのだ。だけど今まで他人の気持ちになんて、干渉しようとしなかったツケが回ってきたのか。

どんなに頑張ってみても、美沙が心に抱え込んでいるものが何なのかわからないままで。

何が美沙にそんな顔をさせるのか、何が美沙を不安に縛り付けているのか。

ただ、美沙のそんな顔を見たくない。させたくない。募る想いが、自然と僕を動かして

気づけば、身体が勝手に動いていた。僕の行動に驚いたのか、美沙は僕に抱きしめられたまま固まってしまった。

そのまま時間の感覚さえ鈍くなっていく。まだほんの数秒なのか、それとも数分だったのか。

だけどそんな時間が永遠に続く訳もなく。終わりを告げるきっかけは、すぐにやってきた。

扉の方からのわずかな物音。だけど、僕も美沙も黙りこんだままのしんとした台所に、それはとても大きく響いた。

台所の入口に視線をやってみると、そこには、さっきの小さな物音を発したであろう人物が立っていて。

彼女もまた、美沙と同じように固まってしまっていた。

「亜子さんっ!？」

美沙の上ずった声が彼女の名前を呼び、流れていた沈黙を破った。同時に、急いで僕から離れる美沙。

見る見るうちに顔を真っ赤に染め、美沙は言葉を失ってしまっているようだった。

そこで僕も、やっと我に帰った。幼い妹に、僕は一体何をしているんだ。まったく自分らしくもないことを。

気まずい空気の中、唯一そんな空気に負けない先輩が、少し困ったように笑って口を開いた。

「真央が、バケツの水こぼしちゃって、水道の場所聞きに……。邪魔……しちゃった？」

冗談めかした言い方。いつも通り、余裕の先輩。何も思われていないようだった。そう、思ったのに。相変わらず笑みの形を作った先輩の口からは、思いもよらない言葉が出てきた。

「ねえ。もしあたしが泣いたら、さ。……同じように、抱きしめてくれる？」

いつもと同じ声のトーン。だけど、先輩は俯いてしまつて、一向に顔をあげようとしなない。

けれど気づいてしまった。俯いたその頬から、一筋こぼれ落ちていった涙

「先輩……？」

先輩の様子もおかしいとは思っていたけれど、予想外の展開だった。僕は恐る恐る先輩に声をかける。

すると先輩がやっと顔を上げた。やっぱりいつも通りの先輩が、笑ったまま言った。

「なんて、らしくないよね」

あまりに自然だったので、一瞬、さつき見た涙は見間違いだったのかと思った。

けどそうではなかったらしい。先輩は耳もとのピアスに手をやりながら、背中を向けてしまった。

「……ごめん、用事思い出しちゃったから帰るね。拓斗、真央は送ってあげてくれる？ もう暗いし、夜道は危ないから」

「何言つて……そんなの、先輩だって同じじゃ……」

自然なようで不自然な先輩の物言いに、僕は不可解な気持ちのまま言葉を言い淀む。

付き合いはそれなりに長いが、先輩は昔から、自分の身を守ることに ついてもきつちりとした人だった。

夜道のひとり歩きなんて絶対にしないタイプだ。それがこんな行動をとるなんて明らかにおかしい。

先輩に何が起こっているのかはわからないが、とにかくこのままひとりで帰すのはまずいと思った。

先輩と真央ちゃんは歩いてここまできたらしいので、当然、帰りは送っていかうと思っていたのだ。

理由は、さつき先輩が自ら説明してくれた通りだ。夜道は危ない。先輩は真央ちゃんについてだけ言っ たつもりのようなが。

僕がそんなことを考えている間に、先輩はためらいなく玄関に向かって歩き始めてしまった。

無理にでも送るくらいのはすべきだ。咄嗟に後を追おうとしたが、その時、後ろから服を引っ張られた。

振り向くと、必死な顔をした美沙が僕を見上げていた。

先輩の様子がおかしいことに気をとられてしまっていたが、美沙だって今日は様子がおかしかったのだ。

それなのにさつき勝手に抱きしめ、さんざん動揺させておいて、このまま美沙を置いてはいけない。

冷静に考えて、先輩を放ってはおけない。でも心の中、感情的な部分が僕をためらわせて。

困り果てた僕は、どうしていいのかわからなくなってしまった。表情から、美沙も同じように困惑しているのが伝わる。

一瞬、美沙も一緒に連れて行こうかと思った。でもその場合、真央ちゃんがひとりになるので、必然的に真央ちゃんも一緒に、ということになる。

態度からしてひとりになりたい様子だった先輩に、大勢についていくのは適切じゃないだろう。

そんな風にして台所に立ち尽くす僕と美沙の所に、また別の足音が慌ただしく近付いてきた。

「拓斗さん！ お姉ちゃんがひとりで

」

派手な音をたてて扉を開け、慌てて入ってきた真央ちゃんは、部屋に入ったと同時に言葉を途中で切った。

瞬間、びっくりとした美沙の手が、しっかりとつかんでいた僕の服の裾から離れていった。

「ごめんね。私大丈夫だよ！ だから行ってきた？」

美沙がそう言って作り笑い、元気なふりをする。相変わらず下手な演技だ。大丈夫なわけがない。

だけど今は、美沙のその下手な演技に甘えるしかなかった。ほんと美沙の頭に手を置いてやると、今は頼りなげな色をした大きな瞳が僕に向けられた。

「ごめん。すぐに帰ってくるから」



そんな一言を残して、僕はまだためらおうとする気持ちを抑え、家を後にしたのだった。

## 第9話 彼女の仮面の、その下に〔5〕

次々と、めまぐるしく展開していく目の前の出来事に、頭がついて行けてなかった。

ただ、私の心の中にぽっかりと浮かんだように残って行つたのは、お兄ちゃんの腕の力の強さと、思いがけない彼女の涙。

お兄ちゃんは、亜子さんを追いかける。そんなことは考えなくてもすぐにわかった。

だけど行かないでほしかった。どうしても。理由なんて分かんない。ただ、亜子さんの所に行つてほしくなくて。

私に引き止められたお兄ちゃんが、困つたように私を振り返つて、  
すがるような気持ちだった。

お兄ちゃんは、私の手を振り払わない。どんな状況であっても、  
お兄ちゃんはひたすら優しいから。

そのことが、大きな罪悪感となつて私の心を圧迫していた。

だから、真央ちゃんが入ってきた瞬間、私は反射的にお兄ちゃん  
を解放した。

状況的に見ても今、お兄ちゃんは亜子さんの所に行くべきで。真  
央ちゃんもそう思っていて。

だけど、私の中の何かが警告音を発してる。今、お兄ちゃんを行  
かせてしまったらだめだって。

彼女の涙が告げる想い。もしかしたら、亜子さんの想いが、お兄

ちゃんに届いてしまうかもしれないって。

「私、大丈夫だよ！ だから行ってきて？」

矛盾したまま、だけど私はこう言うしかなかった。それでも本当は、見抜いて欲しかった。

行かないでほしいって。まだそんな未練がましいことを考えていた。

「……ごめん、美沙ちゃん」

私の願いもむなしく、お兄ちゃんが行ってしまってから。2人になった部屋で、真央ちゃんがぼつんと呟いた。

私は、無言のまま首を横に振った。ただ、お兄ちゃんが亜子さんを送りに行っただって、それだけの話なのに。

亜子さんが相手だと言うだけで、穏やかでいらなくなる。そんな自分自身が嫌になりかけていた。

できるならひとりになりたかったけど、真央ちゃんを追いつくわけにはいかないし、それは無理な話だった。

そんな状況の中、私はどうしても真央ちゃんの顔が見れずにいた。

「……お姉ちゃんはね。みんながお姉ちゃんのこと、強い人だって決めつけてるけど。本当は違うの。本当は……ひとりで泣くことしかできなくて、不器用で弱い人なの。だから今、ひとりにしちゃだめ。そしてね、その役目は、拓斗さんじゃなきゃだめなの」

真央ちゃんがぼつりぼつりと話を続けた。そんなこと私に言われたって、と思った。わかんない。わかりたくない。

いやだ、自分が嫌いだ。以前よりもずっとずっと、亜子さんのことと嫌いになってる。

うつん、そうじゃない。亜子さん自体が嫌いなんじゃなくて、お兄ちゃんに近づいてくるあの人が嫌い、怖いんだ。

嫌なんだ、私。お兄ちゃんをとられたくないって思ってる。一人占めしたいって思ってる。

最低だと思った。こんな自分がすごく嫌いなのに、どうして。

どうして大嫌いな自分のまま、こんなにお兄ちゃんのこと大好きなんだろう。

私が何も言えずにいると、真央ちゃんが逃げようとする私の目を視線でつかまえて、のぞき込んできた。

「拓斗さんが、泣いてるお姉ちゃんのことほっとくような人だったら、美沙ちゃんは嬉しいの？」

怒ってる風でもなく、軽蔑してるわけでもなく。ただ純粋な質問として、私にそんな言葉を投げかけてきた真央ちゃん。

違う。お兄ちゃんの優しいところが好きだ。大切にしたいなら、お兄ちゃんの優しさを、私が奪っちゃだめなんだ。

少しだけ素直になった心の中、涙がにじんだ。わかってる。この気持ちは、単なる「やきもち」だって。

私の大切な恋心は、時々私を不自由にする。切なくもさせる。不安にもなる。心が弱くもなる。

でもこんな気持ちがなかったら、今の幸せはきつと半分くらいになってるのかもしれない。

「美沙ちゃんの笑顔、変わった。初めて会ったとき、すごくさみし

そくに笑う子だなんて思ったんだよ？ …… きっと、美沙ちゃん  
笑顔を変えたのは、拓斗さんだね」

にこりとしながら真央ちゃんが言った。そんなこと、言われて初  
めて気づいたけど。

お兄ちゃんが大好きだって気持ち、私をこうして変えていく。  
それはとても嬉しいことだと思った。

今日のこと、亜子さんとお兄ちゃんの関係が、どう変化するの  
か、それとも何も変わらないのかはわからない。

だけどうなっただって私は、お兄ちゃんのことを大好きなこの気  
持ちを、大切に続けようと思った。

そうじゃなくても多分、お兄ちゃんへの気持ちは大きすぎて、消  
える気配も見せないから。

第9話 彼女の仮面の、その下に「5」（後書き）

明日も、更新できそうな感じなので、更新する予定ですのでぜひ見に来てくださいね。

次話は拓斗視点です。

## 第9話 彼女の仮面の、その下に〔6〕

気だるくなるような、暑さだった。先輩を探して、僕は夜の道を走っている。

初めて会ったときから、強い人だと思っていた。どんな人間を前にしても、その瞳の中には揺らぎというものがなく。

自分という人間を、しっかりと認識していて。言ってみれば彼女は、本当に先輩らしいひとだった。

面倒見がよく、いつも完璧に身だしなみを整えていて、その容姿と内面、相まって高まる人気。

だけど僕は、そんな先輩が好きじゃなかった。元カノの友達だった先輩は、僕の冷めた態度にしばしば文句を言った。

その時の僕は、誰の内面にも干渉しない代わりに、僕自身の内面にも、誰にも干渉しないでほしかったのだ。

そんなことを思い出して、自分は変わったな、と思った。以前の僕ならば、きっとこんな風に先輩を追ったりしなかっただろう。

僕自身の内面の変化。その変化の原因となった人物として、思い当たるのはたったひとりだ。

置いてきた頼りなげな大きな瞳が、僕の心にずっと引っかかっていた。

しばらく走って、すぐに見つけた後ろ姿。後ろ姿をとらえたことで、とりあえず僕は走るのをやめて歩みに変えた。

先輩、と声をかけようとしたが、その前に先輩が立ち止まった。僕に気づいたのだろう。

だけど先輩が振り向かないので、何となく僕もそれ以上近づけないまま歩むのをやめた。

お互いがお互いを認識していながら、少し離れた場所で立ち止まっていた。近づきすぎず遠すぎず、微妙な距離感だ。

「本当はね。拓斗なら、追いかけてくるかなってわかってた。……でも困るかな、今は」

先輩が僕に背中しか見せないまま、唐突にそんなことを言った。予想通りの反応。拒絶されることはわかっていた。

夜は危ないとか、先輩の様子が変わったとか、追ってきた理由はいくつかあって、それを説明すればいいのだろうけど。

それを今、言ってもあまり意味がない気がした。それになんとなく、先輩の態度については触れてはいけない気がする。

「送りますよ。そのために来たんです」

僕はその一言でここまで来た理由を片づけることにした。

実際どうでもいいことだ。先輩がひとりで夜道を歩くことがなければ。

先輩が今、心の中に誰にも踏み入れたくないと思っていることくらいはわかる。僕としてもこれ以上踏み入るつもりなんてない。

ただ、僕に事務的にでも送られると言うことを、先輩が受け入れてくれれば問題はない。



だけど先輩はやっぱり簡単には納得してくれず、首を横に振り否定の意を示してきた。

「そんなのいらないよ。知ってるでしょ？ あたしって強いんだ。誰かに守られなきゃいけない、美沙ちゃんとは違うの」

先輩の背中から、まるで当然のことでも話すような言い方で、そんな言葉が飛んできた。

突然、何の脈絡もなく美沙の名前が出て来たのには驚いたけど、強いとか弱いとか、そういう問題じゃない。

僕がそうたしなめようとしたとき、けれど僕が何か言うより先に先輩がくるっと振り向いた。

先輩はいつもどおり笑みを浮かべていたけど、なんだかぼんやりとした笑顔の印象だった。そのまま言葉を続ける先輩。

「想つてるとどうしても、わかりすぎちゃったりするから。いつそ鈍感だったら楽だったのかな。変だよ、あたし……切ないんだ」

先輩の言うことは最近いつも意味深で、でも僕にはわかることができる。

ただ、以前の先輩と違うということだけはわかる。さっき先輩が自分で言った通りだ。

「どうしたんですか？ らしくないですよ、本当に」

僕がそう問いかけると同時に、先輩の笑顔が揺らいで。僕は驚いてしまった。

いつも余裕の笑顔。年上の顔を決して崩さない先輩。だけど今、目の前に居る先輩は泣きそうな目をしている。

「拓斗は、どういふのがあたしらしいって思ふの？　あたしのこと……何もわかってないくせに」

先輩の声が、責めるような響きを帯びて僕に向かつて来て。特に深い意味なく言っただことだったが、僕はそれが無神経なことだったと思った。

先輩の言うとおり、僕は先輩のことを何も知らないばかりか、特に知ろうともしてこなかったのだ。

何と言葉を返していいのかわからず、僕は黙るしかなかった。すると先輩が、今度は苦笑のような笑いを小さくこぼした。

「……ごめん、違うよね。何でもわかったふりして、余裕ぶって。一番余裕ないのは、あたし自身だった」

その言葉の内容に、声の抑揚に、先輩の不安定な気持ちが複雑に揺れ動いているのが、僕にも伝わる。

そしてそれに一番戸惑っているのは先輩自身なんだろう。

もうその顔から笑みも、泣きそうな表情も消してしまった先輩の瞳が、僕をまっすぐに向いて。

一瞬見せたためらいも、一瞬のまま消してしまい。先輩が告げるその言葉は、思ってもみないものだった。

「あたし、拓斗が好きなの」

先輩の静かな声が、夏の夜の静かな通りの中、僕の中に確かな衝撃を残していった。



第9話 彼女の仮面の、その下に「6」（後書き）

読んでくださっている方々、ありがとうございます！

明日は無理かもしれませんが、次話も近いうち更新したいと思っ  
ますので、また見に来てくださいね

## 第9話 彼女の仮面の、その下に「7」

考えたこともなかった、そんな事態が今、目の前で起きていて。僕は先輩の言葉を、素直に信じられずにいた。

ただでさえ、人気があっても簡単になびかないひとなのだ。年下の僕は、当然対象外なものだと思っていたのに。

どうして先輩が僕を、と考えてみても、思い当たることがまるでない。疑問ばかりが増えていくだけだった。

「気づいてなかったでしょ？ 気持ち隠すのは上手い方なの」

先輩がまた、少し困ったように笑って言う。そして一瞬ためらいを見せた後、僕の方に向かって一步を踏み出した。

僕はそれにはっとする。驚いたあまりに、呆然としたまま何も言えずにいた自分をやっと自覚した。

先輩は恐る恐ると言った仕草で、何気なく体の横にぶら下げていた僕の手を取った。

「拓斗の……心の中が見たい」

言いながら、先輩が僕の手を胸のあたりの前まで持って来て、両手で握った。

触れてきた先輩の手は、震えていた。……気づかなかった。先輩の手は美沙と同じように小さくて。

ああ、そうか。先輩は先輩だけど、その前にひとりの女なんだと。邪魔をしていたのは、先入観。

今まで先輩のことを、年上で、強い人だと決め付けて、そんな風に扱いも見もしなかった自分に少し罪悪感を覚えた。

だけど、気持ちには答えられない。僕の心の中には既に、消せない感情が芽生えてしまっているから。

目の前に居る先輩が今、先輩という仮面を脱ぎ棄てて、心をさらけ出している。それはきつととても勇気のいる行為で。

だから、真剣に答えなければと思った。正直に、自分の気持ちのありのままを。

「あの子は、僕の妹で。でもそれだけじゃなくて……どう言ったらいいのかわからないけど……とても、大切に。大切だから、どう大切にすればいいのかわからなくなる」

そう言い終わってみて、誰かに対して自分の気持ちを言葉にするというのは、案外難しい事なのかもしれない、と思った。

言葉としてうまく浮かんでこなかった。でも一番じっくり来るのが、『大切』だという言葉で。

思い出そうとしなくても、笑顔が浮かぶ。そしてその笑顔がまた見たくなる。それはとてもあたたかな感情。

僕の気まじめな返答がおかしかったのか、それともわざとなのか。先輩が小さな笑い声をもらし、それまでのはりつめたような空気をほんの少しやわらかくした。

「やだ。なんかそれって、初恋でもしてるみたいじゃない」

冗談のように、先輩が言った。だけど僕には、先輩と一緒にあって冗談として笑い飛ばすことはできそうになかった。

困ったことに、的を射ているのだ。先輩が言っていることは。僕は苦笑気味に口をひらいた。

「初恋、なのかもしれない。今まで、恋愛っていうのは自分の気持ちをコントロールしていくことだと思ってました」

それは、これまで僕が築いてきた恋愛観だった。感情的になっただけ、そこで終わりだ。

いかに客観的に、冷静に、相手と自分を見て恋愛できるか。だけど、美沙と会って、気持ちを自覚して初めて気がついた。

「でも、そうじゃない。本当は恋愛っていうのは簡単じゃなくて、コントロールが効かないものなんだって」

言いながら、僕は思い出していた。あのときの、衝動が体を突き動かす感覚。

美沙を抱きしめたその瞬間、僕の心を占めていたのは、きっと愛しいという感情だ。

美沙がまだ幼いとか、妹で、大切にすべき家族だとか。そう言った建前の話は建前でしかなくなってしまう。

「告白、するの？」

とても自然に握っていた僕の手を離しながら、先輩がなんでもない話をするように軽い調子で聞いてきた。

さっき無神経だと思った言葉を使うのもどうかと思うが、こんな状況にでもあっさりしているのは先輩『らしい』と思った。

そんな先輩の自然な態度に後押しされるように、僕はまた言葉を続けた。

「もう少し、このままの関係がいいかなって。それは逃げてるのか、そういうんじゃないんです。ただ……もっと美沙に、家族の温かさを教えてやりたい。気持ちを伝えるのは、それからだって遅くない。時間は、たくさんあるから」

僕が言い終わってから、一呼吸の間をおいて、先輩が気を取り直したような笑顔になって言った。

「好きなんだね、美沙ちゃんのこと。……だけど、ごめん。あたしも拓斗が好きなんだ。しばらく忘れられそうにないや……」

先輩はその一言を最後に、無口になった。僕もそれ以上何も言えなくて、そのままどちらともなく歩きだした。

無言のまま並んで歩く2人。先輩を家まで送り届けるのには、そんなに時間はかからなかった。

家にたどり着いて、僕が言葉を探していると、僕が何か言うよりも先に先輩が一言、「じゃあね」と言った。

余裕の笑顔。あまりにもいつも通りで、僕の方が拍子抜けするようだった。

だけど無理をしているんだろうということは、容易に想像がつくだけに、複雑で。

そのまま、元来た道に戻る、ひとりの帰り道。あまり晴れない心の中、なんとなく美沙の顔が見たいと思った。



## 第9話 彼女の仮面の、その下に〔8〕

真央ちゃんと2人になってすぐに、私たちは花火で散らかした庭を片づけていた。

まだ花火は残っていたけど、このまま続ける気にもなれない。そう考えると、亜子さんの存在も結構大きかったんだと思った。

私はバケツ周りに落ちた花火を集めて回っている。真央ちゃんは庭周辺に花火が落ちてないか見に行った。

花火は楽しいけど、やっぱりこうして片づけている時間は、現実を引き戻されたみたいで好きじゃない。

地面に視線を向け歩き回りながら、ふと、足下に落ちている終わった花火に気付いて、私はそれを拾おうと屈んだ。

その時、ポケットからケータイが落ちてしまつて、そしてそのケータイを拾おうと気をとられたのがいけなかった。

片手に持っていたビニール袋から、それまで集めて回つた花火までがばさつと派手に落ちていった。

うんざりする瞬間。自分でやったことだけに、疲れてしまった私はその場にしゃがみ込んだ。

拾い上げたケータイを意味もなくパコパコと開いたり閉じたりして見る。

余裕がなかった。強がつて見ても、つまりは好きな人が、ほかの女の人の所に行っちゃってるわけで。

なんとなく落ちた花火の軍隊を見ると、その中にまだ火をつけていない花火を見つけた。

ポケットにケータイを押し込んでから、私はそれを手に取った。何本かの線香花火だった。

ちょうどいいことに、私の反対側のポケットには、ローソクに火をつけるためのライターが残っている。

ためらいなく、私はその線香花火を構えて、ライターでかちりと火をつけた。

ぽつりと、ちいさく灯る黄色い光。それはやがてぱちぱちと音をたてて、一生懸命に光を放ち始める。

「きれい……」

思わず、ひとり呟いていた。真央ちゃんは片づけをしているのに、私は何をしてるんだろう。

そういう思いもあるけど、この花火が消えるまではこのままにようと思っただ。

前に花火をした時、“パパだった人”が、線香花火は最後まで落とさずに燃やすのは難しいと言っていた。

ちよっとした手の動きでも致命傷。だから一番繊細で、やさしい花火なんだって。

そういうちよっとした難しいことってというのは、願かけの対象になっただりする。

あの時、私がこっそり線香花火に願ったのは、ずっとみんなと、家族と一緒にいられますようにって。

だけど私もそのままじゃなくて。私の家族もそのままじゃなくて。

今の私が願うのは。……願うのは

「何してるの？」

ふと頭の上から飛んできた声は、聞き慣れた、とても大切な人のものだった。

その声に反応したせいか、私の手がほんの少し揺らぎ、ぽとりと大きな光の玉が地面に落ちた。

「落ちちゃった……」

私が思わず落胆した声で呟くと、お兄ちゃんも私の前にかがんで目線の位置を合わせた。

かと思うと、お兄ちゃんは残りの線香花火に手を伸ばし、そこからとった1本を私の手に握らせた。

お兄ちゃんもライターを持っていたらしく、お兄ちゃんのポケットから取り出されたそれで、花火に火がともされる。

あつという間に、今度はお兄ちゃんの手から生まれたちいさなひかり。

さつき落としてしまったこともあって、私の手は緊張からか少し震えてしまっていた。

すると、お兄ちゃんの手が今度は花火を握りしめる私の手に伸びて。その大きな両手は私の両手を簡単に包み込んだ。

「大丈夫。2人分の手があれば、最後まで守れるよ」

お兄ちゃんにはにこりと笑い、もったもお兄ちゃんらしいともいえるそんな言葉を口にした。

花火のわずかな光が、2人の両手で繋がれて。泣きたくなくなるような感覚。好きだと思った、とても。

「亜子さんと……付き合うの？」

ぼつりとこぼした私の言葉。待っている間、膨らんでいった嫌な妄想。

お兄ちゃんは驚いた顔をして私を見たあと、静かに微笑んで、でも視線は線香花火に向け直してから言った。

「いや……」

告げられたのはたった一言。だけどざわざわしていた私の心は少し、落ち着きを取り戻した。

私が見つめるお兄ちゃんの瞳に、花火の光が映っている。そこでまた、すぐに気づいてしまう。

どうしようもなく優しい、お兄ちゃんの瞳の色。どうしてお兄ちゃんはこのように、私を切なくさせるのが上手いんだろう。

「今は……、妹の世話だけで、手一杯だから」

そう言っ、お兄ちゃんがまた私を見て笑ってくれた。夏の思い出になるような、とてもいい笑みだった。

2人分の手の中で、線香花火は途中で落ちることなく、いつの間にか自然に光を失っていた。

だけど不思議とさみしくなかった。

## 第10話 笑顔の向こう側〔1〕

花火の後片付けもすっかり終えて、僕たちは3人で真央ちゃんを送るべく、彼女の家に向かった。

先輩は真央ちゃんの家泊まるらしく、さっき先輩を送り届けたのも真央ちゃんの家だった。

結果、僕は同じ道を2往復もするはめになったのだが、それはいいとして。

辿り着いた真央ちゃんの家には、先輩がいるはずなのに電気がついていなかった。

僕と美沙を玄関に上げて、真央ちゃんは先輩が泊まるときいつも使っているという部屋を見に行った。

そして戻ってきて告げたのは、大丈夫、一言だけだった。電気はついてなくても先輩はちゃんと部屋にいたらしい。

心が少し痛んだが、こればかりは時間が解決するほかないのかも知らない。

その微妙な空気から、さすがに僕と先輩の間に何があったかは知らないだろうが、何か察したのか。

2人の帰り道、歩幅をあわせて歩く僕に、美沙の手が僕と手をつなぐとそろそろとよってきた。

そのまま、自然と繋がれた2人の手。美沙が雲をつかむような表情で、僕を見上げる。

とても不安定で、ともすれば消えてしまいそうだと思った。

そんな顔をされると、すぐにちらつくのは、美沙の心に引っかかっている何か。

それは僕の心にも重くのしかかるようで。だけど僕はすぐに、その理由を知ることになる。それは意外なきっかけからだった。

大好き！お兄ちゃん      第10話      笑顔の向こう側

長い夏休みだと思っても、それは永遠じゃなく。8月も後半に入り、次第にセミの鳴き声も少なくなりつつある。

夏の終わりが近づいていた。それでも暑さは相変わらずで、未だクーラーは必要のようだ。

美沙が食べつくしたかと思ったが、辛うじて一本残っていたアイスをほおばりつつ、僕は居間で大学の課題をこなしている。

今日は、美沙は家にいない。真央ちゃんの家遊びに行くと言って出かけて行ったのだ。

花火をした日以来、美沙はいつもどおりに戻ってしまい、もう不安な表情を見せることはなくなっていた。

強がっているのか、無意識に隠しているのか。美沙の笑顔はそのままだ。心から嬉しそうに笑う。

だけどふとした時に表情に出る不安の影。僕だって仮にも家族で、そんなに簡単に見落したりしない。

釈然としない気持ちもそのままに、とりあえず僕は課題を続けた。

考えても仕方ないことだ。

今無理に聞き出そうとしなくても、今はお互い歩み寄ることの方が先だ。

これから先、家族として過ごしていくうちに、もっと心の距離が近くなったら、美沙の不安の原因もわかってやれるだろうと思った。

そんなことを考えた矢先だった。僕のケータイが電話の着信を伝えるべくふいに鳴り始めたのは。

ディスプレイに表示された相手の名前を見て、僕は首をかしげた。今は新婚旅行中のはずの父親からだったのだ。

通話ボタンを押し、もしもし、と僕が言つと、受話器の向こうから父さんの声が、遠慮がちに拓斗、と僕の名前を呼んだ。

あまり電話を好まない父さんがかけてくるのは、大概用事のあるときだ。僕は父さんが切り出すのを待った。

けれどもらしくもなく歯切れの悪い父さんは、ためらっているのか一呼吸の間をおいて、当たり障りのない話を始めた。

『美沙ちゃんとは、上手くやれてるか？』

「うーん、どうだろう。まあまあってとこ。結構、家族らしくなってきたかな」

美沙の不安を消してやれるほど、兄らしくなったわけじゃないので、僕は言葉を濁しつつ笑い混じりに答えた。

とにかく、父さんの前置きに付き合うのもいいが、長電話するつもりもない。そろそろ用事が気になるところだ。

「で、どうしたの？ 何か用事があって電話してきたんだろうけど」

話を打ち切るように僕がそう告げると、受話器の向こうで、父さんはなぜか一瞬ひるんだようだった。

そして観念したように溜息を吐き、やっとその用事を話し始めた。

『話があるんだ。電話口で話すのもどうかと思ったんだが……。多分……離婚になると思う』

父さんが言った、突然の言葉を頭の中で処理しきれず、僕は一瞬思考回路を止めてしまった。



## 第10話 笑顔の向こう側〔1〕（後書き）

完結まで突っ走ります。応援よろしくお願いします

明日も更新にきますので、よろしければまた、見に来てやって下さいね。

## 第10話 笑顔の向こう側〔2〕

考えてもみない展開だった。まばたきを繰り返しながら、僕は眉根を寄せ受話器に向かって問いかける。

「……は？ 何言ってるのか、よくわからないんだけど……」  
『拓斗には黙ってたが、彼女、離婚を繰り返してたらしいんだ。そして今回もやっぱり……ってことらしい』

僕の少し強い口調にもひるまず、父さんが淡々と告げる。どうやら本気らしい。

冗談を言っているのかとも思ったが、声音や話し方からただならぬ雰囲気を感じたのだ。

「……どういう話？ 初対面の子供たちを残して、勝手に旅行に行った結末が、これ？ 本気で言ってる？」

本気だとわかっていながらも、そう責めずにはいられなかった。信じられない展開だった。

僕も混乱しているのかもしれない。家族になろうと努力している矢先、また他人に戻るなんて、そう簡単に受け入れられない。

しかもこんなに早く、短期間でだ。新婚旅行の時もそうだったが、今回はもっと非常識極まりない話だ。

『……僕も、離婚なんてしたくないと言ったよ。でも彼女は、決して誰も見ていない。誰と結婚しても。すでに、空の星に心を奪われてしまっているようにしか、見えないんだ』

父さんのその言葉に、僕はとうとう言葉を失ってしまった。僕が  
どうこう言ってももう、どうにもならない話なんだろうか。

通話を終えて、僕は意味もなく床に寝転がってみた。もう課題を  
する気もなくし、僕は額に手のひらを当てる。

反対するにしてもなんにしても、とにかく今は頭を整理して、気  
持ちを落ち着けたかった。あまりにも突然な話で。

父さんはもう一度よく話し合って、慎重に決めたいと言っていた。  
だから帰ってくるのは予定通り、夏休みの終わり頃だと。

だけどそんなに時間がある訳じゃない。むしろ、すぐと言ってい  
いほど短い時間じゃないか。

結論は、すでに出ているんだろう。繰り返されてきたという離婚。  
先の見えない約束は怖いと言った美沙。こんな形で、美沙の不安  
の正体に気づくなんて。

空の星に囚われているのは、美沙だけじゃなかったのか。美沙が  
星になったと言った、美沙の本当の父親。

このまま離婚になったとすると、美沙と僕は兄妹でなくなる。そ  
うなったとき、美沙が心配だと思った。

でもそれだけじゃない。僕は自分で思った以上に、ショックを受  
けているようだった。

他人になる？ 僕と美沙が？ 短い日々だったが、お互いが必死  
になって築いてきた絆。

時間はたくさんあると思っていた。家族としての時間はこれから  
も続き、ずっと美沙の笑顔を見守っていけるのだと。

それなのに、こんな展開になるなんて、誰が予想しただろう。…  
…美沙は、わかっていたのか

その時、ふと何かがかぶさってくる気配がして、僕は覚醒した。覚醒したということは、僕はいつの間にか眠っていたらしい。

次第にはつきりしていく視界の中、もう随分見慣れた顔が、寝転んでいる僕を見下ろしていた。

「あ、ごめん。起こしちゃったかな。そーとしたつもりだったんだけど」

美沙がそう言って照れ笑う。かぶさってきたのはタオルケットで、美沙がかけようとしてくれていたらしい。

いつもどおり無邪気な笑顔を浮かべた美沙は、机の上にちらつと目をやってから、さらに面白そうに目を細めた。

「めずらしいね！ お兄ちゃんが居眠りするなんて。宿題の途中で眠くなっちゃったんでしょ。わかるー」

言って、美沙がうんうん、ともしっかり頷いている。机の上、開きっぱなしの課題を見て、その結論に至ったんだろう。

美沙はにこにこ笑っているが、僕はと言えば体を起こしてみたものの、上手く美沙に応じることができずにいた。

美沙はいつもどおりでも、僕の中での現状は、さっきの電話で180度変わってしまったのだ。

そんなことを知る由もない美沙が、またおかしそくに笑いながら、ふと僕の頭に手を伸ばした。

「ふふ。寝ぐせついてるよ？」

そう言った美沙の手が、何度も僕の頭を撫でつける。寝ぐせを直そうとしているんだろう。いつもと立場が逆になっている。

だけど僕は寝ぐせどころじゃなかった。僕が何も反応しないので、さすがに異変に気づいたのか。

「お兄ちゃん？」

美沙がやっと、その大きな瞳を寝ぐせから僕の顔に向けながら、不思議そうに問いかけてきた。

美沙の目を見て、僕はようやく微笑むくらいの余裕を取り戻した。

「美沙、今から時間ある？ どっか連れて行ってあげるよ」

思いつきのような言葉を、気付けば僕は口にしていた。

連れて行ってあげる、なんて言いながら、一緒に出かけたいのは僕の方かもしれない。

だけど予想通りというか、期待を裏切らない美沙はぱつと表情を明るくした。

美沙の方からせがまれて出かけるのは珍しいことじゃないが、僕の方から誘ったのは初めてなのだ。

とりあえず寝ぐせを直してから、僕ははしゃぐ美沙と家を後にしたのだった。

第10話 笑顔の向こう側〔2〕（後書き）

まだ見ていただけますか？？

リクいただいた「美沙と拓斗の平和デート」です（笑）

平和……だと思われます。たぶん。

## 第10話 笑顔の向こう側〔3〕

外に出るとすでに、日は暮れかけていた。目的地は決めていなかったけど、どこに行くか迷うことはなかった。

窓を半分ほど開けた助手席に座る美沙の猫っ毛が、ふわりと風になびいて。

目的地にたどり着くまで、目一杯風に乗ってから、車を止めると同時に落ち着いた。

それまで何も言わずに、助手席に乗って窓の外を眺めていた美沙だったが、そこでやっと僕を振り向いて一言。

「どうしてまた、この海に？」

嬉しそうなわけでも、はしゃいでいるわけでもなく、あくまで不思議そうな表情をして。

いつか初めて来たときのように、車を降りて走って行くわけでもない。

以前来た時と同じように、夕方の海は綺麗な光を反射させている。でも美沙の反応は以前と同じわけじゃない。

この場所は変わらなくても、そこを訪れる人間たちは変わっている。それは当然のことだ。

でも今はそれが少しだけ、怖いこともあるように感じた。

「原点回帰、かな」

僕がそう言ってみると、美沙は言葉の意味がわからなかったのか小首をかしげた。

けれど美沙はそれ以上聞いてくることはなく、そのまま自然と2人、車を降りて砂浜まで歩いて行く。

どうしてまたこの海に来たのか。

一度来たことのあるこの海よりも、もっと気の利いた場所はたくさんあったはずなのに。

つまりはただ、僕自身が、美沙と一緒にここに来たかっただけなのだ。

その深い意味なんて、自分でもよくわかっていない。確かめたかったのかもしれない。

しばらく2人佇んで、なんとなく海を見やっていた。

ふと隣に立つ美沙を見ると、魅入っているようではんやりとしているような微妙な表情で海を見つめていた。

結局は僕の希望のみでここに連れてきたのだ。美沙はもっと別な場所に行きたかったのかもしれない。

「楽しい？」

こんな状況で楽しいも何もないとわかっていながら、思わず聞いてしまった。

けれど美沙は僕のほうを向いたかと思うと、嘘のない満面の笑みを浮かべて言った。

「うん、すごく楽しいよ。あのね、お兄ちゃん。私うれしいんだよ。一緒にいられること」



美沙があまりに嬉しそうにそんなことを言うから、逆に胸が痛んでしまった。

美沙はよく笑う。いつも、素直に感情を伝えて。それが美沙らしく、そして僕はそんな美沙を大切に思っている。

けれど美沙は決して口にしなかった。離婚になるだろうことを、心の中に抱えたままで。

どれだけの重圧と不安を抱えてきたんだろう。

無邪気なその笑顔に見え隠れする小さなかげりは、今も消えることなく存在している。

美砂の不安定な気持ちが伝わって。その理由を知ってしまった僕だけど、そこには触れてはいけない気がした。

必死に隠して耐えているぎりぎりの美砂。ずっとそうだったのだ。どうして気づいてやれなかったんだろう。美沙を大切に思っているのに。

離婚したって、僕は美砂のことを妹だと思い続けると思う。

でも気持ちが変わらないとしても、形式上、美沙はまた家族を失うことにはなるのだから。

「もう、貝殻は探さないの？」

ふと僕が尋ねると、美沙は小さく首を横に振った。そして得意げに笑って言う。

「あれはね、たったひと組だからいいの。大切なものはひとつで十分でしょ？」

美沙の言葉に、僕は何となく言葉に詰まった。確かに美沙の言う通りだ、だけど。

煮え切らない僕の態度に、美沙がまた小首を傾げる。

「お兄ちゃん？ 貝殻、ほしかったの？」

「そうじゃないよ。でも……」

言って、僕はそこでいったん言葉を切った。言いたいことを整理しないままに口に出していた。

自分でもらしくないというか、混乱しているのかもしれない。何を言いたいのかわからなくなりそうだ。

貝殻が、ほしいわけじゃない。

けれど初めて来たときのように、美沙は貝殻を探すと思っていたし、探してほしかった。

それが多分、ここに来た理由だ。形のないものは、人を不安にさせる。

だから今、僕が美沙にしてやれることはこれだと思った。貝殻はひとつの理由にすぎない。

「何か……確かなものとして、残したいって思った。今、僕たちが一緒に居るってこと」

ここにきた自分の行動を、やっとその一言で結論付けられた僕は、けれど複雑な心境のままだった。

美沙はその大きな瞳の中、海よりも深いような色を湛えて、確かに僕を見ていたのかもしれない。

そつとのびた美沙の手が、僕の手を取ってきゅっと握る。

海のさざ波の中、不思議と安らぐような心地いい空気を共有して。僕の手を握りしめながら、美沙は笑った。けれどそれは、いつも

の無邪気な笑顔ではなくて。

初めて見せるその表情に驚きながらも、とても優しい笑みだと思った。

## 第10話 笑顔の向こう側〔3〕（後書き）

また、更新滞らせてしまいました。本当に申し訳ないです。

## 第10話 笑顔の向こう側〔4〕

家に帰って、お兄ちゃんを起こした時から、いつもどこか違うなあって思ってた。

具体的にどこがどう違うとか言えるわけじゃないけど、なんとなくそんな風を感じる。

そのまま連れられてきたこの海。私とお兄ちゃんにとっては、思い出のある大切な場所だ。

だけど、今のお兄ちゃんにこの場所に連れてこられたら、なんだか心がざわざわした。

もしかしたらそれは、お兄ちゃん自身の気持ちから、伝わってくるものかも知れなくて。

そしてそれは、ちょっと前、離婚におびえてただ臆病になっていた自分に、似ているようでもあった。

不安な気持ちを抱えている瞳を、してる。

隣に立つお兄ちゃんの手を握った瞬間、愛しさは増していくばかりで。言葉にしなくても、伝わればいいのに。

何があったのか、本当は聞きたかった。すごく気になってた。不安なら話してほしい。

ただとお兄ちゃんが何も言わない以上、きっと今のお兄ちゃんに必要なのは、そういうことじゃなくて。

お兄ちゃんはいつも、私を守ってくれて、私は心から頼りにして

た。

だけど世の中に、完璧な人はいないように。お兄ちゃんだって、不安になるときとか、弱くなるときだってあると思う。

それが今この瞬間なら、私は何も言わずに、こんな風に手を握っていたい。

そのまま、海に向かって一步を踏み出した。砂を踏む感覚。私は結構好きだ。

私と手をつないだままのお兄ちゃんは、私に手を引かれてつられるように歩き出す。

一歩歩くたびに、波打ち際が近づいてくる。

そろそろつま先が海の波に触れるかというところで、私は足を止めた。お兄ちゃんも一緒に立ち止まる。

足元はぬかるんでいて、靴に少し泥がついた。でも全然気にならない。

私もお兄ちゃんもその場に立っているだけだけど、気まぐれな海の波は、近づいたり離れていったりと忙しそうだ。

「ずっと残せたらいいのにね。この、足跡とか」

私が波を見つめながらぼつりと言うと、同じように波に視線をやっていたお兄ちゃんが私を見た。

私とお兄ちゃんがここを歩いた証。砂浜を歩きたびずっと続いていくけど、波にさらわれてすぐに消えていく足跡。

だけど本当に大切なのはモノなんかじゃないんだ。

自分の付けた足跡っていう、目に見えて安心できる形が消えることを嘆くんじゃなく、自分の中の真実を見つめること。

見えない行き先を不安に思っんじやなく、自分の足元をしつかり見つめて、微笑んで歩くこと。

私の言葉に対して、お兄ちゃんは何も言わなかった。人の少ない海、波の音だけが支配する空間。

お兄ちゃんはやっぱり少し元気がなくて、私はしんみりしたことを言った自分を後悔した。

この状況を打破して、お兄ちゃんを元気づける方法をあれこれ考えてみる。

周りを見回してみると、少し離れた場所に砂を落とすための水道があった。

そしていいことを思いついた。即行動とばかりに、私は満面の笑みになりながらお兄ちゃんに提案する。

「ねえ、あの水道まで競争しよう！ 負けた方が、皿洗い一週間分担当ね」

言うのが早いか、私は颯爽と走りだした。足の長さが違っんだから、このくらいのハンデはもらわないと。

だけとお兄ちゃんと来たら本気で走っているのか、すごく速くてすぐに私を追い抜いてしまった。

ハンデを勝手に貰って余裕になったのに。思わず必死になった私は、砂に足をとられて転んでしまった。

ずざっ！ という感じに、結構、派手な音がしたと思う。前のほうで、お兄ちゃんが立ち止まる気配がした。

砂の上につつぶせに転がってる私の所まで戻ってきて、お兄ちゃんが恐る恐る私を呼んだ。

「美沙……？ 大丈夫？」

お兄ちゃんは心配してるみたいだけど、そんなに痛くなかった。ただ私のいたずら心が芽生える。

「痛いよー……」

顔を砂に伏せたまま、わざと弱々しく言っつて、泣きまねをしていた。

すると慌てたように、お兄ちゃんが私の前にしゃがみこむ。その瞬間、私はがばりと顔をあげた。

一瞬驚いたような顔をしたお兄ちゃんだけど、私が笑っているの  
で、すぐに騙されたことを悟ったようだった。

溜息を吐きながら、困ったように笑うお兄ちゃん。2人とも砂ま  
みれ。でもすごく楽しい。

「……帰ろう」

私を立たせてから、お兄ちゃんが言った。いつもの優しい笑顔に  
安心した。

駐車場までの短い道のりを、2人で歩いて戻っていく。お兄ちゃ  
んは、私の斜め前をゆっくり歩く。

……知ってるんだ。歩幅を合わせて歩いてくれるんだってこと。  
広い背中が気持ちいいと思った。衝動に動かされるまま、気づけば、  
私はお兄ちゃんの背中に抱きついていた。

「美沙……？」



お兄ちゃんの声が波のように揺れて、私を呼ぶのが心地よくて、思わず目を閉じる。

抱きついたお兄ちゃんの背中にはあったかかった。

“何か……確かなものとして、残したいって思った。今、僕たちが一緒に居るってこと”

お兄ちゃんの言葉、うれしかったんだ。私と同じ気持ちを抱えてるんだって。

涙が出るほどいい人。きっとこれから先生きていても、こんなに大切に思える人はいない。

伝えたい、言葉がある。抱きしめる腕に力をこめて。

「私、ここにいますよ。確かなものなんて、もう心の中にいっぱいあるでしょ？ 私は……、お兄ちゃんから、たくさんもらったよ」

お兄ちゃんは何も言わなかったけど、不器用な私なりに、ちゃんと伝えられたかな。

今この瞬間の空の色も、波の音も、ずっと忘れないと思った。

## 第10話 笑顔の向こう側〔5〕

気付かなかった自分の気持ちに、気付かされた。美沙は僕の気持ちに、僕より早く気づいていた。

少しの驚きと同時に、美沙を大切に思う気持ちは、より一層大きくなって。

美沙がくれた言葉は、ずっと僕の心に残っていくだろうと思った。

「ついた……」

消毒液を傷跡につけた瞬間、美沙が涙目になって呟く。

あれから車に乗り、無事家にたどり着いた僕と美沙。

美沙は痛くないと言ったが、転んだ時、膝をすりむいていたらしく、血がにじんでいた。

砂浜で転んだのだから、傷口には砂がついていたわけで。つまりこうして傷の手当てをする展開になった。

転んだ時は痛くないといったくせに、水で洗い流した時の美沙の痛がり方といったら尋常ではなかった。

洗った後拭いてから、こうして消毒を始めたわけだが、痛いはずなのにどういふわけか美沙の顔は笑っている。

「痛くないの？」

思わず僕が美沙に尋ねてみると、美沙はにこりと笑って言った。

「痛いよ？ でもこうやって手当てしてもらうの、兄妹って感じで幸せだなんて」

僕はくすりと笑う。些細なことでも幸せだと言ってくれる。そんな美沙の一面を愛しいと思った。

それにしても、こうして手当てをしていてわかったことだが、美沙の膝には他にも古い傷跡が残っている。

今日のように転んでできたものだろう。

「傷跡が他にもあるね。あまり傷を残しちゃダメだよ。女の子なんだから……」

少し説教臭いとは思いつつ、僕は言った。ただでさえ抜けているところのある美沙なのだ。

活動的なところは美沙の長所だが、もう少し気を付けてほしい。

美沙は平気で無茶をすることも多い。

見ているほうもハラハラしなければいけないのだ。

そんな僕の内心を知ってか知らずか、今度は美沙が、何か思い出したようにくすつと笑った。

「昔から、よく転んですりむいてたの。そのたびにね、マ　お母さんがこうして消毒してくれた。そしてね、今のお兄ちゃんと同じこと言ってたよ。お兄ちゃんって、お父さんみたいだと思ってたけど、お母さんみたいなのところもあるよね」

美沙にそんなことを言われてしまったので、僕は神妙な心持ちで思わず黙ってしまった。

これは喜ぶべき場面なのか……とても複雑だ。とりあえず僕は手

当てを終えた。

「夏休み、あと少ししかないんだね」

話に脈絡がないのはいつものことだが、美沙がふとそんなことを言ったので、僕は消毒薬をしまいに行こうとする足を止めた。

座ったまま動こうとしない美沙の視線の先には、カレンダーがあった。

日付を見たらわかるが、夏の終わりはますます近づいてくるばかりだ。夏休みは長いようで短い。

離婚のことを知ってしまったから、そういうことを感じるたび、気持ちに迫ってくるものがある。

美沙も同じなのだろう。カレンダーをじっと見つめる、美沙の何とも言えない表情を見るのは、辛いものがあつた。

「どこにでも毎日でも、連れて行ってあげるよ。美沙の宿題が終わったらね」

とりあえず美沙の表情を和らげようと、僕が冗談めかして言うてみたら、美沙の表情がぱつと晴れた。

自ら地雷を踏んだかもしれない。……恐ろしい話だが、美沙は本気に取ったらしい。

「じゃあ、明日までに終わらせる!」

美沙が勢いのまますつくと立ち上がり、意気込んでそんなことを宣言した。今の美沙ならやりかねないのが逆に怖い。

今までの経験からして、宿題が終わったその日から、休みなくあちらこちらに連れまわされることになるだろう。

だけど、それもいいかなと思ってしまっ自分がそこにいることに、僕はひっそりと苦笑する。

「行きたい所はいっぱいあるよ！ カラオケとね、ボーリングとね、水族館とかもいいなあ、遊園地、ドライブ、動物園、映画館、それから……」

楽しそうに、指折りしながら次々と行きたい所をあげていた美沙だったが、ふとそこで言葉を切った。

我に返ったように、美沙が困ったような笑いをもらす。

「でも……きつと全部行くには、夏休みだけじゃ足りないよね」

まるで、諦めたような言い方だった。

美沙は思っているんだろう。夏休みの終わりが、僕たちの家族生活の終わりだと。

確かにそれは正しいのかもしれない。もう離婚は避けられないところまで来ているんだろう。

形式上他人になってしまっ僕たち。……だけど、それで本当に終りなんだろうか？

これまで一緒に過ごしてきた時間が、離婚というきっかけだけでそんなに簡単に崩れ落ちるのだろうか？

「大丈夫。全部連れて行ってあげるよ。夏休みが終わっても」

僕が言うと、美沙は少し不安げな色を残したままの瞳で、僕を見上げた。

僕の言葉は、美沙の心に届いたのか、届かなかったのか。

親の再婚も離婚も初めての経験だから、これからどうなっていくのかはわからない。  
でも僕の方から手を放すことだけは、したくないと思った。

## 第11話 夏休みの終わり〔1〕

弱いようで強いところがあり、強いようで、脆い一面を持っている。

誰でも笑顔にはきっと種類があつて、一瞬の表情にも小さなメッセージを残しているものだから。

ほんの小さなそのひとかけらさえ、見逃したくないと思っていた。見逃さないと思っていた、特に大切な彼女についてだけは。

けれども彼女の根底には、揺るぎない強い意志のようなものが息づいていたのかもしれない。

あの一瞬の笑顔の意味に、その時気が付いていなかったと、後からわかってしまうほど。

大好き！お兄ちゃん      第11話 夏休みの終わり

海に行った日から2日間はおかつたが、驚いたことに美沙は宣言通り宿題をすべて終わらせた。

まさか本当に実現するなんて思っていなかったのだが、約束は約束だ。

美沙の遊びに連れてってコールは毎日途切れることなく。

残った夏休みをフルに使うように、美沙に連れまわされる毎日が続いていた。

いくつあるかもわからない、美沙の行きたい所がひとつづつ減って。減るたびまた増えて。

とても穏やかで、平和な日々、僕は夏休みが終わった後のことなんて、すっかり忘れかけていた。

その日は、いつもに増して暑い日だった。夏真っ盛りとばかりに、じりじりと焼けつく日差し。

もう8月も終わりにかけているはずなのだが、暑さはまだまだ衰える兆しも見せない。

少し用事があって大学に来たのだが、明日にしておけばよかったのかもしれない。

予定で行けばそのままバイト先に向かわなくてはいけないが、家に帰れるなら水分補給して涼みたい。

汗を不快に思いながらも、僕は大学の門を出る。

結局はバイト先に向かうしかないのだ。のんびりしていたが、実はぎりぎりの時間帯だ。

ふとその時、ジープンの後ろポケットに入れているケータイが鳴って、メールの着信を伝えた。

見ると、送り主は伊藤先輩だった。内容は特に大したこともない、サークルの予定についての連絡だった。

あんなことがあって、先輩と気まづくなるのではとも思っていたが、やっぱり先輩はあくまでも先輩で。

数日前に会った時にはすでに、いつもどおりの先輩に戻っていた。

わかりましたと言っただけ打ってから、返信を終える。とにかく急がないといけない。



ケータイを後ろポケットに再びしまってから、駐車場に向かう足を動かし始めたとき、またケータイが鳴った。

今度は電話の着信だ。さっきから忙しく鳴り続けているケータイに眉をひそめながら、もう一度ケータイを手にとってみた。

今度の着信は、美沙からだった。とりあえず通話ボタンを押してみる。

『もしもし！？ あかね、私今どこにいますか？』

僕が何か言う前に、受話器の向こう側、いかにも楽しそうな声で美沙がまくしたてた。

そんなことを突然言われてもわかるわけがなく、僕は何と言葉を返そうかと考える。

「美沙、ごめん。ちょっと今急いで……」

考えた末にそんな言葉を返した僕だったが、言いきらないままに口を閉ざす結果になった。

思ってもみなかったことだが、視界の中に、見慣れた人物の姿が入ってきたのだ。

通話のためケータイを耳にあてたまま、こちらに近づいてくるその人物。

『見つかった？』

美沙は、いたずらがばれた子供のような声でそう言ってから電話を切った。

そして突っ立っている僕の前まで来て歩みを止める。美沙が大学まで来たのは初めてだ。

確かに歩いてこれない距離ではないが、この暑い日にここまで来るのは大変だったはず。

よく見てみると、美沙の頬が赤くなっている。日に焼けたのだろう。

「どうしたの？ 何か用事？」

驚きつつ、僕は美沙に問いかけてみる。確か今日は真央ちゃんの家遊びに行くと言っていたはずだが。

第一、今まで美沙は迷惑になるからと言って、決して大学まで来ようとはしなかったのだ。

「お兄ちゃん、今日は大学に行くって言ってたでしょ？ だから、来ちゃった」

理由になっていない理由を言いながら、美沙がにっこりと笑う。態度からして急用というわけでもなさそうだ。

とにかく今は急いでいる。美沙にその旨を伝えようとしたが、またしても美沙が先手を取って口を開いた。

「ねえお兄ちゃん、ちょっとかがんで？」

「どうして？」

「いいから！」

有無を言わせぬ美沙の口調。すっかりペースを奪われるのはいつものこと。わけがわからないまま僕は従う。

もう少し、もう少しと美沙に言われるがまま身体を曲げると、美沙と視線が合ったくらいの位置でストップをかけられた。

すると、すぐに美沙の顔が近づいてきた。まるで一瞬の出来事。

美沙の唇が僕の額にキスを落としていったのだ。

驚いたあまり、僕はあっけにとられる。けれども目の前の美沙といえは、無駄にうれしそうな顔をしている。

「あのね、ありがとう！　それだけ言いたくて……」

照れたように言って、美沙はえへへと笑う。何かおかしいと直感で思った。

けれど僕が口を開こうとしたら、美沙はたてた人差し指を僕の口に当てて制してしまった。

いぶかしむ僕とは対照的に、笑みを深める美沙。

「大学に行ったあと、バイトって言ってたよね？　いつてらっしゃい。私も、行ってくるね」

美沙はそう言うが早いか、身をひるがえして走り出す。僕に口を挟む隙も与えてくれなかった。

美沙を呼びとめようとしたけれど、僕が口を開こうとしたその時、ケータイの着信音が鳴った。バイト先からだった。

美沙を追うこともできず、心に引っかかりを抱えたままで、僕はただ後姿を見送っていた。

家に帰れば美沙がいる。家に帰って、美沙にもう一度話を聞けばいい。

その時の僕は、そんな安易な考えに、どこか安心しきっていたのかも知れなかった。

## 第11話 夏休みの終わり〔2〕

“結婚することになったの。美沙ちゃん、お兄ちゃんができるんだよ”

はじまりは、そんなママの一言だった。

戸惑いも、期待も、本当はあまりなかったんだ。ママの再婚ははじめてじゃなかったから。

だけとお兄ちゃんに出会ってしまったから。私の兄妹になった人が、お兄ちゃんだったから。

“もっと頼ってくれていいよ。兄妹なんだから”

あの時お兄ちゃんにおぶわれて、大きな背中越しに見えた、ふわ揺れるお兄ちゃんの茶色っぽい髪の色。

あの幸せな感覚。お兄ちゃんといられるのが、うれしい。お兄ちゃんが大好きだから。

ずっとずっと、あんなふうに、お兄ちゃんに甘えていたいと思ってた。

夏休みの最後は、いろんなところに出かけて本当に楽しかった。お兄ちゃんが楽しくしてくれた。

まだ、行きたい所はいっぱいあったし、夏休みはあと少し残ってるのが心残りだけど。

『離婚することに決めたの。今、飛行機。別々に帰ってきてる』

今、この現実が、私の心を冷やしていく。始まりと終わりは、対照的なようでつながっている。

お兄ちゃんもいないひとりの家で、受話器を耳にあてたまま、立ち尽くす私。

予想を裏切らないママの言葉で、終わりは静かにやってきた。重苦しくもなく、あっさりと。

宣告は、唐突なようで、けれども予想の範疇内の出来事だった。心がマヒしたような変な感覚。容赦なく続く、受話器の向こう側からのママの声。

『今日の夕方頃、ママが先にそっちに着くから。そのまま家を出る予定だよ。美沙ちゃんは、荷物をまとめておいてね』

怒るとか、泣くとか、取り乱すとか。そんな風になるのかなと思っただけ。

悲しいことだけど、離婚っていう出来事に対する慣れっていうのがきつとあって。

機械的に、まるでそうするのが当然のことみたいに。ママは受話器の向こう側にいるのに、わざわざ作り笑って。

「うん、わかった」

私は頷き、聞き分けのいい子になる。ママはそんな私の反応に安心したのか、淡々と今後の予定を説明し始めた。

ママたちが、お兄ちゃんの 菅谷の家に荷物を運び切る前に旅行に行ったから、大体の荷物はママの実家にある。

だから出て行くのは簡単なこと。先に帰ってきたママと、おもに私の、ひとり分の少ない荷物をまとめて。

そのまま菅谷の家を後にするだけ。あっけなくて簡単で。だからこそ、現実感がないようで、妙にリアル。

ママは離婚を何度もやってるから、もう実家にも合わず顔がなくて帰れないと言った。

だから小さなアパートを借りて、当面は2人暮らしする予定だとママからの電話を終えて。私はしばらくそのままぼんやりとしていた。そしてふと我に返る。

ああ、お皿を洗って真央ちゃん家に遊びに行く予定だったんだ。すっかり忘れそうになってた。とりあえず私はお皿を洗う。洗い終わった後、水道の蛇口をひねる音がやけに大きい気がした。

荷物をまとめるのに、やっぱり時間はかからなかった。2時間ちょつとくらい。

このまま、ママが帰ってくるのを待つて、そしてこの家を出て。そして、もう二度と……

そこまで考えて、私は危機感を覚えた。それじゃいけないと思った。

このまま終わりなのは仕方なくても、お兄ちゃんに、ちゃんと伝えなきゃいけないことがあるから。

第11話 夏休みの終わり〔2〕（後書き）

明日も更新に來ます。ぜひ見に來てください

## 第11話 夏休みの終わり〔3〕

真央ちゃんには、断わりのメールを入れた。今は何よりも大切なことがある。

夕方にママが帰ってくる。タイムリミットが近づく中、私は必死に大学までの道のりを走っていた。それは、賭けでもあった。

お兄ちゃんの予定は聞いたけど、何時まで大学にいるのか、何時からバイトなのか、そこまで把握してない。

だけど幸運なことに、私がたどり着いたとき、お兄ちゃんがちょうど出てくるところだった。

見つけて安心したのと同時に駆け寄りなくなったけど、それじやだめだ。

息を整えて、余裕なふりをする。さよならなんて、言いたくない。悲しくなるだけだから。

「あのね、ありがとう！ それだけ言いたくて」

私の言葉の意味を、お兄ちゃんは、よくわかってないみたいだった。でもそれでいい。

怪訝な顔をしたお兄ちゃん。拳動不審な私の行動に、お兄ちゃんは気づきかけたみたいだった。

私が困ったときとか、悲しい時とか、お兄ちゃんはすぐに見抜いてしまう。



私はお兄ちゃんに話す暇も与えないまま、その場を走り去った。核心を突かれる前に。私は言いたいことだけを言っ、そして逃げるようにいなくなる。

それがどんなに薄情なことか、わかっているけど。卑怯者で、臆病者で、私は……

「おねえちゃん？ どうしたの？」

ふと、とぼとぼと歩いている私の耳に、下のほうからそんな声が入ってきた。

お兄ちゃんの大学から菅谷の家までの道のり。公園の横に通った細い道だった。

「みどりちゃん……？」

確かめるように、私は私を見上げる小さなその女の子に問いかける。見覚えがあった。

マキちゃんのおじさんの家にお世話になったとき、娘さんだって紹介してもらった子だ。

公園で遊んでいたんだろうか。公園の中をよくみるとおばさんもいた。

保護者らしきお母さんたちは、ベンチに座って子供たちを見守っているみたいだ。

夏休みの公園は、こんなに暑いのに小さい子でいっぱいだ。

その中のひとりが、きょろきょろしながらみどりちゃんの名前を呼んでいる。

「みどりちゃん、あっちであの子が呼んでるよ。行ってあげなきゃ」

しゃがんで目線を合わせながら、私がみどりちゃんに言うと、みどりちゃんは必死な顔をして首を横に振った。

そして悲しそうな顔をして、みどりちゃんが言った。

「行けないよ。だっておねえちゃん、なきそうな力オしてる」

私は一瞬言葉に詰まった。だって私は確かに、微笑みながらみどりちゃんと話してたのに。

その時、おばさんがみどりちゃんを探して見つけたのか、こっちに走ってきた。

顔をそっちに向けた私に、おばさんも気づいたみたいで。

走るのをやめつつ近づいてきながら、やんわりとした笑顔で私に会釈をするおばさん。

みどりちゃんはおばさんに名前を呼ばれて、名残惜しそうに公園に戻っていった。

いつかもこんな風に、みどりちゃんは私を心配してたっけ。あまりに似た展開だったので、私は少し笑ってしまった。

「あんな小さい子に、何度も心配させちゃうなんて。私ってホント、子供だなあ……」

ひとりつぶやく私。私は本当に子供で、お兄ちゃんと一緒にいると余計にそう感じて。

子供じゃないと言い張ったり、外見だけで大人ぶってみたい。必死に背伸びしたりした。

だけど子供でいいんだって。そのままの私でいいんだって。ゆつくり、大人になればいいんだって。

胸を張って受け入れられるようになったのは、いつからだっけ…

…？

“ ゆつくりでいいよ。美沙が大人になるまで、僕が隣で見てあげるから”

そうだ、あの時。お兄ちゃんがそんな言葉をくれたから、私はコドモな自分をほんの少し好きになれたんだ。

立ち尽くしたまま、唇をかみしめる。どうしようもない気持ちになっていた。

信じていたんだ。信じたかったんだ。ずっと一緒にいるって。ずっと、ずっと家族だって。

お兄ちゃんはずっと私の隣で、あの優しい瞳で、いつも私を見ててくれるんだって。

どうして……？

そんな一言が私の頭をぐるぐるまわって。どうして、このまま一緒にいられないんだろう。

どうして、もう家族じゃいられなくなるんだろう。どうして

……

「大人になるまで見ててくれるって……言っただじゃない」

誰にも聞こえないくらいの私の小さな声は、すぐに夏の暑さにかき消される。

離れてしまってから。もう、お兄ちゃんが私のことを見守ってくれることはないんだ。

うそつき。うそつき。うそつき。お兄ちゃんはうそつきだ。

そんなやつ当たりのような言葉を、何度も心の中で呟いて、私は瞳にこみあげてくる熱いものをこらえていた。

しがらみを振り切るように、私は駈け出した。もう二度と通ることはない、菅谷の家に帰る道を。

私の夏休みは、一足先に終わりを迎える。ママが帰ってくるのも、もうすぐ。

第11話 夏休みの終わり〔3〕（後書き）

明日も、更新できたらするつもりです！（あくまで予定です）

## 第11話 夏休みの終わり〔4〕

なんとなく落ち着かない気持ちのまま、その日のバイトを終えた。

今日はずいぶん長時間働いた。外に出るともう日も暮れかけている。すっかり遅くなってしまった。

大学まで来た美沙に会ってからそのままにしまっていることが気がかりだ。

そろそろ真央ちゃんの家から帰っている頃だろう。早く帰って、美沙の顔を見なければ。

そう思いつつ、急ぎ立てられるように僕は帰りついた家の扉を開けた。

美沙の靴は、ない。それに玄関がきれいだ。珍しく靴箱の中に靴を片づけているようだ。

誰もいない家の中は、いつにも増してしんとしていた。

たいていの場合、美沙が早く家に帰っているので、僕が早く着くのは珍しいことで。

美沙の玄関までの出迎えがないのは、いつか美沙が家出した時以來かもしれない。

あの時の苦い気持ちがちらりと思い出されるが、きつと真央ちゃんと遊ぶことに夢中になって遅くなっているんだろう。

そう言い聞かせ、僕は美沙の帰りを待つ。時間は遅くても夏だか

ら日が長い。

メールをしようかとも思ったが、それじゃ過保護すぎるかもしれない。黙って待つ他なかった。

何もしないで待っているというのは、結構な苦痛になるものだ。何も手に付かないし、心配な気持ちも膨らんでいく。

この無駄に広い居間に、ひとりでいるというのも落ち着かない。以前はこれが当たり前だったのだが。

こうして居間にいても、自然と決まった2人の定位置というのがある。ソファの前に僕、その少し横に美沙。

だから美沙がいないというのは余計に違和感を感じるのかもしれない。

美沙がこの家に来てからは、お互い部屋で過ごす時間よりも、居間にいる時間のほうがはるかに長かった。

美沙の座る場所には、クッション枕とタオルケットが置いてあり、それが少し散らかった印象をかもしたしている。

今日はタオルケットがきれいにたたんであるから、いつもより若干ましだが。

クッションもタオルケットも、もとは僕の部屋にあったものだ。

いつのまにかここにあるのが当然になっていた。

昼寝用だと言って、美沙が勝手に持ち出したらしかった。そのくせ片付けるとすねるのだ。

美沙は、いつも僕を大好きだと言う。けれど同じ言葉でも、ニュアンスが若干違ってきていたような気がする。

具体的に、どこがどう違うかは、説明が難しいが。美沙に大好き

と言われるたび、最近は愛しさを感じていた。

どうしてこんなことを考えているんだろう。今朝会った美沙の様子が、どこかおかしかったからだろうか。

1時間ほど待ったところで、さすがに日も暮れてしまい外が暗くなった。これは、いくらなんでも遅すぎる。

僕は意を決して美沙のケータイに電話を入れようとした。けれどその時、玄関の扉が開く音が耳に入ってきた。

安堵すると同時に、少し厳しいことを言いたくなった。美沙に、遅くなるときは連絡を入れるように言わなければ。

僕はそんなことを考えながら玄関に出たのだったが、玄関で靴を脱いでいる人物は、予想とは違っていた。

玄関に出迎えにくるなんて、今までとったこともない行動をする僕を、その人物は不思議そうな顔で見ていた。

その人物というのは、僕の父親だった。新婚旅行は1か月のはずだし、予定よりも早い帰りだ。

それに、期限ぎりぎりまで話し合ってから帰ってくると思っていたのに。

何の連絡もなく突然帰ってこられても驚くばかりだ。それに美沙の母親も見つからない。

「……離婚が決まったよ。彼女は出ていくそうだ」

展開についていけない僕を置き去りにして、父親は手短にそれだけ言った。

頭を強く殴られたような衝撃だった。口調は軽くても、言ってい



る内容はまるで軽くはない。

立ち尽くすままの僕の横をすり抜けて、父親はさっさと家に戻り、ソファにどかりと座った。

自棄になっているような態度だ。けれども僕にはそんな父親を氣遣う余裕も義理もなかった。

わけもわからないまま、とりあえず父親の眼前まで行き、僕は抗議を始める。

「ちょっと待って、まだ美沙が帰ってきてない。きちんと4人で話し合ってから」

「もう帰ってこないよ。美沙ちゃんも、その母親も。もう二度と、お前とは会うことはない」

すかさず切り返してきた父親のそんな言葉を、一瞬、理解できなかった。

「え……?」

ややあって、やっとそれだけ聞き返した僕。父さんは難しい顔をして、鞆の中から紙切れを取り出し、僕に突きつけた。

僕はそれを見て、しばし絶句する。その紙切れは、離婚届だったのだ。

第11話 夏休みの終わり〔4〕（後書き）

明日も更新したいと思います

## 第11話 夏休みの終わり〔5〕

紙きれの上に並ぶ、父親の名前と、美沙の母親の名前と。現実を思い知らされる。

さつきまでは美沙を連想し、心暖かくなるはずだったクッション枕。

けれどもこうなってしまうてはもう、置き去りにされた、ただのかわいそうなものになってしまった。

靴がなかったのも、タオルケットがたたんであったのも。美沙が、足跡を消していった結果でしかなかったのだ。

「離婚は成立したんだ。後はこれを提出するだけ。……けど、新婚旅行の行先にまでこんな用紙を持ってきているなんて、彼女にとつてこれは、想定内の出来事だったのかもしれないね」

父さんは自嘲気味にそんなことを言った。こんな展開、誰が予想していたというんだろう。

あまりに急すぎる。結婚もそうだったが、離婚までこれじゃ話にならない。

耐えられないほどの憤りが、僕を支配していく。

「そんな話、納得できると思うてる？ 僕も美沙も、父さんたちの勝手に振り回されただけじゃないか……！」

僕は言葉の語尾を強め、言い終わらないうちに、思わず父親の胸倉をつかみ上げる。

苛立っていた。勝手な父親たちに対しての怒りももちろんあったが、きつと、自分自身に対しても。

あの時の美沙の笑顔、ほんの少しの揺らぎ。気づいていながら、また僕は見逃してしまっただの。

眼前に、父親の後ろめたさを映した目が見えて。そこでやっと冷静にならざるを得なくなった僕は、父親を解放した。

それでもまだ、父親の目を直視することはできなかった。目をそらしたまま、僕はぼつりと聞いた。

「……美沙の、引っ越し先は？」

「教えられない。もう他人になっただんだから」

父親は淡白な声でそう返してきた。そう言われるだろうと思っていたが、引き下がれない理由が僕にはあった。

「頼むよ。……父さんたちが離婚しようが、僕にとって美沙は大切な家族なんだ」

危機迫った僕の声に、さすがに教えられないで通すことができなかったのか。

父親は一瞬のためらいを見せた後、やがて観念したように、手短かに住所を告げたあと、遠慮がちに聞いてきた。

「美沙ちゃんに、会いに行くのか？」

「そうしようと思ってるよ。でもその前に、やる必要がある」

僕の言葉に、父親は勘繰るような視線も見せたが、追及してくることはなかった。

疲れ果てているような表情をしている父親には、そんなことをいちいち考えるのも面倒だったのかもしれない。

父親の傷心は目に見えて明らかだ。別れは、一方的だったんだろう。

ひとつ、決心したことがあるのだ。美沙本人のケータイの番号も、メールアドレスも。連絡先は知っている。

住所を聞いたのは、もっと別の目的があるからだ。そう、美沙のために。

たとえ僕の父親と離婚して、僕とは他人になっても、美沙の母親が、美沙の母親であることには変わらない。

「すまない、僕も混乱しているんだ。彼女はまた、繰り返すんじゃないのか。結婚と、離婚を」

父親が途方に暮れたように言った言葉を、僕はかみしめていた。

## 第11話 夏休みの終わり〔5〕（後書き）

最終話まで、できるだけ毎日更新、できなくても2日に1回は更新、でがんばろうと思っています。

応援よろしくお願いします。拍手1回だけでも、作者はものすごく喜びます。

## 第12話 もしも、叶うのなら「1」

菅谷の家を出て、私の苗字が代わって。新しい生活が始まるのは、あつけないほど簡単だった。

引っ越しであわただしくしているうちに、少し残っていた夏休みは、あつという間に終わりを告げた。

引っ越しの手続きが済むまで数日間は、ママの実家　おばあちゃんの家にお世話になって。

それから手続きが終わって、新しいアパートで荷物を整理して。

落ち着いたと同時に始まった新学期、私は学校に通いつつある。なんとか通える範囲に引っ越したから、転校はせずに済んだ。だから学校のメンバーは同じ。

変わったのは住む家と、お兄ちゃんがいないってことだけだ。そしてママは以前のように夜の仕事を始めると言っていた。

環境が変わってもう一週間くらいたつけど、お兄ちゃんと連絡はとっていない。

きっと、これきりになるんだと。そうわかっている私は、今更悲しまない。

大好き！お兄ちゃん　　ゝ第12話　もしも、叶うのならゝ

今朝も顔を洗って、私は鏡をのぞきこむ。大丈夫だ。今日も元氣な自分でいられそう。

このまま平穩無事な毎日を過ごしていれば、時間が心の中の傷も消してくれるはず。

そんなことを思いながら、制服に着替えて学校に行く支度をする。そうこうしているうちに、ママが起きてきた。

「あ……、おはよう、美沙ちゃん」

ママはぎこちなくそれだけ言うと、いそいそと洗面所に入ってしまった。

昨日から、ママの様子が変だ。昨日、私が学校から帰ってきたときからこんな調子だった

時折考え込むようなしぐさを見せて。何かに迷っているような、戸惑っているような。

ママも離婚したばかりだし、悩んでいるのかもしれない。

ママのことが少し気がかりだったけど、行ってきますと告げて、私はとりあえず家を出た。

学校は嫌いじゃないけど、今は、学校に向かうのは少し憂鬱だった。

私の苗字が変わったことで、学校の人たちは、まるで壊れ物を扱うかのように気遣ってくる。

そういうのを経験するのも初めてじゃないけど、ちょっと困る。だって私は平気なのに。

でも気遣いに対しては、気遣いで返さなきゃいけないから。大丈夫



夫だよって、そんなそぶりを見せて。

学校が終わったころには、今日も例外じゃなく、私は疲れ果てていた。

真央ちゃんと一緒に帰ろうと誘われたんだけど、ひとりになりたかった私は用事があると言って断ってしまった。

真央ちゃんは優しいから、私のことを人一倍心配してくれていて、嬉しいんだけど、それは私にとって、嬉しいと同時にとてもきついことだった。

とぼとぼと教室を出て、私は帰路につく。  
玄関を出るところで、数人固まった女の子たちが、そわそわしてるのが気になった。

耳に入ってくるその子達の話のをそれとなく聞いてみると、校門のところに、誰かかっこいい人が立ってるという話だった。

私は特に興味もわかなかったけど、校門のところに立ってるということは、誰かこの生徒を待っているのかもしれない。

学校まで他校の人や一般の人が来ることは少ないから、あの子たちも騒ぎたくなっただろう。

それにしても、校門で待ってる男の子なんて、まるでドラマみたいな話。

よくあるよね、そういう展開。そんなことを思って、私はひとりでくすりと笑った。

興味はなかったけど、あれだけ騒がれていたんだから、ちょっと気になる気持ちもあって。

少しだけわくわくしながら、私は校門までの道のりを歩いて行った。

うちの学校は、グラウンド脇を抜けて校門まで行かなきゃいけないから、結構な距離がある。

しばらく歩いていると、噂どおり、校門のところには誰かが立っていた。

けれどもその人というのはどこか見覚えがある気がして、私は一瞬どきりとした。

だけど見間違いだ、きっと。そう言い聞かせながら近づいて行くんだけど、近づくと、心臓の鼓動が速くなる。

ずいぶん近づいたところで、私はとうとう確信してしまった。その人は、私がよく知っている人だったのだ。

近くでその姿を見たたん、離婚の後ずっと、平気だと言い張っている自分が、一瞬緩みそうになってしまった。

しばらくぶりだ。だけど全然変わってない。私の大好きな人は、大好きなままそこに立っていた。

## 第12話 もしも、叶うのなら〔2〕

一瞬、逃げ出そうかと思った。裏門から出れば会わずにすむ、と  
っさにそう判断したのだ。

だけど足がロボットにでもなったように、私はなぜか歩き続ける  
自分の足を、止めることができなかった。

話ができそうなくらいの距離になり、校門に寄りかかって待つて  
いたらしい彼が、ようやく私を振り向いて。

目が合った瞬間、私は泣きそうな気持ちになった。

少し離れていただけなのに、随分遠くに行っていた気がした。お  
兄ちゃんを目の前にして、私は言葉を失う。

私の心が警鐘を鳴らしはじめ、次第に大きくなるそれは、やがて  
私の頭の中でも鳴り響いていた。

いつかの記憶がよみがえる。二度目の離婚のあと、ママと2人で  
引越して。

家族だった人たちに会えなくなって、しばらく経ったある日。何  
気なく言った私の一言だった。

『ねえ、ママ。また、お姉ちゃんとパパたちに会いたいな……』

私の言葉に、ママは一瞬驚いたような表情を見せた後、それをと  
ても困ったような悲しい表情に変えた。

会うのはいけないこと。できないこと。それは幼い私にでもわか  
る、暗黙の了解だった。

あの時の心の痛みを、悲しさを、ずっと忘れられずにいる。

気づけば、二度と会えない、遠い存在になってしまった大好きだった人たち。

幸せだった、過去の記憶だけを置き去りに

「美沙を待ってたんだ」

ふと、物思いにふけていた私は、お兄ちゃんのそんな言葉で我に返った。

あんな過去の出来事を、思い出すのも久しぶりだった。

すぐに返答できなかったのは、私が混乱しているからだろうか。

頭の中を整理しつつ、私はあえて無難なことを訊いた。

「どうして、こんなとこまで……」

「約束は、まだ有効だから。……って言っても父さんから、転校はしてないって、聞きだしたただけなんだけどね」

お兄ちゃんは少し冗談っぽく言って、笑った。約束　私がどこに行っても見つけ出してくれるっていう、あの約束のこと？

ただどあの約束は、私とお兄ちゃんが家族だったから成立していたもので。

私は何か言おうとしたけど、どう言葉にしていいいか、何と云うていいのか分からず、もどかしいままに終わる。

そうこうしているうちに、他の生徒たちがこっちを見てひそひそと騒いでる声が耳に入った。

ここじゃ、場所が悪すぎる。とつさに、私はお兄ちゃんの手をつかんだ。

面喰った様子のお兄ちゃんを無視して、私はつないだお兄ちゃんの手を引いたまま走り出し、学校を後にした。

ある程度走った後、自動販売機の横に小さなベンチのある場所を見つけて、私はやっとそこで立ち止まった。

9月になっても、相変わらず日差しは強い。ここは日陰になっていて、少しだけ暑さをしのげそうだ。

2人とも、息が少し上がっている。息を整えるのを理由にして、私はお兄ちゃんから目をそらしていた。

何も言わずにいると、背中を伝っていく汗が余計に気になって、不快だった。

状況も忘れて、自販機のジュース買って飲みたいな、なんてどうでもいいことを考えていた。

「どうして、何も言わずに出て行ったの？」

不意打ちのように、お兄ちゃんがそんなことを尋ねてきた。

もう息も整っていたのに、まだ息が上がっているふりをしていた私はどきつとする。

息が上がっている間は会話もできないから、核心を突かれることはないと思って油断していたのに。

思わずお兄ちゃんを見てみると、とても真剣な顔をしていた。取り繕う余裕もなく、私は本音を口にするしかなかった。

「ごめんね。……自分のためなの」

お兄ちゃんはやっとだけ驚いたみたいだった。  
無理もないよね。何も言わずに出て行ったのは、私の単なるエゴ  
だったんだから。

「お兄ちゃんのためとか、お母さんのためとか。……そんな風に言  
えたら、かつこいいのかもしれない。でもね、本当はさよならをし  
たくなかっただけなの。さよならは辛いから、何も言わずにいたく  
なるほうがずっと楽でしょ？ お兄ちゃんの気持ち、無視して。た  
だ自分を守っただけなんだ」

私の言葉を聞いて、お兄ちゃんはとてもつらそうな表情をした。  
そんな顔、しないでほしい。お兄ちゃんの笑顔が好き。私のこと  
でつらい思いをさせるなら、それはきつと、違うんだよね？

もう家族じゃないから。他人だから。ママが悲しむから。これ以  
上、この人に会っちゃいけないんだ。

さよならしないままでいれば、どこかでつながっていられる気が  
してた。だけど、それじゃ駄目で。

“だから、笑顔でさよなら……できるよね？”

辛さと苦しさのなか、いつかの私の想いが、心の中でこだまする。  
どうしようもない悲しさとともに、泣き出したい気持ちが、私を  
がんじがらめにして。

だけど幸せをくれたお兄ちゃんに、私も精一杯で返さなきゃって  
思った。

お兄ちゃんの記憶の中、泣き顔じゃなく、辛い顔じゃなく、お兄

ちゃんを幸せにできるくらいのすてきな笑顔でいたい。

私泣かないよ、お兄ちゃん。だって幸せだったから。これから先もずっと、この幸せな気持ちは消えないから。

たとえ、家族じゃなくなっても。遠く離れても。そばに、いられなくても。

ずっと一緒にいたいって。願う自分の気持ちを、お兄ちゃんの幸せを祈る気持ちに変えて。

願わくば、星の光にすぎるんじゃなく、誰よりも強く在りたい。

「さよならだね。お兄ちゃん」

ためらいながら言ったはずなのに、自分の言葉は、やけにきつぱりと言い放つように口から出て行った。

第12話 もしも、叶うのなら「2」（後書き）

いやな展開で申し訳ありません！

美沙のトラウマは、私が思っていた以上に深く大きかったようです。最後まではこのシリアス加減も続きますので、最終話にご期待くださいね。



## 第12話 もしも、叶うのなら〔3〕

とても、痛い空気が流れていた。お兄ちゃんが、何も言わずに私を見た。さみしそうな目をしていた。

重苦しくしたくなくて、私はあわてて笑顔を作る。

「引つ越し先ね、あの海の近くなんだよ！ 初めて2人で行ったあの海。歩いて3分なの。だから、さみしくないね」

そう言つてえへへ、と笑つて見せるんだけど、お兄ちゃんが笑い返してくれることはなかった。

少し、苦しそうな表情。お願いだから、もうこれ以上そんな顔しないで。

「離婚したからって、何も変わることなんてないんじゃないかな」

お兄ちゃんの、訴えかけるような声。そうだよって、答えたかったけど。ずっと一緒だよって、家族だよって笑いたかったけど。どうしても領けなかった。私はうつむき、鉛のように重い口を、なんとか開いた。

「……変わるでしょ？ だつてお兄ちゃんは私のお兄ちゃんじゃないかな。もう、お兄ちゃんって……呼べなくなる」

また変わる私の名前。家族とか、そうじゃないとか。戸籍なんていう、ただの形式に負けたくなかった。

だけど、私はもう知ってる。それがどんなに重要で、重い意味を

持つのか。

「家族なんて、本当はそんなもの、ないんじゃないかなって思ってた。ずつとずつと一人で生きてくんだって。だけど、お兄ちゃんと一緒にいられて、本当に、すごく幸せだったんだよ？」

心からの言葉を伝えて、できるだけ幸せなまま、笑顔で会話を終わらせようとする私。

だけとお兄ちゃんは簡単に引き下がってくれないみたいだった。

「僕を、信じてくれないの？」

もう一度、私に訴えかけるみたいに、お兄ちゃんが言った。

信じる？ 信じない？ そんな問題じゃないんだ。私にとつてはそれがすべて。

そんな簡単じゃない。私の気持ちだけの問題じゃない。だって私は知ってるんだ。

一度は家族だった者同士が離れてしまったら、普通の“他人”以上に遠くなるんだってこと。

ゆつくりと自然に、だけど意図的に距離を置き、関わりを少しずつ絶って。

会いたいと言った時の、ママの困った顔。会いたくても会えないんだと、思い知ったときのやりきれなさ。

あんな胸の痛みを、大切なお兄ちゃんに与えたくない。だから、私から断ち切ってしまうしかないんだ。

ねえ、お兄ちゃん。私笑ってても、本当は余裕なんてどこにもな

いんだ。これ以上は、心が壊れちゃいそうだから。  
この強がりが揺らがないうちに。お兄ちゃんに、もっと悲しい思  
いをさせないうちに。

「夏休みは、終わっちゃったの。さよなら。……“菅谷<sup>すがや</sup>さん”」

痛む心を抑えた、作り物の笑顔で。菅谷さん、なんて他人行儀な  
呼び方をする。

お兄ちゃんの傷ついたような瞳の色が悲しかった。すごく辛けれ  
ど、でも、これでいいんだよね？

「……。美沙、僕は」

お兄ちゃんが何か言おうとして、でも途中で口ごもり、何か言い  
たげなもどかしい顔をした。

だけとお兄ちゃんが何か言う前に、私ははりつけたような笑顔の  
まま、急いで次の言葉を口にする。

お兄ちゃんは多分、私を引き止める。そうなれば私はきっと、簡  
単に揺らいでしまうから。

「……私、帰るね！ ママが待つてるんだ。もう、お互い元の生活  
に戻らなきゃいけないでしょ？ 家族ごっこは、おしまいにしよ」

本心ではこんなに大切にしている絆を、今までの私たちの関係を、  
残酷に否定する言葉を吐きだして。

嫌われてもいい。最低だってなじられても、もう二度と、その瞳  
に映ることができなくても。

お兄ちゃんの笑顔を守りたい。私と同じ辛さを与えない。望むの

は、ただそれだけだから。

お兄ちゃんは何も言わずにうつむいてしまった。どうして、こんなに胸が痛いのか。傷つけたのは私のほうなのに。

いたたまれなくなった私は、お兄ちゃんに背を向け、それ以上何も聞かないとばかりに耳をふさいで駆け出した。

第12話 もしも、叶うのなら「3」（後書き）

たくさん感想や拍手、投票をありがとうございます！！

この展開を早く抜け出したいです。12話が終われば残すは最終話のみです。

どうか今後も、あきれずにお付き合いくださいませ。

## 第12話 もしも、叶うのなら「4」

夏の夜は暑く、まとわりつく空気がうつとしい。無気力って、こういう状態のことを言うのかと思った。

全力疾走で駆け込んで、家の扉を開けてからもずっと、心の中に重苦しいもやがかかったままだった。

うつむいたお兄ちゃんの、表情が見えなかったのが気がかりだった。今頃、どうしてるかな。

傷ついて、なければいいなんて。なんて自分勝手なこと思ってるんだろう。

私 逃げて、いるのかな。ううん、きっとそうじゃないよね。だってお兄ちゃんを守るためなんだから。

そうやって自分に言い聞かせてみるんだけど、どこか飲み込みきれないような微妙な心理のまま、もう夜を迎えている。

住みなれないアパートは居心地がそんなによくなくて、よけいに助長させているのかもしれない。

「なーに、美沙ちゃん。どうしたの、悩み事？」

部屋の隅っこに座って黙り込んでいた私に、ママが声をかけてきた。

あまり広くないアパートは、当然自分の部屋なんてなくて。ひとりで悩むなんて無理な話みたいだ。

お風呂からあがってきたばかりのママは、濡れた髪の毛をタオルで拭きながら、私の横に座った。

ママの自慢の、腰まである明るい茶色の髪から、シャンプーのいいにおいがする。

「悩んでるのは、ママでしょ？」

「……うん、そうだね」

平静を装おうとするあまり、思わず核心をついてしまっただけで、意外にもママはあっさりと認めた。

そして、咳払いをひとつしてから、おもむろに話し始めた。

「あのね、美沙ちゃん。私なりに悩んでね、それで決めたことがあるの」

ママはそこまで言って、改まったように私に向きなあった。何事かと、私はちよつと身構える。

「私ね……ひとりで生きていこうかと思ってるの」

続いてママの口から出てきた言葉に、私は驚いてママを見返してしまった。

ママは一人じゃ生きていけない人だ。それなのに、こんなことを言い出すなんて、一体どうしたっていうんだらう。

「もちろん、美沙ちゃんと一緒にだよ？ でも、もう再婚はしないつもり」

「ママ、どうしたの？ 何かあったの？」

誇らしげに話すママに水を差すようだけど、私はそう尋ねずには  
いらなかった。

いくら自分の親でも失礼なことかもしれないけど、今までのママ  
をずっと見てきてるから、私には信じられなかったのだ。

するとママは、やわらかく笑って、立ち上がりカーテンを開けた。  
今日は星が見えている。

外の夜景を眺めながら、ママがそっと口を開いた。

「だれかに幸せを望むより、幸せを与えようとするほうが、本当  
はずっと幸せなんだと思います」

何の脈絡もなく告げられた詩的な言葉に、私は首をひねった。

ママはいつもこんな感じだから、慣れてはいるけど。隣に立つマ  
マを見上げながら、私は何気なく訊いた。

「何それ、ママ。何かの本の言葉？」

「違うよ。誰が言った言葉だと思う？」

くす、と笑って、ママは何かを思い返すように、静かに話し始め  
た。

「昨日、突然家まで拓斗くんが来てね。どうして何度も離婚して、  
また結婚するんですかって聞くの」

思いがけないところで、思いがけない人の名前が出てきて、私は  
思わずすっと立ち上がった。

そしてママの服の裾をつかみながら、質問を投げかける。

「それで？ ママは、なんて言ったの？」



「さみしいからって言った。そしたらね、怒られちゃったよ。美沙がいるのに、どうしてさみしいんですかって」

ママは、そう言って肩をすくめた。じんわりと、心にあたたかいものが広がっていく感覚。

そんなことを、言ってくれたんだ。そっか……、だから昨日から、ママの様子がおかしかったんだ。

「そしてね、さっきの言葉を教えてくれたんだよ。……大切なこと、見落としてたのかもね。ママの一番は、やっぱり美沙ちゃんと、美沙ちゃんのパパだから。もういないあのひとも、心の中には、ちゃんと居るの」

ママは言い終わってから、とても素敵な笑顔を見せてくれた。今回の離婚以来、笑顔を見たのは初めてかも知れない。

それもこれもすべて、あのひとがくれたもの。大切な宝物を、またひとつ送ってくれた。

いいよね、ちょっとだけ泣いても。だってこれは幸せな涙だから。

「ごめんね。ママ、バカだから。遠回りしちゃったけど」

ママは少し困ったように笑った。その笑い方があのひとにちょっとだけ似ていて、胸が痛くなる。

私は首を横に振ってから、笑顔でママに答えた。

「ママ。私、今すごく幸せなの。いっぱい、幸せをもらえたんだよ」

こうして離れていても、出会えてよかったって。そんな風に思えるくらい、大切な人。

尊敬しているし、憧れてもいるし、だからやっぱり、こんなに大好きなんだ。

第12話 もしも、叶うのなら「4」(後書き)

今日は、夜にまた更新しに来ます。

ぜひまた見に来てくださいね！

## 最終話 『大好き！お兄ちゃん』〔1〕

会いたい、という気持ちがないと言えば嘘になる。だけど、今の私にはその嘘を貫き通すしか道はない。

空の星を、見上げる時と同じ。大好きなあのひとに会えなくても、顔が見れなくても。

さみしくないよって、同じ空の下にいるんだからって、自分にそう言い聞かせて。

大好き！お兄ちゃん      〽最終話   『大好き！お兄ちゃん』   〽

どんなに辛いことがあったとしても、日常はゆっくり流れていく。いつも通りの、日常。

だけどふと泣きたくなることがあるのはきつと、あのひとがいる日常に、私が慣れ切ってしまったから。

会わなくなっってから、もう1か月近く時間がたった。もうずっと声も聞いていない。

昨夜も、あのひとの夢を見た。強まってしまった、会いたいという気持ち。

だけど今日も無事作り笑いながら、私はいつもどおりに真央ちゃんとお弁当を食べていた。

「……拓斗さん、元気にしてる？」

真央ちゃんが、遠慮がちな言い方でふとそんなことを聞いてきた。少しだけ傷も浅くなってきたから。真央ちゃんも聞きたいのずつと我慢してくれてたんだろう。

だけど、真央ちゃんが期待するような答えは、私は持っていない。真央ちゃんがあのひとに会えなくなったのと同じに、私だってもう会えなくなっちゃってるんだ。

「離婚したから、もう会えないの」

私がぼつりと言うと、真央ちゃんが顔をこつちに向けて私を見た。なんとなく目を合わせ辛くて、私は視線をお弁当にだけ向けておかずを箸でつつく。

真央ちゃんはそんな私のことを見たまま、また口を開いた。

「そうなんだ……でも、離婚したからって、なにも会えなくなることないでしょ？ 会いたいつて思えば……」

「もう会えないよ。だってもう、家族じゃなくて“他人”でしょ？」

真央ちゃんが言い終わらないうちに、私は少しだけ強い口調になつてしまいがら口をはさんだ。

思わず見やった真央ちゃんの目は、少し驚いたような色をしていた。

そしてその色を言い聞かせるときのものに変えて、真央ちゃんは私の肩に手をおいて言った。

「美沙ちゃん？ 美沙ちゃん違う。きつとそれ、違うよ」

私は、何も答えられなかった。違うつて、真央ちゃんは言うけど。私は何か間違ったの？

荷づくりのときに見つけてから、ずっとポケットに入れているあの白い貝殻を、私はポケットの上からぎゅっと握りしめた。

うつん、何も間違ったことなんてないよ。だってもう離婚しちゃったんだから。

もう家族なんかじゃない。他人にならないといけないから。だから、きちんとさよならしたんだ。

そうやってずっと自分に言い聞かせてるんだけど、どうしても、頭の中のもやもやが取れなくて。

今日も、とぼとぼと歩く帰り道。家の近くまで来たところで、久しぶりに見る彼の姿があった。

きつと私を待ってたんだろう。遅くなっちゃったけど、昨日、メールで離婚したことを伝えた。

ここの住所も教えたけど、まさか来てくれるなんて思ってもみなかった。

「マキちゃん」

向こうを向いてる彼の背中に声をかけると、マキちゃんが振り向いた。

もう夏休みも終わったから、おじさんの家から自分の家に戻り、自分の生活に戻ってるマキちゃん。

平日だというのに、たぶん学校が終わってすぐ、電車に乗って会いに来てくれたんだ。

マキちゃんに向き合い、にこりと笑ってみせると、マキちゃんはちよつとだけ表情を和らげた。

「ん。ちよつと無理はしてるけど、大丈夫みたいだな」

言いながら、マキちゃんは私の頭に置いた手で、髪をぐしゃぐしゃとかき回した。

ぼさぼさになる私の髪。同じことをしても、あのひとは全然違うな。

そんなことを思ってしまったから、私ははっとする。もう考えないようにしていたのに。

「あいつとは、会ってんの？ ああ、兄貴」

まるで私の心を見透かしたかのように、絶妙なタイミングで、マキちゃんがあの一との名前を出した。

どきりとする私の心。でも動揺を隠して、私は言葉を返す。

「もう会わないよ。もう、お兄ちゃんじゃないし。私ももう……妹じゃないから」

私がそう言うと、マキちゃんは考え込むように黙ってしまった。

ずいぶんと、本当に気が遠くなるような沈黙が流れて。

私が耐えかねて何か言おうとしたとき、マキちゃんがやっと口を開いた。

「そうやって目をそらすのは、楽なんだろうな。確かに、逃げ道もひとつの道だ。だけど美沙は、本当にそれでいいわけ？」

「……どういう意味？」

私がマキちゃんにそう訊いたと同時に、私のケータイが着信音を鳴り響かせた。

取り出したケータイ、ディスプレイに表示された名前を見て、私は驚いてしまった。

瞬時に走った緊張に、ケータイを取り落としそうになる。

それは思いがけない、あのひとからの電話だった。

私はどうしていいのかわからなくなっていた。

だけどただの電話だって、普通にあればいいんだって気づいて。

私は通話ボタンを押すことに決めた。

だけど指先が震えて、なかなか押せなくて。結構時間がかかったけど、着信音が鳴りやむことはなく。

無事、やつのことで私は通話ボタンを押し、受話器を耳に当てることができた。

『……美沙？』

受話器の向こう側から降ってきた、久しぶりの声。

とても優しいトーンのその声が、私の名前を呼ぶことすら、愛しくて。



最終話 『大好き！お兄ちゃん』〔2〕

一気に高まる感情に、私は心に走った動揺を、隠すのが精一杯だった。

「どうしたの？ 何かあった？」

努めて普通な話し方を心がけながら、私は受話器の向こうのお兄ちゃんに問いかける。

ぎりぎりだった。少しでも油断してしまえば、お兄ちゃんに会いたいよって、泣いて訴えてしまいそう。

『いや、元気かなと思って』

受話器の向こう側で、彼の声が告げる。どんな表情をしているのが見えないけど。

声のトーンとか話し方、それだけでわかる気がした。今きつと、少し困ったようなあの笑い方をしてる。

用もないのに電話をもらえるって、すごくうれしいことなんだなと思った。私のことを心配してくれた。

離れても、さよならしても、まだどこかでつながってるみたいで、うれしい。

「私、大丈夫だよ。元気だよ、ちゃんと」

思わず笑顔になりながら、私は元気な声で返した。元気に言おう

としたわけじゃなくて、自然に声が弾んだ。

我ながら、なんて単純。元気だったわけじゃない。今、お兄ちゃんの声を聞いて元気になったんだ。

その時ふいに、横にいたマキちゃんが動き出し、私ははっとして彼を見た。

「美沙、オレ帰るから」

マキちゃんは言いながら、私に背中を向けて歩きだしてしまった。バス停の方向。そのまま駅に向かうんだろう。

だけどこのまま帰すわけにはいかなかった。私は遠ざかろうとするマキちゃんに焦る。

“そうやって目をそらすのは、楽なんだろうな。だけど美沙は、本当にそれでいいわけ？”

さっきの、この言葉の意味を、まだ何も聞いてないのだ。

私は受話器を耳にあてたまま、とつさにマキちゃんの背中に駆け寄り、その腕をつかんだ。

「待って、マキちゃん」

『そこに、彼がいるの？』

私の呼びかけに、立ち止まったマキちゃんが振り返ると同時に、受話器からの声がそんなことを尋ねてきた。

「……うん、そうだけど」

なぜか言いづらく感じながらも私がそう答えると、気まずい空気

が流れて。

ちよつとの沈黙の後、耳にあてたままの受話器からは、さつきよりも少し低いトーンの声が返ってきた。

『美沙は、大丈夫かもしれないね。僕がいなくても。案外、彼の方が美沙の兄妹に向いてるんじゃないかな』

「どうして？ どうして、そんなこと言うの……？」

泣きたいくらいの気持ちで、私は問いかける。そんなことを言われるのは、本当に悲しかった。

私にとって“お兄ちゃん”はたったひとりだけで、他の誰でも成り得ないのに。

『いや、声が聞けたからもついいよ。じゃあ……、元気で』

だけど私の問いかけに答えることなく、その一言を最後に、電話は一方的に切られてしまった。

会話の最後あたりで、お兄ちゃんの様子が、どこか変だった気がした。

だけどかけなおすのも変だし、それに何より、さつきマキちゃんに言われたことが気になって仕方がなかった。

ずっと心の奥にくすぶっている感情を、自分じゃ何なのかわからなくて。

でもさっきのマキちゃんの言葉が、その言おうとする意味が何なのかわからないけど。

さっき言われたことが、どこか核心をついているような気がしたから。

でもマキちゃんはそんな私の内心なんて知らないとかかりの態度だ。

私がケータイをしまっているすきに、彼は再びバス停のほうに歩きだしていた。

「待ってマキちゃん！ まだ聞いてないよ、さっきの言葉の意味」

さっきと同じようにマキちゃんの背中に駆け寄り、私は必死でマキちゃんに声をかける。

だけどマキちゃんは、今度は私を振り向かないまま、彼の腕をつかんだ私の手を振り払ってしまった。

「自分で考えろよ」

マキちゃんはそれだけ言って、歩みを早めた。さすがにそれ以上追うこともできず、私はその場に立ち尽くす。

やがてマキちゃんの背中が見えなくなるまで、私はその場を動くことができなかった。

“ 美沙は、本当にそれでいいわけ？ ”

振り払われた手を、反対の手で握りしめながら。マキちゃんの声だけが、ずっとぐるぐると頭の中を回っていた。

最終話 『大好き！お兄ちゃん』〔3〕

告げられた、さよならの言葉。一切を拒絶するかのような美沙の瞳に、僕は映っていなかった。

美沙をつなぎとめたかったのに、その手を放したくなかったのに、何も言えなかった。

何を言ってももう、届かないような気がした。僕を「お兄ちゃん」と呼ぶことを、やめてしまった美沙。

けれども僕の心の中を占める美沙の存在は霞むことなく、揺るぎない気持ちは、まだ美沙を想っている。

一方的に切った電話。ケータイのボタンをカチカチとわけもなくいじりながら、やがて飽きた僕はそれをたたむ。

そのまま、ジーンズの後ろポケットにねじ込んだ。電話しておいて勝手に切って……何をしてるんだ、自分は。

居酒屋の玄関先、ベンチに座り、僕は夕方の曇り空を見上げた。

今夜は、星は見えないだろう。

聞いた話によると、美沙の母親は夜、仕事に出るらしい。美沙は大丈夫だろうか。

居酒屋の中から、ざわめきが伝わってくる。

サークルの飲み会に顔を出した方がいいが、逆に疲れる結果となった。

ぼんやりと、何をするでもなくそのまま座っていたら、ふと誰かが僕の隣にそっと座った。

横を見やると、座ってきたのは伊藤先輩だった。そういえば、この人も出席だったか。

「驚き。拓斗も、嫉妬なんてするんだね」

先輩が唐突にそんなことを言った。今日、先輩と言葉を交わすのは初めてだ。

それなのにそんなことを言われる根拠として、思い当たるのはさっきの電話しかない。

「電話、聞いてたんですか？」

「飲み会盛り上がりつつあるのに、途中で抜け出してまで電話して。声が聞きたかったんでしょ？」

先輩は肯定とばかりに、否定の意は示さずからかうような言い方をした。

僕も否定はしないが、あえて肯定するほどできた人間でもない。僕は話題をすりかえることにした。

「どうして先輩も出てきたんですか？」

「だって全然飲んでもいないのに、酔い覚ますなんて言って出ていくから」

言って、先輩がくすりと面白そうに笑う。なんでもお見通しといわんばかりの態度だ。

それはいいが、僕にしてみれば心を見透かされるのはあまり面白くない。

無駄かもしれないと思いつつ、僕は取り繕おうと試みしてみる。

「僕はただ、夕方から飲む気になれなかっただけで……」

「わかってるんでしょ？ それ、ただの言い訳だつて。拓斗は、自分の気持ちに対して自覚が足りないのよ。ここ最近の拓斗、とても見てられなかった」

僕の悪あがきを、先輩がすっぱりと切り捨てる。さすが、としか言いようがなかった。

先輩の言うことは当たっている。つまり僕が一方的に電話を切ってしまったのは、嫉妬という感情故にだろう。

受話器の向こうにタマキという少年がいたというだけで、僕の心に生まれたあまり思わしくない感情。

彼と話しているとき、イメージがどことなく美沙とかぶる。感情を隠さない。いや、隠す術を知らないのか。

まっすぐで、ひたすら純粹で。自分の感情に正直に生きている。つまり、年相応。

彼らは年も近く、合わせようとしなくても同じ目線に立っている。

遠ざかってしまった今、僕よりも、彼の方が美沙に近いんじゃないか、と。

そんな考えは僕の心に痛みを伴う摩擦を生む。僕は自分で思っていたほど、自分の感情を把握していなかった。

先輩の言う通りだ。僕は、自分で自覚していたよりもずっと

……

「好きなんです、美沙が。本当に、好きで……。離れてみてわかった」

独り言のように吐き出した僕の言葉を聞いて、隣の先輩は満足げにほほ笑んだ。

「やっと言ったね」

やれやれといった感じの口調だった。その意図するところがわからず、僕は先輩に視線で問いかける。

ふう、と小さくため息をついて、けれど笑みは崩さないまま先輩が話し出した。

「知ってた？ 拓斗さ、美沙ちゃんのこと好きだつて、ちゃんと言葉にしたの初めてだよね」

そうだっただろうか。確かに、美沙を大切だ大切だと言ってきたけど、好きだとは表現したことがない。

家族だったから、妹だったから。そういう言い訳をするのは簡単だが、本当はもっと違う理由じゃないだろうか。

気持ちのどこかで、セーブをかけていたのだ。のめりこみすぎないように、と。

自覚が足りないというのは、きっとこのことだ。

それは長年培ってきた僕の悪い癖で、簡単に変わってはいなかった。だから今、美沙とこんなに離れてしまった。

今まで美沙のほうから繋いでくれていた手を、美沙から突き放されて。



だけど美沙にそうさせたのは、きっと彼女のトラウマからだ。そんなことわかりきっていたのに。

どうして、もう一度美沙の手を取ることができなかったんだろう。

美沙にさよならを告げられた時、何も言えなかったのも。美沙の意志を大切にしように見せかけて。

本当は、傷ついただけだった。美沙のさよならの言葉が痛くて。それ以上傷つくことから、逃げていただけだった。

大切な人を、みすみす逃してしまったのは僕自身の弱さのせいだ。

ふと、まるで僕の思っていることを見透かしたかのように、先輩はまた核心をついたことを言いはじめた。

「簡単に言えない。好きって気持ちは、人を不器用にさせるよね。そのせいで間違ったり、弱くなったり、傷つけたり……でもね、」

話の途中で、僕は状況も忘れて少し笑ってしまった。本当に、この人には敵わない。

先輩は一瞬、そんな僕の態度にちょっとむっとした顔をしたけど、すぐに余裕を取り戻し、そして続ける。

「あたしはね。実はその本質っていうのは、いたってシンプルだと思うの。つまり、惑わされてるだけってこと。本当は気持ちって、人を強くするものなんだよ」

先輩は教え諭<sup>さと</sup>すように言い終わってから、あまり見せたことのない、満面の笑顔を僕に向けた。

「素直にひとこと、言えればいいじゃない。会いたいって」

先輩のその言葉は、僕を動かすには十分すぎたのかもしれない。  
まだ間に合うだろうか。いや、間に合わせる。

先輩に飲み会は途中で抜けると伝え、僕はその場を後にする。今  
どうしても、美沙の笑顔が見たかった。

今まで美沙は、僕にたくさんの笑顔をくれた。今度は僕が、美沙  
を笑顔にする番だ。

最終話 『大好き！お兄ちゃん』〔4〕

マキちゃんと別れたあと、そのまま立ち尽くしているわけにもいかず、私は家に帰ってきた。

ただいま、と言って玄関を開けるんだけど、家の中はしんとしている。

ママの姿は見つからなくて、机の上にメモ紙が、一枚。冷蔵庫の中に夕飯を作って入れてるから、という内容だった。

そういえば考えないようにしてたけど、今朝、ママが言ってたっけ。今日から仕事が始まるって。

ママが再婚する前は、当たり前だった日常。夜、ママは仕事に出かけて行って、私はお留守番。

だけど今日は久々にひとりだから、ちょっとだけこわい気持ちもあって。

「今日から、ひとりなんだ。そっかぁ……」

呟きながら、私はしつかりしなきゃと自分に言い聞かせる。さよならのとき、強くなるって決めたんだから。

そう、自分で誓ったんだ。星の光にすぎるんじゃない、だれよりも強く在ろうって。

けど外がだんだん暗くなるにつれて、少しずつ顔を出す不安の気持ち。今日は曇ってたから、きっと星は見えない。

しんとした部屋が、私の不安を増長させる。静かな空間って、こんなに怖かったっけ？

振り切るように、私はカーテンを閉めて、ちよつと早いけど電気をつけた。そしてテレビをつけて座り込んだ。

ひとりの夜は、いやだ。そんな本音が頭にちらつき、私は必死に首を横に振った。

そのときだった。突然、ケータイが鳴ったのは。ディスプレイに表示される、愛しい名前。

『今、あの海にいるよ。美沙に会いたい』

文章は、それだけだった。いつもどおり、あっさりとして短い文章。だけどそれだけでも私には十分だった。

急激に込み上げる切なさ、私をがんじがらめにした。私の心のなか、必死に隠した弱い部分が悲鳴を上げる。

だめだ。今会ったらだめだ。もうこれっきり、二度と会わない。だってあの優しい眼差しを見たら、弱くなってしまう。泣いてすがって、離れたくないって、駄々をこねて。

わかってるから、だからもう忘れなきゃいけない。考えちゃいけない。

だけどどうしても、気持ち止められなかった。

思い返してしまうのは、お兄ちゃんとの思い出ばかり。一緒にいるんなところに行つて、いろんなものを見て。

鮮やかに浮かぶ、お兄ちゃんの優しい眼差し。少し怒った顔、驚いた顔、真剣な顔、困ったような笑い方。

強くななんてなれない。お兄ちゃんがいないと私は……

「思い出の数が……多すぎるよお……」

ずっと抑え込んで我慢していた気持ちが、そんな呟きとなって私の口から出て行った。

心が、痛いつて叫んでる。どうしようもないこんな気持ち。

暗闇が迫ってくる。誰もいないんだって。お兄ちゃんはどういうんだって。そんな夜を思った瞬間、足がすくみそうになった。

忘れてたんだ。星のない夜が、ひとりぼっちの夜が、こんなに怖いこと。

だってそばにいてくれた。お兄ちゃんがお兄ちゃんになって、夜はいつもふたりだった。

空の星が見えなくても、外がどんなに真っ暗でも。

お兄ちゃんがそばで笑っててくれた。安心した。不安なんて全部簡単に飛んで行った。

悲しい気持ちを嬉しくしてくれた。さみしい気持ちを楽しくしてくれた。

あったかい気持ち。全部、お兄ちゃんにもらったもの。それは、あまりにも大きすぎる幸せで。

お兄ちゃんはお兄ちゃん、でも時々パパみたいで、ママみたいで。

何でも話せる友達で、頼りになる親友で、大好きな人で、一番……

…一番、大切な人。

私の世界の中のすべてに、お兄ちゃんが居るみたいに。

見つけたの。大切な大切な、私の……、一番星。

思わず立ち上がった拍子に、カツン、と音をたててポケットから床に落ちた、小さな大切なもの。

いつか海に行った時の思い出そのもの。お兄ちゃんと半分ずつの、小さな白い貝殻。

“きつと拓斗さんにとって、美沙ちゃんはかけがえのない人なんだね”

記憶の中の真央ちゃんの声とともに、私の頬をひとすじの涙が伝い落ちる。

ためらう理由なんて、どこにあるっていうんだろ。強がってかっこつける理由も、自分から手を放す理由も。

そんなもの全部吹き飛ばしてしまうくらいの強い絆を、私たちは一緒に築いてきたんじゃないの？

大切な記憶。大切な思い出。あの海に、今、大切なあの人がいる。気づけば、私は家を飛び出していた。

最終話 『大好き！お兄ちゃん』〔5〕

夕方の海は、嫌いじゃないと思った。

波打ち際からずいぶん離れた、横に長くて低い石の階段に、僕は座っていた。

美沙に送ったメールに、返事は返ってこなかった。けれどもここを動く気はない。

何の根拠もないが、確信していたのだ。美沙はここに来ると。

投げ出した足もとに砂がまとわりつく。

そつえばこの前美沙と来たときは、競争だと言い出した上に、派手に転んでいた。

そのずっと前に来たときも、赤い顔をしてはしゃいでいると思ったら、実は風邪で熱があった。

ふたりで出かければいつも、何らかのハプニングを巻き起こす美沙。

いろいろな出来事を思い出したら、少し笑ってしまった。美沙といると本当に飽きない。

“他のを合わせようとしてもだめなんだよ。このふたつはね。ふたつでひとつなの”

対の貝殻を必死に探し出して、美沙がそう言ったのもこの場所だった。

ああ、そうだ。ふたりで最初に出かけたのも、この場所。

“ お兄ちゃんに、片方あげる！”

あの時の美沙の笑顔は、まるで昨日のことのように鮮明に脳裏に浮かぶ。

いつもはしゃいで。どこかに出かければ、目的地に着いた途端、ひとりで走って行って。

けれど途中で、必ず僕を振り返る。そして、こっちに向かって手を差しのばすのだ。満面の笑みで。

……ふとその時、背後から砂を踏む小さな音がした。息を切る気配。走ってきたのだろうか。

「お兄……、菅谷さん」

ためらいがちなその声は、まだ過去の呪縛から解放されては、いないようだった。

振り向くと、そこには予想通りの、僕が待っていた人物が立っていた。

僕は美沙を見上げた。僕は座っているので、いつもとは目線の位置が逆になっている。

今にも泣きべそをかきそうな愛しい瞳が、少し揺れながら僕の姿を映し出す。

よく見ると、まぶたが少し赤くなっている。泣いていたのだろうか。



「私を、待ってたの？　もしかしたら来ないかもとか……思わなかった？」

「思わなかったって言ったら、嘘になるかな。でも信じようと思った。それが家族ってことだ」

やんわりと微笑みながら美沙の問いに答えると、美沙の瞳がまた揺れる。

困惑しているんだろう。相手に対してどう歩み寄っていいかわからない、小さな子供のような目をしている。

「過去に囚われて、美沙が何も信じられなくなってるなら、信じられるまで何度だって言うよ」

言って、僕はちょうど顔の前ほどにぶら下げたある、美沙の手を取ろうとした。

一瞬、みさがびくつとして手を引っこめようとしたけれど、構わず手を握る。温かさが伝わっていく。

届くとか届かないとか、そういう問題じゃなかった。ただ、できることはしたいと思った。

美沙が僕の言葉を聞こうとしなかったとしても。僕が伝えようとするのをやめてしまえば、そこで終わってしまう。

何も言わない美沙に代わって、僕は話を続ける。伝えたいことは山ほどあるのだ。

「誰だって、何かを失いながら生きてると思うんだ。だけどそれ以上に、新しい幸せもきつと増えていく。たとえば形式上の家族を失っても、本当に大切なのはそんなことじゃないよね？」

美沙は何も言わなかったけれど、僕の目をちゃんとまっすぐに見

ていた。後押しされるように、僕はまた口を開く。

「時間は決して長くなくても、僕たちはあの家で一緒に過ごして、同じものを見て、同じ幸せを共有した。……もうとくに、家族になれてるんだ。美沙はずっと僕の妹で、僕たちはずっと兄妹で。それは心の中にある絆だよ。戸籍上の関係よりも、ずっと確かなことだと思わない？」

僕が言い終わると同時に、張り詰めていたような美沙の顔が緩んだ。

その瞳から、幾筋もあふれ出していくもの。だけど僕がそれを涙だと認識する前に、美沙が突然砂に両膝をついた。

膝折れでもしたのかと、僕は一瞬焦る。けれど次の瞬間には、僕は驚く結果となっていた。

美沙が座っている僕に向かって倒れこんできたのだ。とりあえず受け止めながら、さらに焦る僕。

だが、ちゃんと意識はあるようだった。美沙はどうやら、僕に抱きついただけだったらしい。

ぎゅうぎゅうと、力の限りとはかりに僕にしがみついて、美沙はこらえるように肩を震わせる。

けれども次第に我慢の限界を迎えたのか、とうとう美沙は声を出して泣き始めた。

時折、しゃくりあげながら。まるで、ずっと耐えてため込んできた、すべてのものを吐き出すように。

それは美沙が、初めて素直に僕に見せた、ありのままの弱さだったのかもしれない。



最終話 『大好き！お兄ちゃん』〔6〕

どうしてだろう。今までどんなにあがいても捨てられなかった、私の心の中のしがらみ。

なにお兄ちゃんは言葉ひとつで、そんなもの簡単に打ち砕いてしまった。

振り切れたように、一気にあふれだした涙。誰かの前でこんなに思いきり泣いたのは、初めてかも知れない。

弱さを見せるのは、いけないことだと思ってた。ただお兄ちゃんの前でなら、許されるような気がしたから。

抱きしめる腕に力を込めると、お兄ちゃんも私をしっかりと抱きしめ返してくれた。

いつもそうだ。お兄ちゃんは私をそのまんま受け入れてくれる。弱いところ、わがままなところ、全部。

そばにすぎで当たり前になっていたから、見逃してたけど。言葉にしなくても、お兄ちゃんの瞳が伝えてくれる、お兄ちゃんの優しい気持ち。

“確かなものなんて、もう心の中にいっぱいあるでしょ？”

いつかお兄ちゃんに伝えた私自身の言葉が、今、私の心に切なく響いた。

他人から始まった、私たちの兄妹生活。

お互いにお互いを知って、もっと知りたいと思って、でも簡単に分かり合うことなんてできなくて。

けんかもした。手を離そうとしたこともあった。臆病にもなって弱くもなつて。だけど、一緒にいてとても幸せだった。

私……バカだ。他人だなんて。目をそらして、気付かないふりして、結局また逃げてた。本当はわかってたのに。

しばらくの間、私は泣き疲れるほどに泣いていたけど、お兄ちゃんはずっと何も言わずに抱きしめてくれていた。

ようやく涙もおさまってきたかというところで、私は顔をあげてお兄ちゃんを見た。

「目が赤いよ」

そう言つて、くす、と小さく笑い、お兄ちゃんが私の目尻に残った涙を指先でぬぐつた。

お兄ちゃんの、こげ茶色の瞳の色が好き。そこに私が映ってるっただけで、どうしてこんなに切なくなるのかな。

そんな私の内心を知ってか知らずか、お兄ちゃんはその笑みを困ったような笑い方に変えて。

そして、何度か口を開こうとしてやめるのを繰り返した後、ためらいがちに言った。

「……ごめん、ひとつうそついた。確かに美沙は大事な家族だけど、それだけじゃなくて……美沙は、僕の一番大切な人だ」

心臓が強くだきりとした。まるで意味深な言葉。一瞬、聞き間違いかとも思った。

だけど目の前のお兄ちゃんが、よく見ないとわからないけど、どこか照れたような初めて見る表情をしていて。

「私……そんなに子供じゃないよ？ そんなこと言ったら……」

勘違いだろうと思ったから、私は遠慮がちにお兄ちゃんに問いかけてみる。

だけとお兄ちゃんは否定するそぶりも見せず、きゅんとするほどの素敵な笑みを見せてくれた。

「知ってるよ。だから美沙が好きなんだ。……って言っても、美沙にはまだわからないかな？」

「子供じゃないって言ってるでしょ？」

少しむっとしながら、私はそうたたみかけてみる。私はお兄ちゃんほど大人じゃないのかもしれない。

けどそんなに子供じゃない。今だけは、大人とか子供とかじゃなく、ちゃんと同じ目線でいてほしい。

するとお兄ちゃんは観念したように、でもしつかりと私の目を見て、次の言葉をくれた。

「美沙が好きだよ。だから美沙が大人になったとき、僕を彼氏にしてほしいんだ。僕は美沙の兄妹で、家族で、そして彼氏にもなれるんだよ」

また涙が出そうになった。こみ上げてくるのは、きっと好きという感情そのもの。

心がいっぱいだった。お兄ちゃんにも伝わってるかな。私がいま、どんなにうれしいのかって。

「いやだよ、そんなの。今すぐじゃなきゃ、いやだよ」

必死に言っで、私はもう一度お兄ちゃんに抱きついた。お兄ちゃんの大きな手が私の髪をなでる。

お兄ちゃんは陽だまりみたいな優しさをくれる。大好き。すごく大好き。

「……うん。そうだね」

頭の上から聞こえた、お兄ちゃんの優しい声音。伝わる鼓動の音が、私と同じリズムを刻む。

それがしあわせ。ずっとこのまま、時間が止まってしまえばいいとすら思った。

最終話 『大好き！お兄ちゃん』〔完〕

意地っ張りで強がりです。でも本当は、怖がりで泣き虫で。不器用なくせに、すぐに無理をする。

恋愛感情に年齢は関係ないんじゃないか、なんて。

そんなことを考えてしまう僕の気持ちなんて、つまりは考えてみれば単純なこと。

思わず伝えてしまった美沙への気持ち。誰かに気持ちを伝えると  
いうのは初めての経験で。

そのうえ、伝えようと決めていたわけでもなかったの、どうにも  
恰好のつかない告白になってしまった。

けれどそのくらいがいいのかもしれない。美沙の前でなら、僕も  
ありのままで居ていいような気がするのだ。

辺りはそろそろ暗くなりつつある。このまま連れまわすわけにも  
いけないので、美沙の家まで送ることにした。

ふたり手をつないで、並んで歩く。美沙の歩幅に合わせて、ゆっ  
くりと。

今夜は星は見えない。美沙が怖いというなら、ずっと電話で話し  
ていよう。

美沙はさっきからてくてくと歩いているが、何も言わない。けれ  
ど数歩進んでは僕を見上げてくる。



赤く染まった頬。酔っているわけではないようなので、照れているだけなんだろう。

僕が微笑みかけてやると、美沙は赤い顔をさらに赤くして、僕からぱっと目をそむけた。

その代わりとばかりに、つないだ手にぎゅっと力を込めてきた。両想いに戸惑う、純粋な美沙。こういうことをされてしまうと、愛しさが増してしまう。

ふと隣の美沙が、何を思ったのか突然、あいている手で取り出したケータイをいじり始めた。僕は美沙にばれないよう、こっそりと笑う。さっきから落ち着かないのか、忙しい限りだ。

美沙はもちろん、そんな僕の様子に気づくわけもなく、ケータイに夢中だ。

カチカチと文字を入力したようで、すぐに終わった様子の美沙がケータイをたたんだ。

それと同時に、僕のケータイが震えた。鳴り響くメールの着信音に、反射的にケータイを手取る。

「あつ、まだ見ちゃだめ！」

ケータイをチェックしようとした僕を、間髪入れず美沙が制した。

「今はだめ。帰ってから見てね？」

美沙は神妙な顔をして念を押してきた。どうやらメールの送り主

は美沙のようだ。

首をかしげながらも、美沙の勢いに押され、僕は納得せざるを得なかった。けれど気になるものは気になる。

そうこうしながら美沙のアパートにたどり着くと、美沙はつないだ手を離そうとしないまま、再び僕を見上げてきた。

「また……、会えるんだよね……？」

美沙の口から、ためらいがちな声。泣きそうな目をしている。今までが今までだけに、不安なんだろうか。

つないだ手を僕が放した瞬間、隠すことも忘れたのか、美沙の表情がゆらぐ。

僕はなだめるように、離れた手をそのまま美沙の頭にぽんと置いてみた。

「いつでも呼んで。どこにでも、すぐに駆けつけるから」

僕がそう言うと、美沙の泣きそうな目が、潤んだまま、笑顔のときの楽しそうな目になる。

「あはは。ドラマみたいなセリフ。ヒーローみたい。じゃあ私は、ヒロイン役かなっ？」

茶化すようなことを言っているが、美沙の表情を見てみれば、その本心がうかがえる。

ドラマでもヒーローでもいいが、要は僕が言いたいのは、美沙のためなら何でもしてやりたいということだ。

「うん。だから今夜は、電話するよ」

僕の言葉に、美沙が驚いたような顔をした。美沙が今夜を怖がっていることなんて、とっくにお見通しなのだ。

「……ありがとう」

言って、美沙は今まで見せたことのないような、やわらかい笑みを僕に向けてきた。

僕の中の、たくさんの美沙の表情は、会ったび増えていくばかりで。

これから先もずっと、美沙のいろんな顔が見たいと思う。このまま、美沙の一番近くで。

やっと安心したのか、美沙はここまででいいと言って、階段へと続く、少し細い通路を歩きはじめた。

何度も何度も振り返りながら、名残惜しそうに。名残惜しいのは僕も同じだが、仕方がない。

もう形式上では家族じゃないんだから、以前のように、僕の家に来て帰るわけにもいかないのだ。

美沙の後ろ姿がある程度離れて、振り向かなくなったところで、僕は言いつけを破りケータイを開いてみた。

メールは、予想通りというかなんというか、当然のごとく美沙からだった。

『大好き！お兄ちゃん』

たった一言だけのメール。相変わらず、意味もなく語尾に星がつ

いている。

微笑ましいのと同時に、美沙の僕の呼び方が“菅谷さん”じゃなくなっていることに安堵感を覚えた。

今までだって家族だったとは思っているが、きっと今が初めて、本当の意味で家族になれた瞬間だ。

美沙が階段の前に差しかったところで、また僕を振り向いた。気づかれてしまったようだ。

言いつけを破った僕にむっとしているのか、少しむくれている。

何となくばつが悪いので、僕はご機嫌取りもかねて返信をする。

『僕も好きだよ』

なんとも背筋が寒くなるような文章だが仕方ない。美沙のご機嫌を直すのは至難の業なのだ。

送信すると、一呼吸おいて美沙がケータイを取り出し、そして開いて内容をチェックした。

かと思うと美沙は、僕に向かって全力で駆け戻ってきた。僕の前で立ち止まるかと思ったが、そのまま勢いは失わず。

僕は後ろに倒れそうな衝撃を受けながらも、何とか美沙を抱きとめた。一瞬の出来事に、僕は少し面喰らう。

でもはちきれそうな笑顔の美沙は、そんな僕にはまるでお構いなしに、そっと耳打ちしてきた。

その内容に、思わず笑ってしまった。あまりにまっすぐな僕の妹。

……まったく。最初から最後まで、めちゃくちゃだ。

だけど結局愛しい気持ちに負けてしまう僕は、美砂の顔をこっちに向けて、そして額にキスを試してみた。

美砂はすぐに顔を真っ赤にした。さっき、耳打ちで伝えてきた大胆な言葉と矛盾している。

“私の将来の夢。……また、「菅谷美沙」になりたいの”

中学一年生にしてすでに、プロポーズ。天真爛漫な美砂に振り回される日々はまだ続きそうだ。

だけど、そんな日々を愛しく思っている自分に、僕はこれまでにないほどの幸せを感じていたのだった。

大好き！お兄ちゃん      おわり

最終話 『大好き！お兄ちゃん』 「完」（後書き）

完結です。半年以上続いたこの小説ですが、いかがでしたでしょうか？

前作「ひみつ」の足跡を追うように始めたこの小説ですが、前作以上に、たくさんの応援をいただきました。

更新速度が遅くても、毎回のように感想や投票や拍手をいただけて本当に幸せでした。

下手で、特に才能もなく、目立たない作者の私なのに、毎回ものすごい人数の方に読んでいただき、

これが終わったら連載中のほかのを終わらせて、ネット小説の世界から姿を消そうと思っていました。

が、今はちょっとだけ迷っています。続編も書いてみたいです。

とにかく、この小説を書けて本当によかったです。全ての読者様に感謝をこめて。

ラストのBGMは、a i k oの「星のない世界」でお願いします！

白雪なずな



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6998e/>

---

大好き！お兄ちゃん

2010年10月9日11時06分発行